

奇譚クラブ

1956年 6月号

昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十一年五月三十日 印刷 (第十卷 第六号) 昭和三十一年六月一日 発行 (第三号 通刊第八十五号) (毎月一回一日発行)

昭和三十一年六月号

6

6月号

告白「奈子の自己愛について」門田奈子
「大衆文学に現れた責めの描写」藤見郁



THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan

奇譚クラブ

昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可
昭和三十一年五月三十日 印刷
昭和三十一年六月一日 発行
六月号 (第十卷第三号)
(毎月一回一日発行)

定価二百円

(送料十六円)



IBM. 2805

本社に対する御送金は、換込みの振替用紙を御利用の上、受領証をお送り下されば、確實で早く大変便利です。振替用紙御入用の方は、お申込次第お送りいたします。

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

奇譚クラブ旧号総目次

昭和三十年

○五月特大号 【百四十円】

白面鬼……………竹谷十三
続々、女性切腹断想……………田谷敬三
見世物とサディズム……………土屋郁人
たのしみアブセスクス……………藤見新実
アブ追求三十年の回顧……………山田正
きいたふ……………長瀬子
女サディストの手記……………榎本利昭
悪癖……………依田和子
責の回想……………沢村精二
奈落の欲望……………沢村隆雄
緊縛モデルの素顔……………沢村隆雄
「呪い」縁起……………野村当
「死を憶える男」……………青葉一
我が倒錯の系譜……………児島輝彦
縛り絵について……………山本和雄
明治年間新聞覚え書……………吾妻文雄
幽囚十ヶ月……………春田一郎
性への考察……………二俣志津子
おしめカパー……………みずしま・まもる
アブ・ホート談義……………狩井麗作
孤独の広場……………吾妻一
或る少年のモノローク……………牧啓一

○三月特大号 【百四十円】

倒錯研究の新展開について……………成瀬川合都子
SAPHO日本版……………川合都子
ボクの貴め方……………宝塚三三夫
大津事件とその後日譚(一)……………須藤律夫
夜光島(六)……………吾妻新夫
「奇抜写真」寒夜の庭の櫓……………大庭高視
残酷なる女性達……………森本愛造
私のイメージ「手術室」……………竹谷十三
「潮来波」……………白金紅次
「義先生」医学相談欄……………伊藤晴雨
血染の毛綱……………伊藤晴雨

天狗鼻由来記……………緑比古
汗について……………みずしま・まもる
「トウキョウの一夜」……………R・G・S
マゾへの胎動……………三根耕二
絵物語「百合子の冒険」……………村崎明子
編者への手紙……………或る読者
アブ追求三十年の回顧……………山田正
懸賞入選第三席「陰の花」……………片矢正
萩千恵子論……………鳴海文雄
あるマゾヒストの手帖から……………沼田正三
奇妙な便り……………読者通信
腰巻専門の窃盗男捕縛……………木村俊野
緊縛モデルの素顔……………沢村隆雄
「マゾヒストの手帖」速報欄……………沼田正三
最近の映画から……………鈴木千稔
縛り映画落穂集……………鈴木千史
「我が愛の記」について……………津島比呂史
「ウイナスの重石」……………真砂十四郎
女性願望の青年の手紙……………中津比呂直
Mへの手紙「第一信」……………二俣志津子
「残酷なる女性達」画集解説……………菅原春夫
編者への公開状……………喜多島佳月
わが半生の記……………依田二文郎
責の回想……………喜多島佳月
幽囚十ヶ月……………依田二文郎
責のアイディア……………依田二文郎
倒錯の英雄、織田信長……………笠置俊郎
縛り絵を描いて……………鳴山能平
流腸マニヤの日記……………花村恵子
巨根崇拜……………森田太一
巨根を切る……………小田原渡
自腹を切る……………長瀬川純子
私の体験記……………長瀬川純子
寄宿舎での体験……………田村仁子
導尿される令嬢……………田村仁子

三月号特集

○二月特大号 【百四十円】

倒錯趣味は果して背徳か……………成瀬川紅次
「姑娘来り」……………白金清一
炎虎雄記……………長谷川幸生
草双紙合巻に現れた女腹切……………山口生

血染の毛綱(二)……………伊藤晴雨
お灸通信……………岩瀬祥一
絵物語「百合子の冒険」……………村崎明子
狼らな虫……………辻村隆雄
残酷なる女性達……………森本愛造
流腸の往復文書……………花村恵子
鉦山の少年忠告期録……………二本良雄
裸にされた美人通訳……………山本晴雨
非小説性液……………伊藤晴雨
レスボスとソドミアへの福音……………伊藤晴雨
幽囚十ヶ月……………森田太一
少年の体臭……………吉次郎
倒錯の英雄、織田信長……………笠置俊郎
編者への公開状……………吉次郎
大津事件とその後日譚(一)……………吉次郎
「マゾヒストの手帖」……………津島比呂史
少年の腹自裁……………小竹比呂史
あるマゾヒストの手帖から……………沼田正三
嫉妬する少年たち……………三根耕二
自分後手に縛る方法……………伏見耕三
A感覚の秘密……………羽村京子
サシステイックなシーンに就……………柳一稔
最近の映画から……………末白柳一稔
無毛狂……………末白柳一稔
弱者劣者にサシズムを感じる……………末白柳一稔
夜光島(五)……………吾妻一
私のイメージ……………みずしま・まもる
「写真」お臍と乳房……………狩井麗作
ボクの貴め方……………宝塚三三夫
映画に現れた切腹シーン……………中野妙子
強盗に侵入された時の事……………井上三雄
鼻責めについての実験……………古田恵子
「乳棒と月経帯」……………花村恵子
「腹被る人妻」……………大庭高視
特異マゾの告白……………長瀬川純子
露出願望の少女の告白……………柴崎通子
私の見た三人の腰巻女……………東明子
破壊本能の文化的理由……………林弓志雄
「腹切に依る悦び」……………兵頭庫一

三月号特集

○新年特大号 【百四十円】

「腹切に依る悦び」……………兵頭庫一

畸型の愛着……………津久井愛
残酷なる女性達……………森本愛造
「遺稿」悪の広場……………角村祥一
お灸通信……………岩瀬祥一
人工女性会見記……………滋賀二子
ソドミアの祭壇……………川根耕二
草双紙に見る女腹切……………井上正三
縛られた女……………沼田正三
あるマゾヒストの手帖から……………沼田正三
緊縛に関する十二章……………沼田正三
絵物語「百合子の冒険」……………村崎明子
告白文、体験談の書き方……………村崎明子
幽囚十ヶ月……………津島比呂史
切腹願望と臍いじめ……………津島比呂史
倒錯の英雄、織田信長……………笠置俊郎
男性切腹同性愛者……………児島輝彦
挿絵と心中し度……………白島清一
春日ルミに関する十二章……………白島清一
女蘭美考……………白島清一
「あるマゾヒストの手帖」……………土俣四郎
「あるマゾヒストの手帖」……………土俣四郎
絵物語「芸者、春駒」……………依田二文郎
現代マゾヒズム芸術時評……………原忠正
日本マゾヒズム芸術時評……………原忠正
丁稚小僧幻想……………森本愛造
夜光島(四)……………吾妻一
欲義先生性愛相談欄……………伊藤晴雨
血染の毛綱……………伊藤晴雨
「残酷なる女性達」画集解説……………伊藤晴雨
女灸点師……………森本愛造
縛り絵マニヤの記録……………長瀬川純子
「色慾」マニヤの記録……………長瀬川純子
「男色秘話」集める人々……………菅原春夫
「夫婦の倒錯遊戯」……………福本智子
動物嗜好者の手記……………山田美智子
号泣(私の腋線遍歴)……………佐次浩介

告白と手記と体験

告白と手記と体験……………佐次浩介



奇譚クラブ

復刊第五号
六月月号
目次

美貌の屈辱
孤島の捕われ人
佐賀美智子ボーズ集
曼陀羅華の萌芽
私室でのプレイ
深夜のホール
修道院の神室

四馬 孝・画
アメリカ雑誌より
(須川令子嬢)
四馬 孝・画
宮崎昭平・画

大衆文学に現れた責めの描写

藤見 郁 18

赤い花は泣いている(第三回)

松井 頼子 26

明治と昭和の絵くらべ談義

緒台 あふみ 37
春田 一郎 42

奈子の自己愛について

門田 奈子 50
青山 三枝 59

「鞍馬の孕み女」
私のイメージ「代理部便り」の夢

並原 猛比古 60
森山 泰子 68

女サティスムより奴隷に与える手紙

菅原 春夫 78

私のアイディアと回想

泉 義明 84

歴史実話

林 靖彦 96

私のマゾ・スクラップ帳より

山 中 同 人 98

甘美なる被虐の幻想

沢 木 清 克 100

小説 虐妻日記

伊 藤 清 三 106

現代マゾヒズム芸術時評

原 谷 忠 三 115

お仕置遊戯

桜井 美智子 118

マゾヒズム体験談

S・Y 生 123

猪狩

黒井 邦 131

緊縛女体雑考

浮家 鷹 三 133

体験・告白・手記「裸」先生

青葉 楓 一 132

最近の縛り時代劇映画から

威 峨 美 子 140

体験・告白・手記 お隣の研究

須藤 晴 夫 136

晴雨私稿 結髪の種類々相

伊藤 藤 晴 雨 142

玉稿 落穂集

編 集 部 149



映画に現れたムツキ

赤井 井 152



ナチスに現れたムツキ

藤木 仙 紀 154



私の空想天国

藤木 仙 紀 154



娘の空想天国

藤木 仙 紀 154



サティスムの漫画

藤木 仙 紀 154



或る告白 春と女の素足

藤木 仙 紀 154



拾万円懸賞原稿募集

藤木 仙 紀 154



限定版各種特集号発行予告

藤木 仙 紀 154



読者通信

藤木 仙 紀 154



「切腹面帳」発行中止について

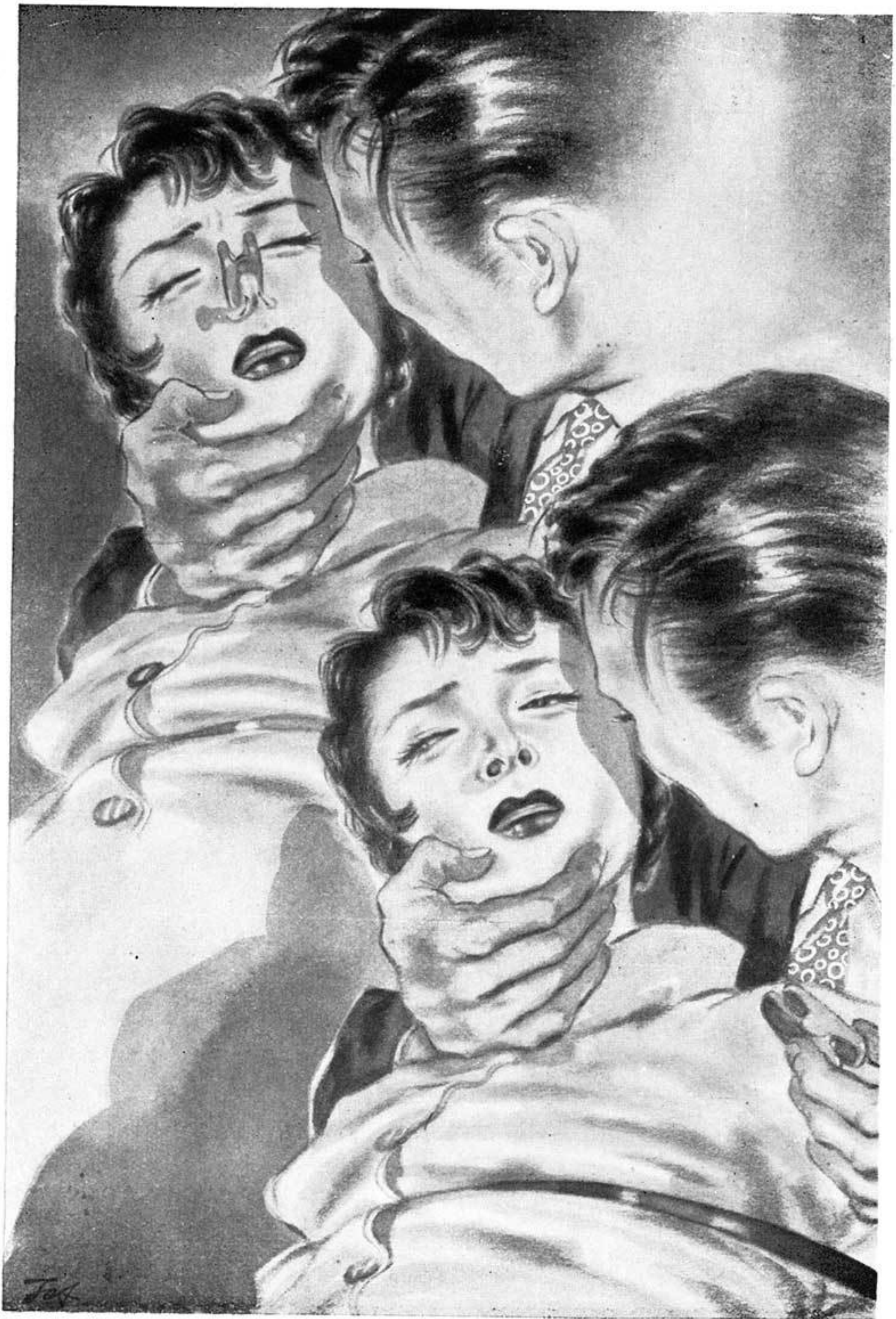
藤木 仙 紀 154

2

美貌の屈辱

クリップを手に持った男の顔は、嗜虐の美酒に酔っている。あゝ、なんという美貌への侮辱であろうか、整った顔の中心に誇りやかにツンとすましている可愛い鼻は

無惨にもクリップによって押しひしがれているではないか。おゝ華やかな屈辱、





この時、一本の矢がどこからともなく飛び来って黒豹に命中した。そして樹の茂みから、別の動物が現れた。彼は二本の足で地上に立っていた。手にナイフを持った“ジャングル・マン”は、乙女に近寄ってきた……………。

<アメリカ雑誌・Exotique No.2 ヨリ>

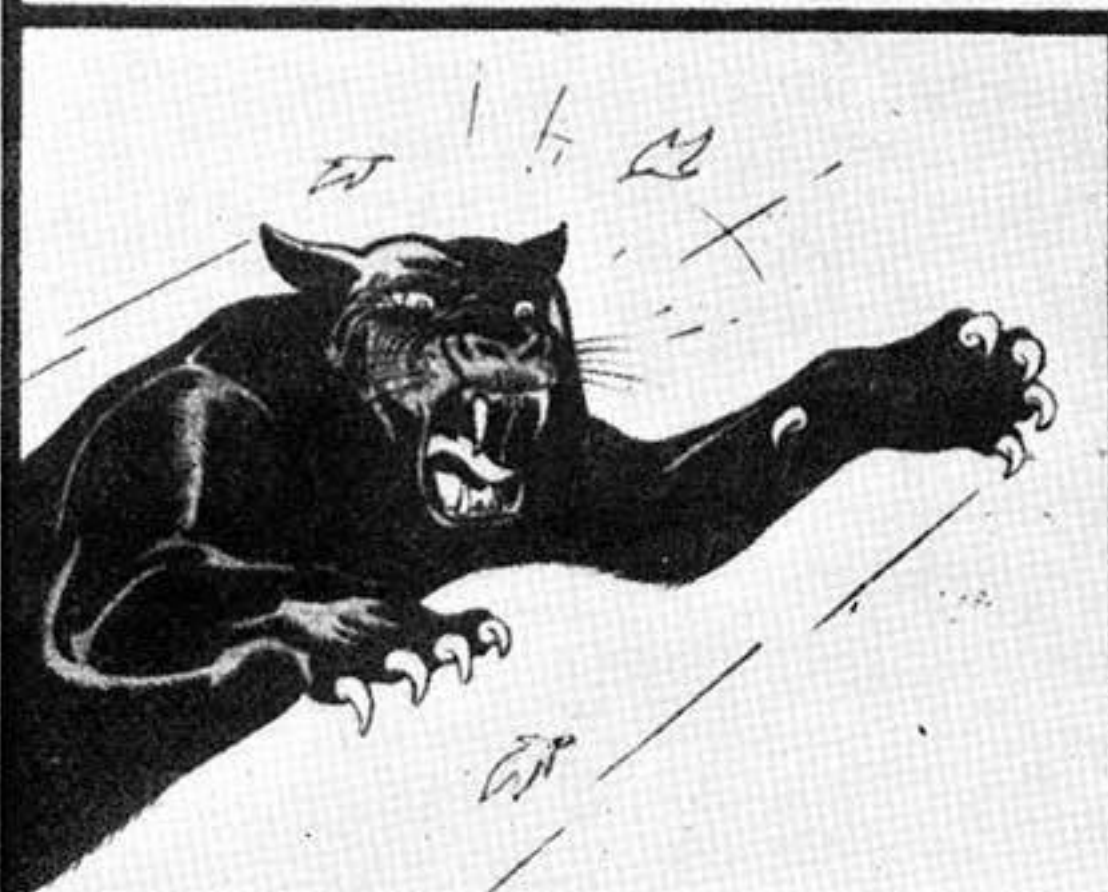
孤島の捕われ人

南太平洋の或る小さな島の出来事だった。一人の白人の乙女が、一本の樹にしっかりと縛りつけられていた。彼女は縛しめを逃れようと死物狂いになっていた。突如、暗い樹間から、さらさらと気味の悪い音を立て、黒豹が唸り声を挙げて現れた。この哀れな生贄をその牙の獲食にしようとして……………。

CAPTIVE ISLAND

by GENE BILBREW

A SMALL BOAT PUTS IN TO AN UNCHARTED ISLAND SOMEWHERE IN THE SOUTH PACIFIC--A BLONDE GIRL IS HASTILY BROUGHT ASHORE AND LEFT BOUND TIGHTLY TO A TREE --- SHE STRUGGLES DESPERATELY TO FREE HERSELF. THEN SUDDENLY, STARK TERROR GRIPS HER--AN ONIMUS RUSTLE OF LEAVES, AND FROM WITHIN THE DARK FOLIAGE ----



--- A BLACK PANTHER EMERGED!! SNARLING ANGRILY, THE BEAST BARED IT'S FANGS AND SPRANG OUT OF THE BRUSH AT IT'S HELPLESS VICTIM!!



WITHIN THE NEXT INSTANCE, THE BIG CAT'S CLAW WOULD HAVE SHREADED THE GIRL TO RIBBONS, BUT ----



モデルになって貰って、まだ間のない彼女ではあるが、“縛られてポーズをとる”ということには、次第に興味を持ってきて、撮影の日が待ちきれないという昨今である。

佐 賀 美 智 子 嬢 ～ポ ーズ 集～

曼陀羅華の萌芽

清潔な感じのする、目のぼっちりとした近代的美貌の持主。

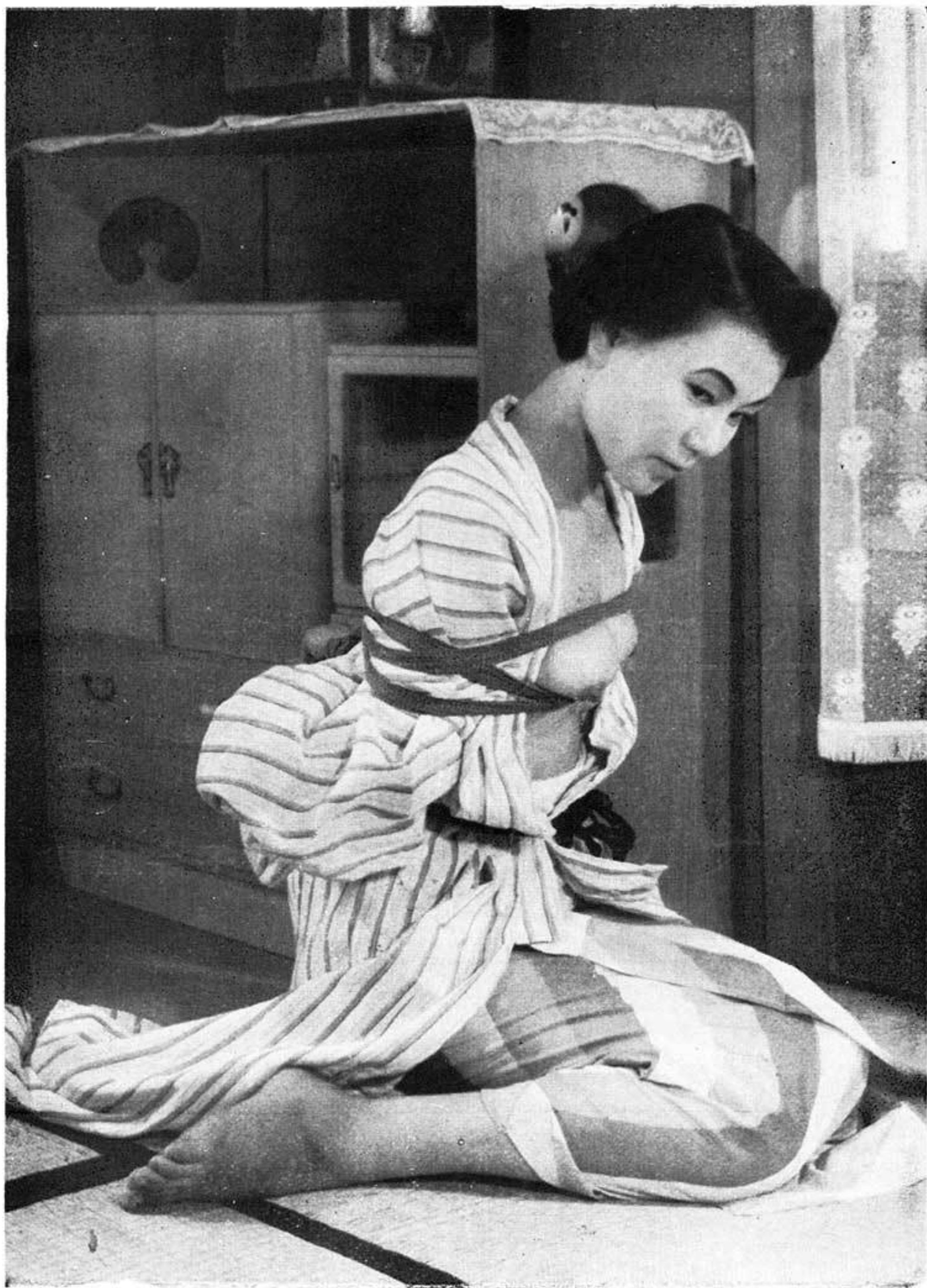
最近新しい本誌のモデル陣に加った可憐な乙女である。



須川令子嬢 私室でのプレイ

「私の部屋へ来て撮影して下さいませんか。」という厚意に甘えて、彼女の私室へ厚かましくも出張に及んだ時の作品である。

……本誌写真部、撮影……



深夜のホール

しんと静まりかえった深夜のホールの中に白く浮かび上った一人の人影があった。コツコツと乱れた足音が近ずいてきた。

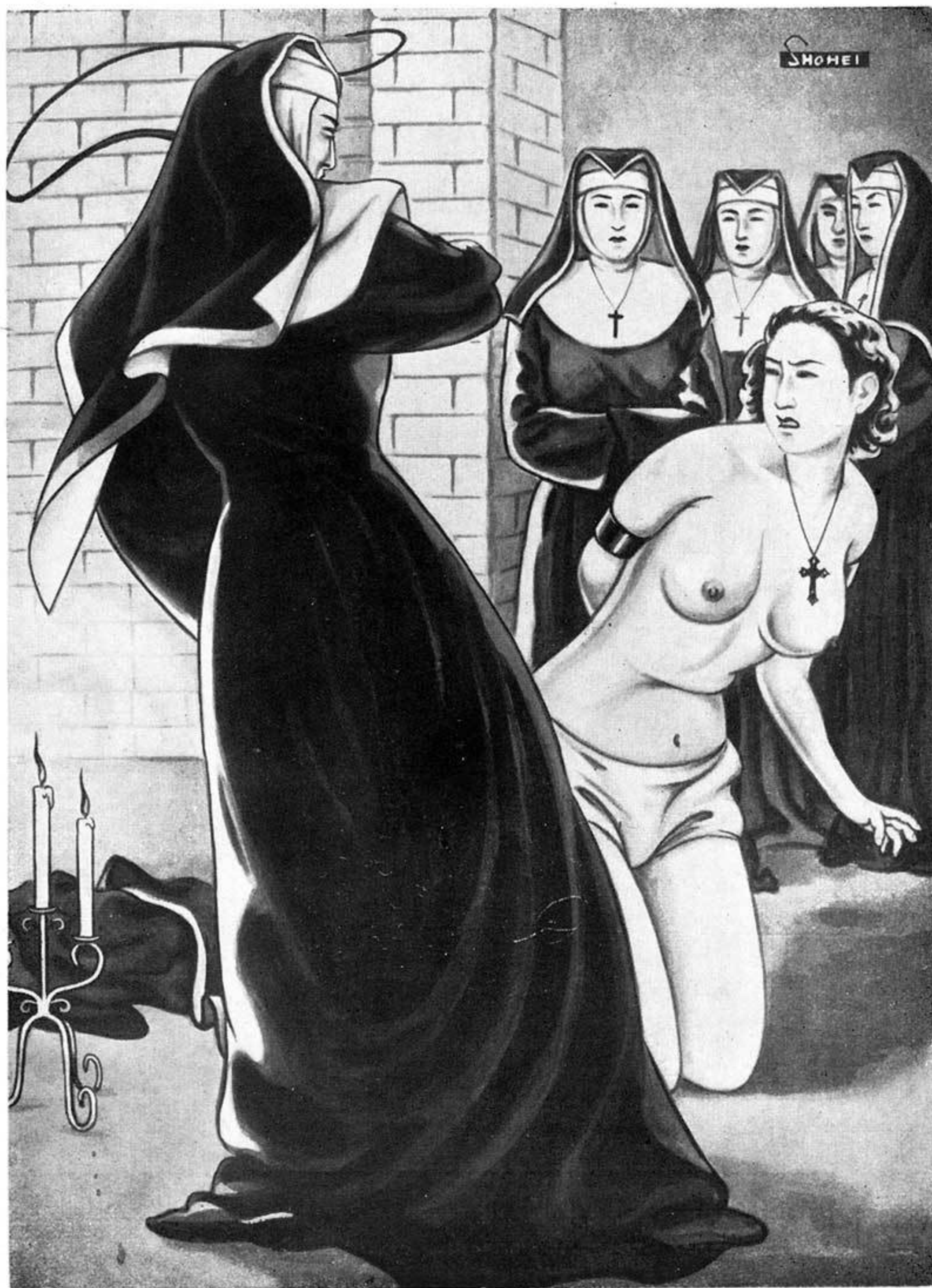
夜目にも白いその肢体が、俄かに崩れるようにも見えるのだった。



修道院の秘室

宮崎 昭平・画

尼僧ばかりうごめく修道院の奥深く、彼女たちが秘室と呼ぶその一室で、今や神の御名の下で、鞭の洗礼が行われている。ローソクの灯に照らし出された白と黒とのコントラストは、彼女たちの生活をあらわしているようだった。





アメリカ雑誌 BIZARR のカットより

新しい文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1 9 5 6 年 6 月 号

(第十巻 第三号 通刊第八十五号)



大衆文学に現れた

責めの描写

藤

見

郁

大衆文学に現れた責めの描写について、なるべく広範囲に、記録して行きたいと思う。

大衆小説の責めという点、どうしても時代物が多くなり勝ちだが、なるべく現代小説からも採録して、変化をもたせたい。

時代小説の責め場面という点、先ず角田喜久雄氏を筆頭にあげねばなるまい。

伝奇小説と銘うって次々と書かれる氏の小説は、探偵、怪奇、エロチシズムに溢れ、まげ物作家の一方の雄であることは間違いない。著名の大衆雑誌なら、必ず角田喜久雄氏の作品が、編集の定石のように置かれ

ている。氏の責め場面はかなりサディスティックで、それが一篇の中かなりの比重を占めている。私は氏が相当のサディストであると思っている。数ある作品の中から先ずはじめに、小説倶楽部所載の「白蠟小町」の責め場面を抜いてみる。お霜という小町娘が、非人の群に覆われるシーンである。

『……自分でつまずいたのか、うしろから突き飛ばされたのか、のめって、どッと倒れたときには、同時に、その背の上に非人の身体が蔽いかぶさっていた。一人や二人ではないらしい。背骨がめり

めり音たててへしおれるかと思うばかり、上からおさえつけ、お霜の細腕をぐいぐいうしろへねじり上げた。

なさけ容赦もなかった。男達の手が、お霜の胸や腰をぐいぐいさぐりまわし、身につけている細紐を、手あたりしだい引きとりむしりとり、手足を、ちぎれるかと思うほどくりあげ、その上、お霜の腰からむしりとった手拭で、ただでももう声さえ出ず、片息に喘いでいるお霜の口へ、本当に息がつまってしまうほど固く、猿轡までかました。……』

『……お霜の顔をおしつぶそうにはさんだ

非人達の身体から発散する汗と脂と垢とほこりの入りまじった異臭の、余りの強烈さに、胸のむかつきにたえられなくなったためだったか、それとも、余りに固くしめられた縄のためだったか、飛ぶように走ってゆく非人達の肩の上でもまれていくうちに、お霜の意識はいつの間にかうすれていってしまった……」

と、氏の描写は相当にねばっこい。普通の時代小説ならば、このような綿密な筆は使わなくても済むのに、このシーンだけでかなりの字数を使っているところを見ると氏がサディズムに興味をもっていることがわかるのである。

この後、いったん逃げ出したお霜が、再び捕えられ、焼火箸でおびやかされる場面がある。

『……藤太が何かいうと、一人の非人が、お霜を抱きあげるようにして引ッたて、すぐ近くの太い杉の根方へつれていって、立ったまゝしぼりつけてしまった。

藤太が、のっそり立ち上って、杖をつきながら、ゆっくりゆっくりその方へ歩いてゆく。そのすぐ側には、真ッ赤に焼けた火箸を手にした手下の一人がより添うようにしてついていく。

どうしようというのか？ 何が起ろうと

するの？……』

『……藤太は、小ゆるぎもせず、一步一步お霜の方に近ずいてゆき、その前に立ちどまると、やおら杖をはなし、代りに真ッ赤な焼け火箸をうけとって、更に、もう片方の手をのぼしてお霜の顔から喉、喉から胸へと、ゆっくり探るように撫でおろして来た。

と——その手は、お霜の半ばはだけた乳房の下あたりまでくると、そのまゝ二、三秒間をじいッと動かずとまっていたが、と見る間に、突然、右手にしていた火箸がすっとその乳房の下へ向けてあがっていった……』

と、流石ベテランだけあって、スリルのある文章のたたきこみで、うまいものである。

次に、山手樹一郎氏の作品の中からあげてみる。大衆小説随一の人気作家である氏の長篇小説にも、必ずといってよい程責め場面がある。私は、山手氏も角田氏と同じようにサディズムな傾向があるのではないかと、と睨んでいるが、このほうは同じ責め場面でも、なかなか綺麗に調子のよい描写である。角田氏のような、陰惨な色気ではなく、明るいエロティシズムがある。これも数多い作品の中から、講談倶楽部所載

の「野ざらし姫」の一節を抜いてみる。

『……うしろ手に縛られているお菊は、しようがないといったように横坐りになっておとなしくうなだれている。がっくりと鬚の根が落ちて、こわれかゝっている髪がひどくなまめかしい……』

『……手ぬるい見た猪崎が、じりじりしながら、びゅつと寒竹の鞭を、一つ鳴して、前へ出て来た。

「女——」

短慮我武者らな猪崎は、頭からお菊など虫けらあつかいだ。

「なんだえ、奴」

お菊も負けてはいない。

「無礼なことをいうな。鶴丸さまは今どこにいるか、白状しろ」

「厭なこった」

「なにッ」

「物知らずの田五作侍なんかと口を利くのも虫唾が走らあ」

「うぬッ」

びしッと火の出るような鞭が、力一杯お菊の背中を鳴る。

「あッ」

骨まで突き刺さるような激痛が全身へ走って、お菊はのけぞるように身をものがきながら、口惜しいが気が遠くなりそうになる。

「いえッ、いわぬか」

「畜生ッ。い、いまに五寸釘を貴様の、眼玉へ打ちこんでやるから、おぼえてろ」

「馬鹿ッ。まだ痛い目にあいたいのか」

第二の鞭が皮膚を裂けよと飛ぶ。

「ううつ」

こんどは俯伏せにのめりそうになって、思わず、口唇を噛み切っている。

「もう一度聞く。鶴丸さまはどこにいるんだ」

「い、いるところにいらあ。ざまあ見やがれ、おたんちん」

「うぬッ」

第三の鞭だ。お菊はひいッと悲鳴をあげながら、ついに前へのめつてのたうつ。さすがに見ていた者が顔をそむける。……」

と、鞭うたれる美女と、悪侍の言葉のやりとりが調子よく、勝気な女の苦悶が簡明に、しかも迫力ある筆致で描かれている。

尚、この「野ざらし姫」は講談社から単行本になって出ている。又、東映映画では「追撃三十騎」と題して映画化した。喜多川千鶴が責められる女、お菊に扮して好演した。

次に同じく山手樹一郎氏の作品で「浪人横丁」(山ノ手書房発行)から、一、二拾ってみよう。

船の中で女が縛られ、ころがされている。

『……青すだれ越しに入るあかるい光の中に、はっと目についたのは目も絢な派手な娘の衣類の色だ。』

しかも、がっくり鬚の根のおちた頭をこっちむけにして、仰向けに倒れている娘は、無残にも自分の赤い細紐で手足を縛られ、目も口も手拭でしっかりとふさがれている。

生きているとわかるのは、着くずれて白々と肌のこぼれている豊かな胸のあたりが大きく息づいていることで、はだかった裾前にちらつと膝がのぞいているのも、妖しい白昼夢を見ているようで、思わず喉が引きつけるように感じた……」

『——そうか、あの浪人者が艦へ出てくる時、娘の当身をくわした、そうに違いねえ。そこは稼業柄、栄三はそう気がついたとたん、もう手が娘の胸へ行った。厭がって身もがきするのをかまわず、いきなり襟を押しはだけていた。白桃のような双の乳房が、恐怖にもがきふるえている……』

『どこの娘かは手拭を取れば大体わかる。どうせ調べられる体なら、おれが先に調べたって悪いって法はあるまい。』

栄三はついに悪魔にとりつかれて、目の前の娘の乳房へ素早く片手をかけた。

掌へ重い弾力を感じながら、じんわりと握りしめた時、ぐらっと船が一つゆれる……」

縛られた娘が、眼も口も手拭でふさがれて、乳房をもてあそばれるという設定は面白く、描写も美しい。

この娘は、次の場面では無住寺にかつぎこまれ、悪浪人のために、あわやという所までいく。

『……手足をくぐられ、ちゃんと猿ぐつわまでされて、無残にも着くずれたまゝの娘の姿が、白々とした肌が、どうにも眼について離れない。……流れこむ破れ行燈の黒ぼんだ光の中に、くの字なりに背を向けて固くなっているらしいお照の白い脛が、むっちりと盛り上っている豊かな腰のあたりがこっちからさえ、男心をひきつけずにはおかぬ。』

「お照、因果とあきらめろ。いいか、人というんじやないぞ」

そんな虫のいいことをいいながら西崎の手はもう娘の胸をさぐり出したのだろう、お照の体はぎくりとちぎまって、急に身もがきをはじめた。

「厭ッ——助けて」

お照の声だ。もがいている中に、口の手拭がずり落ちたのだろう。

「いっそ、いっそ殺して。——もう恐い」
「おとなしくするんだ」

西崎は上の空でいいながら、ふっと立ち上った。お照の体中をじいっと見まわしていたが、つかつかとこっちの部屋へきて行燈のそばへ寄っていく。灯を消してから、安心して悪魔になろうというのだろう。しかも丸腰だ。刀は手まわしよく、お照のそばへおいてきたらしい……」

ことの前に、邪魔な刀を置いておくなどと、山手氏の描写はなかなか細かい。なる程、刀をさしては、あれはむずかしからう。

次にもう一つ山手氏のもので、すさまじいローソク責めの描写があるのを拾って記録してみよう。

講談社版の「江戸の虹」下巻から採る。

「……口をつぐんで、まだ不敵にも睨みつけている強情なお蘭の顔をみると、錦之助はいきなり右の手でお蘭の肩をつかみ、力まかせに俯せに押し倒した。

「な、なにをするんです」

「貴様の手から焼いてやる。音を上げるなよ」

錦之助はお蘭の背中へ、足のほうを向いて馬乗りになった。目の前に荒縄で重ねて縛られた白々とした手首が、赤い袖口から

のぞいている。

「お蘭、もう一度だけ聞く。貴様は、どうしても鶴枝の居どころを白状しない気だな」

西部の掠奪者 藤木仙治

かなわぬ恋の意趣ばらしに、得意の投げ縄を使って、酒場の女ジエーンを縛りあげた荒くれ男たちは、馬を走らせ、西部の荒

お蘭は答えない。体中で、誰が口を割るもんか、と云っているようだ。

「くそッ」

錦之助は、ゆっくりと蠟燭の灯を、人形

野を引きずって行く。

「あれエー助けてエー」

しかし、乱暴なやくざ男を怖れ、誰も女を助けようとしなない。



のように形のいい手首へ近づけて行つた。

「熱いっ」

じりじりと手首が焼けて、醒い香いが鼻をかすめ、尻に敷いたお蘭の柔い体が、死物狂いで、のたうちはじめた。

「人殺しいっ」

金切声が、びいんと空屋敷中をゆすぶる。

「喚け、喚け」

錦之助はもう完全に鬼になっていた。うごめくお蘭の肉体が異様な男の昂奮を誘いそのざくりと耳に突き刺さるような悲鳴さえ、胸にわだかまる鬱憤を晴らしてくれるような気がするのだ。

錦之助はお蘭の袖口をたくし上げて、ふつくらとした腕をあらわにした。その白羽二重のような光沢のある皮膚へ、又しても、めらめらと、蛇の舌のようにゆらぐ灯を、じじっと這わせてやる。白い肌は、たちまち赤く焼けたゞれてゆく。

「熱っ。助けてえ、人殺しい——」

お蘭は骨身を抉るような、熱いというよりは痛烈な痛さに、身もだえして狂いまわった。

そのばたばたと上下する足、その度に、くつきり盛上がるように、うごめく丸い腰——もがけ、もがけ。

錦之助は目を血走らせながら、もう一方

のほうの袖口をまくり上げた。

「ひいっ」

お蘭の喉が裂けるように鳴る。……」

……こうなると、奇クの常連作家顔まけである。女の背中へ足のほうを向いて馬乗りになる、そして眼の前の手首をローソクで焼くなど、山手氏のサディズムはなかなかに、堂に入ったものである。

次に、大衆文壇の最高峰、吉川英治氏の、「宮本武蔵」第四巻空の巻（六興出版社）から、私の印象深い加虐描写を一つぬき出してみよう。

可憐なお通が、本位田又八のために、雨乞堂の裏手で責められるシーンである。

『……堂の裏手にひきすえられて、先刻から、又八に責め苛まれていた彼女だった。縛められている両手がきくものならば、及ばぬ迄も、突きとばしてやりたいと思うが、それも出来なかった。隙があったら眼の前の池に飛びこんで、堂の棟に上っている絵馬のように、楊柳の幹を巻いて、呪う男を呑まんとしている蛇身になっても——と思うが、それも出来なかった。』

「立たねえか」

又八は、手に持っている篠を鞭にして、お通の背を、いやという程打った。

打たれる程、お通は意志が強くなる。も

っと打ってみると望みなくなる。……黙って又八の顔を睨めつけていた。すると又八は、気が挫けて、

「歩けよ、おい」

と、いい直す。

それでもお通が起たないので、今度は猛然と、片手で襟がみをつかみ、

「来いっ」

ずるずると、地を引き摺られながらお通が、地心の火へ向って、悲鳴をあげようとすると、又八はその口を手拭で縛って、引っ担ぐように、堂の中へ抛りこんだ。……』

『いきなり彼は、お通の肩と左の手頸をかくく掴まえた。そして着物の上から——彼女の二の腕のあたりを、がぶっと、深く噛みついた。』

ひいっ、お通は思わず悲鳴をあげた。

身を床にもがいて暴れた。そして、彼の歯をもぎ離そうとするほど、彼の歯の尖を肉へ深く入れてしまった。

りんりたる血しおが、小袖の下を這って、縛られている手の指先までぼとぼと垂れて来た。

又八は、それでも猶、鰐のような唇を離さなかった。

「……………」

お通の顔は、月明りでも受けているよう

に、見るまに白くなってしまった。又八はぎよっとして、唇を離し、そして彼女の顔の猿ぐつわを脱って、彼女の唇を調べてみた。——もしや舌でも噛み切ったのではなからうかと。

余りの痛さに、喪心したのであろう、鏡の曇りのような薄い汗が顔に浮いていたが唇の中にはなんの異状もなかった。……」

縛った女の二の腕に、血の流れる程噛みつくなど、なかなかのサド・シーンである。血が、縛られた手の指先にまでぼとぼと垂れるなど、かなり激しい噛みつき方で、誇張が感じられるが、恋しい女に嫌われた男の怒りが、サディズムとなって描写されている。

次に、現代小説の中から一つ記載して置こう。

宮本幹也氏の「銀座令嬢」(雑誌「明星」所載)の一場面。直接縛りの場面はないが、特筆に価する描写がある。

雑誌「明星」の読者は明らかにその読者の殆どが青少年の筈であるのに、これも又、相当なエロティック・シーンである。おまけに豊富な挿絵もついている。ナチス・ヒットラーのように書物を焼いて得意になる教養たかいおばさん達も、こういう娯楽雑誌にはなかなか寛大らしい。或いは彼女ら

も喜んで読んでいるのかも知れない。それはさておき、そのシーンというのを書きぬいてみる。

「……言下に男達の荒くれた手が摩耶子の着ているものを、引っ剥ぎ始めた。ステュアデスの制服もぬがされていた。スリッパも、ブラジャーも、そして、最後の一枚までも……」

「許して！」

気が遠くなりそうな瞬間だった。必死に摩耶子は叫んだ。

「ひひひひ」

と、ジャンクの政は心地よげにせせら笑った。

「ここに居る男達はな、女という女に飽き飽きしている連中ばかりよ。しかも普通の方法じゃアピンと来ねえ連中ばかりさ。ひひひひ。かわいがり方もちよつとばかし変っているのさ」

一体どんなことをしようと云うのだろうか？ 恐怖と羞恥で、すぐにもぼんやりと気が遠くなりそうな自分に摩耶子は必死になつて格闘していた。

「やめて！」

両手も両足も男達が掴んでしまつていた。白いなめらかな摩耶子の皮膚が薄暗い電燈の光の下でなまめかしく浮き出した。

そののたうつ肢体を政は舌なめずりをして見ていたが、

「構うこたアねえ。早く全部ぬがしちまえ！」

「へい」

無惨にも摩耶子の白い肌に男の手がかかった。ごくりと男達は生唾を飲んだ。

「引んめくれッ！股間縛りで縛るんだッ」

と、ジャンクの政が喚いた。眼は血走り、まるで狂気のようなだった。股間縛り？ 一体、それは何だろうか？

「あっ……」

摩耶子は呻いた。男はぐいと乱暴に摩耶子の下着に手をかけた。……」

……ここで面白いのは股間縛りという言葉葉がでてくることだ。私は宮本幹也氏は確かに奇クの読者で、この責めのヒントは奇クからとったものと思う。

同じく宮本氏の「魚河岸の石松」では、完全に股間縛りで縛られる描写があり、その説明にはやはり奇クからの引用があつた。おまけに、ヌード股間縛りの鮮明な挿絵が(岡本爽太氏——内外タイムス所載)についている。今手もとに資料がなくて、書き抜くことのできないのが残念だが、私は読んですぐそれを感じた。作家達も、時代に遅れないために、いろいろ勉強するもの

だわい、と思ったのである。私の眼に触れない点でも、案外、奇巧は各作家に影響を与えているのではないかと思われる。

尚、この「銀座令嬢」「魚河岸の石松」とも、松竹、東映に於て、映画化された。勿論、股間縛りなどのシーンは無かった。次に変ったところで、講談雑誌から拾ってみる。松林桃園という人の口述で「男一匹刺青奉行」つまり遠山政談の一節である。この場面は、今までと違って、はじめから女が、素裸で縛られている。

「……まるで地の底からでも聴えて来るような、唸りごえ。はて、どこから聴えてくるのか、あたりに気をくぼってみるが、声は地の底から聴えているようにしか思えない。」

「ウム、どこかに穴ぐらがあるにちがいない……」

金さん立ち上った。手さぐりで壁に近よります。ガラリと唐紙をあける。押入れの床の板をウムともち上げて見た。下からは、冷たい風が死人の息のようにのぼってきます。さぐってみると土の階段が出来ている。階段を降りきると横穴がつづいている。声のする方に進んで行く。荒く組んだ格子がある。

格子の奥の土壁にローソク立てが打ち込

美女と海賊船 藤木仙治

「それッ、女をマストに縛りつける！」
こうすれば敵の船からの攻撃はできない
黒ひげ船長の命令に、海の無法者は、とり

この女をマストに縛りつける。敵のひるむすきに、海の狼は牙をむいて襲いかかつていくのだ。縛りつけられた女は、救いを求めて絶叫するが声はむなしく風に消される。



んであつて、それが薄ぼんやり土牢のなかを照している。土牢のなかには紅葉のお竜が、一糸まとわぬすはだかで縛られていた。

もう声を立てることも出来ないのか、ぐったりしているようであります。

「お竜——」

金さんが声をかけたたん、天井からサ

ッと降ってきたものがあります。……」

……ところがこのお竜というのは、悪人たちの手先で、縛られているのは狂言なのである。そのことを同じ仲間の、へそ熊と云うのとしやべっているが、この辺が講談らしく人情の機微に触れて、この会話にはちよつと味がある。

『……次の日の夕刻ぐらいになった地下道の上の幽霊屋敷の奥まった一室で五六人の人相の好くない男が酒を呑んでいる。ちよつとはなれたところにぼんやりしているのは紅葉のお竜。乞食に化けて金さんを誘い出しに來た、へそ熊という男が、

「お竜さん。お前さんの芝居ときたら素晴らしかったぜ。息も絶えだえになって髪の毛をふり乱し、まっ白いはだに縄が喰いこんだところなんざアたまらなかつたねえ。ああ親分がうらやましい」

「なにを云ってるんだい。おふざけでないよ。でも、あの男はどのだれなのさア、なんだってこんな手のこんだ真似をしたんだよ」

「あいつのことを親分から聴かなかつたんで」

「ああ、ただ裸になって縛られて、ちよつとお芝居をしてくれっていわれただけさ」
「へえ。そうなんで？ あの男が、それ刺

青奉行っていわれた遠山左衛門尉なのさ」

「え？ 遠山の？……」

はつとお竜の顔色が変わりました。……」

……ああ親分はうらやましいなどと、へそ熊が感嘆するところなんかは、なにも特別なサディストでなくとも、女体緊縛シーンが男ごころをそるものであることを表現して興味がある。

こうして書き並べてみると、各作家によって、それぞれ責めの描写に特徴があり、又、いろいろ工夫をこらしていることがわかる。

大衆文学の中でも、単に女性が責められ、縛られる場面ならいくらでもあるのだが、特筆に価するのはやはり少ない。

その多くは、わずか一行か二行であつさり片づけられている。責めシーンだけを執拗に追究している小説は思ったより少ない。

又、責めに多くの字数を費しているともみえても、筆に熱の入っていない場合には、如何にもマンネリズムであり、私共にはすぐわかるものだ。作者が、たとえわずかでも責めに興味をもち、力をこめて書いている場合にはその熱気が、こちらに伝わってくる。

奇クに掲載される文章は、文学的には稚

拙なものもあるが、その真実性と力のこもっていることでは、どんな作家にも劣らないだろう。

こうして、現代大衆文学の中から、加虐場面だけを採録して、数をまとめて、責め場設定の各統計をとったら、興味ぶかい現象がみられることと思う。

この他、舟橋聖一、野村胡堂、横溝正史氏らの作品にとりあげたいものがあつたが、それは次の機会にゆずりたい。

単に、縛りの責めだけでなく、心理的にサディスティックなものも広範囲に取り上げたら、いろいろ面白い結果が、現れるのではないかと思っている。

◎本号では、藤見郁氏の「大衆文学に現れた責めの描写」及び菅原春夫氏の「私のアディアと回想」―悦虐ダイジェスト―資料提供に代えて。並に、緒台あふみ氏の「明治と昭和の絵くらべ談義」の三篇を掲載しましたが今後はつとめて、文献的価値のある資料を紹介したいと思ひますので、新旧長短に拘らず御寄稿下さるようお願いす。記憶の不確実なものでも、多数読者の方により誤謬があれば訂正されたいと思ひます。

(編集部)

連載小説

赤い花は泣いている (第三回)

松井 籟子

北原 純子・画

雪姫幻想

窓の向うに白い雲が浮いている。

ビルディングの五階の艶子の稽古場だ。

舞踊教室という名のもとに、週に二回、艶子は此処で若い人達に舞踊を教えている。

いつもは女たちの香水と汗の匂いで、温室のようなこの部屋が、今日はひっそりと静まりかえっていた。

「あっ、先生、痛い、そんなにしたら、首がしまってしまう！」

女の悲鳴が急にするとく空気を揺った。

「体をそらせばいいのよ、出来るだけそらしたら、首はしまらないわ」

「痛い、無理よ、かんにん、もうかんにんして！」

「じゃあ、そのまゝ、一寸そのポーズみせて……」

「苦しい！」

片方は悲鳴をあげているのに、裕々と窓際まで後向きに下つてきて、窓わくへもたれるように身をよせたのは艶子だった。

「もうといて、先生」

悲鳴をあげている女はと見ると、あのテリーと呼ばれた照子だった。

踊りの稽古に使う一段高い板の間の真中に後手に縛られている。袖の長い和服を着て、帯をお姫様のようにだらりと垂らし、胸をまわした紐で後手に結ばれているのだ。

それはまだいい。

彼女の前後に椅子がおいてあって、立っている照子の足首は、前の椅子の脚にしっかりと結びつけられ、首にかけた縄を、後の椅子に結ばれているので、自然、体を弓のように後へそらさないと、首が締ってしまうことになるのだ。

胸のふくらみが天井に向く程、照子は体をそらしあえいでいる。



「もうそれ以上体をそらすこと出来ないかしら？」

傍へよった艶子は、椅子に結びつけた首の縄をといいたが、はっと息する間もなく、再び椅子の低い位置まで引張った。

「あゝっ！」

照子はもう言葉にならない呻めき声を発した。

のどの皮が破れるかと思う。

顔が真赤になってきた。

艶子はそれにかまわず、もう一度距離をおいて、その姿を見ていたが、やっと、椅子に結んでいた縄をといいた。

照子は崩れるように、後手に縛られたまゝ板の間へ伏した。

艶子はその姿を又、網膜に焼きつけるように見ている。

「先生、もうつらい、まだポーズとらなければいけませんか？」

照子がいうのに、

「だって、はじめっから、承知で来たんじゃないの？ 縛るといふこと、いろいろポーズといってもらうということも……」

艶子は云った。

艶子は春の発表会に「雪姫幻想」という新作舞踊を発表

しようと思っているのだ。

金閣寺の桜の幹につながれた雪姫が、足でねずみを画くと、桜がゆれて、花びらが雪姫の肩へふりかゝる。歌舞伎の舞台の美しさを雪姫にだけ強調して、舞踊として踊ってみたいというのが艶子の意図だった。

その振付に、縛られた女の姿というものをいろいろな形で研究してみたかった。自分で自分の姿を鏡にうつすだけでは充分でない。

今、照子が自然にとったポーズのように、袖も、帯も長くたらし、後手に縛られた身を、横坐りに板の間へ伏してしまふ姿は、虐げられた女のみじめさと、なまめかしさが、一つにせまってくるものがあつた。

自分でそのポーズをとって、鏡にうつしてみることが出来ないのだ。この場合どうしても顔を伏せてしまわないと形にならなかつたから……。

雪姫は首に縄をかけはしないが、照子にはそうしないと、体をそらすことが出来ないのだ。

あやつり人形を動かすように、後手に縛った紐のさきと、首にかけた縄のさきを引いたり、ゆるめたりすることで、照子の体は自由になる。

「さあ、もう一寸辛抱してね」

艶子は照子を膝をついた中腰の形にすると、又、前の椅子へ、彼女の腿の所をしっかりと固定させた。

そして、後から、手の縄と首の縄を一つに自分の手首にからげてもっと、邪慳に、右に左に、上へ下へと引張った。

その度に照子の体は右に傾き、左に傾き、脇腹はつれるように痛んだ。足がしっかりと固定しているから倒れることはなかつたが、それだけ体中の筋肉が無理をしいられることになる。

後手のまゝ上へ引っ張りあげられれば、肩から二の腕がぬけそうな気がした。

今まで縛られたヌード写真のモデルをしたことはあつたが、相手

は大抵男だったし、悲鳴をあげると、それをおしてする程のことでもなかつたから、今度の仕事は女の舞踊家と聞いて安心して来たのだ。男より女の方がある意味では残忍性を持っているのかもしれない。

艶子は照子が痛がるのにおかまいなく、面白いと思う形を見ると、その形のまゝ固定させようとした。何本もの紐が前後の椅子に結ばれて、無理なポーズのまゝ、照子はまるで蜘蛛の巣にかゝつた虫のように、椅子と椅子と間に、自分の姿をねじまげて呻めくより仕方なかつた。

艶子はそうしておいて、窓わくへもたれてゆっくり煙草に火をつけたりする。

照子のポーズを見ながら、踊りの振りを考えているのだろうか、長いこと、空間に絵をかくように想をまとめ、煙の輪をはくのだつた。

「苦しい、もうほどこいて下さい」

照子が必死にうったえても、聞えないのか、自分の想の中へ入りこんでしまふらしかつた。

女ふたり

やっと、陽ざしが傾いてきて、照子は自分を取りまく縄から解放された。

「ごめんなさい、私は仕事という夢中になつてしまふので……」
艶子は自分からウイスキー紅茶をいれてくれると、約束の金額よりよけいにくれた。

もともと照子自身の中に、縛られることへの妙にひかれるからこ

そ、こうした仕事を引きうけているともいえる。

ただあまり苦しいと、自分ではこらえようとしても悲鳴がさきに
出てしまう。

縄をとかれ、いたわられると、もっと辛抱出来たのという気が
しないでもないから不思議だった。

「弱音をはいて、先生に悪かったわ」

そんなお世辞のような言葉さえ出てくるのだった。

「まあ、休んでいらっしやい。今日はもう他に廻る所はないんでし
よう」

「ええ」

「ごはんでも御馳走しましょうか」

艶子は云った。

どうせ家へ帰えっても、谷野正樹が来てくれるわけでもない。仕
事、仕事と、自分に鞭打ってはいいても、男のいない生活は艶子にと
って空虚だった。

「あんた、恋人いるの？」

今日はじめてモデルの紹介所から廻してくれた照子だったが、自
分の手で縛って、苛めるともなく苛めてしまった照子に、艶子は親
しみを持った。

自分よりは十以上年下だろう。いったいこの位の年の娘は男を知
っているのだろうか、どうだろうか、ふと、照子に聞いてみたくな
ったのだ。

「恋人？」

照子はおうむ返えしに問い返えしたが、

「さあ」

と、曖昧に笑った。

照子の方では夏雄を愛していた。体の関係もある。けれど、恋人
とよべるのだろうか、一方的な愛情のような気がする。

「先生は？」

自分のことはうまく云えそうもなかったので、照子は逆に艶子に
聞いた。

「私？私の方だけで愛していても、恋人とはいえないでしよう？」

「あら、先生も……」

「先生もって、いやだわ、あんたもそうなの？」

「ええ、好きな人いるんですけど、向うはいたって心もとないの」

「奥さんがあるの？」

「いいえ、でも、愛している人があるんです。とてもきれいな人……」

「でも独身の人ならいいわ。私の愛した人はこの間、お嫁さんをも
らっちゃったの」

「先生みたいなきれいな方があっても、他にお嫁さんをもらったり
するのかしら？」

「私なんか駄目、もうお婆さんですもの」

云いながら、艶子は正樹への未練の苦しさに胸が痛んだ。

窓から外の舗道を見おろすと、そのビルの下の細い道にはアベッ
クが肩をすりよせるように歩いていたが、表通りの人の流れが視野
の先に見える他は、わりにひっそりと静かだった。

「あら！」

何を見たのか、急に艶子は顔をこわばらせた。

恋敵

——あの人に来てくれる——
そう思っただけで、艶子の心
がときめいた。

今日はその稽古日ではなかつたから、普通なら艶子はいないのだが、家へ行って此処にいることを聞いて来たのだろうか。

艶子はそわそわと、落付かなくなつた。

してあげようと云つたてまえ、急に「帰えれ」というのは変だった。
まあ、正樹が五階まで上つて来てくれれば、照子だって気をきか
して帰えるだろうと急うのだが、稽古疲れが顔に出ていやしないか
と、鏡も見てみたい。

しかし、それも、何だか不自然な気がする。女心というものは、好きな男の前では、こんなにも他愛ないものかと、自分ながらあきれもするが、嬉しくてたまらない艶子の気持はかくしようもなかった。



云いながら、さりげない風を装って、稽古場の隅の鏡の前に立つた。

踊りのポーズを見る為に、大きな鏡が壁にはめこんである。
鏡の中の顔がうれしそうに生き生きしているのが一寸いまいまし
い。

艶子は手早くコンパクトを開いて、鼻の頭にパフをあて、口紅を濃い目につけた。

稽古疲れが目のかちの皺になっていた。

「やっぱり疲れたわ」

何ということなしに照子に云って、急に顔をなおした言訳に

「若い人はいいわね」

と、空せじを云いながら、もう一度窓ぎわに戻った。

正樹は誰かを待っているように、まだ少し先の街角に立っている。おりて行ってみようかしら……と艶子が思うのと、若い女が小走りに、正樹のわきへかけよるのと一緒だった。

何を話しているのか、艶子の耳にまでは届かなかったが、正樹が女の羽織の衿を直してやりながら微笑している様子に、艶子の胸がグーツとつまった。棒を押しこまれたような苦しさが胸元をしめつけた。

二人は五階の窓から艶子が見おろしているのを知らないのだろう。仲良く肩を並べて、ビルの横を窓の下の方へ歩いてくる。

艶子は体中が燃えるような気がした。

火の玉が艶子の体をかけ廻る。子供のようには地団太ふんで泣きわめきたいような、異常な血の奔流に、窓わくをつかんでいる指がぶるぶるとふるえた。

艶子は駆け下りるように窓ぎわをはなれると、部屋の中に飾ってあった花びんをとった。

そして、それをかゝえるように窓ぎわまで持ってくると、窓の下を通りかゝった二人の頭をめがけて、花の入ったまゝ逆さに落した。水がザーツと流れ、花瓶は僅かの間隔で、二人の足もとの地面へおちて割れた。

水の飛沫の中に、赤い花が蝶のように飛んだが、地面に落ちると

血の塊のようにも見えた。

「あっ！」

と云って、正樹は上を仰いだが、艶子の姿を見とめると、そゝくさと女の手を引いて通りすぎようとした。

女は理不尽な落しものに、文句が云いたいらしく、正樹に何か云っている。

それを正樹がなだめて連れて行こうとしているのだが、女の顔が五階を見上げた時、

「あら！」

と、五階の窓で照子が叫んだ。

艶子が花瓶を放り出すのを、好奇の目で並んだ窓から見ていたのだ。

「あの人……」

誰にともなく照子が云うのと、女が顔を伏せて、正樹と一緒に走り去るのと同時だった。

鍵を持つ女

「あなた、谷野を知っているの？」

艶子が聞いた。

「谷野さんってあの女の人、谷野さんっていうんですか？」

「女の人？」

「先生の仰云るのは男の人？」

「あら、あなた、あの女知っているの？」

艶子と照子は、お互いに相手の問いに答えないうで、自分勝手の質問をしているのも、偶然の意外さからだろう。

二人は顔を見合わせて、何となく笑った。

「それにしても、先生、大胆ね、花瓶をぶつけるとは……。でも、あの女が一緒だったのなら、私も、何か落してやればよかった」

「あのひとに何か恨みがあるの？」

「先生こそ……」

「さっき話したのはあの男なのよ。何も見せつけるように、このビルの下を通らなくてもいいだろうに思ったら、癪にさわって、癪にさわって……」

「そりやあ、癪にさわるの当りまえですわ」

「この間結婚したのよ。結婚式の日は嵐にしてやるって、私、呪ってやったの。そしたら、本当に嵐のような日だったわ」

「行ってごらんになりましたの？」

「どこへ？ 式場へ？ まさか……」

「あの入達、先生のいう嵐のような日に、結婚式をあげなかったんですよ」

「どうして？ どうして知っているの？」

「さあ、云っていいかしら？」

「気をもたせないで話してよ。あんたはあの入達の味方じゃないんですよう？」

「そりや、私、あの女は嫌い。あの女さえだまって結婚してしまえば、彼の心が私の方へ傾いていたのに、あの女が来たばかりに、折角つかみかけた彼の心が離れてしまったんですもの。でも、ああして、どうにか結婚生活に落付いてくれれば、又、彼を私のものに出来ないものでもないと思うんです」

「じゃあ、あんたはあの二人の結婚が長く続くことを祈っているの

ね、私は厭よ。壊してやりたい」

艶子は目をすえるように窓の外の空を見た。

急ぎ足で姿を消した二人が、ビルディングから多少離れた所で、頭からあびた水しぶきを、拭き合っている様子が目の前にうかぶ。艶子は悪魔になって、彼等の上へもう一度水をあびせてやりたいと思った。

男も憎かったし、女も憎かった。

二人を苦しめる方法はないものだろうか。

照子が何かを知っている。

「ねえ、どうしてあの女を知っているのか話してよ」

「ええ、でも……」

照子だって話したいのだ。あんなすました顔して、さも貞淑そうな妻のように男によりそって歩いているけれど、あの女には愛する男があるのだ。そして、あの女は結婚式の前に、いたづらをされてるんだ。それも、他ならない私の手で……。おとなしそうなあの女の肉体の奥にある秘密を私は知っているんだ。

「カマトトっていうんでしょう。あんなひとを……」

照子は言った。

しかし、どうやらあの男に惚れているらしい艶子にそれを話せば、あの二人の間に水をさすのはわかっている。そうなれば、あの女は傷物として実家へ帰えされるだろう。そしたら夏雄と結ばれる可能性が生じてくる。うっかりしたことは話せないと、照子は口をかくした。

そんな照子の態度に、艶子は急いでこの話題を引っこめた。あせっては反っていけないと思ったのだ。

——言わせてやる——

艶子は頭の中で考えをめぐらした。

何にしても、正樹の結婚をこわす鍵を、この女が持っているらしい。

「さあ、御飯を食べに行きましょうよ。あんたお酒は？」

「少しなら……」

「お互いに失意した同志がお酒をのむのも面白いじゃないの。人の秘密をほじくり出したってしょうがないわよね。もっとたのしい話をしましょうよ」

と云いながら艶子の頭から、照子にどういう風に話させようかということは、決して消えてしまったわけではなかった。

照子と一緒に夕闇の濃くなった街へ出ながら、艶子はもう一度谷野正樹と、その妻らしい女とのむつまじそうな姿を目の前にうかべて、

——畜生！——

と、唇をかんだ。

疑

惑

正樹はタクシーを拾うと、美沙子を促して、真直家へ帰った。

洋服の正樹は濡れてもたいして目立たなかったが、小紋錦紗の羽織の肩にかゝった水は急にかわきそうもなく、そのまゝ街を歩くことは出来なかった。

艶子の目には仲良さそうにうつった二人だが、正樹はある目的の為に、ことさら美沙子をつれて街を歩いていたのだ。

正樹の心におおいかゝっている黒い影の正体をたしかめたかった

のだ。

結婚式の当日は、急に生理日が来た狼狽から、姿を消したのだと言訳され、あらためて式をあげ、新婚旅行にも立った。

「まだネンネなので……」

と、仲人の森田夫人は云っていた。

「まだ日が早いのに、急にメンスがくればあわてますわ。まして、何の用意もしていないし、むすめさんは応急処置に困るものなんですよ。私のようにお姿さんになれば、一寸、持ち合せのもので何とか出来るんですけどね、そこがむすめさんではどうにも出来ないところで……」

と、森田夫人は殊更露骨に、女の体の構造をほのめかすように云って、真実らしくみせかけようとした。

正樹もその時は、そういうこともあるのかと、不承不承納得した。そんな時、腹痛や頭痛に悩まされるということは、正樹とても他に女を知らない訳ではないから、承知していた。

だから、大体結婚式の日取は、前もって、そういう日をよけて取りめられてある筈だった。

「でも、むすめさんの間は、案外不順なもので、精神的な緊張で反って、そんな時に不意に粗相してしまうことだってあるんですよ」森田夫人はそう云った。

まあ、それもそうかもしれない……と、正樹は思った。何といっても女の体は男の自分には解らないことが多いのだらう。

最悪の場合にぶつかったのだと、あきらめるより仕方がない。

美沙子自身がどんなにかそれを恥じ、大勢の人に迷惑をかけたこ

とを済まなく思っているだろうと思うと、正樹は反って恬淡に「雨降って地固るともいいますし、雨の日に式をあげるつもりがあげなくて、晴れた日にもう一度式をあげ直せば、二重にお目出度いかもしれませんよ」

と、こじつけのような言い方で、式の日取をきめ直した。

けれど、新婚旅行から帰って二三日すると、美沙子が夫婦生活を拒んだ。

理由をきいてもどうしても云わない。

気分が悪いからというのだ。

一日二日は正樹も遠慮した。

しかし、三日にもなると、ただ気分が悪いというだけでは我慢が出来なかった。

さわらせまいとする手を、無理やり押さえて、彼女がT字帯をしているのに気がついた。

——いったい女のメンスとは、月に何回あるのだろう——

正樹は不思議な気がした。

結婚式を最初にきめた日取から指を折ると、十五日しかたっていない。これでは半月に一度、メンスがあることになってしまう。

「何か病気だといけないから、医者にみてもらったら……」

と、彼は新妻にすゝめた。

「いいえ、大丈夫なんです。ほんの少しおりものがあるので……」

と、妻は医者へ行こうとはしなかった。

「お嫁にいった最初の中は、人によっては一週間も出血がつくこともあるんですよ」

例の森田夫人が新居をたづねて来て、正樹の心配を笑った。

「何しろ女の体は微妙に出来ていますからね、谷野さんのように、一々そう気になさっていたらたまりませんわ、当節流行のノイローゼじゃないんですか？」

そう云われればそうかなとも思う。

しかし、正樹は何かしら心にかゝった黒い影を払い落すことが出来なかった。

妻の秘密

街をつれて歩くのも、もしや美沙子が知人に会いはしないかと思うからだ。

両親のない美沙子だったし、兄弟といえば義理の兄があるだけで、仲の良い友達もないらしい。

美沙子のことは、美沙子しか知らないということがもどかしかった。

森田夫人は仲人口で何とでもいうだろう。しかし、何か真相があるとしたら、おそらく森田夫人も知らないではないだろうか。

知っていてごまかしている夫人ではない。

おとなしそうに、口数の少い美沙子の方が、あるいは夫人よりは役者が一枚上のような気がするのだ。

「最初に式をあげるときめた日に、雨の中をどこへ行っていたんだい？」

と、美沙子に聞いても

「どこって、乳母の所ですわ」

と答えるだけだ。

「一度一緒にばあやさんの所へ行かなければいけないね」

と、正樹が云えば、

「乳母は亡くなりましたの。あの日から間もなく……。お目出度い時にそんなこというの悪いと思っただし、べつにあなたにお知らせすることもないと思っただし……」

と美沙子はいう。

正樹は美沙子がすらすらとよどみなく答えれば答える程、疑惑が増すのを、自分自身いぶかしく思う程だった。

美沙子がいうことはちやんと筋が通っている。通っているのに正樹の心の影はひろがって行く。

——何故なのだろう？——

正樹はどうしたら美沙子に、彼の気持が済むように説明させられるかと、たえず考えていた。

人の多く行き来する街を歩いたら、美沙子が誰かに会うかもしれない。その会話なり態度なりを見ているうちに、自分の疑惑を解く糸口が見つかるかもしれない。

人目には、新婚をたのしむ夫婦とみえるかもしれないが、正樹はもっと苦しさを背負って歩いていたのだ。

それが今日、思いがけなく艶子に花瓶を落された。

あのビルディングの五階に艶子の稽古場があることは知らないわけではなかった。



しかし、その稽古日が火曜、木曜に限られていることも知っていた。他の日は別の人が使っていると艶子から聞いていたので、まさか、丁度その時刻に艶子が窓の外を見ているとは思えばなかった。

——鬼門なんだな、近付いたのがいけない——

と、彼は思うのだが、あの時、同じ五階の窓から見おろしていた

別の女が、美沙子に向って
「あら！」

と云ったように思う。

美沙子はあの場合で、パンケチを出して、濡れた衣服をふこうとしかけたのに、あの女が「あら！」と云ったことから、急にあの場合を去ろうとした。

あれはどうしたことなのだろう？

その時は、正樹自身、艶子の目から一刻も早く逃れたかったので、美沙子と一緒に、そくさと街角まで出てしまったが、正樹の心に何かがひっかゝっているように、美沙子の態度がだんだんにふにおちなくなってきたのだ。

家へ帰えると、

「着がえしてきます」

と、自分の部屋へ入ろうとする美沙子を

「まあ、お待ち」

と、正樹は押しとどめた。

「そのまゝ、暖炉でかわかす方がいいかもしれない」

正樹は云った。

「僕の書斎へ行こう。」

二人の新居として建てた家は、正樹の趣味で、正樹の書斎だけ、薪を燃す大きな暖炉が設備されていた。

「でも、こんなに濡れていて、このままかわかすと縮むといけませんか……」

美沙子がいうのに

「僕のいうことはきけないのかい？」

いつになく正樹はきびしく言った。

「いいえ」

美沙子は従順に正樹のあとから書斎へ入った。

「さあ、此処へおいで、今、薪が勢よく燃えてくると、じきにかわくよ」

暖炉の前へひじかけ椅子を置いて、正樹は美沙子を坐らせた。火をおこそうとする正樹に

「私がします」

美沙子がいうと、

「どうして、君はいちいち、僕にさからうの？　そこにじつとしていることは出来ないのかい？」

彼は云いながら、慣れた手つきで火をおこした。そして、わざと美沙子の方に背を向けて、

「さっきのビルの窓にいた人、君の知っている人？」

と、さりげなく聞いた。

「いいえ、私、存じません」

美沙子は云った。

——嘘だ！——

正樹はとっさにそう思った。

背を向けているから美沙子の顔はわからない。しかし、なまじ声だけできく言葉の方が、その中に入っている感情をよみとれるものなのだ。

——よし、今日こそ！——

正樹は思った。

「羽織をぬいでごらん」

女の随筆

寄稿

明治と昭和の

絵くらべ談義

緒台あふみ

文、画

正樹は美沙子の手から、美沙子の羽織を受取った。

「肩から背が大分濡れているね。こうした方が早く乾くかもしれない」

言いながら、正樹は美沙子を椅子にかけさせてその胸から、逆に羽織を着せかけるようにして、椅子の後で羽織の紐を結んだ。

美沙子は理髪店で前かけをかけられたような恰好で、椅子から顔だけ出して、当惑したように正樹の顔を見た。

色紙をまといつけたみの虫のように見えた。

正樹の口元に皮肉な微笑が走る。男が悪魔に変わる時の微笑だった。

(以下次号)

或る年の彼岸入りの日でした。長唄かお茶道の教えか今ではすっかり忘れて思い出しませんけれど、春にしては少々きつい雨降りに困り抜いて柄にもなく駅前古本屋に飛び込み雨宿りをよいことにして半分塵に埋れて積んであった中から面白い本を掘り出したことが御座いました。

あとで店の小僧さんがさも合点の行かぬような顔をしながら届けては呉れましたが、物が物だけにそれから云うものは極く懇意に親しく御交際願っている方々へはお茶など差上げる折、座興に御覧に入れて「あら、まあホホホ」なんて笑い顔につい釣り込まれて思わず長話しになったりしたことが御座います。それは当今で云う漫画、いえ世相漫画と云った方が適当かも知れません。滑稽新聞社発行と銘打って御座います。

でも百枚近くの絵画の全部が全部、当時の封建的な雰囲気を感じて発表したものでなく、中にはちよいちよい春画を思わせる



緒言

第一 図

ものも見受けられます。ですから妙齡の娘さんが御覧になる場合、はつきり内容の判るものには一応お笑いになっても、少し意味深のものは誰も考え込んでいらつしやいます。

「先生、清水崑と云う漫画家のカッパではいつもよく笑うんですけど、こんな古い時代本にも御座いますのね、野ら着のお裾なんぞ捲くつたりして」

それはお尻でカッパを釣り上げる画なのですが、画中の娘さんは赤いお腰巻そのまま後向きに——つまり股の中から顔を出して水中のカッパ小僧と対面している画なのです。その他「あら、これ随分ね」とか「ホホホ、まあ憎くらしい、勇敢な女のひとですこと」だのともう半世紀近く経った古本と申すより寧ろ風俗に関する文献とでも申した方がよいこの合本雑誌は、ほとんど普段はハイヒール生

活をしていらつしやる現代の娘さんを結構喜ばせて呉れますが、だからと云ってお嫁入りのタンスの中へは一寸趣きが違うかも知れません。

いつも十人近くの若い娘さんが、私の内に稽古においでになります。主人と別れた独り暮らしの私への気樂さが遠慮と云うものをなくさせたので御座いましょう。皆さん、とても朗らかに稽古を習って帰られます。その中で一度結婚されて折合がつかず実家に戻られた方が一人いらつしやいますが、仮りに粹な名前ですけど美鈴さんとも申しておきましようか、とても和服がお似合いで黙ってその儘、赤坂や新橋のお座敷に三つ指をつけば、立派な芸者さんに見紛う程の方ですけど、右の手が一寸御不自由ですので、その訳はしばらく経ったあとで判りました。それは確かお年始に来られた日でしたかしら。ひどくしよげて沈んでいらつしやいますので「美鈴さん、今日こそお暇でしょ、御ゆっくりなさってはいかが？ お茶でも入れますから」と薄日の射し込むお茶の間の四畳半で和楽のラジオを聴きながら、おこたの中でも山話を致しましたけれど、例の本を丹念に眺めていらした美鈴さんはひどくびっくりしたような顔付で「先生、これ本当だったら大変ですわね、無断でこんな目に逢わせたりして——でも」「でも、ってどれ？ これですの、そうね」

とお答えしたのがこの画(第一図)なのでした。

正直に私達女性の身から申上げると、随分時代がかった挿画なんでしょうけど、赤い手からの鬘形から当時の新造さん、または御内儀とでも云う方なのでしょう。抵抗らしい抵抗もしないで素直に両の手を腰紐のような物で後手に二重に縛られ脚まで無雑作に揃えて括くられて観念している姿は、画そのものの上手下手は別として一寸頂けないポーズかも知れません。ただその脇で一杯傾けている男の方が寧ろ場面にマッチして素敵じや御座いませんかしら? 押入った目的はつまるところ金銭のことでしょう。いえ、ひよっとすると、かねて懸想していた彼氏が彼女のさし迫った或る夜の対面と云うのかも判りません。だとすればお夏清十郎じやないんですけど、このままそつと連れ出して頂き度い位、女が催促がてら偽せ観念しているようにも思われます。

それは兎も角としまして、画の表題が振っています。曰く「大胆なる強盗」と書いて御座います。

「先生、男の方って何処かに秘かな娛しみを味ってみたい下心があるんじゃないでしょう? 私、以前よくこんなことを……」と云って伏せ目勝ちに顔を赧くした美鈴さんの横顔を拝見してやっとな右手の訳がお察し出来

たのは絵の取り持つ縁かも知れません。

「わたくしね、先生、その方がとっても我儘でしたの、よくその場へ直れ、ってそして、こんなにさせられましたわ」と不自由な右手を撫でていらしたのは、おかわいそうな位に、いえ、あの——夫婦の情愛が人一倍強かった証拠なのでしょう。

「でも、この御新造さん、本当に寝入りばなを蹴起されたようで半分眠っているようにや御座いませんか? こんなことが度重なれば、つい、それに慣合いですと、全然恐怖心も湧いて参りませんし、どうともお好きなようになさいます、って誰でもなりますわね」と、この儀に至って美鈴女史はなかなかのうがった物語をなさるのには聴手の私の方がびっくりする位でした。ただ何んと申したらよいか、今の言葉で申上げる、所謂「演出効果」が、この画に乏しいのは、素人の私でも物足らないような気が致します。けれども、かと云って、

「先生、あたしだったら、もっと」などと仰言るお弟子衆は恐らくないようですから「実はね、この絵を忠実に模写した今一つの画を御覧に入れましょうか」と茶ダンスの中から取り出したのが、第二図なのです。

よく御覧遊ばせ。そうですわね、今から二十五年も前のことでしたでしょうか、当時、私がまだ浅草に籍を置いていた頃——あら、

うっかり身許を明かすようなことをお喋りしましたわ——でも、もうすっかりお婆さんですからどうぞ御放念下さいましね、私をお姐さんお姐さんと呼んで呉れて実の妹のように可愛がっていた芸妓がいました、その妓と観音様へお詣りの帰えり途、ひょうたん池の脇でしたから今の大勝館の前に当ります、その道ばたの露天本屋で「講談雑誌」をそれも月遅れの附録付として売っていたのを、あの妓が買い求めたもので、何かの拍子に私の手許に蔵って置いた折綴のお笑ひ物、序ですから引用文献箇所を明記して置きましょうか、題して「硯藥齋茶絵曆」とあり、振り仮名を振ってへみるがくすりへそちやえごのみ、と、書いて御座います。その中の一枚がこの画なのでした。画を描いた方はもう亡くなりになったかも知れませんが名取春仙と云う方の方です。

「どう、この方が一寸近代味がありません、よく似せて描いてありますわ」

「先生、このほうが、前のより実感味があつて、凄味満点ですわ。矢張りこれも御新造さんなのでしょ、昭和の初めとすると若奥様かしら? それに脅迫する男の顔、形、姿が、あの——そっくり」

「結構じゃありませんか、それじゃ、さぞ御遊戯がはずんだことでしょう」

「あら、先生、ひどいこと仰言って。でもわ

たぐしの場合、ずっと、あの、主人がとても好きだったものですから、いつも帯は解かされましたのよ、お長襦袢か夏はお腰一枚と云った恰好です。それから、この画を拝見して宅の乱暴振りは本当に困ったものですけど、この程度位の処までは妻として協力したつもりですの」

「そうでしょうとも、御夫婦なんですから。それに何んと云いますか、殿方はその場きりで後を曳きませんものね、きつと面倒なんですよ、線香花火式にパツと咲けばそれで」

「それにね、先生、この昭和の画の方は別れた良人が因念つけに、でなければ小遣いゆすりにでも来たんじゃないでしょうか。こうなると笑話でなく怖さで一杯、やいッ、美鈴ッ、今晚はなあ、ただじゃ済まねえぜ、なんて、喋りそうですわ」

「私もこの齢でよく映画やお芝居を観ますが、どれも奇麗事が多くて、

もつとも舞台は美しくなくっちゃ困るためもあるんでしようけれど、この間も或る問屋筋の方からの御招待で、それも久々に落成早々の観音様お詣りの序でにストリップ小屋に入ったんですよ、復古調らしい日本舞踊です



ら本当に寒々とした感じ、お色気なんぞ薬にたくもありませんのよ、つまりお芝居事で」
「でも、この画は写実味があるようですわ、お芝居事でなく、本当の脅迫だったとすれば自然とこの画のように足の指先がこわ張りま

すわね」
「裾の乱れからでしょう。明治大正から昭和の初め頃までの女は、裾前の乱れは画家こそ好んで描いたでしょうけど、女の方からはとても恥しい事でしたものね、今でも風の吹く

日はとっても——」

「いつか主人が、わたくしをこの画のように柱にくくりつけては、女から赤い物を奪ったら零ですって……。ホホホ、馬鹿見たい」

「女をくくる以上に、殿方には魅力と興味があるんですよ。ここにこんな絵もありますのよ、いきり立った馬に跨って助けを求めている娘さん、とそれから……」

「ですから、普段は洋装が軽くてとても便利でしょ、夏なんぞ太幅の帯じや堪りませんもの。でも色々と下心があると見えて、俺の間はきものにしろって、それが落ちついていていゝなんて。勝手な注文をつけては、あゝしろ、こうしろなどと。」

「まあまあ、せいぜい眼の保養をさせておやりになったんでしょ、その上、私共の云う端唄小唄の文句を地で行けば御夫婦の間が御円満でしたのに——。惜しいことをなさったこと」

「この次は是非、もっとセンスのある方にお嫁入りしたいわ、お酒ぐせのよろしい方に、お頼み申上げておきますわ」

とうとう、半日余りを女のお喋りで過してしまいました、この方も半歳余りで御縁があったと見えて先月御自身充分満足された殿方に嫁付いて行かれました。

内緒話で大変恐縮ですけど、女の幸福は所詮独りでは求められませんものね、ですから

後学と申しては口はどつたい言葉でしょうが私は血が噴き出すような無惨絵——芳年の画によくそのようなものが多いと聞きました。

——は拝見するのも御遠慮してますの、嫁入り前の娘さん、それも思春期から適齢の方々には色々な意味合から、明るいお色気が伺われるのが一番よろしいんじや御座いませんかしら。

この二つの明治昭和の画面にある物騒な凶器はきつと玩具かも判りません。そして、それぞれ御二人で気分を出しながら芝居気たっぷり娛しいんでいらつしやるものとすれば、風俗素乱などといきまいて事を荒立てる必要はもうとうないと思ってますの。

毎度の事でお眼触りでしょうがお腰マニアの殿方へはお気の済むまで十二分にお腰しを御覧に入れたら女冥利につきるのでは御座いませんかしら？。

たとえ時代は明治大正昭和や未来と変わったとしても女の締めるお腰には変化はありませんもの。例えば滑稽新聞社発行の中には若い女は赤、中年が白、老婆が青と色が変わる位なものでお腰が赤いものだとお定めになるのは若い女がよいと云う殿方の多い証拠としてのそのような画が多いので御座います。

最近と同じ赤でもぐっと染料の鮮かなものが出来ましたし、皺の寄らないデシンものが、ペンベルグ物が比較的安価に売られています

から要不要に拘らず、新品でよろしければ存分にお買い求めになって贈り物に、いえ、いえ、御自身御締めになったら如何なものでしょう。

またきものマニアの殿方へは、そろそろもう現代は洋装時代ですわね、私もせいぜい若返って、ブラジャー、ブローズ、スリッパマニアに御即答申上げるような参考文献、いえ参考絵画をどっさり仕入れることに致しましょう。

それでは、またいずれ改めて誌上で——。皆様、御機嫌宜しう、御免遊ばせ——。

(この項終り)

絵画のアイデア募集

各種趣向の「画帖」並びに「写真帖」

を作成の上、同好者の方々に分譲する企画を立案中ですが、右に關してのアイデアを広く読者の皆さまから募ります。採用の分には、完成した、画帖又は写真帖を贈呈いたします。なるべく詳細なる説明並びに略画の添布をお願いします。

編集部

幽 囚 十 ケ 月

春 田 一 郎

戦後の刑務所内の囚人の生活を、これほどまでリアルに描き出した文章をまだ他に知らない。誇張も作為も、いさゝかも含まないこの一文は、文獻としても、極めて高い価値を持つてゐることを信じて疑わない。

新 顔

内山君より少し遅れて、平野と云う青年が看病夫となった。色の白い、小肥りの、出尻が目立つ青年であった。平野君は某県の衛生試験所に勤めていたのであるが、収賄か何かで刑務所に入ったのであった。病理試験が本職であるから、随分重宝がられ、それまで埃まみれで放置され、精々が冷蔵庫の置場ぐらいにしか利用されなかった病理試験室は平野君が看病夫になって以来、見違える程、整頓され、平野君の努力で、結核菌、蛔虫、十二指腸虫其他が次々と明るみに出された。彼の刑期は極めて短かゝったが、受刑者の保健に尽す所が随分大きかった。

平野君の次に看病夫になったのは立尾、中山の両青年であった。立尾君は話を聞いてみると一種のドン・ファンで女から女へとあさって歩き、遂に結婚詐欺に問われて刑務所へ来たのであるが、本人の風さいは凡そ結婚詐欺と云う様な色っぽい犯罪とは縁の遠いものであった。色が真黒で、ひげ面で、おまけに鼻の穴が行儀悪く上を向いてゐると云う顔を見て、こんな美男子に次々と引つかゝった女は一体どんな女だろうと私達はよく笑い話にしたものであったが、立尾君には女を惹き付ける何物かゝあるのかも知れない。事件を惹き起した当時、立尾君には四人の女があった。その四人共が夫々立尾君を愛し、一人一人が立尾君の女は自分だけだと思つていたのであ

つた。立尾君の話を聞いていると、女、特に若い女は何てだらしないのだらうと思う。立野君にしても、女達にしても、所謂アプレゲールの人達と云うべきなのだろう。中山君はやせて背が高く、かまきりの様な風ぼうで、見るからに神経質な青年であった。同君の罪名は傷害致死で、刑期は五年であった。同君は酒乱癖があり、事件を起した日も焼酎をしたゝか飲んで、何のつもりか棒切れを一本持つてゐたそうである。棒切れを持つて居たことゝ、中山君が剣道三段の腕前であったことが、同君一生の不幸をもたらしたのであった。泥酔してフラ／＼と歩いている時向うからやって来た老婆がむやみに憎くなりすれ違いざまに、持つてゐた棒でその老婆の

脳天を一撃したら、グシャツと云う音がした
 そうである。勿論、通りがりの見ず知らず
 の老婆である。この老婆は間もなく死んだの
 であるが、なぐった瞬間に中山君はこの老婆
 のことなどは忘れてしまい、尚もフラ／＼と
 歩み続ける中、或店の店先に坐っていた男が
 無精に癪にさわり、棒を振りかぶってその店
 の中へ入って行ったら、その男は悲鳴を上げ
 て便所に逃げ込んだそうである。逃げれば逃
 げる程、その男が憎くなり、之を便所まで追
 いかけて、遂に便所でその男の頭をなぐるう
 ととして、受止めた男の腕を折ってしまった。
 こゝ迄は幾分記憶はあるが、あとはもう夢中
 で、上ずってしまった瞳を据えて、血染の棒
 をぶら下げて繁華な街を彷徨し、次々と結局
 合計七人の人々を傷付け、中山君自身は気が
 付いたら自宅の自分の布団の中に寝ていたそ
 うである。この話の通りとすれば、アルコー
 ルに因る一時的の精神錯乱と云う外はないが
 全く通り魔の様に恐るべき犯罪である。中山
 君が二舎にいる時は、殺された老婆が毎晩の
 様に彼の夢枕に現れ、同君を責めたそうであ
 る。この苛責に彼はすっかり神経質になっ
 てしまつて、医務課へ来た時は目の光と云い、
 居動と云い常人離れをしてしまつていた。外
 科の手伝になると、血を見るのが耐えられな
 いと云つて事務室に廻して貰い、事務室へ行
 けば、何でもないことに無暗に丁寧に時間を

かけ仕事のバランスをとることが出来ず、調
 剤室は忙し過ぎて耐えられないと云う次第で
 結局彼は医務課に居ること僅かに一ヶ月余で
 遂に元の古巣の二工へ帰されてしまつたので
 あつた。

レントゲン室へ入った樋中君は典型的なア
 プレ・ボーイであつた。何とか商事と云う泡
 沫会社へ入り、その営業部長——戦後、無暗
 に「長」の付く肩書が多くなつた。人間とし
 ての修養も積まず、二十四、五才で振廻す営
 業部長の肩書、考えただけでも犯罪若くは犯
 罪に近いものを暗示するのである——として
 飽くなき悪を尽したらしかった。話を聞いて
 みると、彼の犯罪には人間らしい温さと云う
 ものがない。こすつからくて、相手の骨まで
 しやぶろうと云うあくどさが現われるのであ
 る。戦後の智能犯の一特色であろう。彼が友
 人数名と自動車で街を走っていた時、街のは
 ずれの老婆が経営する菓子店に車を止め、菓
 子を五百円も注文し、思いがけぬ上客にほく
 ほくした老婆が注文の菓子を包んで、自動車
 の中にいる樋中君に渡すと、樋中君は財布を
 出して金を支払う様な様子を見せ、老婆の僅
 かのすきに自動車をいきなり走らせて、その
 儘逃げてしまつたと云う話などは、相手が弱
 いだけにエーモアをどうしても感じるものが
 出来ず、流石悪で鍛えた老練な受刑者さえ眉
 をひそめたのであつた。併し、この樋中君で

さえ、その恋女房が幼い子供を樋中君の母に
 預け、或るバーに勤めたと聞いた時はその貞
 操に対する心配と嫉妬とで練獄の苦しみを味
 つたのであつた。悪の見本の様な樋中君です
 ら、恋には矢張り人の子であつたのである。

十一月頃、看病夫になつた大林君は看病夫
 が二度の務めで、それだけ全くのヴェテラン
 であつた。その前年の秋、看病夫になつたの
 であるが、正月に看病夫の集団反則に連座し
 て、懲罰を受け、他の工場に廻っていたのだ
 が、佐藤部長の温情で、再び看病夫に捨われ
 たのであつた。人物も仕事もしっかりしたもの
 であつたが、それだけに人あたりが悪かつ
 た。私の居つた間は私の手伝いをしていたが
 私の出所した後は看病夫の中心となつて活躍
 しているそうである。彼は所謂、苦み走つた
 よい男で、犯罪の原因も矢張り女であつた。
 彼の父は地方政界の有力者だったのである。
 彼は父に背いて家を出て、遂に犯罪を犯すに
 至つたのであつた。彼の犯罪は窃盗であつた。

パロール

私は四月上旬に入所し、刑期は一年十ヶ月
 であるから、満期は翌々年の二月上旬になる
 訳である。併し、現在は仮釈放の制度が活用
 され、本人の人物、成績と、家庭の保護関係
 が満足であれば、最短、刑期の三分の一を服
 役すれば仮釈放の恩典に浴し得るのである。

素より仮釈放は受刑者の権利でなく、飽くまで恩典であるが、余程の悪条件のない限り、期間の長短は別として、原則として仮釈放は許されているのであって、受刑生活に於て、最大、と云うより寧ろ唯一のゴールは仮釈放なのであり、之を楽しみにあらゆる受刑者は日々の行動を慎んで修養に務め、作業に精励しているのである。と同時に「仮釈放が飛ぶ」と云って、その機会を失うことは受刑者にとって最も恐ろしいことなのである。

刑期の三分の一の当日の六十日前に、受刑者は自己の選択に従って、「パロール許可申請書」又は「パロール放棄申請書」を提出することが許される。前者は何故パロールを申請するかと云う理由及び仮釈放後の生活方針を説明して、仮釈放を願ひ出るものであり、後者は受刑者夫々の理由に基き、自分は仮釈放を必要としない旨の意思表示をする申請書である。仮釈放は受刑者の誰しもが最も熱望する所であつて、「パロール放棄申請書」を提出する受刑者があり得る筈はないと考えられるのであるが、数に於ては遙に少いにしても実際には矢張りあるのである。老病夫「末さん」もその一人であつた。「わしなんか仮釈を貰うなかに仕様おまへん。刑務所から追い出される迄のんきに暮さしてもらいまつさ」と云って、齒のない口を大きく開けて笑い乍ら、「パロール放棄申請書」を提出した

「末さん」であつた。その真意は、刑務所の生活がほんとにのんきでよいのか、それとも身寄りの全くない娑婆の生活に対する悲しい諦めなのか、それは誰にも分らない。又、こんなことを聞いたことがある。それは仮釈放を早める策戦として「パロール放棄申請書」を提出すると云うのである。「パロール許可申請書」を提出して、若し刑務官会議又は司法保護委員会で却下されると、それから相当の期間は再び「許可申請」を提出することが許されない。そこで、自分の平素の成績や家庭の保護関係を考へてみて、とても仮釈放を円滑には貰えそうもないと判断したら、先ず「放棄申請書」を出して、「刑務所に在つてもっと修養したい」とか何とか神妙な所を見せ、そして其後は行状を慎んで、係官の印象をよくするに務め、扨、適当な時に更めて「許可申請書」を提出すると、合格する可能性が多いと云うのである。併し、之は少しうがち過ぎている様である。

「パロール許可申請書」が提出されると、刑務所当局は色々の点から本人を調査し、刑期の三分の一近くになると、刑務官会議に上程して、各個の受刑者が果して仮釈放を与えられる資格があるか否かを討議し、之にパスすると、「仮釈放然るべき」旨の所長の副申書が添えられ、司法保護委員会に提出されるのである。従前と異なり、受刑者に仮釈放を許

すか否かの権限は刑務所長にあるのではなくて、司法保護委員会が之に関する全権限を持っているのである。「パロール許可申請書」と刑務所長の副申書を受取つた委員会は受刑者の住所のある土地の司法保護司に依嘱して家庭環境の調査を行い、出所後の方針をしらべ、その報告書が提出されると、司法保護委員は刑務所に出張して、受刑者個々に面接し、その結果を持ち寄つて委員会に於て討議し、茲に仮釈放の可否が決定せられ、各刑務所に対して受刑者個々につき、許可又は不許可の通知書が送致せられ、刑務所は仮釈放証書を作成の上、指定の日に仮釈放を行うのである。之等の事務的手続に日数を必要とする關係上仮釈放適格の受刑者が實際に仮釈放に浴するのは、刑期の三分の一経過後半ヶ月乃至三、四ヶ月ぐらいの所である。今日の仮釈放は本人及び家庭両方の条件が完全に揃わねばならないのであつて、刑務所に於ける本人の成績に申分がなくても、出所後の環境が思わしくなかったり、家庭の保護が万全でも、本人に改悛の情が乏しかったら、いずれも仮釈放は遠いのである。特に大切なのは本人の反省修養の程度であつて、之が仮釈放の前提条件である。

私の刑期三分の一の当日は十一月中旬であり、その六十日前は九月下旬であつた。私も二舎の新入以来五ヶ月余、遂に「パロール申

「請書」を提出し得る時期に至ったのである。九月下旬の一日、私は科学分類課の部長の前に呼ばれた。愈々パロールの申請である。果てしなく感じられる受刑生活に一つの区切をつける様な、肩がすつと軽くなる様な嬉しさに身内が包まれる。部長に「許可申請をさせて頂きます」と答えて用紙を貰い、その夜、房でゆっくり考えて私の「パロール許可申請書」を書いた。そして翌朝、之を担当看守に提出して、ほっと一安心したのであった。

パロール申請書を提出してから、刑期三分の一の応当日迄には六十日あり、実際の仮釈放迄にはそれから尚相当の日数があるのであるが、之を提出すると、受刑生活の終了について一応のめどが生れ、今迄の受刑生活が夢の様に感ぜられるものである。即ちそれ迄の受刑生活と、その日からの受刑生活との間には一つの大きな飛躍があると感じられるのである。

早野君の話

私が医務課へ来た当初は十房で早野君と起居を共にしたが、早野君の狷介さには随分閉口させられた。反則と煽動と陰険さに於て早野君は札付の受刑者であった。どの看守も早野君を憎み、どうにかして尻尾を擱えようとするのだったが、凶破抜けて悪賢い同君は決して尻尾を擱まれるようなへまはしなかつ

た。反則もあそこ迄堂に入れば大したものだった。患者の病菜、牛乳、果物或は卵を誤間化したり、被告から草履や差入物を捲き上げたり、エロ本を手に入れて来たりすることは早野君にとって朝飯前の仕事であった。

九房に起った「花札事件」は早野君の狷介さを示す好適例である。それは九月の或日曜日であった。早野君は九房に入り込んで、患者達と遊んでいた。実は彼は手製の花札で患者達を相手に花合せをやっていたのである。そのような場合、彼は決して花札だけを弄ぶと云うことはしない。看守に万一発見された時の云い抜けの爲めに傍に将棋盤を置き、もつともらしく駒をならべて置くのである。その日、正担の鈴川看守は非番で、早野君と予て犬猿の間である吉田と云う看守が交替勤務をしていた。吉田看守は最初から早野君の動静には充分の注意を払っていたらしく、そつと九房に近寄って、窓越しに早野君の手に花札があるのを見るや

「おい、早野、何をしている、見せてみる」といきなり声を掛けた。之が早野君にとって是有利、看守には拙ずかった所で、早野君の手に花札があるのを見るとすぐ声を掛けず、暫くそつと見ていて、花札を捨てたり拾ったりする動きのとれない現場を押えてから声をかけるべきであったので、之がため「花札をやっていた」「いや、唯見ていただけだ」と

云う水掛論に終らししてしまった点であったのである。吉田看守から声を掛けられて、早野君は

「之かい、担当さん」と、手に持っていた花札をかざして見せた。之が亦、早野君の怪物たる所以の点である。この様な場合、十人が十人迄、はつとして慌て、本能的に花札をかくそうとするものである。併し、あわて、かくすことは花合せをしていたことを自白するのと同じで、早野君などはこの辺の呼吸を十分心得ていて、却って逆に花札を示すのである。

「そうだ。何をしているのだ。その儘じつとして居れよ」と看守は云って、鍵を持って来させ、扉を開いた。患者でない早野君が房の中に入っているのであるから、普通は鍵が閉まっている筈はないのであるが、この点も早野君の悪賢い所である。万一露見した場合に鍵を開ける間の時間を稼ぐために、新入の看病夫に本錠を掛けさせて置いたのである。鍵を持って来て錠を外すのにはものゝ十秒とはかゝらない。併し扉を開けるためにはどうしても窓から離れなければならない。即ち看守としてはこの十秒足らずの間、早野君から目を離さねばならないのである。之が早野君にとつてはちやんと計算に入れて置いた余裕であつて、彼はその間に素早く患者と結托して花札をかくしてしまつたのである。それも全部

はかくさない。ほんの二三枚かくすだけであつて、この点も早野君の大した所である。

「早野、お前何をしていた」と扉を開けた看守は、やっと早野君の尻尾を押えたと云う勝ち誇った調子できめつけた。早野君は悠然たるもので、手にある花札をパラ／＼やりながら

「担当さん、どうしたのや。そんなに息込んで、俺達将棋やってたんやないか」と平然と答えた。

「嘘を吐け、手に持っているものは何だ」

「これか？ これ花札やないか」

「花札を持って花合せをしていたのだろう」

「何云ってるのや、担当さん、花合せなんかしている筈はないやないか」

「つべこべ云うな、手に花札を持っているのが何よりの証拠じやないか」

「へーえ？ 担当さん、そうすると何かい。

俺はこの花札が余り上手に出来ているので、感心して眺めていたゞけやが、花札を持っていただけで、花合せをしたと云うことになるのかい。担当さんの考え方で行くと、看病夫は皆仕事が出来なくなるぜ。例えば患者の卵や牛乳を取ったら反則やが、看病夫は牛乳や卵を患者は届けてやるのが仕事や。それなのに、牛乳のびんや卵を手を持っている時、手に持っているから、食べるのやると、一々とがめられたら看病夫は仕事が出来へんで、又

事務所の掃除をする時、煙草のすいがらを手にとって捨てる途中で、お前は煙草を吸うのだととがめられたら、何処に看病夫の立つ瀬があるのや。担当さんののは、それは云いがゝりと云うものや」

「つまらないことをつべこべ云うな。お前達は花合せをしていたに違いないのだ。ぐずぐず云うと特警へ連れて行くぞ」

「あゝ、特警でも何処でも行くで。担当さんこそけつたいな云いがゝりを付けて受刑者をむじつの罪に陥れてよいのかい。俺達が将棋を指している、その合間に一寸花札をながめていただけやと云う証拠には、さっき担当さんが何してると尋ねた時、俺はすぐ花札を見せたし、担当さんに見付かつて花札をかくそうとしなかったやろ、あたり前ならあわてゝかくす所やで、それをかくしたりしないで大っぴらで見せたのは何も悪いことをしてない証拠やないか」

「何と云つても、ちゃんと花札を揃えて前に置いてあれば云い訳は立たないぞ」

「へーえ？ 担当さん、この花札そろつてると云うのか。数えてみよか」と早野君は悠々と枚数を数えた。先に二、三枚かくしてあるのだから揃っている筈はない。

「どうや、担当さん、よく見てや。この花札は四十五枚しかないやろ。花札と云うものは四十八枚なければ何も出来へんのやで」

この問答はこれで水掛論になり、看守が早野君のトリックに負けてしまつて、その日は有耶無耶の中に終つてしまつた。早野君は翌日、特警へ呼ばれ、色々と取調べられたが、花合せをしていたのではなくて、将棋をしている間に、以前誰が作ったか分らない花札が出て来て、それが余りに上手に出来ているので、手に取つて眺めていたこと、そしてその花札は弄そうにも枚数が足りなくて花合せが出来ない筈はないのだと云うことを、彼一流の弁舌で申立てゝ、遂に尻尾を出すことなく、その日の中に病舎へ帰つて来たのであつた。早野君と云うのはこの様な人物であつたので、同じ房にいる私の迷惑を担当看守が察して呉れたのか、八月末、私は十房から三房へ移された。同房者は川崎君で、この人はこんな人が何故刑務所に入ったのかと疑う程、善良な青年であつた。川崎君は掃除其他の仕事に人のいやがることを黙々と行うと云うたちで、夜は房で一生懸命英語を勉強すると云う青年であつた。年令の割に落付きがあり、人物も出来ていた。間違ひさえ犯していなければ、立派に模範青年たり得る人物であつた。世の中の人々は刑務所で模範囚と云つても、普通の社会に於ける最も感服出来ない青年のその次に位する程度の人物だと思つてゐるかも知れない。成程、性格的に欠陥を持つてゐる犯罪者はそうかも知れない。併し、受刑者

の大多数は普通の人々と別のカテゴリーに属す特殊階級ではないのである。刑務所にいる青年と、街を歩いている青年とは決して別の人種ではないのである。犯罪は勿論、反社会的の行為であつて、厳しくその責任を追及さるべきである。併し乍ら、一旦の誤謬を犯した者を、その理由だけで、その者の全資質を否定し、責任を果した後に於ても見えぬ高塀の内に閉じ込め様とするのは余りにも苛酷ではあるまいか。社会に於ける模範青年、刑務所に於ける模範囚、この兩者の間には資質の点に於て本質的の差異はないのである。私は川崎君と云う模範囚と起居を共にして切実にこのことを感じたのであつた。

早野君と別れてから一ヶ月余りは無事に過ぎた。この早野君が遂に医務課を去らねばならなくなつた事件が持ち上つたのは十月初旬のことであつた。この日は土曜日で、調剤室としては比較的ひまな日であつたので、倉庫から薬品を出して、薬棚を補充して置くために小村先生と私は朝八時半頃、調剤室の向側にある薬品倉庫に入った。内山君も体温計を出して貰うために私達と一緒に倉庫に入つた。何時もなら倉庫へ入る時は必ず調剤室の硝子戸を閉じて置くのであるが、この日に限つて硝子戸を開け放した儘、私達は倉庫に入つたのであつた。出す予定の薬だけ出してすぐ調剤室に戻る續りだったのが、一旦倉庫に

入ると、あれも出して行こう。之もと云う具合でひまがかゝつた上に、内山君はザルソ・グレランを出して置いてほしいと云い、小村先生はそんなものは出して置く必要がないと云う。こんなやりとりで時間を費し、私達が調剤室に戻つた時は既に二、三十分以上も経過していたのであつた。

部屋へ帰つて暫くすると、小村先生が煙草が無くなつていゝと騒ぎ出した。倉庫へ入る直前まで、確に机の上に置いてあつたのださうである。そう聞けば朝早く小村先生が煙草をすつていたのを私も覚えていた。私は小村先生に若しやポケットか机の抽出に入れ忘れたのか、或は倉庫にでも落して来たのではなかつたかと注意を促し、も一度探して貰つた。世間一般の人々は高がすいかけの「新生」一箱位と思われろであらう。普通の社会であれば煙草の一箱位「何処へ行つたんだらう」で済むのである。併しこゝは刑務所であり、煙草は大変な禁制品である。そこらに落ちてゐるすいがらを不図した出来心でのんでさえ仮釈放が六ヶ月も延びると云われる程なのに、若し小村先生の煙草を受刑者の誰かが盗んだとすれば之は大事件である。小村先生が騒いでゐる所へ佐藤部長が入つて来た。先生は直に佐藤部長に煙草の無くなつたことを告げた。其の時はまだ煙草が果して盗まれたものか、紛失又は置忘れしたものか分らなかつたので

あるから、私達としては小村先生が佐藤部長に告げる迄にもう一応も二応も調べてほしいかつたのである。一旦佐藤部長が之を耳にすれば、その立場上、どうしても事を公にしない訳には行かないのであつて、もしその煙草が先生の身辺から発見された場合は先生が看病夫から恨まれるのみでなく、先生の立場がなくなつてしまふのである。併し先生は佐藤部長に告げてしまつた。事は公になつてしまつたのである。佐藤部長は私達全員に浴場へ集合を命じた。一列にならび、半裸体になつて私達は嚴重な身体検査を受けた。併し煙草は発見されなかつた。私達を浴場に置いた儘、部長は鈴川看守と看病夫の檻房を一々検房した。その結果も何の得る所はなかつた。但し副産物が二つ出て来た。一つは内山君の机から封を切らないサントニン二十錠入りの小瓶が一つ出て来た。応急薬でもないサントニンを内山君が持つてゐる筈はなかつた。追及されて内山君はそれは春田から預つたものだと白状した。そこで私が佐藤部長に呼ばれて事情を聞かれた。実は之は反則物ではなかつたのである。と云うのはその直前看病夫全員の検便をやつた所、その中五名に蛔虫がゐることが分つたのである。正規の手續としては、蛔虫のゐる看病夫夫々のカルテに医官の処方を得て、サントニンを何錠か宛、薬包紙に包み、各人の名前を書いた薬袋に入れて各自に

手渡すべきなのであるが、何分医務課内部のことであり、手数が面倒なので、カルテは後に作ることとして、小村先生の諒解の下に看病夫にサントニンを支給することとし、五人分で丁度二十錠になる所から、二十錠入りの小瓶をそのまゝ内山君に配布を依頼したが、忙しさに紛れて内山君は机に入れた儘忘れていたのであった。この様な訳で、私は手続の不備を叱られただけで済んだ。も一つの副産物は病舎の片隅からカストリ雑誌が出て来たことであつた。差入の許されない雑誌が、娑婆と絶縁された受刑者の手に何故入るのかと不思議に思う人もあろうが、種を明かせば簡単である。拘置所の被告には大抵の雑誌が差入を許される。看病夫が拘置所へ行くこともあれば被告が罹病して病舎へ来ることもある。そこで被告としては看病夫の機嫌をとつて置くと病気の時好都合なので、看病夫の要求に応じたり又は自発的に差入の雑誌を提供する訳である。この時のカストリ雑誌がどこから入つて来たものか分らないが、誰が持つて来てかくして置いたものかはどうも分らずじまいであつた。

扱、本題の煙草はなか／＼分らなかつた。前に述べた様に狂人房のあとの三房を、十房十一房を看病夫の檻房に、十二房を物置に使つてあつた。物置には色々の雑品と共に患者用の畳が十枚ばかり簀子の板の上に積んであ

つた。事件が起つた日の午後、鈴川看守が物置を詳しく探すと、ちり紙に新しい新生が二本包んであるのが簀子の下で発見された。之で事態は俄然緊張した。小村先生の失つたのも「新生」であり、発見されたのも「新生」であつた。而も失つた煙草の本数は小村先生の記憶に依れば二本乃至五本とのことであつた。発見された場所から考えて、看病夫以外の者が盗つたとは考えられない。そして十房及び十一房の看病夫に対する疑いが最も濃いわけである。事件発生以来、佐藤部長も鈴川看守も口を酸っぱくして、若し出来心で盗つた者があれば早く申出でよ。今の中なら医務課内部で済むからと説得に努めたが、「私がやりました」と申出る者は全然なかつた。かくして事件は段々もつれて行つた。この時に平野君がこんなことを云い出した。

「事件の朝、自分が何気なく調剤室の前へ行くと、名前は云えないが、或る看病夫が落付かぬ態度で、調剤室からあたふたと出て来た。自分は其の挙動に不審を抱いたので、そつとあとをつけて行くと、その看病夫は病舎に行き狂人房へ入つた。自分は何気なく十房に入りすぐ出て来ると、その看病夫が出て来るのとばかり出会つた」と云うのである。早野君の云う或る看病夫とは色々の状況から判断して十一房の田辺君

以外には考えられないのであるが、田辺君はその時間に自分の房附近に立寄つた覚えはないと主張した。

斯くして迷宮の儘でその日は暮れ、翌日は日曜日であつた。この日曜日には朝から秋季角力大会が催されたのであるが、看病夫全員は禁足を命じられ、今日中に盗んだ犯人が出ればよし、さもなければ月曜の朝には全員を三舎に移し、特警の手に引渡すと云う鈴川看守の申渡しであつた。私達は一房に集つて相談した。看病夫十二名の中に誰か一人犯人がいることは確かであつた。十二名の中でも十房十一房の看病夫、即ち早野、平野、下田及び田辺の四君が、煙草の発見された場所の關係から最も容疑が濃厚であつた。この四名の中でも平野君はまだ新入早々でそんな大胆なことを犯すとは考えられず、又その時間には試験室に居つたことは若森医官の証明があつて確實であり、下田君はその時間には鈴川看守に連れられて、洗濯の依頼に行つていたから、この二人は事件の圏外であつた。そうすると残るのは早野、田辺の両君で、どちらにも其の時間に於ける行動のアリバイがなく、疑いは自然、二人の何れか、或は二人共謀の上と云う具合になつていたのであつた。早野君は術策と詭弁と狡智にかけては札付きで、何か事が起ると、直ぐに「早野」と誰の頭にも浮ぶ存在であり、且つ田辺君と推測される

看病夫の行動をわざ／＼口に出すのは語るに

落ちてゐる感があるのであるが、一方早野君は煙草に対する嗜好がなく、早野君がやったにしても、盗んだ煙草を物置へかくすなどは随分間の抜けた話であつた。田辺君は炊場と特殊な関係を持つて居り、薬を持ち出してはサッカリンと交換してゐることなどは看病夫の間で知らぬ者はなかつたから、煙草を持ち出して甘い物と交換することは当然考えられることであつた。早野君には更に一つの不利な材料が加わつた。早野君に日曜日の朝、鉄を持ち出して病舎の裏にある花壇をいじくつていたことが分つたのである、平常、花壇の世話をよくする者なら何の不思議もないのであるが、花壇など見向きもしたことのない早野君がその朝に限つて花壇に入ると云うのは何としても不可解で、或は証拠埋滅を図つたとも考えられるのである。

斯くして、私達の疑いは早野、田辺両君の上に集まり、若し両君の中、盗つた者があるなら、自首すればそれだけ有利であり、今日の中なら看病夫全員が嘆願して内済にして貰える可能性はあるのだから、徒らに皆に迷惑をかける様なことをせず、潔く申出てほしいと交々説くのであつたが、二人とも頑として肯定しないのであつた。二時間毎ぐらゐに鈴川看守は全員集合させて、情を尽して犯人の反省を促すのであつたが、犯人はどうしても

判明しない。

何回目かの集合の時、早野君は

「皆のポケットを調べて貰つて煙草の粉が底に発見せられたものを犯人としてはどうか」と云い出した。之はどう考えても早野君のわるあがきであつた。所謂、問うに落ちず、語るに落ちるの類であつた。看病夫の中には平常かくれて煙草をすつてゐるものがあるかも知れない。若しあれば、その者のポケットには煙草の粉がくつついてゐる筈である。仮令ポケットの底に煙草の粉が発見されても、今回の事件の直接の証拠にはなり得ないのであるが、若し誰かのポケットから煙草の粉が出て来たなら一挙にその者に今回の事件の責任をなすり付ける。若しうまく煙草の粉が発見されなくても、注意を一寸でもそちらに外らそうと云う早野君のトリックは見えていた。事件に関係のない者がどうしてこの様な余計なことを云い出す必要がある。看守及び私達の早野君に対する心証は益々黒に傾いたのであつた。

看守の数回に上る説得、努力に拘らず、日曜日には結局犯人が分らず、愈々月曜日の朝を迎えたのであつた。その朝、掃除を済まして出役と云う直前に特警の看守が一人病舎へやって来て、看病夫は全員揃つて三舎へ連れて行かれたのであつた。ふとん其他の世帯道具を抱え、十二名の看病夫が全員三舎へ向

う光景は他の受刑者達の耳目を聳動さすに充分であつた。受刑者の中では最高の職場であると自負する看病夫が、それも全員揃つて三舎へ放り込まれるとは、いゝ恥さらしであつた。

三舎は全部独房で、重屏禁、軽屏禁の懲罰房や取調中の反則容疑者を入れて置く厳正独居房が沢山ならんでゐる。何か反則の疑いがあつて三舎に入ると「厳正独居」となる。厳正独居とは他の受刑者との連絡を完全に絶つことである。だから独居であるのは勿論、風呂も運動も一人の受刑者に一人の看守がついて他の受刑者と全く接触せしめないのである。そして厳正独居中は房の扉に「厳正」と云う札がかけられる。三舎には許された者以外は刑務所の職員と雖も、濫りに立入ることは出来ないものであつて、地獄と云われる刑務所の中に於て更に地獄を形作つてゐる所である。

私達は夫々隣合せにならない様に独房に入れた。私達の中で事件に関係のない者は別段に恐れる所はないが、それでも三舎の厳正独居は余り気持のよいものでない。特警へは一人ずつ呼ばれて行く。特別警備隊本部へ入ると、正面に部長が坐つて居り、二、三人の特警看守が横に控え、壁には手錠其他の戒護道具がいかめしく並べられて、良心に疚しい所のある者に対して無言の威圧を加えてい

る。

私は素より事件の起った時は小村先生と薬品倉庫に入っていたことは明らかであるから私に対する取調べは極めて簡単であったが、倉庫へ入る迄の足取り、特に内山君の動作と倉庫を出てからの状況を聴取され、一体誰が最も怪しいと思うかと尋ねられた。私は之に對して、早野が八分、田辺が二分の割合で怪しいと思うと答えて置いた。私はすぐに容疑をとかれ、三舎から病舎へ帰った。併しその日は事務所へ出ることを許されなかったので医務課は手足を失い開店休業の状態であった。その日の中に病舎へ帰ることを許された看病夫は八名で、残りの四名は遂にその日は帰らなかった。その四名は、早野、田辺、下田及び内山の四君であったが、この中に内山君が含まれているとは実に意外であった。併し後に聞いた所によると、内山君が煙草事件

そのものに関係のなかったことは明らかなのであったが、或る患者が内山君に付て薬のみ流しをしているとか何とか中傷の投書をしたので其の取調べに時間がかゝったのであった。下田君も彼自身に対する疑いでなく、早野君の平常を最もよく知っている者として、色々取調べを受けていたので遅れたのであった。下田、内山の両君は翌日許されて帰って来た。結局、残ったのは早野、田辺の二人であった。衆目の見る所、二人以外に怪しい者はなく、状況はすべてこの二人、特に早野君の黒いことを示していた。一週間経っても、一ヶ月位経っても二人は三舎を出ることが出来なかった。「上手の手から水」のたとえ通り、あれ程狡智に長けた早野君にも遂に年貢の納め時が来たのだと皆は噂をした。早野、田辺両君の補充に新入も採用され、取調べの結果如何に拘らず、両君はこゝに医務課と縁

が切れてしまったのであった。

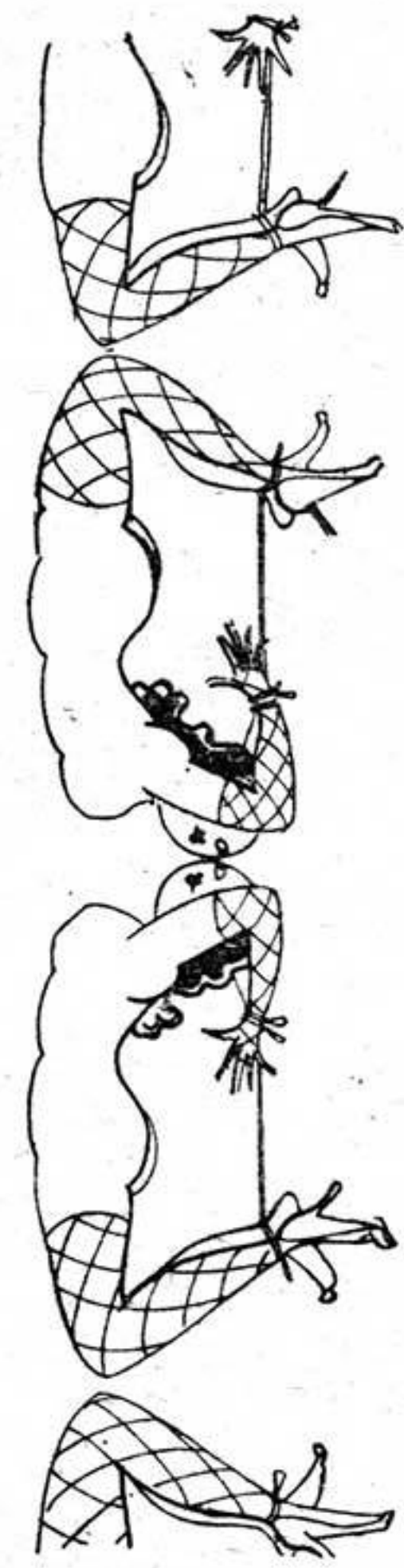
五等飯で、僅かの運動以外、房にじっと坐っている厳正独居の二ヶ月、その間に行われる特警の峻烈な取調べ、両君には骨のずい迄こたえた筈である。身体はやせ、顔色は次第に青白くなって行く。それでも二人は犯行を否認し続けたのであった。刑務所当局としても、ちり紙で包んだ二本の新生以外に何の証拠もなく、且つこの二本の煙草も極め手とはなり得なかったのである。

其後、看病夫が二人、三人と仮釈放で出所し、その代りに新入が入り、最早、煙草事件を体験し、早野、田辺の両君を知る看病夫がすくなくなつた頃、十二月も押し詰った或日、二人は証拠不十分として無罪となり「厳正」が解けたが、病舎から逐われた看病夫は木から落ちた猿同様で、昔日のさつそうとした白衣姿の面影はなく、年の暮に入浴を待つて並んでいる二人の姿は寒々としていた。

〔世相断片ローカルレポート〕

新聞・雑誌

通信



女二十数人に劇薬

トイレの外からかける

—三月七日附読売新聞—

—最近、渋谷、世田谷の住宅街でトイレに入っている婦人が戸の外から劇薬をかけられ、火傷を負う事件が続出、届出たものだけでも二十数件におよんだので、代々木署では北沢署と合同捜査にのり出すとともに付近の

注意を望んでいる。

さる一月八日夜十時ごろ渋谷区幡ヶ谷笹塚町一、〇二六会社員木村栄さん妻(三一)が用便中、はき出し口から消毒薬らしい液体を霧吹きでふきかけられ全治二週間の火傷を負ったのはじめ、隣接の世田谷区北沢五丁目一帯へかけ二十数名の婦人が被害にかかっている。

犯人の人はまだつかめていないが現場にスポーツ新聞などがすててあり、若い男らしく外出先から帰宅する若い娘や人妻を尾行して来てトイレにゆくのを待ちかまえているらしい。犯行の際ははき出し口やくみ取口を前もってあけ、時間は夜七時半から十時までが多く薬品はクレゾールの原液らしい。

(東一郎投)

(第二信)

また世田谷に劇薬男

—三月二十七日附夕刊読売—

—またまたトイレに入っている婦人にくみ取口から劇薬をかける痴漢が東京世田谷の住宅街に出没し婦女子をこわがらせている。二十六日夜八時半ごろ世田谷区北沢五丁目会社員の次女中学生(一三)が自宅便所に入っているといきなりくみ取口から水鉄砲のよ

うなものでクレゾール原液を放射され、左モモ全治二週間のヤケドを負った。

この「劇薬放射事件」は去る一月八日夜渋谷区幡ヶ谷笹塚町で会社員K氏の妻(三一)が被害をうけたのがはじまりで、同町や北沢町五丁目一帯で合計二十五名が被害をうけている。

最近では去る二十四日午前零時半ごろ同町五の八六一会社員の妻F子さん(三七)が全治約十日のヤケドを負い北沢、代々木両署で合同捜査中だった。両署では付近に住む変態男の仕業と見て捜査している。(東一郎 記)

女学生に劇薬浴びせる

汲取口にまた痴漢

—三月二十八日附、東京タイムズ—

本年はじめ頃から夜間用便中の婦女子に汲取口から劇薬をかける痴漢が代々木、北沢署管内の住宅街に出没、両署で合同捜査を続けているが、またまた同様手口による火傷事件が世田谷区北沢に発生、付近一帯の婦女子の恐怖をよんでいる。

廿七日朝世田谷区北沢五丁目会社員Sさんが「前夜八時半ごろ次女のM子(一三)Ⅱ中学二年Ⅱが自宅の便所で用便中いきなり汲取口からふん霧器のようなものでクレゾール原液

を放射され、左ももなどに全治二週間の火傷を負った」と北沢署に届出た。被害者M子さんの話では「足音はまったくせず放射後」ヒヒミミ」と気味の悪い男の声がしたただけ」といっているが、同署で調べたところ現場にマッチの燃えガラと十文半大のズック靴の足跡があった。同様手口の事件はさる一月十日夜、渋谷区幡ヶ谷笹塚町会社員の妻A子さん(三一)が被害を受けたのがはじめで、さる廿四日にも年前零時半ごろ北沢五丁目会社員の妻F子さん(三七)が全治十日の火傷を負ったほか世田谷代々木の住宅街一帯で未届の分も含めて、約十数名が被害を受けており、北沢、代々木両署では土地の事情に明るい変質者の仕業とみて、本格的捜査を進めることになった。(真木不二夫 投)

【編集部より】

世田谷の事件について、東一郎氏と真木不二夫氏から、以上のような新聞切抜きの御送付を受けました。東氏はこの事件に対しての感想を附記せられ、真木氏は、被害者M子さんの話「足音はまったくせず放射後」ヒヒミミミ」と気味の悪い男の声がしたただけ」と言っているのは、探偵小説的な興味を持つと結んでおられます。

奈子の自己愛について



門 田 奈 子

一、自己紹介

「ナルチズム」という言葉を使って良いものかどうか、奈子にはよくわかりませんが、自分で自分をとてもしいと思う気持は、もしかしたら、こう呼んでもさしつかえないのではないでしようか。

丁度、女学校の三年生位の時から、奈子の身体の中には、もう一人の違った自分が生れてきた様です。

そしてそれ以来、私の肉体を借りて生活している二人の異った奈子は、それ〴〵お互いに愛し合い、睦み合って、今日まで生きてまゐりました。

どちらが本当の奈子なのか、自分にもよくわからないのです。一体この気持を、何と云って説明したら良いのでしょうか。

時々、私の心の中には、第三の奈子が現れて、二人の不倫な関係をたしなめようとはするのですけれど、そんなものは、私にとってほとんど一瞬の反省にすぎません。

私が眼を閉じると、二人の奈子は、たちまち手を取り合って、肉体の束縛から逃れ、奇妙な他次元の世界に遊ぶのです。そして、あの素晴らしい狂騒曲をかなでます。にぶく、それでいて強烈な、丁度恋する女の胸の鼓動の様なリズム、調和と不調和の限界をゆく、途切れ〴〵の狂おしいメロディ……その中で、二人の奈子は、まるで墮落したアダムとイヴの様に、ありとあらゆる虹の幻影を描き出すのです。

でも、それは決して、皆様が安易に想像される様な、淫らな桃色の構図（奈子だって青春なのです。そういう事がないとは申しませんけれど——）ばかりとは限りません。もっともっと鮮烈で、なま〴〵しい体臭を持った幻想、とても言ったら良いでしようか。

奈子も、自分のお部屋の、ある秘密の場所に、奇譚クラブを二十冊以上、持っておりまゐす。自己愛の研究？ と実践のために、欠く事の出来ない教科書として、或は奈子の気持をよりよく理解してくれる最良の友として、

奇譚クラブは、奈子にとっても又、どうしてもなくてはならないもののなのです。

近頃では、二日に一度か三日に一度、それをそつと取り出して、人知れず、何回も何回も読み返す事が、奈子のひそかな楽しみです。出来ることなら、十日に一度、せめて一週間に一度ぐらいにしたいと思うのですけれど——。

奈子の大好きな、羽村京子さん、魔像保様そして、今は亡き角皓子さん——、お書きになりましたものは、奈子も全部読ませて戴いております。ほとんど皆暗誦してしまう位に、そして他の皆様方のお話も、奈子にとりましては、本当に素晴らしい、貴重な贈りものなのです。

でも、それならば、奈子は一体、本質的には何なのでしょうか。

奇譚クラブという、世にも稀な雑誌から、奈子は、何を求め、何を得ようとしているのでしょうか。

切腹——あゝ、なんと素晴らしい音律を持った言葉でしょうか。あの豪華で陰惨な、肉体に直接描かれる生きた錦絵は、奈子を夢の様な悦虐の境地に誘い入れてくれます。それは神が人間に許した最高の演技、と言っても良いと思います。でも、奈子の心の中にあるものは、もっと濁って、黒ずんだ色をしている様です。切腹という幻想が生む、あまりにも

華麗な純粹さが、奈子にはおそろしい——。

浣腸は、奈子も大好きです。耐え難い程の陰圧と、充満感が、より一層奈子の心をひきつけるのかもしれない。奈子は、自分にとって可能な範囲で、いつも花村さんや羽村さんのお言葉を、忠実に実行してみます。でも終った後の、あのしら／＼とした心の空白を、どう処理したらよろしいの、その程度が進めば進む程、一層焦らだたしさが増すばかりで、心から満足する事が出来ない。この遊戯にも、おのずからひとつの限度がある様な気がしてなりません。

奈子みたいな女が、今更こんなことを言いだしたりして、これは、皆様方に対する恐ろしい冒瀆だと思います。でも、これらはすべて、奈子の体験からだけ割り出した主観にすぎません。決してこの主張を、一般論と対決させようなどという大それた考えは持つておりませんので、どうぞお聞きながし下さいませ。それどころか、奈子は、もっとも具体的事実をお教え戴きたいとさえ思っております。何故なら、自虐という感覚は、奈子の自己愛の中でも、最も中心的で、重要な位置を占めているのですから——。

それでは奈子は、やはりある意味ではマゾヒストかもしれません。でも奈子が本当にマゾヒストだとするなら、この身体の中にあるもう一人の奈子は、一体どう呼んだら良いの

でしょう。自分の肉体をきりきざんで、そのあげく喰べてしまいたいと願っている。もう一人の私は——。

皆様は、奈子のこんなタワ言を聞かれて、きつと失望され、笑っていらつしやるかもしれません。何という教養のない、底の浅い無節操な女だろう——、いゝえ、そうではないんです、そう思わないで下さい。「自己紹介」という小題の中で、奈子はもうひとつだけ、皆様方に聞いて戴きたいことがあります。

奈子は、現在（過去もふくめて——）恋人と名のつく男性を、一人も持ったことがありません。又、持たたいとも思いませんでした。そんな必要は、すこしもなかったからです。でも良いお友達は、欲しいと思っております。マゾとサジ（失礼——）といった様な肉感的な対象としてではなく、お互いに自己愛を持ったもの同志が、心から語り合う事が出来たら、世間並みの友情などという甘い感傷は別として、もっとずっと切実で純粹なものが生れるのではないかと思いますので。

それはそれとして、私の様なもの——正直に申しますと、この言葉は奈子の本心ではありません。主観的には、奈子は自分程美しいものは他にないと思っております。あわれな自己愛が描いた妄想です。笑わないで下さい——でも、男性から愛の告白を受けた経験は、何回かもっております。が、奈子は、

その方々のさゝやきを聞いて、私と同じ年頃の女性が感ずる様な、甘い恋の感動を胸に受けたことは、ただの一度もありませんでした。

ある人が奈子を見たら、何という鼻柱の強い、氷の様に冷い女だろうとお嫌いなさる事でしょう。理想ばかり高くって、足元を見る事を知らない馬鹿な女だと、さげすまれるかもしれません。ある場合には、可哀想に、あの女は小野小町ではないかとさえ——これは現実に面と向ってそう言われた事もあるので。どう間違っても、奈子を、憶病でしかも気の弱い、気の毒な位純情な女だと思って戴く事は出来ません。

そうです。そんな時の奈子は、表面では冷たく微動だにしない鉄の仮面をかぶりながら、その胸の中はまるで枯嵐にもまれる一枚の枯葉の様に、わな／＼とふるえ、このいとしいといし自分の身体が、今にも他人に奪われてしまうのではないかという不安や恐怖に戦っているのです。そして、その結果、奈子は夢中になって心の貝殻の蓋を閉じ、侵略者の甘い言葉を払いのけると、自分の身体をしつかりと抱きしめて、その場から飛び退いてしまうのです。

そんな時、奈子はこの美しい自分自身に対して、激しい嫉妬を感じます。この気持は、たしかに恋と呼んで良い程の強いものだと思います。

っています。

自分自身に恋する女、自分のために念入りのお化粧をする女、そして、それが美しく仕上れば仕上る程、愛の嫉妬を燃えた／＼せている女の姿ほど、あわれでこっけいなものは、又とありますまい。それでもなお、奈子は自分を美しく飾りたいと思う心で一杯です。

奈子は、自分自身を愛することに汲々として、今日まで生きてきた女なのです。

鏡の前に立った美しい肉体を見て、いとしと思う心と、ねたましく感ずる心とは、自然激しく対立して全身を駆けまわり、奈子をおの狂おしい自己愛の滝壺の中に引きずり込んでしまします。

このくちびる、このぬめ肌、この乳房……何という魅惑、何という芳醇な感触でしょう。誰のものでもない。そして、誰にも奪われはしない、奈子の肉体は、すべて、毛髪の本に至るまで、みんなみんな奈子だけのものなのです。

自分で自分を抱きしめ、激しくくちづけしてやりたい気持と、この美しい肉体を責めさいなみ、路傍に放り出して辱しめて見たい欲望とが交錯して、奈子は切腹の真似もしました。浅い傷でしたけれど、本当に乳房にきりつけてしまったこともあります。浣腸だって、奈子のなだらかな曲線をもった腹部が、みにく／＼ゆがんでしまうまで、大量の空気を

注入した事があります。それから、お腹の上に冷たいアイロンを置き、電気を通じて背筋の方までチリチリと熱く感ずる程になるまでじっと我慢していたこともございます。

奈子は、本当に浮気者なのでしょうか。奈子は、本当にアブ（この言葉嫌いですが）の遍歴者なのでしょうか。

アブノーマルって、すべて自己愛が、それぞれの形に変型したものではないのでしょうか。これは、あまりにも虫の好すぎる自分勝手な考え方かもしれませんが——。

でも、奈子は、自分の汚したものにさえ、激しい愛着を感じます。それだからこそ、奈子は、自分の恋人がつける下着類の選択には人一倍こまかい神経を使っているのです。

自らを愛するがゆえに、あらゆるアブの世界に迷いこんでしまった女、こうした奈子の存在が、奇譚クラブのために少しでもお役にたつとは考えておりません。たゞ、奈子はお話したいのです。書いてみたいのです。今迄、奈子がやって来たこと、考えていること。もしかししたら、本当に奈子を理解して下さる方が、あらわれるかもしれない。たゞそれだけを楽しみに——。

二、奈子のお化粧

今迄お話いたしました様に、奈子は自分以外の対象に対しては、決して恋とか愛とかい

った関心を抱くことはありません。

切腹も浣腸も、そのほかのさまざまな責めや緊縛、そして下着や肉体の各部分に対する狂崇などといったものは、奈子にとっては、すべてが自分自身を愛するための手段、或は小道具にすぎないので。奈子の生活の内部にまで深く喰い入って、本質的な影響を与えているとは思いません。それはたしかに、二〇〇〇の浣腸器を使用したり、自分で自分に激しい苦痛を味わせたりする事は、奈子の熱情を一層亢進させるのに役立つことは事実です。でも、もっとその奥にある奈子の実態というものは、あくまで自己愛の衝動的な官能に対する狂おしいばかりの執着であると言わなければなりません。

奈子のあくことを知らない装飾欲、自己の美に対する狂熱的な憧憬と追求は、こうしてはじめられるのです。

奈子のお友達は、こうした奈子の性格を、一笑のもとに「お洒落——」という言葉でかたづけられます。それを右から左に聞きながして、奈子は自分自身を磨きたてることに余念がありません。

奈子のハンドバッグの中にはルーシユや、クリームなどの他に、附けまつ毛やマニキュアのセットなど、あらゆる種類のお化粧道具が、一杯につめこまれております。更に目薬や口臭どめの緑色の錠剤、オキシフルにいた

るまで、それ／＼セルロイドのケースに小出しにされ、或は小瓶につめかえられて入っているのです。

でもやはり、奈子も女ですから、落着いた自分だけのお部屋で、美しくお化粧の仕上った自分の顔を鏡にうつして、つく／＼と眺める時が、一番幸福で、平和な一瞬だと思っています。その直後に襲ってくる、もう一人の奈子が感ずるあの激烈な嫉妬の嵐を押えることさえ出来たなら——。

こゝで奈子は、もうすこし奈子の生活について、詳しくお話しておきたいと思ひます。

奈子の職業は、デザイナーの卵です。住込ですから、小さいけれど、奈子だけのお部屋も、与えられております。腰高のガラス窓に半間の押入れ、三方壁に囲まれたこのお部屋には、勿論誰も入ってはまいりません。でも奈子は、念のため、というより一層その雰囲気を増すために、廊下に面した唯一の出入口である襖には、内側から鍵をとりつけました。窓はクモリガラスですが、真紅のウール地の厚手のカーテンが引かれております。そして、今奈子がペンを走らせている小さな机変り型の電気スタンド、お人形に花さし……。このお部屋の中に、二人の奈子は同棲しているのです。

奈子のお給料は分合給ですから、そう豊かであるとは言えませんが、それでも仿けば仿

ただけ、収入をふやすことが出来ます。奈子はその中から、食費と月々の定った出費とを出してしまふと、残ったお金のほとんどを、自分の身を飾るための化粧品や下着類、アクセサリーなどのためにふりむけます。

だから、もしどこかに、変った化粧品の容器などを蒐集していらしやる方があったとしたら、奈子のコレクションは、その方とくらべても決して恥かしくないくらい、相当なものだと思っております。下ばきの類も、それが市販されていない特殊な型のものでない限り、あらゆる種類のものを、一通りは揃えてあるつもりです。

こう申しますと、奈子の生活は、如何にも豪華な印象を与える様ですが、決してそういうわけではありません。奈子は、乏しい経済の中から、一生懸命節約して、どうやらこれだけのものを揃えることが出来たのです。実際には、皆様の想像なさるよりも、ずっと貧弱で、せま／＼しいお部屋に住んでいるのですけれど——。

でも奈子は、こうした貧しい生活には、まるで不似合な家具を二つ持っております。それは、一番大型で沢山のひきだしのついていゝる上等の姿見と、昨年の冬やと買う事の出た、ナシヨナルの高級電気ストーブなのですが、これだって、奈子が粒々辛苦の末、やゝと手に入れることが出来た時の嬉しさは、

恐らく、一生忘れることは出来ません。

一日のお仕事が終わると、奈子はこのお部屋に閉じこもって、内側からしっかりと鍵をかけ、念入りなお化粧をはじめます。誤解して戴きたくないことは、奈子は決して真っ白いお面の様な「バケ粧」に凝っているわけではありません。どうしたら要領よく、自分を美しくスッキリと見せるかという事に、心を砕いているのです。

入浴を了え、そして奇譚クラブに眼を通した後の夜などは、奈子のお化粧の範囲は、身体のある部分にまで及びます。そのため、奈子にはどうしても、この冬には、電気ストープが必要だったのです。銅の輻射板から、カアツとはね返ってくる熱気は、奈子の全身にこゝろよい淫蕩の血を湧たたせてくれます。

奈子は、まず乳首に紅をさし、それを周囲のやわらかいふくみにそって、半円型にぼかしてゆく、これは、濃すぎても薄すぎてもいけません。その大きさも、乳房全体を塗りつぶしたりすると、かえって全くグロテスクなものになってしまいます。桜色に染った直径十センチほどの丸味が、最も美しくもあり肉体の他の部分、例えば、奈子の中心にある墨色の陰影などとも、ピッタリと調和している様です。乳首に紅の焦点を合わせ、だんだんと色がうすくなつて、最後に肌の桃色の中に

溶けこんでしまう感じ、奈子はそんな時、自分の乳房が本当にいき／＼と弾力をましてくる様に思われてなりません。

それから、奈子のお臍ですけど、二十九年六月号に須藤律夫様がお書きになりました「臍窩への省察」の中のお言葉によれば、奈子のお臍は「小さな深い臍」に属する様な気がいたします。奈子は、その周囲を青のアイシャドウ（ドーランの一種）で、うすく色どり内部には眉墨を使って、この自然のアクセサリーを一層ひきたたせる様にいたします。すこし離れて、鏡にうつして見ると、たしかに須藤様のような、お臍に対する強いフェチシズムを持たれた方のお気持が、わかる様な気がします。でも、奈子は、自分でもお臍にいろいろな刺戟を加えて見たことがありますけれど、まだそれ程深く理解しているとは申されません。

その下の方に大きくひろがっている場所については、いろいろの事がありますけれど、あまり立入ってお話することは出来ないのではないかと思います。ただ、ポマードや髪油など、油性のものを使用することは絶対にいけません。ほんの微かな空気の流れにも、さやさやとそよぎを見せる様なのが一番良いのです。

そして、奈子があまにも奈子である部分に対しては、一切のお化粧は不必要です。そ

れは原色のままで、十分すぎる程の価値をもっております。奈子は、自己愛を象徴するしるしとして、そこを一对の真珠のイヤーリングで飾ってあげましょう。

こうして出来上った奈子の全身は、アラビアン・ナイトの物語に出てくるシェヘラザートの様に、妖しいまでに官能的な美しさをただよわせております。

電気ストープを買ってからというもの、奈子は朝早くから起きて、このお化粧をすることがあります。そして、真珠のイヤーリングをつけたまま（ある時は、銀のクルスとなり、またある時は可愛らしい小鈴ともなるのです）ブラジャーをし、下ばきをはいて、お店に出た時など、奈子はお客様のお相手をしなから、そして自分で裁断台に向いながら、身内をかけまわる発作的な衝動をおさえるのに、人しれず苦勞しなければなりません。でも、何というよろこび、何という喜悅なのでしょう。奈子は、自分自身を完全に独占している。それは、奈子だけが知る自己愛の不思議な陶醉境なのです。――

三、奈子のお料理

こうして、極端に自分をいとしいと思ひ反面、奈子はそれとは全く逆な、恐ろしい自虐の願望を持っている様です。それは、時折、奈子のお料理（解剖といった方がピッタリす

るかもしれません」という形であらわれてまゐります。

人間を料理したいとか、されたいとかいう幻想は、多かれ少かれ誰方にもある様です。奇譚クラブの口絵にも、何回か描れておりますし、羽村京子さんの「A 感覚の秘密」にはその詳しい情景があり／＼と語られております。(三十年二月号——其他)

私の身体の中に生活している二人の奈子のうち、能動的な性格をもっている方の自分、もっと具体的に言えば、加害者としての奈子も、やはり、これと同じ様なことを考えております。自分の身体を喰べてしまいたいという願望は、自己愛をもっている方なら、誰でもが感ずることなのではないでしょうか。

「喰べてしまいたい程可愛い」とか、「可愛さあまって憎さ百倍」とかいった言葉を思い出して戴ければ良いと思います。それは又本能的な独占欲ともいうことが出来ると思いますが。ただ私の場合、その対象が自分自身に向けられているだけに、多少深入りしすぎる傾向が、なきにしもあらずなのですが――。

奈子の幻想は、こうして次から次へとひろがってまいります。二人の奈子は、私の肉体からはなれて、それぞれ別な活躍をはじめめるのです。

まっ白なベッドの上に、青みがかった奈子が置かれています。ひどく明るいくせに、ど

んよりと静んだまま動かない空気、その中でもう一人の奈子が、自分の身体のお料理を作りはじめめるのです。

まず、両の乳房を、その形を崩さぬ様に、そつと切りはなし、傍らのお盆の上に並べます。奈子は、まだ死にきっているわけではありません。まないたの上にのせられた断末魔の鯉の様に、時々四肢をヒク／＼と動かしているのです。乳房をそぎとられた後の胸部には、ポツカリと真赤な大きい傷口が出来ました。あの形よく盛り上っていた胸が、まるで少年のその様にペチャンコとなり、テラテラと光った肉を露出しては、他の部分はまだ完璧な美しさを保っているだけに、何ともいい様のない程もの悲しくあわれにさえ見えるのです。

やがてもう一人の奈子は、更に鋭いメスを下腹にサクツと突きたてると、音もなく腹部をきりひらいて内臓をつかみ出し、その後にはザア／＼と水をかけながら残った血を洗い流すと、丁度魚のえらをむしり取る様に、肋骨の内側に掌を入れて、力まかせに奈子の肺をひっぱり出してしまふのです。

何も残っていないガランドウの肉体をじつと見つめながら、彼女は「これが、お前の肉体だったの――」

とつぶやく、そう――、あの美しい奈子の身体内部にあったものは、間違いもなくこ

れなのです。

プウンと生臭い血の臭い、暗紫色の臓器、そこから発する異様な腐敗臭――。うす桃色のきれいな肺が、わずかに奈子らしい感じであとは、犬のとすこしも変わりません。傍らにうず高く積み重ねられたはらわたの山、これが奈子なのです。子宮だって、卵巣だって、ほかの動物の牝とすこしも変わらない、あれほど美しく、可憐だった奈子の内部が、むしろより醜悪なものだったという事は、もう一人の奈子に限りない優越感を与えます。

やがて奈子の身体は、縦に真二つに切断されると、腕は腕、脚は脚と切り離され、小さな肉片にぎざまれて、どこの誰ともわからない――おそらく、それは大勢のみにくい乞食の群れなのでしょう。――男たちに喰べられてしまふ。そしてやわらかい二つの乳房は奈子自身が舌鼓をうって喰べてしまふのです。その課程において、想像される限りのさまざまな凌辱が奈子の肉体に加えられるのですが、それは、奈子の胸の中だけに描かれる妖しい夢として、秘めておくべき事なのです。

奈子はただ、自己愛で理想化された絶対美の観念をこなく／＼に打ち砕き、踏みじって極端に醜悪なものに変型させてやりたいと思ふもう一人の奈子の気持を、知って戴きたいのです。そして、それがあくまで自分を愛するが故の衝動である。ということ――。

こうした奈子のお料理熱は、具体的には、次の様な方法で満たされています。

まず、お料理されるためには、衣服は不必要なものです。しかしマリリン・モンローなら、シヤネルの五番がお似合かもしれませんけれど、日本家屋に住む私たちにとっては、そういうわけにもゆきません。それでやむを得ず、お寝間着の紐をゆるめて前を開き、シユミーズはお乳の上まで、パンティは膝の下までで我慢しなければなりません。(もつと夏になれば、奈子もモンローの真似をいたします) 馴れて見ると、この程度の方がかえって露出部分が強調されている様な気がいたします。そして、その上を、相当厚い夜具で覆ってしまうのです。

奈子は、眼を閉じて、しばらくの間静かにそのなだらかな腹部を平手で撫でさすっていると、やがて何とも言い様のない被虐感が全身にゆきわたって、まるで自分が世界一の美女であるかの様な、ウットリとした蕩酔が訪れ、完全に解剖される第一の奈子になりきってしまうことが出来るのです。この場合、幻想では自分が加害者の立場に立つことが出来るのに、現実にはかえって被害者としての感覚を追い求めているということは、自分でも理解出来ない気持の変化です。

それから、最初に腹部の中心に、割箸を三本程立てます。厚い夜具の重みで、それは相

当に強い力で奈子のお腹にめりこんで来ますが、たしかにこれは、お腹を真二つに割られようとしている情景にふさわしい痛みです。それをそつと一本づつ除いて、最後の一本になると、ほとんど耐えきれない程の苦痛となります。わずか一本の何でもない割箸ですけれど、実に想像以上の力で、お腹の中にめりこんでくるのです。

これを一度、お臍に突きたく、見たことがありますけれど、どんなに自虐を好む方でも到底十秒と耐えられる苦痛ではありません。奈子は、割箸の上端で夜具を押し上げておいて、その下端をお臍の中におろして、手をはなした瞬間、ほとんど無我夢中で払いのけてしまいました。

こうして、腹部にメス?を突きたてておいて、静かに呼吸をつめながら、乳首にクリップを噛みつかせます。これは、三十年二月号に、クリップ責めとして発表されたことがありました。小さなフオートでしたけれど、あれを見て、奈子はふるえあがってしまいました。失礼ですけれど、あの写真は、今でもバネがゆるめてあったのではないかと思っています。本当にあの大ききのクリップを乳首にとりつけたら、モデルはおそらく気絶してしまうのではないのでしょうか。つけてからはすなわに、どう早く考えても十二、三秒はかかる筈です。もし、あれが真実の記録であると

したら、奈子は、川辺砂登子さん(その時のモデルさんです)の気力と意志の強さに、眼を見張るばかりです。奈子のはもつとずっと小さなものですけれど、それでも背筋の方までデンデンと伝ってくる激痛にともすば耐えきれず外してしまいます。(同年四月号二三八ページを御参照下さいませ)

最後にもう一個所責める場所がありますけれど、御親書でしか申し上げることは出来ません。そして、このままの姿勢でじつとしておりますと、奈子は自然に自己解剖のクライマックスに、達してしまふことが出来るのです。文字にあらわしますと、前者と後者との間には別に何のつながりもない様です。強いといえば、全身にゆきわたる鋭い痛みが、メスにきり裂かれてゆく肉体を連想させるという程度ですけれど、現実には、この両者がピッタリと一致して、素晴らしい悦虐の花園を展開してくれるのです。

奈子は、この手記で、出来るだけ忠実に、自分の気持を綴ったつもりです。こうした奈子の性格は、皆様方には何の興味もないかもしれせん。でも、奈子の気持を、よりよく理解して下さる方が、たとえ一人でもいて下さいましたら、奈子はどの位うれしかかわりません。

(以下次号)

「保健同人」という療養者向の雑誌に、次のような、浣腸についての興味ある回答が掲載されて居りました。

掲載誌「保健同人」四月号 保健同人社 発行

浣腸のクセを直したい

問 八年間の安静生活の間に毎日の浣腸がクセとなり、少しずつ起きられるようになった現在もこの習慣をあらためることができません。何とか使わずにすませたいと思うのですが、まだ便所へ通うこともそれほど自由でなく、腸が弱いのと不快なもので、つい毎日使用してしまいます。かんたんにしたいと思ってしたマツサージマでがクセとなり、浣腸液も強い刺激が必要となつてしまい、こんなクセをつけたことを悔んでいます。いまとなつては便意が弱く、また便意があつてもこの消極的な不自由なクセを直してゆく方法はないものでしょうか。また使わずにいてどの位の間、排便しなくても害がないものでしょうか。

(東京・よしこ)

回数へらし、きまつた時間に自然排便するようにしてください

答 一般に女性のかたは便秘がちで、一週間一回位の便通でふつうに仿っている人もあります。しかしこれは異常なので、一日一回少くとも二日に一回位あるようにしたいものです。あなたの場合浣腸そのもの

浣腸問答

青山三枝吉

の作用よりも精神的な面がたぶんにあるように思われます。二三日便通がなくても心配はありませんから、浣腸をしないで、便意があつてもなくても、きまつた時間(いつも浣腸をして排便される時間で結構です)に便所にいつてみて下さい。

浣腸そのものはそんなに悪い影響はありませんが、毎日、しかも八年間もつづけ

ば、腸力がしげきにぶくなり、そのためにさらに強いしげきを必要とします。ですからこのさいきっぱりとやめてしまうようにすべきです。しかし、一度にやめられなければ前にのべたことをやって、それでも排便がなければ三日一回にするとか、いうようにして、どうしても五日もでないというのであれば、やむを得ず浣腸をするというようにしてみて下さい。

(慶応大学 伝田俊男)

以上

私はこれを読んでおかしくなつた。慶大医学博士伝田氏の応答はあまりにも常識的で、こんな回答なら誰にだってできる。こんな返答で「東京、よしこ」さんの悩みが解決できたなら苦労はない。人間の性情というものは、そんな常識的なものではないのだ。しかし、八年間、毎日浣腸というのはすごい。病人とはいえ、マニヤでなくてなんである。

お天狗松昔噺

『鞍馬の孕み女』

緑

猛

比

古

大川端の橋杭に、若い孕み女の死骸が引つ掛つていたって話で、今も来がけに船宿辺りじや大騒ぎだった。何れは不義密通の果ての腹ぼてにはなつたは、男には捨てられたどこのつまりの身投げなんだろうが――。

近頃の若え者はどうも命をお粗末にしていけねえ。とは云うものゝあつしだつてあんまり大事にする方でもねえが……。

来る早々、縁起でもねえ話で御免よ。兄貴、あつしはこの二三日滅法ついていやがるんだ。今夜の処はひとつ奢らせて貰うぜ、膝でも崩していつものように、自慢にならねえ莫迦っ話を、酒の肴にでも聞いて貰うとしようか――。

例のちらし紅葉のお吟の奴に逃げられた後反つておこりの落ちた様で薩張りしたあつしは、一気に尾張から京へと、東海道の最後の上りを目指して、双六じゃねえが、さいころ振り／＼急ぎに急いだ。といったって、京へ着いたところで別段用もねえ、呑気な体のあつしだった。

木屋町辺りに宿をとつたが、フト思いついたのが鞍馬詣り。牛若丸で名高けえ鞍馬の天狗が、この近くに住んでおつたと知りや、万更あつしにとつても赤の他人でもねえ。

すっかり夏めいて、汗ばむ程の日射しを体一杯に浴びて、右に比叡の山々を仰ぎ乍ら、八瀬の大原女のゆき交う街道をぶらり／＼と鞍馬の山道へと辿つていった。

森閑とした杉の木立に囲まれたお山の静けさが、流石にがさつなあつしにもすっかり神々しく思われて、祠に額づき、お天狗面にこれからも女のあやかる様、不埒なお願ひかけて、扱帰途についたが貴船あたりから、どこをどう間違えたか、行けども／＼の山道で、そのうちいつしか陽も暮れかけて来た。えゝい儘よ。悪く行きや野宿する迄よと糞度胸をきめ込んで、梟のホウ／＼啼くのを厭な思いで聞き乍ら、頃よく山裾から覗き出した五日月の仄明りを頼りに、人家を求めてさ迷い歩いていた。

そのうちポツチリと灯が樹の間がくれに見えたものだから、やれ

嬉しやと、地獄に仏の思いで、灯を目当てにどうやら、壊れかゝった様な軒のかたむいたその家の前に辿りついた。

こんな家でも、野宿よりは随分ましだと、外れかゝった板戸をトントンと叩こうとした、その途端。

「フーウ、ウーム」と押し殺したような、女のらしい呻き声が内らから洩れてきたじやねえか――。

はてな？　こいつはひよっとすると、雲助が鞍馬の山賊かなんぞの噤じやなかるうかと、あつしはドキリとして思わず一二歩後ずさった。

その時、又以前にも増した、今度は判っきり苦痛の呻き声と分る女の声が、断続して聞えて来た。

てっきりこいつは、拐わかされて来た女が後手猿轡かなんぞのあられもねえ姿で、荒くれ男共の手籠めに逢って、散々いゝ弄みものになつてゐるに違えねえ。とあつしは思ったね。体が妙にぞくぞくと小刻みにふるえ乍らも、怖いもの見たさの厄介な性分が、又ぞろムクムクと起つて来て、あつしはそつと足音を忍ばせると、家の廻りをぐるりと一廻りして見た。

丁度いゝ工合に、裏側の井戸端の障子戸がぼろ／＼に紙が破けていて、覗くにやまつたくのおあつらえ向きと来ていやがる。

ゴクリと生唾を呑み込んで、そつと破れからうちらを覗いて見たあつしは、二度吃驚した。

こいつはあつしの想像した様な山賊の輩じやなかったが、絵で見た安達ヶ原の鬼婆そっくりの女も、いゝ年増の、ちよいと小股の切れ上った洗髪に絆纏着の女二人が、いろいろの側で一人の若い女を責折檻している図だった。よく見ると若い女は妊ごつていて、臨月近い腹を切なげに浪打たせていたが、ひとしきり責めつけられた後かぐつたりとなつてゐるのそばに打倒れていた――。

薄暗い楯の光だけだが、女は腰巻一枚の裸に剥かれていたので孕

み女と分つた迄で、相当手非道くやられたのか、息も絶え／＼にあえいでいた。

あつしの眼が次第に馴れてくるにつれて、女がむごたらしく縛られているのが判っきりとして来た。

女の顔は両のかいなに挟まれた恰好で、頭の上に両の手首を合掌の形にさせ、縄の代りに蔓草の手頃なのを繋いだやつで、拇指の合せ目辺りから、すき間もないくらいぐる／＼ときつく巻いて締め上げて、顔ごと犇々と巻き上げた蔓縄が、頬、鼻の辺りにも凹みをつくって深く喰い込み、口一杯に押し込まれたぼろ布れの上からも唇に喰い入る程に、そこで二巻三巻巻きつけて、延々とびた蔓縄は、尚も首から胸へと続いて、豊かな乳房をも、はみ出す様にして縛り上げて盛り上った腹の上の、みぞおち辺りで最後のとゞめを結んでいた。

下手に動く度に首がしまるのか、冷汗のじつとりと滲み出た顔が微かに両腕の間から覗いていて、それに長い黒髪が絡みに絡んで、まるで藻を辺りにぶちまけた様な按配だ。それに今迄この臨月近い腹で、逆さ吊りにされていたに違いない。とあつしが考えたのは、腕の蔓縄より倍も太かろうと思われる蔓縄で、青い血脉のムラ／＼と盛り上った、孕み女特有の腫れ気味の両脚を、しっかとしびれる程に強く縛つてあつて、その蔓縄の端が、燻んだ天井の梁を通つてだらりと垂れ下つていて、婆の手に握られてゐるからだ。

「どうだね、つゆ――。少しは身にこたえたかい。ほんとにお前は張情な嫁だよ。どうしても厭と云い張るなら、もう一度痛い目に逢わせるよ。さあ、ウンとお云い――」

婆の憎々しげな様子に引換え、絆纏の女は一言も云わず、冷たい眼で、シロリと孕み女を見下していやがる。事情はどうあろうともこいつら二人が／＼で、このつゆとか云う妊ごつた女を責め虐なんている事だけは確かだ。ムカ／＼してきたが、もう少し詳しく、話

の次第の分る迄覗いていてやれと、あつしは逸る心を押えて、尚もピタと破れ障子に眼をおっつけていた。

「フン、未だ責め足りないと見えて返事をしないよ。お銀、もう一度責めてやろうじゃないか——」

お銀と呼ばれた絆纏の女は、のろ／＼立上ると、婆の傍へ近づいて、二人して手許の太い蔓繩を引ッ張り始めやがった。

引くにつれて、つゆの両脚は宙に浮き上って、ズル／＼と体は蔓繩のかゝった梁の真下へと引曳られて行った。一尺二尺とたぐるにしたがつて、シリシリと腰が浮き、背が薄べりを離れ、滑り止めの為、上り口の柱に巻きつけられていった蔓繩が、五六巻きにもなると、つゆの体は、辛うじて合掌の手先が薄べりを這うだけで、両脚首が梁に届くと、その手先も四五寸薄べりを離れ、真逆さまに、ブラリと梁から吊り下っていた。突き出た腹は重みから、胸の辺り迄ふくらみを増し、ツン出た臍が下を向いて、漣の様に小刻みに激しく息づいていた。

婆の奴め、出刃を片手にもって、女の前に廻り刃先でチクリ／＼脇腹を小突き乍ら、

「いつそ、この大きい腹をズバリと出刃で立割って、胎の児を掴み出してやりたい位憎いよ。お前さえ、うんと云って、八作の商いに出た留守の間に、この家から姿を消してくれりや、八作は諦めてお銀と夫婦になり、何もかもうまく行くんだ。お前と云う邪魔者がいる許っかりに、あたしやお銀が、どれ程肩身の狭い思いをするかしれやしない。えゝい、憎い。憎い——、その腹が憎いよ。お銀、いゝからその出張った腹をウンとぶちのめしておやりよ——」

何とも、凄鬼婆だ——。お銀奴、相変らずのろ／＼と、無言の儘でいろりにさしてあった尺五寸もあるという鉄火箸を抜きとると、まるで太鼓でも叩く気で、突ン出て今にもはち切れそうな腹をパシリ／＼と殴りつけ始めた。

鬼婆は鬼婆で、わざといろりの楯をくすぶらせると、渋団扇でバタバタ／＼とつゆの顔の方へ煽いで、煙責めにしていやがる。

叩き疲れたのかお銀は、つゆの突き出た腹を押して前後にゆさぶり出した。ギイ／＼と蔓繩が梁できしんで、つゆの呻きが一入激しくなる。煙にむせて息も十分出来ず、こいつはさながらの生地獄だ。お銀は右手の火箸をぐつと前に差し出して、揺れ返ってくるつゆの飛び出した臍の辺りに、火箸の先は見るも無惨に深い凹みをつくって喰い込み、その都度女は魂消る様な悲鳴を洩らしている。あの張り切った腹に、火箸を勢よく差し出せば、きつとプスリと穴があくに違えねえ。

あつしはもう我慢しきれなくなってきた。余ッ程飛び出していつて、こつぽい眼に逢わしてくりようと思ったが、いやまて暫し、奴等の嫁いじめの原因をよく／＼確かめた上、二度と出来ねえ様にしてやろうと考えた。

あつしはこう見えても、芯からの悪党じゃねえのか。こんな哀れな女を眼の前に見ると、他人事乍ら救けてやられずには居られねえ厄介な性分なんだ。己れ自身散々悪い事をする癖、他人の悪業振りをして見過せねえ妙なたちなんだ。

話の様子じゃ、八作と云う女の亭主は不在らしいが、八作の手前まさかばらしもすまいだろう。

眼を吊り上らせたつゆは、呻く元氣も早や失せて、時々ピクリ／＼と腹がけいれんしていた。この儘あと半刻も続けば、恐らく女の命はないだろうよ。

「おッ母さん、もうこれ位でいゝかえ——」

始めてものを云ったお銀が、呑気そうな声を婆にかけた。

「おゝ、大分こたえた様子じゃ、おろしてやるとするか——」

蔓繩が柱からとかれて、つゆの体はズル／＼とその場に崩れ落ちどさりと打倒れた儘動かなかった。あつしはヒヤリとしたぜ。しか

し、
「云う事がきけるかえ。それなら、縄を解いてやってもいいんだよ——」
つゆが微かにうなずいた様子だったので、あつしは未だ脉がある
とホッとした。

両腕の解かれた跡が、まるで織物の様に、白い肌にくっきりと赤い縞をつけていたよ。

「よし、それじゃ八作の帰る迄に、こゝから姿を消すんだよ。いいかい」

「おッ母さん、堪忍して——。外の事なら何でも聞きますから……」

「おや、これ程云っても分らないのかい。えゝい、腹の立つ」

鬼婆の奴め、いきなりつゆの黒髪を手に巻きつけると、ズル／＼と引曳って行って、土間へポンと蹴落しやがった。打ち所が悪かったらしい。ウーンとつゆは脇腹を押えてどうにも起き上れなかった。

「フン、そこで横になってたら、夜露が少しはシヤンとした考えを持たせてくれるよ。これなど敷いて、土間で寝るんだ。お前の様な畜生なみの女は土間で結構だよ」

荒庭をポンと一枚放り投げて、婆とお銀はムカムカ／＼した顔で奥へ這入って行った。

泣いているんだろう。つゆの肩が浪打って、微かな小聲で、

「あなた——。どうすればいいんです。あなた、早く帰って……」

全く無理もねえ。あつしの様な者の胸さえつまってくる哀れさだ。

よし、今の間に——と、あつしは透き間洩れ洩れ灯をたよりに、

日頃書き馴れねえ、コチ／＼の矢立の筆をとり出して、金釘流の我乍ら下手糞な字で、はな紙に書き終り、石に巻きつけてポンと障子の破れから投げ込んだ。

音に気付いたつゆはハツとして、恐る／＼そいつをとり上げた。

『きつとたすけてしやわせにしてやる』

くらまのお天狗

つゆはギョツとして、障子戸の方を振り返り、それから慌てゝ先刻婆に投げられた庭を身に纏って、オド／＼した眼付で、その紙をそつと折り畳んで押し戴くや、やり場に困った挙句、暫らくためらった末、紙をくる／＼と丸めて、そつと腰巻の間へ挟んだ。

一先ずはこれでよしと、この家からちよいと離れた平地で、簾蚊にさ／＼れた野宿の一夜を明し、眼が醒めて見りや何の一軒家どころか交番もねえ、あちこちにパラ／＼と人家が立ち並んでいた。

灯りの洩れていたのが、フトした縁で、この家の出来事を見き／＼したのも、きつと鞍馬の天狗の救けてやれとの御託宣に違えねえ。小川の流れて流水ちようすいを使つてさっぱりしたあつしは、悪夢の様な昨夜の出来事を、もう一度と／＼胸に思い浮べて見た。

こいつは先ず事情を知つてからの事と、旅人を装おつて、婆あの家から小一町許りも離れた隣家の軒先を借りて、持参の焼いた握飯をつかつたあと、八作の知合という体で、あつしはそれとなく何気ない様子で、例の一件を聞き出したが、兼々婆の悪業を腹に据えかねていたのか、木櫓の甚兵衛親爺は、まるで聞手を待ち兼ねていた様にすつかりと話してくれた。

八作も、死んだ親爺の平作と云うのも親代々の針売り稼業。八作の産みの母が死んだ後、男やもめに堪えかねて、日吉村の方からお兼と云う今のあの婆を後添に貰った。八作が十四才の時だったそう。お兼にや連れ子があつたが、十七才の時、京の鳥丸の丁字屋に女中奉公に出て、そこで手代と良い仲になって手に手をとって出奔し、宇治のほとりで同棲していた。この女がお銀と云う。口数の少なえあの冷酷な女だ。親爺の平作が、流行病いで死ぬ一年程前に、八作は針の行商で馴染になった。浅草辺りの去る大家の下女中で、気立てのいいつゆを、大家の旦那の世話で晴れて嫁に迎えて、何云う事なく暮していたと云うことだが……。

後添のお兼にも気を配って八作は申し分のない、男だったが、お兼の娘のお銀が、生来の尻軽女の淫奔さから、愛想を尽かされて離縁同様で出戻って来た時から、不幸が始まった。

浮気っぽいお銀は、つゆの手前も憚らず、しきりに八作に色目を使い、触れなば落ちん風情を見せて誘い込もうとした。浅はかな親心で、お兼はお銀を八作にめ合せたくなかった。そうなるにつゆは事々に邪魔者扱いで、八作の居る間は虫も殺さぬ母親振りが、月のうち二十日は行商に出る八作の不在の間は、日がな間がな、暇さえあれば、親娘二人が、りで虐めて追い出そうという算段で、何かにつけて難癖つけての責折檻も、近頃じやすつかり嵩じて、鴉のなかなぬ日はあっても、つゆを責めぬ日はないと云う程の非道い仕打ちだった。

親娘に脅かされてか、つゆは八作にその事も打明けず甘んじて責められているのも、莫迦くしいが、ひどつは八作のいる間は、掌を返した様なお兼の優しさに、八作は夢にも気付かぬ様子らしい話だ。

これ程の事を知っていつ乍ら、甚兵衛始め近在の者は八作にその事を話しちゃいねえ。と云うのは、亭主の平作の死後、お兼の許に度々忍んでくる権六と云う奴が、恐ろしく悪い奴で、稼業の雲助仲間でも爪弾き者の悪たれで、あわよくば初々しいつゆをものにしたいたの野心を持っている厭な野郎だ。そんなわけで、八作に告げ口をしようものなら、無茶に暴れ込んで行くものだから、気の毒と知りつゝも誰も相手にせず、そつと眺めているってえ有様なんだ。

甚兵衛の話の様子じや、今日明日あたり八作が帰ってくるらしい。それ迄に何とか片をつけ様と、それでお兼親娘は焦っているらしいと、あつしはどうやらガンが擱めた。

あつしは柄にもねえ義憤に燃えた。こうこうと、懲しめの企り事を甚兵衛に打明けたところ、すっかり喜んでのって来た。

あつしの頼み通り、早速親爺は八作を探しに行ってくれる事になった。

日のあるうちに鞍馬までとって帰えし、ちよいとした装束やタネを仕込んで、戻って来たあつしは、親爺の家で夜のくるのを待ちかねていた。

鞍馬の方から、微かに暮六ツの鐘が響いてくるのを聞き流して、あつしは再び、お兼親娘の様子を窺いに忍んで行った。

どうせ又、つゆはあの臨月の腹を抱えて、可哀そうに虐め尽されているんだろうと、昨夜の障子穴から覗くと、てっきり責折檻が始まっていやがる。

それに今夜は、あの権六の奴迄が揃っていて、役者に不足はねえ。貧乏徳利から口移しにドブロクをがぶくあふり乍ら、赤鬼の様な面で、ピシヤく毛脛を叩いて悦に入ってやがる。

つゆはと見ると、今しもお兼に小突かれるようにして、後手に縛られた湯文字一枚の姿で、土間のかまちの柱の処へ突っ立たされ、柱ごと例の太い蔓縄でぐるぐると、首の廻りから一寸刻みに犇々と柱を背に締めつけられて、盛り上った腹も、情容赦もなくじいぐ締め上げてゆくから、突ん出た腹が蛹そっくりに段々にくびれて、腹の真中のくびれから臍だけがプツリと飛び出して、とんでもねえむごい仕打ちをおっ始めていやがる。今に見ていると、あつしは八作の戻ってくる迄の間の辛抱と、ぐつと我慢して、尚も様子を窺っていた。

土間へ降りたお兼は、
「蒼蠅い声を立てるといけないから、ぼろ布を口へ詰め込んでやろうか——」

「いや、待て、俺は面白え事を思いついたんだ。先刻飯をくつた跡の、洗物の流水が、その桶に溜っているだろう。そいつを杓ごとこゝへ持ってこい」

「一体お前さん、そんなものをどうするのさ」

「フフ、こいつには飯を喰わせていねえんで餓じかろうから、ちつとは喰物の味のかけらなとする、この洗い物の流し水をのませてやるのさ——」

「いゝ考えだよ、ホラよ」

桶の水はどんよりと薄黒く濁って、プーンと厭な匂いのしていそうなものだった。権六の奴はそれを杓に汲み上げると、

「お兼、そいつの口をアーンと大きくあかせろ——」

貧乏徳利を片手に提げた儘、よろ／＼つゆに近附くと、お兼の爲鉄火箸で無理矢理こじあけられた女の口の中へ、その濁り水をドロドロと流し込んだものだ。

「どうだ、美味かろう。だがな、おいちに靡けばこんなものは喰わせねえぜ。腹の子はこの俺が何とか始末してやるから面白可笑しく暮して行く気はねえか——」

必死につゆは首を振っていた。

「そうかい。どうしてもいやとぬかすなら、もう一杯——ほれどうだ。」

孕んでいる時にや、それでなくてさえも用が近くなると云う話だその上こんなくさり水を何杯となく吞まされちやたまったものじゃねえ。

悲鳴にならぬ悲鳴をあげて、むせび乍らつゆはポロ／＼と涙を流していたよ。

くびられた腹が入苦しいらしく、肩でつく息が余ンまり無惨すぎでじっと見ちやいらねえ。

「か、堪忍して……。」

腰をよじらせてつゆは悶えていた。けれどこいつは権六の思う壺だ。

「何、未だ欲しいか。よし／＼、お代りはたんとあるぜ。ほらよ

——

かれこれ七八杯、一升近くも吞ませただろう。グル／＼とつゆの腹の辺りで、汚水のかけ巡る音が、あっしの耳にも判つきるときとれた。

二人の女は柱の蔓縄をとくと、つゆを後手の儘引曳る様にして障子の方へと歩んで来た。慌ててあっしが木蔭に身をかくした時、ガタピシと立てつけの悪い裏障子をあけて、つゆを井戸端へ引きずると、ドンと蹴ころばしておいて、お兼婆は井戸水を汲んではザブリ、汲んではザブリと容赦なく頭から水をぶっかけていた。

ずぶ濡れのつゆをその儘再び土間迄引立てて、立ち姿の儘両脚を縛ると、突き出た腹に二巻三巻、太いゴツ／＼した棕櫚縄を巻きつけて引きしぼり、ウーッと思を引いて蒼白になったのを、せせら笑いして、権六は棕櫚縄を土間の棟木にボイと掛け廻した。

腹にかかった太縄一本でグイ／＼吊り上げられたつゆの眼は苦しきで白くカッと吊り上り、縄目に窪んだ腹は大きく盛り上って、ブラ／＼宙に水平に浮いて見えた。

ヒヨイと背を叩かれて、ギョッと振り返ると、甚兵衛親爺が、旅装束の儘の八作と共に後ろに立っていた。

百聞は一見に如かずの諺通り、八作は己れの眼で、恋女房の虐待される様をはっきり見たらしく、怒りに形相は変り、眼は吊り上って睨まで裂けているかに見えた。

すぐにも飛び込もうとする八作を押し止め、あっしはかねての手筈通り、今日支度しておいた、天狗面と黒装束を二人して手早く纏った。

八作は隠し技で普段は減多に使わぬという含み針をして、小刻みに体をふるわしていた。

甚兵衛の吹きならす、陰に籠ったほら貝の音色が夜空に響き渡って、天狗出現の気分は申し分ねえ。

煙筒に火繩の火は燃え移ってパツと白煙が一面に立籠る中をあつしはガラリと障子をあけて、芸居気たっぷりにニューウと天狗面を突ん出して踏み込んでやった。

ギヤーツと腰を抜かしたお兼母娘。ウエーツと逃腰にへた／＼と座り込んだ権六目掛けて、八作の恨みこもった含み針は、蠅つと白く光って見事に奴の一眼又一眼に突きささっていた。ワツと両眼を抱えて倒れた権六を始め、腰抜けのお兼母娘を、投げ捨ててあつた蔓縄で縛り上げるには手間暇もかからねえ。

「われは鞍馬のお松天狗なるぞ——。その方等の数々の非道の仕打を懲しめの為、下山して参ったのじゃ」

三人の奴等は顔色もなく、ふるえ上って、齒をカチ／＼いわせていやがる。

あつしは八作に耳打して、先ずつゆの体を降させ、ぐったりとなつてゐる女を介抱させた。いとしげにつゆを横抱きにして、八作は一先ず闇に消えた。甚兵衛の家でゆっくり心身の痛手を癒す段取になつてゐる。

さて、いよいよあつしの独断場だ。昨夜来の積りもつた憎しみが、今こそこいつ等に思いきりぶちまけてやる気だ。随分と腹の虫を押えて辛抱したからな。こんな奴等はどんなに虐め、非道い目にあわせたって、あわせ過ぎる氣遣いはねえから氣が楽だ。

あつしは先ず権六の料理にかかった。ばらしちまつたって、反つて喜ばれる様な悪い奴だが、命を奪う程の事もねえ。それにこいつは恐らく盲目になる事だろうから——。

片輪になつて生きて行きや、余計に辛さも身にしみようって云うものさ。

権六を身動きの出来ねえ様、先刻つゆが縛られていた柱に、雁字搦目に縛りつけると丸太ん棒でところ嫌わず二十ばかり殴りつけてやった。少し荒療治だが、暴れン坊の奴がこれで温馴しくなりや人

助けだと思つてやった迄の事さ。奴はまるで狼の様な声をはり上げて吠え立てていたが誰一人来つこねえ。

半死半生の奴を引曳つて表に連れ出し、溝に二三度顔をつつこませて、鰓腹くさい水をのませてやつてつゆの仇をとり、井桁にしっかりとしばりつけて

「このものに三日、さわるべからず。お松天狗」と、胸倉に紙片れをぶらさげておいた。

次はお兼母娘だ——。こいつが一番の張本人だから、少々罰を重くしてやらなくちやならねえ。

婆といつても五十過ぎの、まだ多少とも女ツ氣の残つてゐるのいいことに、襦袢一枚裸にひんむいておいて、年にしてはポツテリした尻を散々ぶん殴つてから、七首でぞりぞりと髪の手を剃り落して坊主にし、後手に縛つた儘で引曳つてはばかりへと連れて来た。山深い田舎の事だから、厠とは名許りの、蕘囲いの中に大樽を据えつけて、その上に厚板を二枚かけ渡しただけのしろものだ。

這いつくばつて、頭を地べたにこすりつけて泣きわめくが今更許せねえ。

板の上に追い上げて、ぐいと後手の縄をひっ張ると、ボシヤリと樽の中へはまり込んだ。首をかけ渡した二枚の板で挟んで、首枷にして板を荒縄で縛り合せ、厚板の両側に重石をのせて動かねえ様に権六と同じ様にし権六と同じ様な文句を書いて、婆の剃り立てのいが栗にはりつけ、一生くさみの脱けぬ糞責めにしておいて、あつしは再び中へとつて帰した。

最後にお銀の料理だが、あの冷酷な女が、流石に涙を流して額をすりつけやがる。

後手に縛られた胸も露わに、ぽちちやりした肌をのぞかせ、裾の乱れも何のその、赤い蹴出しをたくりあげて、泣き続ける女の姿は全くのみのものだったぜ。

あつしは余つ程こいつだけは勘弁してやろうと思ったが、矢つ張りこの天狗鼻のやつが承知しねえ。それから、散々この淫奔女を責めさいなんてやったが、これも役得の一つというものだろう。

その儘夜道をかけて京へと一目散に辿った。結局はあのお銀が一番非道い目にあつたのかあわなかつたのか、こいつは兄貴の好きな様に考えて貰うとしておこうか。

三日程して八作が木屋町の宿にあつしを訪ねて来た。あの夜、つゆは流産をしたって事だ、あれだけ虐められりや、それも無理はね

私のイメージ——並 原 新 一

『代理部便り』の夢

△今回皆様方の御多数の希望により左記の品の御注文に応じます▽

男子の部

一、紳子用ズロース（白、ピンク）
一、男子遺精予防バンド
特に中学生、高校生、独身男子に推薦されるバンド、内側は総ゴム、女性月経バンドとの兼用も可能（厚生省推せん）

一、男子運動用ブルマース（黒）

如何なる激動にも絶対破れる心配のない特製品、裾口はゴムテ

（色模様）

一、大人用おむつカバー（色模様）

（イ）内側はアメ色の総ゴム張り、

外側はフランネルの優美なスタイル。

（ロ）ビニール製の簡便品もあり、特に仕事に多忙の方、受験期の学生におすすり出来る（労働省、文部省共同推せん）

え。勿々に貴船を引払って知らぬ他国で二人っきりで暮すって話をしていたがそれもよからう。八作の奴、悲しそうな嬉しそうなくしや／＼した顔で、何度も礼を云って帰ったつけ。

今頃はしあわせに暮している事だろうよ。

京も見あきて浪速へと足を延ばし、行く先々の失敗りは例の如くで、相も変らぬ一騒動おっ始める話は又この次にするとうしようぜ。

では、あばよ。

（この項終り）

（ロ）ビニール製の簡便品もあり、特に仕事に多忙の方、受験期の学生におすすり出来る（労働省、文部省共同推せん）

一、特製男子用ズロース
裾口レース附、リボン附、各種スタイルを気になさる方には、レース附ブリーフもととりそろえています。（美術協会認定）

一、御婦人用暴行予防ズロース
総なめし革製、裾口は金属の特

殊錠前附、尚長時間の御使用の方

女子の部

一、御婦人用暴行予防ズロース

総なめし革製、裾口は金属の特殊錠前附、尚長時間の御使用の方

の為、内側にアメ色の総ゴム張りのおむつカバー兼用品もあり、（防衛省推せん）

一、御婦人用金属性ブリーフ

ズロース、貞操帯としての御使用に適す。（風紀協会推せん）

一、御婦人用褌（白、黒）

（相撲連盟許可済）

【編集部】並原氏の御投稿には男子用ブルマース、金属性ブリーフ

レース附ブリーフ、大人用おむつカバー、月経、夢精兼用バンド、

リボン附ズロース、レース附ズロース、ズロース各種の挿画が

ついていましたが、都合により割愛いたしました。

散^{さん} 女^{にょ}
華^げ 人^{にん}

悲^ひ
風^{ふう}
磨^{すり}
上^{がみ}
原^{はら}

瀬川 泰子
北原 純子・画

富田将監は、全軍の先頭に立って猛進し、たちまち敵の第一、二陣を突破し、猪苗代の一族太郎丸掃部盛次を追って馬上に組み合うや、一時にドツと落馬した。盛次が上になり、将監の兜をグイと捻じむけた。鎧通しに手がかかる——その一瞬、将監の家臣七宮奎之助が、駆け寄りざまに馬上から盛次にとびかかった。その隙に、将監は半身を起こしていた。奎之助の右手が、組みしいた盛次の咽喉の下を横に深く動いたと思った時には、すでに盛次の首は一文字に搔かれていた。血糊にぬれた奎之助の手の中で、鎧通しの刃先がキラリと光った。将監はふたたび馬上にまたがると、まっしぐらに敵陣に走りこんで行った。

高森山から見下していた義広は、伊達勢の散兵陣が幅広く戦野を圧して来る有様に業を煮やした。中央を突破して蹴散らせば、物の数ではないという気がしきりにする。しかしその時、敵の鉄砲組が東北の方角から一齊に火蓋を切った。濛々たる煙の中から火花が噴

いた。味方は、二段三段構えのその鉄砲組の前に、もろくも撃ち倒され釘づけにされた。実はそのころ、芦名勢の注意を前線にひき寄せた伊達勢は、第三、第四の両陣を巧みに右廻させ、磐梯山麓をめぐる敵の背後に移動させていたのである。

伊達成実、白石若狭の両将は、突然旗を七森にたて、双声を合わせて芦名の陣をかき乱した。義広は虚をつかれて進退に窮し、ひと思いに政宗の本陣に斬りこみをかけるよりほかはないと、咄嗟に心を決めた。

手兵四百余人は、義広を守りながら八ヶ森に突進した。鉄砲組はこの一団を目がけて乱射をあびせかけた。武器の点で、芦名勢は格段の見劣りがあった。身を隠す術のない平坦地に、馬を駆って迫って来る姿は、鉄砲組にとっては、恰好の標的であった。芦名勢は次第に押し退けられ、遂に磨上原の北方に移って行った。この時、富田将監麾下の兵は二手に押し分けられ、一手は、義広の本隊とともに

に北へ北へと動いていた。荒井二郎三郎実積は、この流れの中にいた。下荒井の館を出た四十騎は、すでに半数に減っていた。

このころから、今までの西風は急に東風に変じ、風速が一段と加わった。こうなれば、芦名勢は、風上に向かって隊列を布く形となった。砂塵が物凄い勢いで舞い上がり、それが風に乘って吹きつけた。やみくもの乱戦の中を、汗と砂にまみれながらシリシリと崩れたった退き潮はもはや盛り返すべき切っかけを失っていた。

その一面の砂塵の中から一発の流れ弾が実積の胸板を貫いた。馬が後脚で棒立ちになった時には、実積はすでに地上に叩きつけられていた。誰が斃れ、傷ついたのか、見きわめもつかぬ風塵の急襲であった。

千浪、操、妙、鈴の四人は、折角この戦場にたどり着いていながら、遂に実積にめぐり逢うことができなかったのである。敗色濃い味方の退潮にまきこまれて、心ならずも西へ西へと流されていた。鈴は、右手に眉尖刀なまきりかいこんで馬にしがみついているのが精一杯であった。疲労は刻々に加わっていた。千浪が馬を寄せて、大声にはげますと、唇をグツと結んで首を立てなおした。

義広は、最後の勇をふるって敵中に駆け向かうと焦った。

「殿。すでに勝敗の決は見えております。このまま突っこめば犬死は必定。隊勢を建てなおして、又の機会を待たれるが上策かと存じます。なにとぞお引き下さいますよう。なにとぞ」

義広は歯ぎしりした。風はいよいよ加わって来る。追いたてられるみじめさが五体を貫いた。

「殿。御無念のほどお察しいたします……が、このところは……」

佐瀬種常は、必死の諫言をこころみてひかなかった。

義広は馬首をめぐらした。南へ下って戸ノ口から日橋川を渡り、一路黒川の城へ退くほかはない。隊列はすでに四散し、身辺を守る

ものわずかに三十騎あまり。咫尺を弁ぜぬ濛塵の中で、急ぎ軍陣を糾合することは不可能であった。

義広が退いて行くのを見届けると、佐瀬種常は、一子常雄をふり返って、ふたたび敵中に斬って入った。常雄は、大声に名告りをあげながら、その後を追った。佐瀬常雄は、実は富田将監の弟、荒井二郎三郎実積には兄にあたる。大寺城（五百石）の守将で時に十六歳であった。砂塵は、たちまち二人の姿を隠してしまった。

義広を中にして退陣して行った一団は、日橋川まで来て呆然となった。新橋はすでに、叛軍猪苗代勢の手によって焼き落されていたのである。焼け残った橋桁が、くろぐろと幅広い流れの中にとり残されていた。一団は、思いなおして、日橋川の北岸を上流に向かつて走った。金川まで落ちのびると、堂島橋を一気に押し渡り、島田六町原を経て黒川への道を急いだ。義広は、はるかに黒川城の天主を仰いだ時、われ知らず無念の涙を落した。

だが一方、戦場に放置された芦名の軍兵は、まだ地獄図絵の中をのた打ち廻っていたのである。武器の差と戦略の優位の前に、決定的な打撃を受けた各隊は、散り散りになり、やがて期せずして、日橋川への退路に雲集して来た。もはや、われ勝ちに先を争って、黒川城下への遁入を考えるほか何物もなかった。顔色は一樣にどす黒く変り、汗の筋が頬を伝っていた。布で無雑作に巻いた手足の傷口から、赤黒い血がにじみ出して、槍にとりすがってよろめき歩く怪我人は、たちまち追いぬかれ、突きのけられた。その後、追手の一群が喊声をあげて迫った。追いつめられた敗走兵が、日橋河畔で仰天したことは、前の義広の比ではなかった。方向を転じようにもその余裕はすでに失われている。一步でも黒川の城下へ近づきたい——その思いだけが彼等の胸をひたした。

槍を捨て、太刀をかなぐり捨て、少しでも身軽になると、そのまゝ流れに飛びこんだのである。極度の疲労と、具足の重さは、たち

まち彼等の自由を奪ってしまった。もがき苦しみながら、数限りない軍兵が押し流されて行った。しかも、それを目の前に見ながら、あとからあとからと飛びこんだ。

全上城主（三万八千石）全上遠江守盛備は、生き残りの手兵百五十騎をひき連れて、急追する敵の側面に向かって、最後の奇襲をかけようとしていた。

「あッ。遠江守様。佐瀬平八郎様家人伴九郎めにございます。殿様を見失い、将監様の本隊をたずねあぐんで困っております。殿様のお行方ご存じではございますまいか」

立木のかげから全上盛備を呼びとめた者がある。

「平八郎殿の輩下と申すか。無念ながら、すでに討死とお見受け申したぞ」

「げッ。討死なされてございますか。して本隊は」

「いずことも行方は知れぬ。捜したとて詮なきことだ。退け。今のうちなら、なんとか落ちのびられよう。平八郎殿忠死の模様を、御遺族に伝えるのも忠義の道だ。退け」

「して、遠江守様には……」

「せめてひと泡ふかせて、伊達勢への怨念を晴らそうとの所存。磨上原に取って返すわ」

「されば、なにとぞ御陣にお加わえなされて下さいませ。賤しき身ながら武門の生まれ。主すでに討死あそばしたと聞くからは、おめおめ敵に後を見せては退けませぬ。お願いにございます」

盛備は、その思いつめた目の色を見ると、黙ってひと鞭あてて林の中に駆け入って行った。騎馬と徒歩の手兵が、一齊にその後に従った。伴九郎は、槍を小脇にかかえなおして、その隊列にまぎれこんだ。

伊達成実の南下して来る精兵に対して、林の中から突っかけたのは、それから間もなくであった。虚をつかれた伊達勢は、一時ガラ

ガラと崩れたったが、伏兵が手薄と見てとるや、隊勢をたてなおして乱撃に出た。

樹かげから躍り出した伴九郎は、黒絲絨の騎馬武者に向かって、思いきり槍を突き出した。体が宙に浮いて、タタタッと斜に流れた時、伴九郎の手には、穂先を斬り取られた柄だけが残っていた。馬上の侍大将は脾腹をおさえたままドッと落ちた。槍先は見事に敵を刺し貫いていたのである。伴九郎は、踏みとどまると、太刀を引きぬいて駆け寄り、馬乗りになるやザクッと首に斬りつけた。と同時に、伴九郎は背中から胸にかけて灼熱の痛みを感じた。体がグラツと揺れて、一度に力がぬけた。伴九郎は、二間柄の槍先に仕止められていた。伴九郎の斃した相手は、伊達勢一方の将、桑野甚五郎であった。伴九郎は、折り重なって息絶えた。

全上盛備は、伊達成実をもとめて敵中に割って入った。と、なにに驚いたか乗馬が急に棒立ちになった。手綱をグッとひきしめて体を支えた時、逆転したような大地の上に、十数本の槍襖がガツと自分に向かって突き進んで来るのを感じた。馬が前脚をおろした時、全上盛備の五体は、蜂の巣のように突き刺されていた——たそがれの陽の暈が、薄れて行く砂塵のむこうに、激戦の時の流れをにじませていた。

そのころ——千浪以下四人の女性たちは、敗走する味方の群衆とも離れ、一ノ沢から赤井田の方角に向かって西南の退路をとっていた。

一番弱っていた妙は、右の太股に流れ弾を受け、千浪の乗馬は前足を折って使い物にならなかった。千浪は、しばらく妙の馬に乗りかえて、妙を鞍先にしっかりと抱きかかえながら進んだが、馬上に高い姿勢をさらしている危険を考え、四人はすでに馬を捨てた。

杉林を出はざれると、一面の灌木林がつづいた。妙は、千浪と操に左右から支えられ、右腕を斬りつけられた鈴は、血に染んだ布で

傷ついた腕を吊りながら、荒い息を吐き吐きその後についていた。重い眉尖刀は、いつの間にか彼女たちの手にはない。五、六間行つては身を伏せ、また立ちあがってはよろよろと進んだ。咽喉はカラカラにかわいて、砂埃が胸一杯につまっているような気がした。

赤井田の部落を南に見て、全川を目指そうとするところで、十軒あまりのひっそりとした小聚落を認めると、四人は、矢も楯もたまたぬ思いで、そのうちの一軒に飛びこんだ。戸は開け放しになっていて、人のけはいはなかった。藁敷きの平土間に妙を横たえると、千浪は薄暗い台所に走った。水甕の中にたたえられていた水を捜しあてた時、千浪は、悲鳴のような叫びをあげた。

壺の中には、ソバ粉が一杯たくわえられてもいた。まる一日の絶食が、この時はげいしい空腹感となつて襲つて来た。

千浪と操は、かいがいしく湯をわかし、塩味のソバガキを作ったが、太股の傷に苦しむ妙は、二口三口で、もう食欲がなかった。

カツツカツツという音に、四人はギョツと身構えたが、それは裏口から餌をあさりに迷いこんで来た一羽の鶏であった。人間の血みどろの戦をよそに、のんびりと土間の米粒をついばみながら歩き廻る鶏の姿を見ていると、なんとも云えぬさびしさとみじめさが、急にこみあげて来た。

折角、下荒井の館をとび出しながら、遂に平八郎君にめぐり逢うことのできなかつた不運が、あきらめ切れぬ思いでよどんでいる。戦のはなばなしは遠のいて、落人のあわれさだけが色濃く浮かびあがっていた。じつと耳をすますと、果てしない静寂の底にとり残されているような気がする。しかし、その静けさの周辺を、はるかなぎわめきが、次第に押しわけて来るような隠微の動きが感じられた。落人の被圧迫感が、それを逸早く嗅ぎとったのかもしれない。たとい芦名の軍陣が、磨上原の一戦に敗退しても、このまま伊達の軍門に降るとは思われなかつた。必ず陣容を建てなおして、雪辱

の一大決戦が展開されるであろう。平八郎君は、その時のために、一時の無念を忍んで、黒川か下荒井に退かれたにちがいない——とすれば、一刻も早くお目通りして、お慰めもしたい、お励ましも申したい。あのいたいいけな平八郎君は、今こそ妾たちの心からの奉仕を求め望んでおられるかもしれぬ——早くお逢い申したい——早く……早く……と、せき立てられるような気がしきりにした。

妙も鈴も、傷の痛みに弱りが目立って来た。しかし、なんとしても、日橋川を越えなければならぬ。そこまでたどり着けば、先はなんとでも開けよう。

「妙さま。あと一息でございますぞ。さ、肩におつかまりあそばして。殿様の御前に参じましょう。お気をたしかに……。さ、早う」千浪は、操をうながして妙を抱きあげた。妙と鈴は、ここで胡祿と弓を捨てた。身を守る武器が一つ一つ減って行くことは、いかにも心細かつたが、負傷の身が、もはやそれに耐えなかつた。

日はすでに傾いていた。風がザワザワと灌木の林を吹き鳴らし、夏草の茂みが膝を没した。四人は、寄りそいながら、よろめき進んだ。立ちどまっては、千浪が竹筒の水を妙にふくませた。

濃い暮色の中に、ささやかな板葺き小屋を見つけた時、もうこれ以上一氣に歩きつづけることは無理だと思った。妙の重みが、次第に強く二人の肩にかかっていたからである。永く無人であつたと見えるその小屋は、床も朽ちかけていた。敷くべき藁束さえ見あたらなかつた。

「しばらく、ここで息を入れましょう、全川までは、もはや幾らもないはず。闇にまぎれて川越えするが上策かもしれませぬ。いかに足早の伊達勢でも、今宵のうちに全川あたりまで出張ることは、よもありますまい。あと少しの辛抱でございます」

千浪は、疲れを見せまいとして声を上げました。それから半刻近い時間がすぎた。小屋の北と南を、疾風のように



駆けて行く隊列があつた。おのおの五十騎あまり——その物音に、ハッと胸をつかれて、破れ戸の隙間からうかがつた目に、伊達勢とおぼしい旗差物が見えた。二、三丁のへだたりで、それは鮮やかに風にはためいていた。

「千浪さま」

北戸からうかがっていた操が、振り返りざまに叫んだ。妙も、その声に思わず半身を起こした。

「覚悟の時が参りましたね。袋の鼠です。妙さまも、鈴さまも、さぞ御難儀のこととでございましたらう。お殿様にもめぐり逢えず、妾どもの思いが通じなかったことが、なによりの心残りではございませうが、潔う果てた暁には、必ずともに四人力を合せて、お殿様の御武運を守護し奉りましょう。まことの姉妹のように睦み合うと思ひ出に、うつくしう同じ枕に果てましょうぞ」

妙がワッと泣き伏した。

南側の一隊は全川に、北側の一隊は三橋城を目指しているにちがいないと思われた。三人の目が、千浪に注がれた。

「望みはございます。たかが五十騎あまり、手薄の隙間を川越えできぬはずはございませぬ。夜を待ちましょう。氣を落してはなりませぬ」

四人は、ひっそりとひとかたまりに寄りそつた。

しかし、とつぷり日が暮れて風が落ちたところ、改めて西南の方を見渡した時、脱出の望みは断たれていた。落合の柵のあたりから、全川、三橋までの河畔一帯に、びっしりと篝火が燃えさかっていたのである。逃げおくれた芦名勢の退路を、完全に遮断しようとする最後のとどめにちがなかった。

まっ暗がりの中で、千浪は三人の手をさぐつた。

「苦しい道中を無理強いし、お許しなされませ、妙さま」

「千浪さま」

ひとしきり、すすり泣きがつづいた。

「数もちょうど四人。刺し違えて果てましょう」

「うれしゅうございます。一つお部屋に床をならべて愛しんで下された方々と、お殿様の御ため相果てるは本望でございます」

「寄りそうて死にましょうよ。いつまでも離れぬように」

「千浪さま。妾は刺せませぬ。どなた様の胸も刺せませぬ。……」

じかにお肌にふれたなら、心がきつと鈍ります。刺せませぬ」

操が、身もたえするように云った。

「ひと刺しに刺し通して下さいませ、操さま。お願いでございます」
妙がにじり寄った。

「刺せませぬ。死ぬのが恐ろしいのではない。妙さまのお肌が刺せませぬ」

「ああ……」

と、妙は身を投げかけた。

「ならば操さま、桜根の簇で射通して下さいませ。弓矢の刺し違いには、一人は坐り、一人は立って構えるとか聞き及んでおります。

さいわい妾は、脚の痛みで立てませぬ。もはや力も弱りはてました。弓射る力がまだあるうちに……操さま」

「でも、この暗がりの中では、たがいの顔さえあやめも分かず、まして弓射ることなど、かないませぬに……」

深いため息がもれた。その時、千浪が声をはずませて云った。

「ほんに。今はのきわに、とっくり顔見合うて、心ゆくまでうつくしゆう果てましょうぞ。妾どもの屍を、もしや敵方に見つけられ、会津勢は女子まで戦に駆りたてたなどと、あらぬ噂をたてられるも心外。いっそのことに、小屋もろとも焼きはらい、跡形も無う失せましょう。炎の明かりで顔も見えます。弓射る明かりに事欠きませぬ」

ぬ」

「千浪さまのようお氣がつかれて……うれしゅうございます。妙は、うれしゅうございます。さ、一時も早う……」

「操さま。お二人に手伝うて、腹巻（具足の胴）をはずしてあげて下されませ。妾は、藁屑なりと捜しましょうほどに」

千浪は、闇の中を土間のほうに足ずりしながら降りて行った。

北側の高窓の下からポツと燃えあがったわずかな火種が、枯れ朽ちた板を這いのぼったのは、それから間もなくであった。

腹巻をはずした四人の女性が、次第に明かるさを増す炎を受けて床の上に座をしめていた。

「千浪さま。もし射損じました時には、操さまの御介錯お願いいたします」

妙が云った。

「見届けます。四人の命は、お殿様の御ため磨上原の戦場で討死したも同然。潔うお側に参りましょう。死出のたしなみ、さ、これにて顔のよごれを落しなさい」

千浪は、竹筒の水を傾け、おのおのの布切れを湿してやった。汗と砂埃に色あせていた顔の白さが、くっきりと浮かびあがり、それが炎の紅さに映えた。残りの水を一口ずつ呑み回すと、四人は堅く手を握りあった。

「千浪さま、鈴さま。ひと足お先に」

操は、弓と桜根の矢を取りあげると立ちあがった。

「妙さま、しかと心の臓をねらいましょうよ」

操はそう云いぎま、鎧下（鎧を着用する際、その下に着こむ上衣）の胸をくつろげて左手をぬき、左半身の肌ぬぎになった。グツと、盛りあがった乳房が、まぶしいばかりの緊張感を秘めてあらわになった。妙は、わけのわからぬ熱いものが、咽喉もとにこみあげて来るような気がした。操は、充分に左を押しひろげた。白い清らかな

肌に、炎の動きがメラメラと映った。妙も、右脚を崩して坐ったまま同じく左肌をぬいだ。二人の間に一間のへだたりがあった。

信じ愛しみ合った者同士が、死に向かい立って最後の裏切の情をふりしほるこの瞬間の姿を、千浪は、世にもうつくしいと感じた。

柔肌を射ぬく簇の無残さも、この場合はただ、「絶美」への昇華の切っ掛けにすぎない。それは、肌の奥深く突き立って、うかがい知れぬ肉体の神秘に食い入る異常なあこがれを宿しているのではあるまいか——千浪は、ふとそれを感じた。悲しみも、みじめさも、今この二人の上に翳ることはできない。凜としたもの、充実したもの一途なものが、二人の間を流れている——千浪は、そう思いしめながら、次の死の場面に、自分が果たさなければならぬ役目を、すでに感じ取っていた。右腕を斬りつけられた鈴が、立派に自分と刺し違えられるかどうかはわからない。鈴の死をうつくしくあらしめる介添え役を、自分がになわなければならぬだろう。三人の死を見届ける最後の役割が自分にはある……。

矢が弦にかけられた。ひきしぼられた。操は斜下を、妙は下から斜上をピタリと狙って弓の座がきまった。吹っ切れるような四つの目が、キラキラと光って、相手の乳房の下を見きわめた。鈴は、ハッ息を呑んだ。千浪の声が、

「ひい……ふう……」

と、低く尾をひいた次の刹那、弦音とともにブスンと肉を破る異様な音——
「ううッ」
という抑えた呻きが、同時にもれて、妙の体が左に崩れた。噴き出した血が、見る見る肌をぬらして、グンとのけ反った胸の真下にブツツリと食いこんだ矢筋を伝って、矢羽を真紅に染めた。低い呻きがかすかにしたが、妙はもう動かなかった。髪が、左肩から胸先に乱れかかった。

操は、「ううッ」と叫んだ時、弓を取り落すや、両手でグッと、突き立った矢を握りしめた。タタッとよろめき出たが、踏みとどまった。千浪と鈴、思わず腰を浮かした。

矢は狙いはずれて、左上腹に食いこんでいた。一文字に結んだ耐える操の唇から、ハッッと吐息が洩れた時、両手と腹にとび散った血糊の流れが、火炎にキラキラと光った。

「操さま……操さま」

鈴が、にじり寄って叫んだ。

「た、た……妙さま……」

操は、唇をふるわして妙の名を呼ぶと、そのまま崩折れるように坐った。脂汗が額ぎわににじんだ。千浪は、立て膝になって素早く操の体を横から支えた。

「操さま……介錯いたしますぞ」

千浪は、仰向いた操の目をちかちかと見つめて小さく叫んだ。操は、唇の端をかすかにふるわせながら、うなずいた。千浪は、操の左肩をグッと抱きしめると、鎧通しを逆手にとって左乳下に狙いをつけ、ひと思いにグサと突き刺した。同時に操の頭がガックリと千浪の胸に崩れかかって来た。

火は、板庇から軒下を這って、はや藁屋根に移り、バリバリと燃え落ちる音がはげしくなった。

「鈴さま。もはや火の手も間近。お二人の後を追うて、早う……」

「この右手が云うことをきかず、口惜しうございます」

「鈴さま。妾は、殿方の御自害を真似て、切腹いたしとうございませす。先ほどより、そのように心を決めました。お殿様の御武運を永く守護し奉る妾どもの念願、殿方にひけとらぬ雄心がのうては叶いますまい。鈴さまは、お腹を召されますか」

「……………」

「及ばずながら、介添えのお役は勤めます。女子の柔肌切りさいて

魂魄を殿の御もとへ天翔けらせましようぞ。鈴さま」

「はい……肝心なこの手の傷が恨めしく、存分の自害もできぬかと、暗い思いにひしがれておりました妾。千浪さまのお介添えあらば、同じ道にお伴をさせていただきとうございます」

「鈴さま。所詮はこの炎の中に消え行く身。誰ひとり妾どもの死にさまを見かける者でもないはず。女子の身として、あられもなき殿方の真似ごととなれど、双肌ぬいで存分の切腹つかまつりましよう」

「はい……あれ、もう火が、あのように近寄って……」

二人は、手を取りあつて南側の隅まで身を移すと、千浪は後に廻つて、手早く鈴の鎧下をぬがせ、傷口は、じかに布でしばつた。

鈴の後で、すっぽりと双肌ぬぎになった千浪は、左膝を立て、右膝を床につけて、鈴の背にぴったりと寄りそつた。グツと盛りあがつた乳房が、鈴の肌に抑えられた。千浪は、左手を前に廻しながら耳もとで、

「鈴さま」

と云つた。低いその声はずんでいた。

「鈴さま」

熱い、ときめく呼吸が、鈴の胸に妖しい情感を吹きこんだ。鈴の左の乳房が、千浪の左手の中に握られていた。

「最後は……ここを……鈴さま」

「はい」

鈴は、思わず千浪のその手の上にわが手を重ねた。肌と肌の触れ合いが、鈴の五体の中に、云いようのない昂ぶりを波打たせた。カッとならぬあがるような身ぶりであった。千浪の右手は、いつの間にか前に廻つて、鈴の袴紐をグーツと下に押しおろそうと、まさぐりはじめた。それに合わせて深く息を吸つた鈴は、素早く腹の上を動いてゆく千浪の手を感じた。袴紐は、臍下二寸あまりのところの下がつっていた。

千浪は、体を右に開いて、はじめて鈴の前面を斜横から見入った。なめらかな肌、ふつくらと張った豊かな腹、やや上向きに深くくぼんだ臍のあたり、そのすぐ上に張り出した乳房の丘——千浪の目は、憑かれたように光り、体じゅうの血が湧きたった。

「鈴さま……切りましようぞ。つづいてすぐに妾も切ります。最期は、時をたがえず一緒に」

千浪の右手に、中ほどを布で巻いた鎧通しが握られた。改めて腋下からさしこんだ左手が、鈴の腹を強く撫でた。二人の息づかいが次第に昂まつた。ひき入れられるような恍惚感が、鈴の全身をしびれさせた。女と生まれて、十七年の生涯にはじめて味わう得体の知れぬ昂ぶりであった。千浪は、一杯に廻した右手を鈴の左脇腹の前にとめた。二寸あまりあらわれている切尖の冷い光の中に、炎の影が生き物のように映った。

腹の上を強く滑っていた千浪の手がとまって、左脇腹に、五本の指と掌の力がグツと加わった。ドキンとするような瞬間であった。鈴は、その力をはね返すほどに力んだ。

「鈴さまッ」

「ううッ」

下腹に熱鉄の衝激が走った。鈴は突き立った鎧通しをハッと見下すと、思わず左手を添えた。千浪は、その鈴の手に押されるように一気に臍下まで真一文字。

「ううッ、うッ」

血が、袴を染めた。臍下から、斜右に切り上げた切尖は、八分の深さに一尺あまり搔きさばいていた。

「ううッ……ハッ……ハッ」

と、鈴は肩であえいだ。

鎧通しを抜きとるやいなや、千浪は、左腕に鈴の肩を抱きささえながら、斜前ににじり出た。

「鈴さま。さゝご覧を。千浪は切りますぞ。……ここを……ここを」

両膝をやや開いた中腰のまま、臍下一寸の線を、腹一杯に広くグーッと掻き廻した。ほとんど一瞬の早業であった。だが次いで抜きとった切尖を、素早く臍の真下、袴紐の奥に突き立てると、グイと切り上げた。切尖は、横一文字の線でとまった。下腹一杯に血がダラダラと流れた。

「切りました。……ご覧を……二人とも見事に切れましたぞ。……ううッ、う、うッ……鈴さま。さゝあなた様の鎧通しを、左手にお持ちなされ。早う」

鈴は、切り口の苦痛にたえて千浪にささえられながら、眼前五寸の近さで、切り裂かれて行く腹を見つめたのである。苦痛を越えて、全身を駆けめぐらさねばならないものが打った。その烈しい情感は、下腹の奥の奥の、果てしもない深いところから起こったような気がした。

「お見事に……千浪さま」

腰を落した千浪は、鈴の膝の間ににじり寄り、鎧通しを握りしめた鈴の手に左手を握り添えながら、その切尖をおのれの臍窩の前に導いた。



「鈴さま。ご一緒に、ここを刺し通して……存分の腹切りなしおえた上は、胸を貫いて……同じ枕に」

「は……はい」

乳房と乳房の触れあう近さ——臍の奥ふかくグサと突き通した。

「あ、あッ」

と同時に呻いて、支えあうように体が傾いた。激痛と狂乱が、五体のまんなかから噴泉のように湧きあがった。

「む……、む……胸を」

千浪は、握りつづけていた鈴の手に力をこめて、鎧通しを同時に抜きとると、そのまま乳房の下にあてがった。手がブルブルと震えた。焼け落ちた板庇が、千万の火の粉をパァッと吹きあげた。

「お顔を……お顔を見せて。鈴さま……笑って、死……死にましようぞ。お殿様のお側へ……さ」

鈴が、最後の力をふりしぼってもたげた顔に、微笑のかげがサツと走って、唇が小刻みに震えた。

その時、千浪の体が、のしかかるように倒れた。鎧通しは、見事にたがいの胸を刺し貫いていた。

暗がりの野中に、突如燃えあがった火の手を、落合の柵を占拠した伊達勢の尖兵が見つけた。

——芦名勢残兵の奇襲？……

十騎あまりが、物見役として駆けつけた。バラバラと馬を下りて今しも南側一帯に燃え移ろうとする小屋の中に、先頭のひとりごとびこんだ時には、床板を這った火が、四人の体をひと呑みにしようとしていた。

「や、やッ……女子の生害ではないか。……熱い。もう火の手は廻ってしまったわ。見きわめがつかぬ」と叫びながら、火の粉をよけて引返した。

「夜討ちと見たは、当てはずれであつたらしいのウ」

火は完全に小屋をつつんで、見る間にバサァッと崩れ落ちた。夜空に舞いあがった火の粉の妖しいうつくしさは、見つめる荒武者の胸に、むしろ一抹の哀切を感じさせた。

翌六日、伊達政宗は駒形山に軍を進め、七日には更に、三橋城に入った。

会津領北部一帯の城柵はほとんど敵手に奪われ、敗将は黒川に遁

れ集った、芦名の命運は、すでに尽きかけている。

十日にいたって、富田美作、平田左京ら代々の重臣と、佐竹家からのお付き重臣たる大縄讃岐、刎石駿河の間にはげしい論争が展開された。もともと、義広を佐竹家より迎え入れる説に真向から反対しながら、本意なくも説き伏せられた富田、平田の一派にとっては日頃の鬱憤がこの土壇場に爆発したにすぎない。二派の対立は、いつの日にか分裂の極点まで行きつかずにはいなかったと云つてよい。しかしその最悪の場が、芦名家崩壊を目の前にして演じられたのである。

富田、平田の両人は、その日のうちにひそかに政宗に投降を申し入れた。城中は、たちまち混乱に陥った。闇にまぎれて脱走する兵が続々と出た。

翌十一日、義広は遂に黒川城を捨てた。道を南にとって闇川橋を焼き落し、芦ノ原関を越えて白川に出、生家の常陸を目指したのである。従う者は、わずかに四十一人——この中には、磨上原血戦生き残りの富田将監の姿があった。

伊達政宗が、宿望の黒川城に乗りこんだのは、この日の申の刻（午後四時）であった。

（おわり）

（附記）私は昨秋、夫の研究旅行に同行して東北地方の二つの県を廻り、その折、会津の地を踏んだ。私はかねて、会津史の資料をあさってみたいという希望を持っていたので、この好機をのがしたくなかった。幸いこの旅で、さまざまな資料を手に入れることができたが、中でも「旧事遺聞」と題する乾坤二巻の写本を譲られたことは、思いがけぬ喜びであった。

奥書によると、この書は会津藩士松平来蔵重信の著したもので

文化十一年十月の月日の入っていたものを、之れより三年後の天保二年五月に「玄清」という人が転写したとある。玄清がだれであるか、今のところ見当がつかないが、著者の松平重信は、字を実甫、号を寒録と称し、槍術の達人として兵学を説いて諸国を廻ったこともあり、また朱子学を深く究めた学究者としても知られていたことは、他の資料によつて調べることができた。天保九年四月、幕府の代官羽倉用凡とともに三宅島に行き、突風のために難船して遂に不慮の死をとげた。時に四十四歳。したがって、この書を著した文化十一年は、三十三歳ということになる。

この書には、諸国遊行の折の見聞を乾ノ巻とし、会津関係を坤ノ巻として、多数の逸話を載せている。

その中に「下荒井館侍婢自害の事」という一項が、ごく簡単に記されている。私は、この記事に発想して一編の作品を書こうと思いついた。

帰京の後、伊達、芦名の確執を描くために手もとの資料だけでは意に満たず、史料編纂所に通つてノートをとったりもした。もちろん「女人散華」の場面に焦点をあわせた作品にするつもりであったが、女人の集団自害が、どのような歴史的背景の中にしぼられて行つたかを見ることを忘れたくないと思つたからである。

〔編集部より〕

本稿は既に一年半前より、編集部の手元へ届けられ、掲載予定のものでありましたが、その当時は記事輻輳のため、翌月廻しを繰り返しているうち、昨春、突然本誌の休刊という予想外の事件のため、とうとう残念にもその掲載の機を失してしまいました。幸い、今回、本誌の復刊を機会に、やっと先月号と本月号の二回を以て誌上を飾ることが出来ました。筆者並に御期待下さった皆さまに本稿発表の遅延を謹んでお詫び致します。

女サデイストより

奴隷に与える手紙

森 山 美 歌

〔美歌から三吉に出した手紙〕

お前はもう二週間も女王様に手紙を呉れない。毎週必ず一度以上「けだものの誓い」を

書く様に命じてあるのに。お前には人間並みの言い訳は許されないんだよ。女王様の命令を破ったお前にはお仕置があるだけだよ。女王様の云う通りに只従順にしつけてある筈なのに命令を破った犬めの罪は許せない。今度東京に帰ったら特別の苦しみを与えてやる。それは浣腸責めだよ。お前にはまだやった事のない拷問だよ。浣腸責めにされて、お前の苦悶するさまを思っただけでも、身体中がうず／＼してくるよ。

やい犬野郎、けだものの奴！ よくもお前は

女王様の御命令にそむいたな、うんと苦しみ
てやる。浣腸責めだよ、いつもの様にロープ
が肉に喰い込む位、高手小手に縛り上げてや
る。そして身体を海老の様に曲げて、頭の両
側に両足首を揃えてゆわえてしまふ。いつも
されるあの恰好さ。泣いても止めないよ、ど
うだ、苦しいだろう？ 痛いだろう、何て顔
してるんだ、苦しみばいいのさ。お前は女王
様に苦しめられる為に生きている家畜なんだ
よ。馬鹿野郎、動くんじゃない！ 天井から
提げたイルリガートルには、犬の好物のお酒
を入れてやるよ、犬、喜ぶんだよ。嬉しいだ
ろう。有難く御礼申上げるんだよ。

お前は犬のくせに果報者だよ、馬鹿野郎、
歯を立てるんじゃないッ、何べん云ったら分
るんだ、いい気になってすぐ忘れてしまふん
だね、この野郎、お前のそのひん曲った鼻を
踏みにじってやる。どうして、この間の抜け
た面をしてやがるんだらう。女王様の唾を飲
むんだよ、さア、これから鞭だよ、ピシリピ
シリ、いつ聞いても鞭の音は堪えないわ、ピ
シリ、ピシリ、

犬、これがお前にしてやる浣腸責めだよ、
このあと、どうするかは、この次の手紙に書
いてやる。犬に女王様の命令をする。必ず守
るんだよ。

女王様の命令

一、犬よ、お前は女王様に苦しめられ、羞し
められる為に生きていくのである事を
忘れてはいけない。お前に許されている楽し
みは、只苦しむ事だけだよ。

二、犬は女王様がおつきあいする男にも、け
だものとして仕えねばならない。女王様が気
に入つた男をつれて来たら、お風呂をわかし
たり、ベッドの用意をする事は勿論、全身の
マッサージして私達の疲れをもみほぐしたり
私達が寝てしまったら、汚れ物をちやんと洗
濯しておくんだよ。

三、現金で五万円すぐ送るんだ、中村錦之助
の様な可愛い坊やの愛人が出来たんで、二
人で熱海に遊びに行く為、お金が要るんだ。
この手紙着き次第、すぐ電報為替で送金する
事、遅れたら叩き殺してやる。解ったか？
四、犬！ お前は毎晩寝る前に、この命令を
三度繰り返して読んだ上、女王様の送った
キスマークを拝むんだよ。

お前の
女王より

拷問用の

けだものへ

女王より犬へ

お金をすぐ送つたのは中々感心だ。御褒美
に今度帰ったら毎日女王様のネクタールを飲
ませてあげよう。でも女王様にお金を受取つ

て頂いて有難く思うんだよ。お前は女王様が
豪華な生活をする費用を生みだす為に営々と
働き、女王様に苦しめられる為に生きる事を
許されている一匹の雄獣に過ぎないという事
を忘れてはいけない。この手紙着き次第、次
の事を誓って書いて寄こす事。
女王様に、次の事をいのちにかけてお誓い
致します。

一、犬は女王様の気儘を御満足させる為に生
存している雄に過ぎません。犬奴の精神も肉
体も感情も意志も、これを独立して持つなん
て大それた考えは絶対にありません。全て女
王様の所有物です。

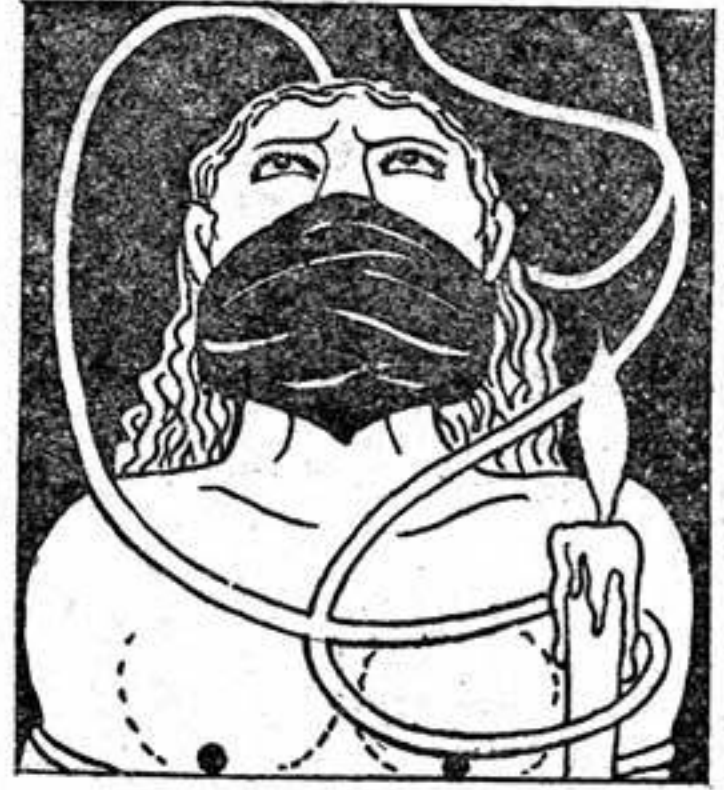
二、犬の偽いて得た金銭財物は挙げて女王様
のものです。これで女王様が豪華な生活をさ
れることは、犬奴の幸福、これに過ぎる事は
ありません。

三、犬は女王様の気紛れな、そして残酷なス
ポーツ用の道具に過ぎません。女王様の御命
じになられた御用を忠実に守るけだものに過
ぎません。

気高き女王様

拷問用の犬

— おわり —



私のアイデアと回想

——「悦虐ダイジェスト」資料提供に代えて——

菅 原 春 夫

本誌三十年三月号に拙文「編集者に対する公開状」を発表させて頂き、私もやつと投稿者のお仲間入りが出来てこんな嬉しい事はありません。而も私の提案した「悦虐ダイジェスト」の企画を早速採用して下さい感謝にたえません。読者の要望に応えるに急速なる本誌如き例は他にない独特の存在であると考えます。

その親切な編集者から「先ず愧より始めよ」とすめられては、提案者たるもの何ものを措いてもその恩義にこたえなければなりません。勿論そう命じられないでも、喜んで資料を提供致したいと思いますが、困った事に私は資料蒐集に熱中した戦前のコレクションは

応召中に一切空襲のため焼失してしまい、今更残念がってもどうにもならないばかりか、戦後は殆んど系統立った蒐集がしてないのです。

それは戦前にはとにかく、よかれあしかれ手あたり次第に集めたものですから、他の研究資料と共に書齋ぎっしり本類がたまっていました。それが余り多すぎるので疎開がでず、と云って処分するのは惜しいのでぐずぐずしているうち召集、戦災という次第で、書齋ぐるみ一切の愛蔵書を失った打撃で一時は全く気が狂いそうになった程で、その後は到底一生かかってもあれだけの品物は揃わないという悲観と又集めてもどうせ灰になるの

だという恐怖から全く蒐集の熱意を失ってしまったからです。

扱戦後は相当縛絵に接する機会もありましたが、そういう心の沈滞ばかりでなく既に一種の批評眼というか美観を持っていたため、それに適合する作品でないと買わないようになってしまったのです。又買っても以前のようには本のまま保存しておくのではなく、絵だけ切抜いてしまったので、出典も不明だし、説明文もないので（なぜなら殆んど絵に値する文章が少なかったため）本誌に資料として提出するには適当でないのです。こんなことならもっと手当り次第集めておくのだったと今更、悔まれますが仕方ありません。そこで縛

絵の提供は他の有志の方にお任せする事とし更に新しいプランを考えて責任を果したいと思ひます。というのは、在来の縛絵のついた小説等は前にも述べたように文章としては大して面白いものではないのが多いのですが、文章ではとてもよい場面があるのに、挿絵にはそれがなく、全くなかりさせられた事も多いので、こういう場面には是非縛絵をつけたいと思う文章を発見次第本誌の挿絵陣に傑作の執筆をお願いしたらどうか、という事なのです。これも又立派なダイジェストでありむしろ前者より価値の大きい仕事だと思ひます。それは単なる再録でなく、補充の意義が附加されるからです。それで、これから私の最も感銘の深かった作品、即ち記憶にいつまでも残っている文章、又は場面をこれからダイジェストしてみたいと思ひます。

先ず古いものから挙げますと、谷崎潤一郎の「少年」、芥川竜之介の「地獄変」はどうしても欠かせません。私は明治大正の文学作品は「明治大正文学全集」全部を愛読しましたが、今日記憶に残っているのは、実にこの二篇位なものです。それほどこの二つは傑作だと思ひます。しかしこの二作は余りにも有名でどなたもお読みになったと存じますのでここに再記及び解説することは止めて、簡単に私の挿絵が欲しいと思う場面だけ書いておきます。

初めに谷崎の「少年」は特異な画材とするに足る場面が、実に多数ありますので画家のセンスと観点によつては、恐らくこれだけで限りなく画材がえられるとさえ考えられますが、その中で私の最も絵にしたいところは、三少年が一少女を廊下のらんかんへぎりぎりと後ろ手に縛り上げ、扱帯で豊頬がくびれるほど猿轡をかませ、縮緬の華麗な振袖を着た少女は、あたかも「金閣寺の雪姫」のように苦しがつて身もだえしている。という場面です。(私はこの個所で雪姫を覚え、後日金閣寺という芝居があったとき、何はともあれ見に行ったものです。)それから、二少年が此の少女を庭の雑木林の中で、立木に縛りつけて、つねったり、くすぐったり、夢中になって折檻するという場面と、それから少女を横倒しにして椅子代りに尻で押していじめるという場面なども捨て難いと思ひます。

次に「地獄変」ですが、これは御承知の通り、最後の場面、豪華な御所車の中に、美々しく盛装した女臈が、鉄のくさりで縛り上げられたまま、焼殺されるという凄惨な情景でぐれんの炎に車が没する瞬間美女がくさりもちぎれんばかりに激しく身もだえるという個所は、誰でも固唾をのんで読んだ事と思われまふ。私はこのような名作の名場面は、課題作として諸画伯のコンクール、又は読者の投票募集などをやったら一層有意義で面白いと

考えています。是非編集部の一考を願ひます。

次に私が戦時中たしか「ユーモアクラブ」であつたと思ひますが、つれづれに読んだ時に、作者の名は忘れてしまいましたが、「大人のお伽話」というタイトルで桃太郎をもじつたとても面白い作品があつたので、これを述べてみたいと思ひます。

桃太郎は型の如く川で拾われて、爺婆に蝶よ花よと育てられ事もなく成長しましたが余り立派な美少年に成長したので、村の娘はおろかお婆さんまで恋心を起して大騒ぎという仕末、そこでお爺さんは焼餅をやいて、桃太郎を「鬼ヶ島」に征伐に行かせます。そこで桃太郎は前髪立の若衆姿もいよく魅力的に盛装して出発、途中犬、猿、きじの三名を供とし、鬼ヶ島に乘込みます。折柄鬼は各所から捕えて来た美女を多数侍らせて大酒盛をやっている最中、珍らしくも人間界から、花のような美少年が弱そうな家来をつれてやって来たので、直ちに手下の鬼が桃太郎を後ろ手に縛り上げ、犬猿雉は檻の中に放り込み、桃太郎だけ頭目の前に曳き出します。

その曳かれて来る美少年の姿を見て、お酌をしたり踊りをおどっている女達はお酌をするのも忘れておどりのさす手ひく手も狂って桃太郎に見とれてしまいます。自分の前に引き据えられた鬼の頭目も、その余りに美しい

のに驚きますが、先ず名を聞きますと、桃太郎は素直に答えます。すると鬼は「なに桃太郎だ、小唄でも歌いそうな名だ、何か一つ唄ってきかせろ」と命じますと、桃太郎は「はい。でもこの様にきびしく縛られていては、縄目が胸に食いこんで思うように唄えませぬ少しゆるめて下さりませ」と哀願します。が、鬼は「ならぬ、その苦しさの中に唄うのが、又一段とよいものじや、早く唄え」と命じます。此の辺りがサジススム的な表現をハッキリ出して面白く面白く思っています。

そこで桃太郎は「では歌います」としなをつくって「私しやよい人の子で、何不自由なく育ち、どんなあそびにももうあきたが鬼の縄目に痛むほど、トロリとしたことないぞいな」といった様なマゾヒスティックな唄を（原文ではもっと長く）うたいます。それを聞いているうち、鬼も何だか変な気持、今では云えば悦虐心理、原文では異常心理に支配されて来て、この美しい人間に縛られて、思う存分マゾの快感を味わってみたいと思い、女達に、「この人間の縄をほどいてやれ」と命じますと、女達は我勝ちに桃太郎の体にさわろうと、一度に殺倒して、中には桃太郎をイヤという程つねる者まで出るさわざです。頭目はこうして酒盛をやめさせ、女や乾分を退かせて、桃太郎に縛ってくれとたのみます。そこで桃太郎は、これぞ思う壺と頭目を縛り

上げてしまいます。

暫らくして手下の鬼共がこれを知ってさわぎ出しますが、頭目が「お前達も美しい人間達に縛られて快感を味え」と命令し、三匹の家来や女達のために鬼が悉く縛られて色仕掛の鬼退治は成功して、桃太郎は女達をひきつれ宝物を奪って凱旋する。めでたし、めでたし、というわけなのですが、この作品は大衆雑誌には珍しい程大胆にマゾ・サドの傾向を表現した悦虐作品だと思っています。そしてソドミの傾向も含んで居ります。よく戦時中にこんな作品が発表されたと感服しています。

これは灰色の戦争に対する文士のレジスタンスとも云えましょうか。ともあれこういう作品はその後余り見かけないので、珍重すべきものとして記憶して居りました故、参考にもなると存じて紹介しました。私はこれに刺戟されて「浦島太郎」という類似作を書いてみたことを覚えて居ります。こんなようにお伽話や他の有名作品をもじってみるのも面白い試みだと思っています。ところが、この作品には挿絵がありました、折角文学がこのように面白いのに、縛絵が全然なくてガッカリさせられました。私は桃太郎が胸にくい込む縄目痛みに酔い乍らマゾの唄をうたう所を絵にして頂きたいと思っています。

扱、他に御紹介したいものもありますが、文学は一先ずこの位にして、悦虐作品の中で

誌上に余り採上げられなかった、「ラジオ放送」について少々書いてみたいと存じます。ラジオ放送にもしばしば鞭打ちの場面や責場が出て来ますが、これは文学以上に刺戟が強くて、捨て難いものがあります。殊にピシリ／＼というムチの音や、「あれえ」「あ、あッ」という女の悲鳴「う、う」といった男のうめき声、などは何とも云えぬ実感を伴い、音声ならでは表現し得ない魅力を持って居ます。ところが放送作品は、文学や映画演劇のように見かえしがききません。予算さえあればテープレコードに取っておいたらどんなに良いかと思いますが、今のところどうも仕方ありません。みす／＼傑作が消えてしまうのは勿体ない話です。

それはともあれ、私の記憶しているものを二、三御紹介してみます。私の一番よく覚えているのは、昭和二十七年の夏放送された、「白鳥の騎士」の一場面です。それは「何というすさまじい光景であろう。醜惡な山賊達が可憐な美少女を高い柱に縛りつけて、情容赦もなく責めるのであった」というようなアナウンスで、ピシリッというムチの音とアレツという女の哀れな悲鳴が交互に何回か繰返されたもので、何かの白状を強いる場面だ、たと思いますが、思わず興奮させられたのでその後この放送を注意して聞くようになりましたが、これ以上の傑作は出なかったよう

す。次に笛吹童子で桔梗という美少女が霧の小次郎のために仲間にならないからの理由で吊し責めにされる場面も割合に長い時間、谷に吊り下げられた桔梗が「あゝッ苦しい、堪忍して」と悲鳴をあげ哀願する声がつゞき小次郎の「どうだ、まだいうことをきかないか」という脅しの声と対照的にひどく可憐でした。この二場面は傑作なので絵にして頂けたら更に思出を強めるでしょう。その後の連作「紅孔雀」も、くみ（主人公）が縛られる場面は少し分りましたが、声としてはさほどとるべきものはありませんでした。

次に場面として印象に残ったのは、川田晴久の遠山の金さんで、腰元の千草が金四郎のために敵方へスパイに入込むため「紫色の大振袖を着た水もしたゝる若衆姿」に身をやつして、最後に発覚して捕えられ、船の中にとじこめられ、あわや斬られようとする時救出されるという場面ですが、千草が「あゝ金四郎さま」と名を呼んで身悶えるところなどは絵に描いたらどんなに美しかろうと思わせられました。この千草というのは、其後も引続き出て来て、此間も若衆姿で現われ、「この振袖姿の美しい若衆は誰でしょう。」というクイズまであった程ですが、川田晴久はきつと美少年趣味もあるのではないかと思いますとにかく「美女の扮した大振袖の色若衆が縛られて身をもがいている切ない姿」は縛絵に

は好箇の見逃し得ない題材だと存じますので是非おねがい致します。

明鳥の浦里の責場などリベラルで岩田専太郎がものしていましたが、放送の挿絵などは前例がないので、きつとマニヤにも一般にも喜ばれると存じます。以上挙げましたところは放送のごく一部であり、私も録音していたわけではなく文句には多少違っているところもあると存じますが、記憶を辿ったのですから何卒御宥し下さい。これからは皆さんもつとめて正確に記録して「悦唐ダイジエスト」の資料としてお寄せ願いたいと存じます。勿論私も努力いたします。

以上甚だ不十分でありましたが、悦唐ダイジエスト資料、プラン、アイデアを話しましたので、提案者として、記念すべき「悦唐ダイジエスト」欄創設に対する「隗より始める責任」を辛うじて果たしたのではないかと存じて居ります。勿論第二回からは出典も明らかにし、文章も文句も原文のまゝで提供いたしますが、初回は読物的覚え書になってしまったことを御諒願いたします。これでも資料としての価値はあるのではないかと信じて居ります。少くとも私にとっては最も記憶に残った傑作の発表なのであります。

最後に悦唐ダイジエストは単に縛絵のみならず、映画のスチール、演劇の写真、見世物等の記録、単行本の抜萃等に広範囲に涉って

構成さるべきであり、これだけでも優にリーダースダイジエスト位の小冊子は出来てしまふ大仕事だと存じますので、とうてい一人や二人の手で全資料を網羅することは出来ません。何卒私に続いてどしどし資料を提供される方の出現することを切に祈って居ります。更に私は展示会や展覧会等の開けない現在、鳴山氏、諏訪氏を始め、数百枚のコレクションを持って居られる方々がその秘蔵品を提供され、法上に於て一大展示会を開いて頂けたら、ある場所で特定一部の人が集会して楽しむより更に有意義で、本誌の本領を充分發揮できることゝ信じます。

我らの楽しいグループ「奇ク」のために皆で努力いたしましょう。

「伝要板」○沼正三氏、羽村京子さん、はじめ当方より連絡の出来ない寄稿家の方々、若し本誌をごらんになられたら、すぐ編集部宛御一報下さるようお願いいたします。○森山、戸破、荒井、其の他のサデイスチンの諸姉よりの御連絡をお待ちします。○白石氏へ、貴名紛失しました御連絡下さい。○以上の上、休刊以前の本誌の寄稿家の中で、編集部と連絡のとれていない方々が多数ありますが、復刊号をごらんになられたら御一報下さるようお願いいたします。

サディズム小説

湯 で い

明 義 泉



「何だって？ 芸妓をやれって？ 君に？」

彼は病み呆けた頬を引締め、度の強い近眼鏡の底に神経質な眸をキラと光らせた。良江は一寸狼狽して、狭い病室を見廻した。武蔵野の森に囲まれた療養所の午後は物音一つ聞えない程静まりかえり、只油蟬の声のみ姦しい。

「え？ ほほ、嫌アね。貴方、又早合点したりして、芸妓屋よ。私なんぞに芸妓が出来る筈ないじゃないの」

良江は殊更快活さを粧って、心にもない笑いに、自分の胸の中の矛盾をまぎらわそうとした。僅かな間に見違える程、憔悴してはいしたが、何かそれが、今迄の彼女にない、女らしさともいうべき妖しい香気を漂わせていた。

彼は其の自分から離れている間に起った若妻の変貌に、何か腑に落ちない匂いを嗅ぎ取ろうと、病人特有の探ぐるような視線でじつと彼女の胸の辺りをみつめていたが、

「ふうん、芸妓屋？ 芸妓屋をね？」

彼女は彼の粘っこい視線から逃れる様に、窓外を見た。其処には患者の手作りらしいダリアが、昨夜来の雨風に横倒しになったまゝ、泥にまみれていた。倒れ伏して泥や砂のはね

た葉や莖は、それでも尚上を向おうと努力しているようだった。彼女はそれを見て、じつと胸が痛くなるような気持ちに襲われてくるのだった。

「だって君、芸妓屋だったって」

「お父様の処も不景気で駄目らしいわ」

「旅館がかい？」

「え、それでお姑様おばさま、商売替の準備って——」

「今度は芸妓屋をやるうって云うのか」

「何だか、良くは判らないけど」

彼は不機嫌そうに爪を噛み始める。

「兎も角、私一度、実家へ帰えるわ」

「矢張り居辛いかい？」

「私、我儘じやないのよ」

「む、我儘じやないだろう」

彼はがっかりした調子で、投げ出す様に云ったが、不図思い返した様に軀を起し、

「ね、君、それじゃ病院の近くに間借りしたらどう？」

彼にとつて、今は唯一の頼りである良江が実家に戻ってしまう事は、もう、それっきりと云うことになりそうで、その頼りなさ、淋しさに耐えられないのだ。

「え？ ええ」

彼女は言葉を濁らせてうつむく。

「どうしたの？ ね、そうしようよ」

彼は何か楽しい計画でも話すときのように言葉を弾ませ、彼女の返事を促した。

「だって、貴方、間借りだったって、先立つものは、お金よ」

「お金さ。はは、良いじゃないか。親父や義母が出さなくなつて、併し僕達の家を売った金、親父が預つてる筈だ。節約すれば二年位は——」

「貴方はお人良しよ」

「なッ、な、何だって君？」

彼はどきつとしたように妻の口許を睨んだ。「何だ。何だと云うんだ。はつきり云つてくれ」

「あ、私、どうしよう？」

彼女は涙を抑えきれなくなつてハンカチをとり出して目に当てた。

「え？ そうか」

彼は呻めく様に深く吐息して、

「其れも、もう無いってわけか？」

「いけない。こんな事、貴方に話してしまつて、でも本当の処、借金の支払いに全部使つてしまつたらしいの、でもお父様の故じやないわ。」

「義母の故だつて云うんだな」

「今は、私達、一文なしよ。伊東からの汽車賃だつて私、女中さんに借りて来たのよ。あ、貴方は病人なの。何も考へてはいけないわ」

悪いと思ひ乍ら良江は噎び上げてしまう。彼は妻の泪にあふられたやり場の無い怒りは

どうすることも出来なかった。

「僕が病気の為、本当につまらない苦勞ばかりさせて済まなかつたなあ」

妻の手を取つて、愛おしむ如く掌の中に握りしめたが、良江は彼の手の異常な熱っぽさに、はつとして思わず手を引込めた。

「君、その腕の傷は？」

彼は妻の白い二の腕にあるアザを見て、はつとして乾いた声で云つた。

「え？ あ、何でもないので。転んだの」

彼女は腕の青痣を着物の袖でかくして作り笑いをした。

「転んだ？ そう、それはいけなかつたね」

彼は氣の抜けた様な声で呟いた。

「軀を大事にして、君だけが頼りなんだよ。」

彼はニヒリスチックな笑いに唇を歪める。彼女は夫に見られまいと、着物の袖が氣になつて仕方がないのと同時にお臍のまわりの火傷が急に疼いてきて、いたゝまれなかつた。

「貴方、私もう帰りますわ。看護婦さん坊や持て余しているでしょうから」

「そう、坊や、大きくなつたらうぜあ、今晚は、じゃ叔母さんの処だね。叔母さんに宜ろしく。二、三日中に僕の方から知らせる事あるから——これ君持つて行つてくれ給え」

「あら、お金？ 私の方大丈夫よ、貴方バターやチーズでうんと營養つけてくれなきあ」「いいや、僕は病院の食事だけで喰べ切れな

「い」
彼は強く云つて妻の手に折り畳んだ札を無理に押しつけた。

二

良江は其の晩、叔母の処に泊った。家出同様に夫の父の許を飛び出して来た母子の帰れるあての実家は、遠く九州だった。彼女は晩く迄叔母と話し合ったが、結局は、

「まあ、もう少しの辛抱よ。それあ今迄の様に二人きりの暢気な生活は望めませんよ。それに頼りになる人が病氣じゃねえ。でももう手術も済んだ事だしさ。それ迄——」

「でも後二年位は駄目ですって」

「まあ、まだ二年も。大変だわねえ。それじゃあ。貴女も何とか考えなくちやあ」

「そうなのよ。だから……」

「そう、じゃ私も及ばず乍ら協力するわ。そうそう、貴女、一日旅して汗になったでしよ晩いけどお店閉めたら御一緒に風呂如何？」

叔母はそう良江を促したが、入浴したいのは、やま／＼ながら良江は躊躇めらわずにはいられなかった。

「私、今、お風呂駄目なのよ」

彼女は苦しい嘘を云わねばならなかった。

「あら、そう、じゃ仕方ないわね。」

何も知らない叔母は笑つてうなづいたが、

良江の胸の中は、新しい屈辱感に痛むのだった。

「あら、電話、はいはい、あら病院からよ。何か急に貴女につて」

彼女はドキンと胸騒ぎがした。

「こんな晩くに、何か間違いでも」

と不安気に受話器を受取った。夫から、明日、是非来てくれというのだった。

三

「夕、君と一足違いに義母が来た。」

良江の頬がさつと白くなったのが自分でもわかる様だった。

「何か仰有つて、私の事？」

「うむ、それあ云つても居たさ」

彼は成形手術後の衰えた腕で頭髪を掻きむしり乍ら暫く瞑目した。氣まずい思いだ。

「僕も義母と大分云い合いをした。併し、全く君の云う通りだ。最早論じ合つても仕方がない。何がともあれ、先立つものは金なんだが、其の金が一文もないなんて。僕達の家を売った金は別として、一戸の商い屋を構えていて間借りする金もないなんて。」

彼は激しい咳込みで一寸言葉を途切る。彼女はこわれ物を見るようにはらはらするのだ

「良いのよ。私、実家で相談するから」

「待ってくれ、こんな有様で、君を故郷へ帰すなんて、」

彼は弱々しくすがる様な眼色になる。

「それあ私だつて何とかなるなら」

良江も切なかつた。併し差当って、乳呑子を抱え一文なしでは、どうすることも出来ない。

「僕も考えた。併し今の僕じゃ駄を動かす事も思うに委せない、氣許り焦つても……」

「そう、そうよ。いいのよ。貴方は、私何とかするわ。大丈夫よ、叔母さんだつて——」

「しかし、それもそうそう長い事はねえ」
確かに叔母の処だつて、そう無制限に居候している訳にはゆかない。

「君ねえ、僕、教会の牧師さんに一寸、話したのだ。」

「牧師さん？」

「そう、病院へ度々慰問に来てくれるのだ。恰度夕べ見えたのでお話したら、早速今日何かそう云う問題を扱つていられる方と同道されて君の来るのを待っていられるのだよ」
「そう、それじゃ、私、お逢いしてみようかしら」

彼女は何か一筋の光が其処に求められるような気がした。

四

院内の面会室で牧師さんと、もう一人上品な老婦人が居て彼女を待っていた。家事審判所の委員とかであった。

「そう、よく判りました。それはお気の毒です。まあ、親子と云つても一旦世帯が別になるとね。お互い、特にお金となるとねえ」

一応、二人は同情の色を浮かべたが、

「しかし、今は貴女も苦しいでしょうけれどお病人と赤ちやんの為、お辛抱なさいませ。母子二人で暮すつたつて貴女、仲々容易じやありませんよ」

良江は急に耐え難い不信と憤りが溢れて、

「でも、私、あのお家にはもう帰りたくありませんわ」

ときつと眸を据える。二人は取なす様に微笑を浮べて、

「まだお若いから。でも私なども姑さんの苦労は散々経験済なんです。ほほ、でも、これも人生ですから」

「人生？　人生ってこんなものじやない」

彼女は自分の考えを十分云い現わせないもどかしさについて言葉遣いが荒くなる。一層のこと総べてを云つてしまおうかしら、という衝動にかられるが、まだ若い女の身空で、それは到底口にする事は出来ないのだった。彼女がこんなに昂奮した事は二人の年輩者にとつては彼女がまだ世馴れない為だと感じるのも又詮方ない事であった。

「貴女は如何して今後、母子が暮す方針を考へられますか。無分別は益々苦勞を加えるばかりですよ。それは私共は出来るだけのお相

談にお預かりはしますよ。併しねえ、私としては辛抱なさるのが一番だと……」

「辛抱にも限度がありますわ。あんなに苛められて——」

「苛める？　そう、何かそんな事一寸お主人からも伺いましたが、それも困りますね。併し、苛めるって具体的にいつて、どんなですの、お差支なければ。場合に依つては又方法も考えます」

「どんな事つて——」

良江は赤くなつて口ごもつてしまう。

「ほほ、ま、多少の事はお辛抱してね。まさか打ったり蹴ったりする程でもないでしょうから」

老婦人は良江の顔をのぞき見るようにして微笑に笑つた。

「まあ、そうした事は表立てても、先様でそんな事しないと云えば、それを証拠だてることは仲々難しいし、それを持ち出す事は返つて話をこじらすことになる場合だつてあります。まあ、私共の方で何とか母子寮にでも貴方とお子さんの住む処を考えてみましょう。其の上で貴女の方の家の代金を返して貰うと云う事と親御さんに何とか穏便に月々生活費を送らせる様お話して見ましょう。」

老婦人はそう云つてから、赤坊をあやし、

「男の御子さんね。良いわね。何日？」

「ええ、未だ四月なんです」

「四月、まあ大きいわ。ほらほら、あら良く笑う事、こんな可愛いお子さんがあるので、苦勞の甲斐もありますよ。そう四月目ね。ええと、すると御主人の入院と」

「ええ、殆んど同時なんですわ」

「そう、本当に大変でしたわね。すると伊東の方は一月足らずね。困つたお爺さんお婆さんです。まあ水商売の方つて往々そうね。普通ならお孫さんには目がないのにねえ。その姑さんつてお子さん生んだ事ないのでしよう？」

「ええ、何か芸妓さんやら女中さんやらで」

「ほ、そうでしょう。愛情が歪められてるのよ。まあ、その方はその方なりに不幸ね」

五

結婚して三年目、失業、発病、入院、と目まぐるしい程の不幸が一遍に押し寄せて、今迄の平和は一朝にして崩れ去つてしまった。それは迄は季節々々の挨拶にだけの接触しかかった姑の許へ引取られる事は、止む得ないとは云え良江にとつては気が進まなかつた。それは彼女が軍人の家庭で、それこそ荒い風にも当てずに育てられて来たので、その姑の家の水商売と云うものに対して、未知の脅えがあつた。

此の先入感が一層彼女を憶病にさせ、初対面の挨拶におどおどした事が、芸妓上りのヒ

ステリ気味の姑の感情を強く刺激した。姑は頭を下げてゐる良江に振向きもせず、

「父さん、家の代金はどうか？」

ときも焦れている様子を露骨にした。老主人は不機嫌そうに長火鉢の前に胡坐をかい「此れだけだ。幾らもありあしない」

「何だ。これっぽっち、弱ったね。これじゃ此処の処、一寸間に合わないわね」

とやけに長烟管を火鉢に叩きつける。良江はそこに敷かれたあでやかな色調の座布団やその赤い柄の長い女持の烟管等、急に全然異った肌ざわりに眩惑してしまふのだった。

「いや、それじゃ入院費にも足りないね」

流石に姑も気が付いてあわてて云い替えたが、良江はその言葉に翳を感じ、はっとして我に返った面持になる。姑はその嫁の色白で下ぶくれの顔のあどけなさに彼女は彼女なりに何か肌ざわりの違いを感じ急に苛々した。併し姑は強いてそれを抑えて猫撫声で、

「おや、良江さんかえ、貴女も苦勞するね。」

でもお父さんがすっかりしてなさるから、貴女も大船に乗った気でいらっしやい」

良江はその言葉が、姑の生活に対する自信で、反面自分への皮肉と感ぜない訳にはゆかなかった。其処には一片の勞わりも感ずることとは出来なかった。

「宜ろしくお願い致します」

良江は蚊の鳴く様な声であつた。

「どれどれ、坊をお寄越し、ほほ、大きいねえ病人さんでも仲々子供は上手に作るわね」

良江はかつと頬を染めて俯何く。無心に今迄笑つてゐた乳呑子は現金なもので、急に脅えた様にわつと泣き出す。

「おやおや、むづかしい坊やだね。婆ちゃんですよ。」

と姑は肥った臍をゆすつて、男の様な声であやした。全く六十と思えぬ厚化粧の嫌らしい女だと良江は背筋に何か寒気を覚えた。

「済みません」

良江は泣く子にはらはらしていると、

「全く済まないよ。はは」

姑は笑つたが、間の悪いもので、

「あらっ、こりあ嫌だ、おしっこだよ」

姑は狼狽して子供を捧げる様にした。赤子の裾から未だ小水がぼたぼたと垂れて、姑の膝を強たか汚してしまつた。

「まっ、済みません」

良江は吃驚仰天して子供を受取り、飛び上る様に立上つて、台所へ雑巾を取りに行こうと、襖に手を懸けると、

「良江っ、立ったまゝ襖の開け閉めしてはいけませんっ、お行儀の悪い」

ぴしと鞭の様な声が良江の背を打った。

「はっ、はい」

良江は崩れる様に膝をつく

「何だねえ、膝もまるだして、だらしない」

良江は、はだけた前をかき合せると、急に胸が一杯になるのだった。

「子供が居るとこれだから嫌さ。やれやれ一帳羅が台なしだよ。良江さん、貴女も此の家で厄介になる以上手伝つて貰わねばならないが、客商売だから多少行儀作法は氣をつけて下さいよ。一寸やかましいけれどね。」

廊下に立つた良江に姑は襖越しに云つた。

六

姑達と一緒に咽喉にも通らぬ思ひの夕食を済ませ食器を台所に下げると、欲も得もなくぐつたりと急に疲れが出た。その上彼女としては全く生れて始めての、酒のお酌には参つてしまつた。夫も自分の父も酒を飲んだ事がなかつたので、彼女は老主人や姑の熱柿臭い息をかぐだけで食べた物も吐けて来る様に思われるのだ。ほっと一息すると、女中達は忽ち彼女の周りに集つて来た。

「若奥さん、とんだ処に來たわ。苦勞よ」

「何故、東京のお家売つたの。母さん達毎日そのお金で借金整理の相談だったのよ」

「私達だって、こんな処、永続きしないわ」と口々に囁やいた。良江は、いきなりあれこれと一度に頭に入れられ整理出来ず、ポカ

ンとした面持で一同を見廻していると、

「良江、何を女中達とくだらない事お喋りしているの、貴女は若奥さんだから、それな

りの貫録を示すのよ。早く此方へおいで」

と忽ち姑に茶間に呼びつけられた。三人の女中達は、一様に頸をすくめ鼻で笑うのだった。良江は子供を寝かしつけた後、足の痺れるのを我慢しながら永い事、姑から客扱いの心得を聞かされたが、胸の裡では到底自分には出来そうもない。併しもし出来なかったら如何なるのかしらと、急に不安になるのだった。

奥の間では、酒に酔った老主人の腰を一番若い梅と云う女中が揉んでいるらしい。不図襖越しにその梅の押殺した様な声が洩れて来た。

「あれっ、父さん」

姑はお説教を止めて、キッと眸を光らせ、「父さん、酔ってるよ。嫌だねえ、梅っ！」

と鋭い口調で怒鳴った。良江は吃驚したが今迄の生活では考え様もない事であった。併し其お蔭で彼女は漸く解放され、ほっとして匆々に台所に戻ると、思わず自分でも恥しい位お腹がぐうっと鳴って驚くのだった。

すると台所で洗い物をしていた、清が

「あら、若奥さん。無理ないわ。おっぱいがあるんですものね。ふふ、あんなお上品なお茶碗じゃ足りっこあるもんですか、いいえ、私だって身に覚えありますとも。これでも三人も子供を育てたんですからね」

「まあ、三人も。如何してお子さん達は」

「田舎に預けてね。ふふ、種々と訳ありますのよ。そうそう、御飯上ったら、いえ、私、お握り作って上げますから、そっと此方で上りなさいよ」

清は一人合点して、さっさと大きな握飯を作ってくれた。良江は恥も外聞もなくそれを喰べ始めた処、運悪く姑が顔を出して、

「おやおや、お腹が空ったのかえ。何だねえそれなら先刻もつと喰べれば良いのに、まるで喰べさせないみたいで見つともないよ」

と嘲笑った。良江は只眼を白黒するだけで何とも返事出来ないでいると、

「そんなお行儀の悪い事しないで頂戴」

と傍に寄って、いきなり良江の腰の辺りを強く抓った。それは驚く程強い力だった。良江は頬張っていた飯が、喉につかえて舂を曲げて一生懸命それを堪えたが、余りの事に彼女は実の処涙も声も出なかったのだ。

七

そんな苦しい日常が彼女を待っていたが、全くの処、次々に展開される水商売の姿と云うものは、彼女に取って驚異に他ならなかった。特に彼女を驚かせたのは或る土砂降りの晩、十二時過ぎて女連れの外国兵が泊った時給仕をさせられたのは、流石に脅えて泣き出してしまった。男も女も肌脱ぎになってウイスキーに酔い痴れていたし、それ以上に彼女

に大きな衝激を与えたのは、十六ミリの映写と、それに続くグロテスクな実演であった。板前や番頭は勿論、女中達迄も面白がって争って覗くので、始め何の事か知らずに彼女もそれにならったのだが、暗闇の中で顔見知りの小唄の師匠が笑い乍ら、

「おや、若奥さん、此方へお這入なさいな。ほふ、いい参考になりますよ、ほふ」

と部屋の中へ引込まれてしまった。何かの劇映画だとばかり思ってた処、それは飛んでもない展開を示し始めた頃、良江は女中達に囲まれて身動きも出来なかった。もっとも始めは唯のストリップダンスで大した事はなかったが、次は嫌らしい実演であった。そして最後に上映されたのは、何か新婚夫婦の睦事と思っている裡に、その部屋に三人の黒覆面の男が侵入して新夫を床柱に縛した後、花嫁を三人の男で鴨居に吊し気絶する迄鞭打つやら、その他、正視にたえない幾場面が、次々と展開するのであった。

一度は驚いたが、流石に良江も恐いもの見たさで胸をときめかして見たのは何とした事だろう、画面は容赦なく進んで猿轡に喘ぐ其眼の色は作り事でなく真に迫っていて、彼女は貧血を起して、うつぶせに倒れた。

良江が気が付くと別室に寝かされて居て、清が一人心配そうに枕許に坐っていた。「如何、気分良くなりまして？」

「え、有難度う。恐かったわ」

良江は正直、まだ鳥肌立っている思いだったが、清はげらげら笑って、

「何さ、あんななもの。皆作り事です。よ。花嫁が聞いて呆れるわね。あんなもう駄の線の崩れたパン助じゃないの。ふふ」

「そうかしら。私には分らないわ。もう済んだの。あれから如何なるの」

「済みましたよ。あれからは一寸面白くて、ほら床柱に縛られた男の方ね、あれが……しちやうんです。それで泥棒が一杯飲み乍ら……ほ、あら、御免なさい。これでお終い」

清はおどけて一寸舌を出して立上った。

「今度はね、実演ですって、嫌だわね」

と云い乍らも、彼女は心が既に其方に飛んでいるらしくそわそわした。

「実演?……て?」

「実演って、つまり本物の、それ、つまり生きてる人がですってよ」

「まあ、一体誰が、そんな事」

「ふふ、ほら、映画の技師と一緒に来た女の人ですってさ。ふふ、嫌あねえ、でもあの人達は本当の夫婦なのよ。だからあの女の人パン助じゃないんですって、本当かしら?、何でも東京でも有名な高利貸の息子夫婦だそうよ。何でも終戦後没落して仕方なくあんな事を商売にする様になったんですってさ。幾ら金になるっても嫌だわねえ。」

向うの座敷から、時々どよめきの様なざわめきが微かに伝って来た。清は一度廊下に出

たが、何を思ったか再び良江の枕許に坐って「若奥さん良い機会だから一寸」

何故かそれは真剣な眼色だった。良江は訝かしんで清を見上ると清は彼女の耳許で

「板前の源さん、注意して。母さんと出来るの。父さんが亡くなったら養子にするって約束しているのよ。養子って変だけど」

と囁やく。良江は咄嗟に何の事か分らず、

「え?、それはどんな意味なの」

「此処の財産が目当よ。立派な息子さんが居るのに、それがお病氣なのに母さん放つて、悪い奴よ。父さん酔い殺されてるのよ」

「え? さあ、良く分らないわ」

「今に分るわ。だから貴女も余程しつかりしないと大変な事になるわよ」

「だって源さん、お内儀さんがあるんじゃない?」

「ふふ、そんな事女房も承知の助、揃って悪玉よ。今に恐ろしい事が起きるわ。きつと」

「まあーっ」

「しっ、壁に耳あり。私から聞いたなんて云っちゃ駄目よ。でも此れは本当の事、源も源さ。三十そこそこが幾ら欲でも六十婆にサービスするなんて薄気味悪いったらありあしない」

八

暫らくして再び賑やかな酒宴になったらしく廊下をばたいた女中達が足音がして良江は氣を取り直して起き上った。——嫌だ、世の中って此んなに醜いものなのかしら——と泌々思い、病人の夫を今更の様に懐しく思った。

どやどやと足音がして

「どやあな。若奥さん、もう気分宜敷うまっか。皆も人が悪いこっちゃ。こないな大人しい人にあげなものの無理強いして、ははは……」

と一人の男が真赤な顔を見せた。今夜の会の主催者で土建屋である。

「はは、悪るう思わんといてな。実はな、役人の招待ですよ。奴等助平でな。あれが一番喜ぶよって、あげなサービスもせな。仕事が取れんのでな」

と彼はゆで鰯の様な顔を、手巾で拭い乍ら頻りと云訳めいてくどくど云った。

「良江さん、如何、ほほ、まだ此の人ほんのねんねだから。貴女先刻はフーサンが抱いて此処へ連れて下さったのよ。御礼申上げて」と姑も横から顔を出した。良江はそうだったのかと真赤に成って、あわてて頭を下げる

「はは、何ですよ。黙ってる人ありますか」「やあ母さん、そんな事、俺は若奥さんに詫

びにやならんで、はは、ま、若奥さん、気分直しに一杯つき合せて下さいませんか。何かすつとする飲物でも差上げましょう」

「あの、私もう結構ですから」

「ほ、フーさん、此の娘は駄目よ」

「分ってる。分ってるわな、母さん、気を廻しなさんなって、俺だって礼儀位は……」

「ほっほほ、如何だか、良江さん、お客様が折角だから御馳走にお成り、さ、え、何が良。アイスクリームでも、おサイダーでも冷えてるよ。気分が晴れますよ。さあ、いらっしやいな。遠慮いららないのよ。それにフーさんからお病人についてお見舞も頂戴したのよ」

「まあ、そんな事。」

「ふふ、フーさん可愛いでしょう。碌にお礼の口上も云えないのよ。此の女は」

「あーあ、礼なんぞ、さ、さ、さ、どうぞ」

と二人に無理矢理連れ出されて、別室に伴われた。彼はどっかと胡坐をかき

「連中の処じや若奥さん、やかましかろうと思ひましてな。ま、お詫びの証にな。ビール？」

「あら、私駄目なんですの」

「良江さんは未だいけないの。だから」

「そうですか、じや母さん、サイダー」

「そうね。フーさん駄目ですよ」

「母さん、やめてんか。俺だって紳士や。はは、若奥さん、驚ろかれましたやろ。生真面

目なお主人だそうですから。如何ですか具合は？そうですか、いけませんなあ。何としても永い病氣やで、併し病人さんは大事にして上げて下されや。はは、病人さんも遠く離れて気がもめるこつちやろて、こげな綺麗な奥さんを置いて。併し何と云っても親御さんの手許、安心ですわい、はっはは」

彼は上機嫌で一人で頻りに喋って居る。

良江はそんな彼のお喋りも上の空で、むかむかするのでサイダーをひと思いに口に含んだ。何か自分の口の故か、ピリツとそれは舌を刺しほろ苦かった。彼女は何か急に赫と胸が異様に熱くなるのを感じた。

「私、気分が悪るうございますから、失礼させて頂きますわ」

気が付くと部屋に姑の姿は見えない。

「ほ、それはいけません。横になりなさい」

彼は心配そうに額にしわを寄せた。良江は部屋の天井がくるくると廻る様な錯覚に捉われ思わず畳の上にうつ伏せになった。

九

それから数日過ぎた。

今年は太平洋の彼方の水爆実験の余波か七月も半ばというのに、肌寒い位、陰気な梅雨空は何時晴れるとも知れず毎日毎日雨が降り続き、大体夏枯れの温泉場は尚一層のさびれ様で此の処連日殆んどお茶っ引きであった。

客足が途切れると現金なもので三人居た女中は次々と姿を消し、今は清一人きりになってしまひ、姑は益々不機嫌になり此頃はかなり露骨に良江に当り散らすのである。其の日も夕刻に成ってひっそりと静まり返った宿の茶の間で、良江は近頃乳の出が悪く、牛乳でお腹をこわし勝ちな子供の世話に忙殺されていた。

姑は所在なげに煙草を吸っていたが不図、「フーさんにも困ったねえ」と呟いた。良江は先日的事件以来、彼が姿を見せないのは照れ隠しもあるうが、何れにしても彼の来ない方が気が楽である。併し何故か彼の名前を聞くとドキツと胸が騒ぐのだった。

「あの時のお勘定。半分まだなんだよ。莫迦にしてさ。此方だって斯う毎日シケていちや入る物入らなきや困ってしまうわね。それに病院から催促に來ているしさ」

良江は自分が責められている様で辛らかった。併し姑の言葉は案外隠やかだった。

「あーあ、くさくさするねえ。どうしてこう

天に雨の種が続くのかね。腐っちゃあうよ。何も彼も、ふふ、そう、良江さん」

「はい」 良江はギクと頭を上げる。

「ほ、何さ。おどおどして、何も叱りやしないよ。ねえ、良江さん。お前さん、分松葉

の福丸、御存知だろ」

良江は良く顔を見せる芸妓を思い出した。

「あれもさ。貴女と同じなんだよ。つまり、御亭主が三年も入院してるんだとさ。でもあの妓も感心だよ。女の細腕一つで入院費を出してさ。もっとも芸妓すりゃ、それ位の稼ぎもあるうからね。月十万は稼ぐよ。あの妓は、まあ、不見転^{みずたん}だけれどね。ほほ」

良江ははっと胸を打たれた。

「はは、何さ。貴女にもそうしろとは云ってないんだよ。気を廻しなさんな。父さんがついててそんな事させられますか。併しねえ、芸、芸だよ。良江さん、聞いている？」

「は、はい」

「福丸なんぞ芸なしだから、駄売るより手はないが、駄を売るのは芸妓じゃないよ。芸を売るなら何様に話したって恥じる処ありあしないよ。此の間師匠さんも話してたよ。貴女お琴出来るんだってね。それに声の筋は良いって賞めていたよ。ねえ貴女、こうして遊んでいる間に芸を身につけると得だよ。何、芸妓になろうって訳じゃなくてもさ。もし氣があるならお師匠さんをお願いして上げるよ」

「え？ でも私、出来ませんわ」

「そんな事ない。じや今晚から一寸私が教えて上げようか。何今時は一寸小唄位で良いのよ。難しい事ない。ね、観^{かん}して見よう」

姑は良江の意志なぞ無視して一人ぎめに考

えを強制してしまうのであった。

「坊やもう寝たかえ。そう、じや一風呂浴びようか。良江流しておくれ。さっぱりするから貴女も一緒に入りなさいな」

と何時になく笑顔を見せる。良江は仕方なく風呂場に伴なわれて着物を脱ぎ始めると、先に裸になった姑は笑い出して

「おや良江さん。お腰なしでズロースかえ。

ほほ、今時の娘さんはね。着物の着方も知らないのだから、洋服と一緒にしてさ、だから腰の辺が変なんだよ。特に今は薄物だから」

良江は真赤に成って駄をすくめる。

「着付もちやんとしなくちや、何ーに直ぐ上等の着物も何枚も出来るさね。お琴がやれるなら三味線だって出来るだろうよ」

まるで、もう良江が芸妓になる準備に取りかゝった様な口調である。

其晩から嫌だなく良江は三味線を持たせられて姑の教育が始められた。

十

稽古は子供の寝ている間だけだったが、日を追って来ると、昼間も清が殆んど子守で相当の厳しさになって来た。良江自身としては芸妓になるなぞ考えられもしないが、芸事は何事に依らず、やり初めてみると興味深いものであり彼女は彼女なりに矢張り熱も入って来た。五日程すると師匠も来て稽古してくれ

た。

「若奥さん、本当に筋が良いよ。」

と師匠はお世辞でなくそう云うと、姑は、「ふふ、でも、もう年だから矢張りね。芸事は十代からでない駄目ね」

と云い乍らも満更でもなく相好を崩し、

「フーさん、現金なものさ。今日、この間の勘定きれいにして行つたよ。良江が稽古始めたって何処で聞いたんだらう」

と云う。師匠はしたり顔で、

「一昨日私ん処で一杯やったのよ。その時、嫌じやありませんか。もう早合点して是非三十万位祝いの着物を新調して差上げたいって

ほゝ若奥さんも病人さんの為、そうして尽される心持には全く感激します。及ばず乍ら蔭から後援申したいってさ」

「ふふ、莫迦にしているよ。此の女はまさか商売人にする心算ありませんよ。併しねえ、あの方もあれで仲々義侠心の有る方だからそりあ力になれる人だよ。でもねえ、ほゝ」

海千山千の二人の女は意味有氣に笑った。

「処で、師匠さん、此の女みっちりやったら今からでも名取になれる見込あるかしら？」

「そりあ、私が太鼓判を押しますよ」

「じやフーさん如何だろう、その三十万もう少し奮発して私に五十万程借してくれないかしら、いえね、私も今考えているの。此処は場所が悪いし、それに宿屋も女中や板だ番だと

人手の心配が大変なのよ。不景気だしね。一
そ小じんまりと市内で芸妓屋を仕度いの」

「そう、それも良い考えね」

「その家の当はあるのよ。併し先立つ物が足りなくて頭を悩ましてるのさ。もしフーさんの方で何とかありあ、其処の二階で稽古場もしてさ。ね、好い考えでしょう」

「ほゝ、それあ好いわね」

「ねえ、一寸貴女聞いて見てよ。好く行ったらお礼するわよ。私も父さんも、もう年だろ。そろそろ楽になりたいの。宿屋は仲々重労働だからね」

良江は姑の考えが、どうやら直接自分に関係はないのだと、錯覚してほつとした。

十

処が次の日思いがけない事が起き上った。それは夜から源さんと清の姿が見えなくなつてしまい、仰天した源さんの女房が駆け込んで来たのだった。

「母さん、どうしよう。どうも私、前から臭い臭いと思つていたのよ」

「まさか、源は又どっかで飲んだくれて……」
「いいや、違う、私全部調べたわ。それに今其処でね、二人がポストンを持って東京行の汽車の中に居たのを見たって人に逢つたの」
「ふうん、本当かね。人違いじゃないかね」

姑は穏やかならざる面持になり、不図

「そういや……」

立上って茶ダンスの引出をこそそして

「良江、此処の紙入知らない？」

「え？ さあ、私存じませんよ」

「そうかえ。今朝も父さんとそれで一悶着したのよ。いいえ間違いない。たしかに此処に」

「沢山入ってましたの？」

良江はおろおろして中腰になると、

「莫迦、傍に寝ていてお前さんは馬鹿だよ」
見る見る険悪な面持で姑は怒鳴りつけた。

「父さん、父さん、矢張りそうだよ。あれやられちゃったよ。どうもあの女は手癖が悪いって評判だったからね」

「そうかい、弱つたなあ。三万程入ってた」

老主人はむつとりして答えた。

「弱つたねえ。金も金だが、早速女がなくちやあ、良江、お前気が付かなかったかい。何か又拙らないお喋りしたんじやないかい。もっとも清も此処のところ、子守許りで嫌気さしてたんだろう。仕様がなねえ」

姑のヒステリイは暴発して些細な事にも当り始め、良江は唯脅え上つてしまふのだった。源の女房も取乱して喚き出した。

「母さん、母さん、うちの人はどうも近頃、急に人が変わったの。どうせ母さんとの話も嘘だ。息子さんのお嫁が……」

「ばっばか、何を云うっ」

姑は狼狽してそれを仰える。女房もはつと

気がついて間の悪るような面持になった。併しそれは良江の胸を打たずにはいなかった。

「免も角、東京へは心当りがあるから、至急手配するよ。それよりお前さん、もし手が空いていたらその間手伝っておくれでないか」
「え？ ええ、私で宜ろしければ」

二人の女は照れ隠しに話題を変えた。その晩、良江は二人の女がひそひそ話しているのを模越しに盗み聞きして愕然とした。

「どうせ父さんにしろ、息子の方にしろ、永い事はないのさ。源も辛抱すりや好いにね。うん嫁かえ、好いのさ、あれは此方へ貰つたもの、それにあれも近頃は観念して稽古に熱が入って来たから、もう一息で稼ぎに出せるよ。何、聞えやしないさ。亭主の為、女の操だもの。本人の自由意志なんだよ」
「そうかしら、でも」

「大丈夫、私に委しておき。だがお前さんも私に口を合せて好く逃げられない様にしなきゃいけないよ。何ーにね、一遍烙印を押しや女なんて弱いものさ。案ずる事はないよ」

「ほほ、そうね、お互いそれは経験済みよ。一生苦労して来たからね。性なし男にさ。」

「ふふ、まあね、そうすりゃフーさんも本腰で百万二百万出すつてももの。あの人も物好きだよ。女にすたりはないよ。ふふ」

「そんな事ない。でも若奥さん、本当に二七なの、ま精々二十そこそこだよ」

「小作りだから得してるのさ。でもフーさんには甘一だって云ってるんだからね」
「合点承知の助だよ。ふふ」

十一

其晩は老主人は東京の心当りに手配の為、外出していたから、良江は唯一の頼りになる人がいなくて急にひし／＼と身に迫るものを感じ、無我夢中で子供を抱いて裏口から、そぼ降る雨の中へ迷い出たのである。

殆んど一文も持っていないので、彼女は生れて、始めての経験もしなければならなかった。心を鬼にして、姑の財布を握り締めたのだ。何処へ行こう。東京にはもう住む処もない。併し自分の実家の親類はある。九州の実家までは到底行けないが、免も角東京へ行こう。其後はどうするか？ そんな事は今の彼女の頭にはなかった。

真暗な闇の中に黒々と太平洋が広がり白い波頭が微かに見えた。遠雷の様な潮騒、雨は益々降りしきった。背中の子が驚いて泣き出した。不図、彼女は立止って吸い込まれる様に其海面を覗めた。耐えがたい永遠の安らぎの危険な誘いの手が其処にあるのだ。

「まっ、若奥さん、こんな雨の中で」

かん高い女の叫び声に、空虚だった良江は我に返った。ざあーっと足許に波が碎けてしづきが散った。女は源の女房の徳であった。

「まあ、良かった。良かった。さあ早くお帰えり遊ばせ。母さん、それは心配して……」

良江はゆっくり頸を徳の方へ向け、憐れむ様に微かに笑った。逃げる事に失敗した。併し其処まで追いつめられると、不意に彼女の胸の中に負けるものか、と不逞な考えが、むくむくと頭を擡げて来たのだった。

「どうしたのさ、此んなに晩く雨の中を。」

姑の厳しい詰問に、良江はけろっとした表情で静かに答えた。

「一寸、散歩に」

「何っ、散歩？ 莫迦におしでないっ。貴女は私の財布お持ちだろう。」

「あら、済みません。一寸甘い物が……」

「何ですって、白ばっくれて、今貴女に無分別な考えを起されたら今まで私が折角良かれと思つて一生県命尽したのが台無しになるじやないの。そんな人を踏み付けは許しませんよ。まあまあ、坊や迄こんな濡れて、お可哀そうに。徳、徳やお前さん早く坊やをお風呂に入れて上げなさい。風邪でも引かしたら大変よ。若いお母さんって本当に仕様ないもんだ。今、坊に病氣されたり、又貴女が患つてもさ、そんな事になったら、病院に居る人は如何なるの、分り切った事でしよう。病人さんは貴女一人が頼りなのよ」

姑は自分で自分の言葉に昂奮して来ると、いきなり筋張った手を上げて良江の頬を打つ

た。

「あッ、あれっ、勘忍して、お姑様」

良江は眼が眩んだ思いで、横倒しに転って両手をつき出して防ぎ姿勢になった。その若い女の姿態に姑の今迄抑圧されていた嗜虐的な性情が一度に暴発してしまった。容赦もなく姑は良江の躰に馬乗りになつても自分自身を制せられず良江の裾を捲り上げ、白い臀部を電灯の下に曝け出して、無我夢中で叩くのだった。良江は姑の小肥りの体に押しひしがれて僅かに悶えるだけだった。

「あッ、おお、おお、勘忍して、あッ」

白いふっくらした二つの小山は、みるみる赤く染まってくき、良江は苦しがつて足をばた／＼跳ね上るのであった。

「どうだ。少しはこたえたかえ。さ、今から心を入れ替えて稽古に熱を入れるか。皆、お前さん自身の為、又子供や亭主の為なんだ。腹をすえて返事をおし」

良江は、此の乱暴な脅迫にすっかり圧倒されて

「は、はい、はい、一生懸命。もう勘忍」

と胸の上に姑の重い尻がある為、息もたえだえになつて呻いた。

「今度逃げたりしたら承知しないよ。夜だつて昼だつて縛っておくから」

「は、はい、もう決してしません」

「じゃ今晚からは本式に私が仕込むからね。」

今迄の様な甘っちょろい事じや物になりやしない。私なんざ仕込つ妓の時は、そりあもう毎日生傷が絶えた事なんざなかったよ。お前さんを私しや芸妓にしようってんじやないんだ。立派に芸だけで身の立てられるようにって、並大抵の苦勞じやなんいだよ」

漸く姑は良江を解放した。良江は躰を起し乱れた裾を直して坐り直し一寸頬をしかめたが泪を見られまいとうなだれた。

「おやおや、母さんどうなすつたの」

徳が廊下から声をかけた。

「いや何でもない、良江さんは又今から稽古するってから、お前さん、坊やのお守りして頂戴な。どうせ当分客はないよ」

「そうですね。じや若奥さん、私確かに坊や引受けましたから御安心なすつても母さん自分達の若い頃見たいな厳しい仕込方は今の方には無理よ。それに若奥さん、お弱そうだしさ、ふふ、びっくりなすつたでしよう。でも芸事を身につけるって皆大なり小なりその苦勞をして来ているのよ。私なんぞ寒中素裸にされて井戸端で水を浴びせられた事だってあったわよ。ほゝ、恥しいなんて、そんな甘っちょろいもんじやないの。夢中よ、あゝ今日とはとちったから酷くらやれるなって時は、もう自分から観念しちやったわよ。ほゝでも才能のない者は結局何しても駄目、でも若奥さんなんぞ、良い筋だってお師匠さんも仰言

つてたし、大丈夫直ぐ楽になりますよ」

十三

時計が一時を物憂氣に打った。良江は流石に今日の疲れでつい／＼臉が重くなり其の度に、姑は焦れて彼女の膝を強く抓った。

「駄目っ、緊張が足りない。もう一息だよ。」

さ、眼をしっかりと、ちえっ、駄目ねえ、じや眼をさまして上げましょうか」

「え？ いえ大丈夫です」

良江はぎく／＼として躰をすくめた。

「駄目駄目、なっちゃあいない。さあお風呂場へいらっしやい」

といきなり強く手を引っ張られた。

「あつ、勘忍して下さい」

もう脅えきつて腰を下ろそうとする彼女を姑は、ずるずる引っばって行った。

「さつ、着物をお脱ぎ手間どらせると酷いよ」まだ躊躇っている良江に、姑は待ちきれぬように荒々しく浴衣をはぎ始める。

「あつ、おお、おお、どうぞ許して」

「いいえ、素直になるのよ」

「はい、はい、なりますから」

良江は、ぶるぶる震える手で浴衣を床に落した。湯文字一枚にされると赫々と屈辱が全身に燃え上ったが、もう夢中になってしまった。

「さあ、大人しく其処に坐るんだよ」

わなわなと戦き乍らも、良江は示された通りタイルの床に坐った。ひんやりとした石の感触がぞく／＼と背筋へ抜けて混乱した理性が冷されて彼女は改めて無惨な自分の位置を意識しない訳にはゆかなかった。

と思うのも一瞬で、もう次はざあ／＼と冷たい山の清水が頭から浴びせられた。

「あつ、ぶう、うっ、おお、おお、どうかも勘忍して下さい」

彼女は仰天して身を反けぞらすと、姑は素早くその腕を握えた。何と云う力だろう。姑は十八貫も有る大女だし、十一貫そこそこの小柄な良江は如何に若いといつても到底敵い難い事を観念しなければならなかった。

「これ、動くの。動くと縛るよ」

「あれ、動きませんから、もう、あゝ」

「いいえ、駄目よ。さあ手をお出し」

姑は腰紐を握んで云った、良江は射すくめられた様にもう姑の云いなりだった。素肌の胸に絹の腰紐がぎ／＼と締め、後手にされた手首に感覚を失ってしまった。そして濡れた紐タイルの床に転がされると別な腰紐で足首が縛られ彼女はもう完全に観念して海老の様に体をすくめた。

(次号へ続く)

〔本稿の挿絵は、限定版サディズム特集号に掲載の予定です〕

「コルセツトの魔力」

林 靖 彦

それは忘れもしない、今から八年前の正月のことでした。私は母からたのまれ、母の代理で、叔母の家へ年賀にまいりました。

その叔母は母の末の妹で（母は四人姉妹の二番目です）年齢は母より十歳下で、三十二歳でした。叔母は一度結婚しましたが、どういふわけか、三年程で別れ、そのまゝ、ずっと独身でいました。私の母や兄弟達にすゝめられても、それ以来再び結婚しようと思わず、横浜市の山手町で、外人相手の婦人洋品店を開いて結構やっているのです。御承知の通り横浜は貿易港ですから、外人が沢山いるのです。叔母は洋裁学校を出ていましたので、自分でもデザインをして婦人服などは仕立てていたようです。

さて、その日は正月の七日で、もう三ヶ日もすぎ、殊に外人相手の商店街では、それ程の正月気分は見られませんでした。生憎家でもお正月早々色々用事があって遅くなってしまったのです。

叔母の家へ着いたのは昼すぎでした。店へ行ってみると、丁度店の公休日で、いつもいる二人の女店員も居りませんでした。叔母が一人で婦人雑誌を見ていたところでした。話が少し前後しますが、叔母は私達姉弟（姉一人弟一人）の中で私を特に可愛がっていました。だから、その時も私が行くことを主張したのです。それに丁度、学校を卒業したばかりで家に居ました私は、外人相手の叔母の家へ行きますと色々珍らしい外国の雑誌などが見られるので、暇があると叔母の家へ遊びに行っていたものです。子供もなく一人暮らしの叔母はやはり寂しいのか、私が行きますと、いつも快くもてなしてくるので私もつい甘える様な気持ちになっていました。

その時も喜んで中へ招き入れてくれた叔母はいつもの様に私の家の近況などを聞き乍ら早速私の大好きなコーヒーを入れてくれました。当時はまだなか／＼純粹のコーヒーなどは手に入らなかった頃ですから、私にとっては何よりの御馳走でした。そして外国の雑誌などを見乍ら話をしていました。ふと気が付くともう外は暗くなっていました。私は母が心配するからと言って暇をつげようと思すと、叔母は、「いいじやないの、靖彦ちゃん。正月なんだし、店の子も休暇で居ないしどう、泊っていったら、お母さんには電話でよくたのんであげるわ、そうしなさい。」というのです。そういえば、それから帰っても、別にすることもなかったもので、私もとう／＼その気になりました。叔母は早速電話で家に話をしてくれましたので、私はその晩叔母の店に泊ることになったのです。

叔母は、「何か美味しいものをつくってあげるわね」と言っておハムエッグスを作ってくれました。食事が終わると、叔母は「どう靖彦ちゃん、ダンスしない？」と言うのです。然し私はまだダンスなど一度もしたことはないのので「出来ないんだけど」と言いますと、「大丈夫、やさしいのを踊るから、すぐおぼえるわよ。これからの若い人がダンス位知らなくちやあだめよ」と熱心にすゝめるので、私もとう／＼その気になり、叔母がレコードをかけました。

始めの一曲を何もわからずフラ／＼と乍ら踊った後、叔母は妙に熱っぽい眼つきで「ねえ、靖彦ちゃん、あなたが好き？」とさくのです。食後に無理に飲まされたウイスキー

キーのせい、頬がほてり胸がドキ／＼してきた私は顔を紅くし乍ら、思わず「うん」と言ってしまう。叔母は母に似た優しい顔でニツコリ笑い乍ら

「それじゃ私の言うことをきくわね、誰も今夜はいないのだから、分りはしないわ」そう言いつて私にうむを言わせず、何かポケットから黒い布の袋をとり出し私の顔にスッポリとかぶせてしまいました。耳は聞えますが、何も見えません。「少しそのまゝで、がまんしててね」そう言う私を抱きかゝえて、傍のベッドの上にねかせ、上着から下着までアツと言うまにとつてしまうのです。私は少しは抵抗しましたが、酔も手伝った好奇心のため叔母のするまゝになっていました。室はガス・ストーブが入っていたので、寒はありませんでした。叔母は私の胸に何やらつけさせ、今度は、あおむけにさせ後についている紐の様なものを引っ張りしました。すると次第に胸が締ってくるのです。そしてきつく締ってゆくうちだん／＼胸苦しくなってきました。

「叔母さん、少し苦しい」と言いますと、「もう、じきのがまんよ」と言い乍ら「どうも、まだ、だめね」と呟いていましたが、ベッドの上に飛び上って、いきなり足を私の背中にかけ、グット紐を締めつけました。私は思わず、「ウワッ！」と悲鳴をあげてしまいました。腰の上のところが思いきりギョツと

締めつけられ、口からは、今迄たまった唾液が溢れ出しました。叔母は背中のところでは何かカチ／＼音をさせていましたが、やがて

「サア、いいわ、靖彦ちゃん、起きてごらんなさい」そう言うと同時に頭からかぶせた布をとり私を部屋の隅にある三面鏡のところへつれてゆきました。「サア、みてごらんない」と言われて私は鏡に映った自分の姿を見て思わず「アッ！」と叫んでしまいました。どうでしょう。男性である筈の私の身体は、胸のところがまるで女の人の様にムックリと盛り上り、腰が突き出ているではありませんか。

「どう、あなたのスタイル、素敵でしょう。全く素晴らしいわあ」叔母は一人ではしやいで手を叩いています。私はきまり悪いのと、恥しいのとで、とつてくれと頼みましたが、「駄目よ、もうあなたは私のものになっちゃったのよ」と云って聞いてくれません。

「いやです、家へ帰るんだから、とつて下さい」と懇願しましたが、「ホホホホ、とれるものならとつてごらんない」と言つて自分は椅子へ腰を下しました。私は急いでベッドのところへ行き、とろうとしましたがどうしたとか、びくともしません。後の紐のところには何か鍵の様なものがついていて外れないのです。後で知ったのですが、叔母は私につけさせるために用意しておいたもので後に鍵

がかゝる様になっていたので。やがて私は苦しさのために、起き上っていることが出来ませんでした。口からはどうしたことかネバっこい唾液が後から／＼流れ出てきます。

「どう、とれないでしょう。あなたはね、私が貰うのよ、明日お母さんにそう言つて、私の養子になつて貰うわ。もうこゝからは出しませんよ」と、さゝやきます。

「苦しいから、ゆるめるだけでもゆるめて下さい」と頼みましたが、「だめよ、これからもうずっとこれをつけてるのよ。これなんだか知っている？」私は口をきくことも出来ないものでだまつて首をふりますと、

「コルセットよ、外人のお洒落な人は皆つけてるのよ、私はね、前からこれを靖彦ちゃんにつけさせたくてたまらなかつたの、でもチヤンスがなくて出来なかつたのよ。だけどトウ／＼はめることが出来たわ、もうはずすものですか」そう言つて叔母は笑窪のある頬を崩して笑うのでした。

翌日、出勤してきた女店員に私の見張りをさせると叔母は私の家に出かけた様子です。母も反対した様でしたが、暫くは叔母の店で仕事を手伝うということで、話がきまつて、それ以来、私は叔母と一緒に暮すことになつてしまいました。始めのうちは何度も、叔母の家から逃げ出そうとしたのですが、胸にはめられた鍵付のコルセットのため外へ出るこ

とが出来ず、辛抱していました。取ろうとしても背中が鍵が、かゝっているのではずれないし、ナイフで切り開こうとしても、肌に直接ピツタリつけられて、喰い込んでいるので切ることも出来ません。体裁のいゝ拷問具です。とうとう私も観念してしまいました。幼い頃から美少年だと言われた私が、叔母に見込れてしまったのです。

それ以来、叔母は様々なコルセットを作っては私にはめさせました。今では、もう全く女性と交わらなくなっていました。男であり乍ら、女の人以上に胸も腰も、むっちりとして盛り胸はくびれて、洋服を着ても女としか見えません。

昨年奥歯がムシ歯になったので、半年程近くの歯科医に通いましたが、少くも男だったとは見破られませんでした。始めはとてつもないやでしたが、然し今では叔母のしたことを感謝しています。

最後に、現在私の常用しているコルセットについて簡単に述べてみます。

入浴は大体五日に一度位で、その時は叔母がコルセットをはずしてくれませんが、それ以外はいつもつけたままです。そして一ヶ月に一度、コルセットのサイズを少しずつ細く締めてゆきます。現在は十六時七分ですがもう全く文字通りの蜂腰で自分のこと乍ら驚くばかりです。今ではもうコルセットは自分の肌と同じで、たまには入浴の時などはずすとかえって、とても変な気持ちです。入浴が終り、叔母がコルセットをはめてくれる時、ギョツギョツと紐を締めてゆくにつれて、胸と腰がむっくりと盛り上ってゆくのを鏡にうつして

見ている時の気持ちといったら——一寸はめたことのない人には想像もつかないだろうと思います。生れ乍らの女性にしてコルセットをなさらない人の気持ちが分りません。

タイトスカートをはくと、自分でも惚れ／＼する様な素晴らしい腰の線が出来ます。私は遠く出かけない時はいつも六時のハイヒールをはきますが、近頃はアマチュアの写真家の人が多いせいでしょか、必ずといって

いゝ位、それらの人々にスナップされてしまふのです。

現在男性との交際は叔母の命令で厳禁されていますので御ことわり致しますが、女性の方でしたらちっとも差し支えありませんからもし御聞きになりたいことがありましたらどうか御遠慮なく御手紙を下さいませ。

以上の私の告白を御読みになって信じられない人もあるかと思いますが、『事実』は小説より奇なり」と申します通り、私の体験もその一つだと存じます。

この手記を発表することも叔母はなかなか許してくれませんでした。今度、素晴らしい(というよりは、凄いと云った方がいいかも知れません)コルセットをはめることを約束して許してくれました。

今迄に色々なコルセットをつけさせられて馴れている私も先日このコルセットを試験的にはめさせられた時には、とうとう一晩中眠ることが出来ませんでした。それについてはまた後で発表致しますよう。

(終)

歴史「変った切腹の掟」

山中同人

徳川時代に入って切腹形式が非常に美化されてきたことは皆様よくご存じだと思います

が、私の仲間(奇巧購読の)一人に徳川時代ずっと東北の某藩のかなり要職をつとめて今

まで続いている家があり、その家系に変わった掟があることが伝わっているので、皆様にお知らせします。

この家(T家)は先祖が身分の低い武士で幼少の主君の供をして野郎中に暴徒に襲われ主君を逃した後、敵と奮戦し立腹を切つて臍

腑を敵に投げつけて自決したという謂れがあり、以後この家は死罪は男女、仲間、女中に至るまで切腹のみという掟が決められたそうです。その作法も武張って原始的で、男は白木綿のじゆばんと袴だけ、女は同じく白木綿の二布、じゆばんに晒のしごきという服装で諸肌ぬぎ、一文字又は十文字に引廻し、臓腑を膝の上に引出して介錯を受けるという残酷なものであったそうです。

T家には伝来の日記様のものが戦災前まで土蔵にぎっしりつまって居り、吾々も一部を見ましたが、明治前までの刑罰の記録も用人が細かく記して残してありました。それによると明治まで約二百年余の間に八人も切腹者があり、五人は男、三人が女であったとあります。一人一人の記録はよめぬものも多く焼けてしまつて分らないものもありますし、今ではほとんど忘れてしまつて残念ですが、変ったのはちよつと記憶に残っています。

男はたしか五人の中三人は掟通り臓腑をつかみ出して介錯を受け、死後T家の墓に葬られてあります。申し後れましたが、掟通り立派に切腹した者は罪を取消され、T家の墓に葬り遺族に見舞金が贈られた由です。ところが残りの二人の中一人は、二十三才の武士だ



つたそうですが、柔弱者で切腹を命ぜられた前夜はわめき立てて眠らず、当日、席についてもがた／＼ふるえ左脇腰を三寸ほど切るともう「介錯介錯」とわめいて介錯を受けたそうです。後の一人は記事を虫がくってわかりませんでした。女ではじめて切腹したのは十九の女中だったそうですが、拝領の器物をこわして切腹を命ぜられ、比較的悪びれず席につき臍の少し上を五寸位深く引廻し、刀を抜くとが／＼前へのめりましたが、介錯人が「しっかりせよ」と大声で気付けると、左手をついて体を起し、右の指を腹にさし込んで腸を二、三寸引きずり出しましたが、力つき苦しい苦しいとわめきつつ打倒れて苦悶し、裾もあらわにもだえるので介錯もかなわず、あうのけに押さえつけ、咽喉へ止めを刺したとありました。

『いさらひ、隠し所をあらはし見苦しければ

以後女は切腹の折別に下袴をはかせ申すよう定め申し候』(原文のまま)

というような記述があったのを覚えています。田谷氏などの女性切腹例と比べて昔も今も変りないことがよくわかり面白く思います。下袴というのがよくわかりませんが今の木綿のパンツのようなものではないでしょうか。二人目は三十才位だったと記憶しますが、特に記述がありません。三人目は十七才の女で不義が暴露して男女とも切腹になりましたが女が妊娠中だったので分娩まで待つかどうか迷っている中に腹が大きくなり切腹した時は六ヶ月だったそうです。それでもわるびれず大きくふれた腹を出し、臍の二寸程下へオウツと気合もろ共突込みキリ／＼と引廻すと血と子袋(子宮?)の水がどつと流れ出し、じゆばんも畳も血で真赤になり歯を食いしばって苦しみつ／＼切口に手をさし入れたが臓腑は出ずもだえるところを見かねて介錯人が切りつけ五太刀で首を落したそうです。

立派に切腹したのは男に多いようですが逆にほとんど腹も切れぬ者もあったのに対し、女はとにかく苦しみつつも掟を守り通そうとして居る点は武家時代の女気質をよく表わして居り、女の服装が途中で二布から下袴に変わり陰臀部の出やすい服装をさけたことや、妊娠女性に切腹させた頑固な武家制度がかなり面白い材料を提供していると存じお知らせ致しました。



春木俊野

私のマゾ・スクラップ帳より

〜 其の略筋と抜粹 〜

一昨年十二月号本誌々上で「私のマゾ・スクラップ帳より」として私のマゾ関係のスクラップ分の大ざっぱな紹介をさせて戴いたが今度は同じもの乍ら、大体のそれらの略筋とマゾ的な箇所を抜粋を併せて御紹介したいと思う。

只、マゾ関係分を集めるに当って、大てい其の当時の雑誌一冊の中に、マゾ物というのは一つでも読物か又は絵画があったらいい方だった程なので、殆んど其の部分だけを抜き

とって集録している為、果して何と云う雑誌の何月号にそれが掲載されていたかが不明の分が多い。然し判る限り、それらはハッキリとさせたが題名及び作者名だけは間違いなく書き表わしたつもりである。ただし順序はスクラップ帳の一頁から開いてゆくので全く不同である事を御断りする。

昭和二十三年か四年発行の読切ロマンス、月号不明だが、此の雑誌の口絵に「歪められた異常愛戯」と云うのがあって、女の加虐症

に男の被虐症という項が解説、医学博士、小林正二、作画佐野博によって十五頁にわたって描かれている。犯罪心理学上よりみると、女の方が男よりも、いざとなると惨忍性を發揮する事が多いと云う処から始まって、赤いしごきで男の首を締める女、後手に縛りあげた男を鞭打つ女、少年を鞭打つ未亡人、老人を責める十八娘、男を馬にして這い廻らせる女、男の頭をハイヒールで踏みつける女、ベッドの上で男の胸の上に馬乗りにつけて首をしめつける女等の絵画が阿部定、江戸時代の草紙「忍草」鞭撻症等の説明と相まって描かれてある。そして最後にそうしたマゾヒズムの男の絵画をみせ乍ら、男に駄々をこね、男が困った表情をするだけで、恍惚となる女がいる。此の程度のサディズムはむしろ病的とは云えない。靴で蹴り或は鞭で打ち叩くのも公然と人前で行いさえしなければ犯罪とはなり得ない。問題はそれが昂じて相手の男を死傷させた場合である。お定が情夫を殺してしまったのはサディズムが昂じた結果で、殺された男は無上の悦楽に身をふるわせ乍ら死んでいたのだから本人にとっては幸福といえよう。此の項を結んでいる。

次に矢張り此の本だったと思うが「女上位の悦楽境」というアマトリア読物として、一、愛妻は寝室で乗馬の練習 篠本文郎作 一、夫婦の位置を逆転して暴君の夫を征服し

た細君のお手柄 仙石規男作

一、夫を乗り潰した騎馬夫人 島陽子作

一、荒馬を乗りこなす馬乗り芸者 鯨孫六作

一、逆もまた真なり、と云う体位 吉良美也

香作と五篇の読物が出ている。

挿絵も本文に忠実に描かれていてマゾヒストの悦ぶ読物である。弱き者は女なり——なんて云ったのは昔のお話、生活力は、いざとなれば女の方がはるかに強い、だからもし、関房に於ての力が本当に發揮されたとしたら男子専制の夢など一朝にしてひっくり返り、それこそ本当に女上位時代が到来するだろう。それかあらぬか、世の多くの御円満な夫婦では、いわゆる女上位家庭がシツクリいつていく様である。と女性が大いに男性を乗りこなさなければ駄目だと強調している。

「桃色ストリップ夫婦」モダン夫婦生活、月号不明 榎木新作

或る夫婦の家の隣りに新婚夫婦が越して来るがその夫婦が毎晩の様に「ナオミごっこ」を開演する。即ち痴人の愛の主人公、ナオミの様に夫を馬にしてよろこんで遊んでいる夫婦なのである。それから妻の足にキスをする夫の場面まで見せられる。そういった事に刺戟されて五つになる子供を持った夫婦が、いわゆる倦怠期を脱するというユーモア読物。デカメロンの「裸女と人間馬の恋」谷尾一歩作、これは沼氏の手帖に紹介されているの

で省略する。

「悪趣味遊興」沢沢秀雄作 小野佐世男画

これは何の雑誌だったか不明、たしか昭和二十二年頃のうすっぱらな雑誌だったと思う。此の中に四十がらみの脂ぎった道楽者、干野という男がミズテン芸者に自分の上に馬乗りたに跨らせてぎゅうぎゅうおさえつけさせる姿を皆に見せないと気のすまないヤマイをもっている事を書いていて、小野佐世男独得の筆法で男に馬のりになっている女の絵が出てくる。同じ此の雑誌で「英語の先生」と題して丸木砂土作、中年の金持の紳士にまつわりついてくるチャッカリ娘行状記ともいうべきものがあるが、此の娘が中年の紳士をトリコにする一つの手管が男の上に堂々と馬のりに跨ってしまふ事である。中年男の鼻の下の長さを描いて妙ともいうべき一作。

昭和二十四年発行のシルエット（小型本）

これに××を買う男というのがあるが、女の××××××××××をのむ男の話が出ている。これは一応の理屈がついていて病気をなおす薬となる事が書いてある。

「女身讃」夏川文章作

これもどの雑誌だか不明だが、巻頭言として書かれたエッセイの様な一文、マゾ的な事は一片だにないが、いずれの時代、いずれの国、いかなる民族でも若い女は常に美しいと題名通りで女性を讃美して余す処のない論文

マゾの吾等を悦ばせる女性尊重論文ともいえる。

「魔窟館の妖女」 八木兼一作

舞台は大阪、此の繁華な街の何処かに未亡人クラブがある。此のクラブへ連れこまれた一人の男が散々女性達からあそばれ責められ、果は嫉妬からおこる惨酷な女性同志のリンチまでみせつけられる読物で百枚以上の読物。此の男が未亡人クラブの五人の美しい女の一人／＼の足を這いつくばって舐めてゆく奴隷宣誓の光景が長々と書かれてあるが少しもあきないで読んでゆける。

「馬も乗りもの乗られもの」 六部京介作

艶笑桃色コントの名の通り、藤原時代を戯画化して関白右大臣が美女の馬となる話、始めから終りまでマゾ愛好者に快い笑いをおこさせるコント。

「男を蹴とばす女」 浜本 浩作

浅草を描かせたら類のない浜本浩作の作、こんな雑誌に書いたのは珍しい程といっても残念乍ら誌名不詳、或る老人が浅草六区街を回想しての独りしゃべり。浅草の持つ不思議な肌と人情の世界をみせ乍ら淫欲奔放な肉体女優ナナ子とその情夫花川チエリオの物語。題名は演しものの中に金色夜叉の熱海海岸の場で貫一ならぬお宮が男を蹴とばす艶笑劇になぞらえてつけてあるが挿絵にも一寸傑作なのが

「毛皮を着たヴィナス——変態性慾者マゾッホの正体」 毛利清一郎作

これはオーストリアの作家、ザッヘル、マゾッホの生涯と作品を紹介した読物である。そして此の作者もマゾヒストかと思われる程マゾヒズムを礼讃している。即ち異性から受ける苦痛を甘受するばかりでなく、そこに却って快感を得ると云う此の病的性慾はどちらかと云えば女より男に多い。(中略)それ故多くの性心理学者によってマゾヒズムはサディズムより一般的であり、同性愛以上に広く流布されていると論じられている。

又、マゾヒストは感受性の強い、洗練された芸術家気質を持った人に多い処から、此の傾向は文明の進歩と並行しているとさえ云われている。と論じている。

「青春変態講座」 作者名なし 雑誌名は確か「アベック」で何年か不明だが一月号、此の第一講が、長襦袢を嗅ぐ男、第二講が、女のお馬になりたがる男、挿絵に物差しを鞭の代りに持って男を四ツ這いに馬乗りに跨っている女性が出ている。

「愛情はふる鞭の如く」 一刀研二作
モダン読物、第二号、マゾ小説ではないが読んでいて思わず微笑みを持つ様なマゾ的な感覚があるユーモア小説。

「楽屋の裏」 渡辺 弘作 同誌同月号
或る地方廻りの劇団内でのイロ話。此の中

にキン子という肉体女優がいて万才師の東屋青助と同棲生活に入るが全くの女王と奴隷の生活である。キン子は青助に猿の真似を演じさせては部屋中を笑い転がっている。そして本文に、その他青助を四ツ這いにして其の馬にキン子が跨り部屋中を廻らせる事がある。そんな時でも女王の前で青助は羊の様に従順である。彼女を失う事はもっと恐ろしい事なのでじつと我慢しなくてはならない。こんなキン子の暴君振りにはあらゆる生活の中まで延長される事は勿論である。——そして最後に青助はキン子から捨てられる。青助は死を決してキン子を殺そうとするが却ってキン子に突きとばされ、馬乗りになり、おさえつけられてしまう。皆がとめてくれて其の場は何とか収まったが、勿論青助はその夜、自殺する様な事はなかった。と此の小説を結んでいる。なか／＼味のある面白い読物であった。

「白夜の美少女」 秋谷澄夫作

昭和二十三年頃軟派楽雑誌と銘うっていた「ペーゼ」に掲載されていたと思うが一寸わからない。若き教師と女学生の話。

「小母さん、葉村先生いらっしやる？」

鮎沢エミは階下の裏口から声をかけた。まだ八時を廻ったばかりである。

「ええ、まだ寝ていらっしやるでしょう」

小母さんが人の好きそうな顔を出すとニッコリ笑った。葉村の下宿先であった。エミの

住む阿佐ヶ谷より一駅目の荻窪までの丁度真中の×町に彼は下宿していた。(中略)エミはそっと襖を開いた。清潔な白のセーターに白のズボンという彼女のスタイルは敏捷なリスを思わせてあどけない位であった。

そと、しかし早く部屋を見廻した。エミは静かに襖をしめると、わざと四ツ這いになって枕許までいざり寄った。葉村先生は仰向けに眠っていた。白哲の顔から知的なものが溢れ出ていた。眼をあけば、眠りによって疲労を回復した筈の元気いっばいな顔が間近かに置かれてある。

「せ、ん、せ、えー」

エミは甘えて唇をとがらした。それから矢庭に彼女は葉村の布団の上に大きく馬乗りにとびかかった。

「あッ」

驚いて飛び起きようとする葉村の頸を、エミは馬乗りになったまま両手で締めつけた。

「あ、あゆさわ君じやないか」

葉村は擦った様な少女の重量感に快い朝の空気を感じ乍ら……

そして此の通りの挿絵が綺麗に描かれてある。

「愛慾に狂う女」 鹿火屋一彦

これは確か本誌で紹介されていたはず。

「情痴の街」 米田廉太作

これは「魔窟館の妖女」と月号は違ったが

同じ雑誌で中篇読物。

此の小説は登場人物が非常に多く、それにその行動は全く多事多彩である。

大阪の歓楽街の中にある酒場エグモンドに勤めるミチ子と、その情夫石川の別れ話から此の小説は始まるが、ミチ子は石川が好きで好きで別れたくない。然し負ける事の嫌いな彼女はそれなりの自信をもっていて、彼が自分の身体が欲しくなって現われた時、逆にウンと苛めてやろうと考える。ミチ子の朋輩のルリ、そのルリに血道をあげる山下、ミチ子が好きだった石川がいるためにそつとみていた坂田、その秘書の寺島等がミチ子と石川が別れた事から別な方に発展する。その交うてゆく筋の中にルリの恋する男、西尾の登場となる。彼は矢張り或るホールのバンドマンである。此のホールに又、トヨという肉感的な女がいて彼女も又、西尾を追いかけて廻している。処が此のトヨが持ったパトロンがミチ子と別れた石川である。だがトヨには彼は経済的面の男としか考えていない。西尾は男か女か判らない様な中性的なタイプ。こういう男におてんばに近いトヨは金を貢いでいるがそれだけに彼女的手中に彼の行動は握られている。だが西尾の本当に好きな女はルリである。ルリには老いた母がいるが、その母は病気でねているので彼女の生活は大変なのだ。それを助けている西尾はトヨの貢ぐお金があ

るからやってゆけているし、事実又トヨから入るお金はそのままルリの処へ入ってゆく。坂田とミチ子、山下とルリの話をもつくらせ乍ら西尾とトヨの行動が出るが、これがサドとマゾなのだ。トヨは女のカンで何かしら西尾に疑いを持って彼を責める。彼女は西尾の頬を打つ事は当然の様に思っているし、西尾はそれに反抗の出来ない事を自覚している――。だが西尾はトヨとのアブノーマルな関係から逃げよう逃げようとしてはトヨに惹かれていて。いつも彼はトヨに別れてくれと話しに行くが馬のりに跨られて首をしめられたり、血がにじみ出る程、身体をかみつかれては、彼の方からトヨに離れられなくなってしまうのだ。そんな西尾を歎き乍らルリは山下と関係を持つ様になる。処が或る夜、坂田はトヨのいるホールで、トヨにルリと山下が最近仲がいい様だけどの話からルリと西尾の話が出る。

それからトヨとルリの対決があるが、其の夜、そんな事を知らない西尾はトヨのアパートに呼ばれて此処で、トヨの責め折かんに逢うのである。じわ／＼と真綿で首をしめられる様にルリとの仲を白状させられ、散々打たれたあげく両手を後手に縛られ両足も縛られて足首を後手の手首と一緒に結えられてしまふ。そうして撲られ蹴られ踏まれて、西尾もトヨも憎しみを越えた愛情を覚えた頃、

石川がトヨのアパートへやって来る。だがトヨは石川をみてしまったけれどもドキリともしない、お金も見栄もいらぬ程、彼女はサドの悦びに酔い痴れていたのだ。

ルリはトヨから散々皮肉をいわれ、果は西尾が飼っているも同じ男だと宣言された夜、――即ち西尾がトヨに責めさいなまれている時――西尾のアパートを訪れて朝までまんじりともせず西尾を待っている。其処へ顔は紫色に腫らし、身体中傷つけられ、縛られていた跡を手首にくっきりと残して西尾が今にも倒れそうに帰って来る。此の朝、西尾とルリはお互の真の愛情にふれあう事が出来る。

一方、トヨにも嫌気をさした石川はミチ子の事を後悔する様になる。だが此処でミチ子は坂田と仲のいい処を見せつけて見事、石川に復讐をする。此の時の坂田とミチ子の甘い会話のあとにこんなものがある。

坂田が彼女の耳許で何かさゝやいた。
「いや、そんなの嫌」

「お前、今、何でもいう事をきくといったじやないか」

「でもそんなの嫌よ、トヨの処へいらっしやいよ」

というのがあるが、女に苛められでみたい男が此処にもある事を知る。

フェミニストの男が多く登場し、西尾とトヨの女サドと男マゾは、当時、男性マゾを扱ったものゝ少い時だったから私には全く宝物みたいな存在の小説だった。



甘美なる被虐の幻想

沢 清 克

晩春のなま暖き或る夜の事、赤や青の美しいネオンきらめく盛場の小路を一寸折れた、こんな所に、こんな淋しい場所がと思う様な薄暗い空気を散歩していた私は、アッと叫ぶ間もなく、突然妙にしなやかな腕が蛇の様に首に巻きつき、悪臭の強いハンケチが唇と鼻穴をふさぎ、次第に気が遠くなって深い谷底に落ち込む様に、怪人のやわらかい白い腕の中にくずおれてしまいます。ふと気付いた私は素裸にされ、息苦しいまでに猿ぐつわをかまされ、大きなまな板の様な台の上に手足を大の字に広げ、きびしく縛りつけられているのを知りました。人の気配にギョツとして横を見ると、薄暗い部屋の片隅に、ほの白く浮き出て見える妖艶な美女が、ニッコリ微笑を浮かべながら私を憐れむ様に見下していたので

す。

「やっと気がついた様ね。でも可哀想だけれど、もうすぐ私の為に生贄になって頂だかねばなりませんわ。聞いてくれる？ 実は私の身体の中には恐ろしい病毒が有るの。それをおす為には、貴方の生きものがどうしても必要なの。私の様な美しい女の為に命を献げる事が出来るなんて、本当に貴方は幸運な人ね、どう？ 嬉しいと思わない？」

冷酷無惨な此の言葉に、私は全身に冷水を浴びせられた様な恐怖を感じ、未練がましく手足を強く引いて見ましたが、頑丈な太いロップはびくともしません。しばらくは、必死になって気が狂った様にもがいていた私は、ます／＼固く手首足首に喰い込む荒縄の痛さに悲鳴をあげ、うらめしそうに女の顔を見上

げました。そしてやっと、彼女の不思議な魅力に気付きました。恐ろしい言葉に似ない美しい顔、大きくエキゾチックな黒い瞳、形良い鼻、燃える様な赤い唇、そして肩まで垂れ下った豊かな黒髪、それにもまして男の情慾を誘わずにはいない素晴らしい豊満な肉体の曲線、殺風景な此の暗い部屋の中に、パッと明るい豪華なドレスの露わな胸のあたり、こんな盛りあがった乳房の色の白さが、不幸な生贄として腹を裂かれねばならぬ自分の運命を忘れさせてしまい、うっとり魂が抜けた様に見とれているのでした。

「どうやら観念した様ね。でもお情けで麻醉注射だけは、して上げるわ。有難く思いなさい」

そう云った彼女は飛び散る血を嫌ってか、

まず豪華なドレスを脱ぎ片隅へ片づけ、まばゆいばかりの肌をパンティ一つに包んで、一本の太い注射器を持って私の横腹の辺りに座りました。すっかりあきらめた私は「どうとも勝手にするが良い」と云わぬばかりにおとなしく目を閉じ、手足の力を抜いてぐったり台上に横たわります。

「案外往生がが良いのね。さて何処に注射しよう」

と云ったかと思うと、左手がぐっとお臍の辺りをおさえました。ハッと思った瞬間、お臍の穴にチクリと鋭い痛みを感じ、針がプスリと突き刺さりました。つゞいて注射液がシユーツと注入され、何だか臍のまわりが痺れて来たようです。

「どうやら薬が効いて来たようね。さていよいよ料理を始めるかな」

何時の間にか注射針は、お臍から抜き取られ、右手には見るも恐ろしいドキ／＼する様な刃の細長い肉切庖丁がしっかりと握られています。「アーいよ／＼俺の腹にあの鋭い刃先がズブリと突刺さり、魚の腹を裂くようにパツクリ裂かれるのか」顔は真青となり、齒はガチ／＼と音を立て始めました。彼女の柔い掌がしきりにお腹を撫ぜ廻し、何処から切ろうか？と迷っている様子。

「やっぱり震えているのね。可愛想だけれど少しの辛抱よ。じきに楽になれるわ。まあ此

の可愛い／＼お臍も震えているわ」

彼女の指先がお臍の穴を一寸広げたかと思ふと、鋭い薄刃庖丁の切先は、私のお臍に深々と突き込まれていました。「アーッ」流石に激しい灼くような痛みで一瞬呼吸は止まり齒を必死に食いしばりました。無情な刃先はお臍の穴をグイと強くえぐり、其のまゝ刃先を下腹へ向けシリ／＼と切裂いて行きます。

生温い血潮がタラ／＼と横腹へ流れ落ちるのを感じ、プツリ／＼と腸管を切断される音が、はつきり聞えて来ます。激痛はやがて遠ざかり、不思議な事に何か云いしれぬ恍惚感が湧き上って来るのはどうした事でしよう。やがて下腹まで切終えた切先が、静かに抜き取られるのを感じると、今度は、しなやかな指先が傷口を押し開き、手首がズボツと腹中に差込まれ、ぎ／＼と詰った臓物を、かき廻し始めました。同時に勢いよくプツリ／＼と腸が体外へ飛び出し、狂気染みた私の陶醉感、最高頂へと進んで行くのです。

「変だわ——生きもが見つかからない。何処に有るのだろう。エイイ面倒だ——」

ヒステリックに叫ぶと、彼女は真赤に染つた右手に、血のりでヌル／＼する肉切庖丁をもう一度握りしめ、又もお臍に切先を向けグツと強くお臍をえぐった刃先は、プツリ／＼と切上げ、あばら骨の辺りでゴツンと突きあたり、もう一度強くグイとえぐって引き抜か

れました。何と云う凄惨な光景、私のお腹は縦一文字にパツクリ大きく切裂かれ、白い脂肪層の間から、鮮血にまみれた青白い腸管が蛇の様に溢れ出てもつれ合い、別の生き物の様にピヨコリ／＼と踊っているのです。そして解剖されたモルモットの様に台の上にごった横になった私は、気も遠くなるばかりの恍惚感をふらり／＼とさまようのです。切裂かれた傷口から吹き出る血潮を全身に浴びた赤鬼の如き美しい裸女が、や／＼と見つめた血潮のしたゝる私の生きもを両手に受けて「有った／＼」

と狂気の如く薄暗い部屋の中を踊り狂う様を、朦朧とした目でチラツとながめた私は、もうまるで無感覚となり天国への階段を静かに昇って行くのでした。そして楽しき幻想は終るのです。

あーなんと云う血みどろな、そして甘美なる被虐の幻想なのでしよう。

もしも此の生きもを狙う妖女の役を、信太容子さんに演じて頂けたら、どんなに素晴しい事でしよう（信太さん、本当に失礼な事を申し上げ申しわけありません。何卒おゆるし下さい。でもこんな気持は「開花の契機」「悦虐秘帖」を書かれた貴女でなければ、とてもわかって頂けないと思います。「悦虐秘帖」以来、貴女の作品が全然誌上に見えない事が、どんな淋しく物足りない思いで居ります事か

御察し下さい。何卒今一度、哀艶極まりない貴女の切腹願望の手記を御発表下さる様御願ひ致します。）つい脱線致しました。此の様な異常な幻想を、こよなく愛する私は、其の

他美女と互にお腹を短刀で突き合い、固く抱き合い息絶える情景、奇術でする様に箱詰にされ、大のこぎりで胴の真二ツに切断される場面、両足を左右に引裂かれ、お腹の皮がち

脱腸に対する私見

伊藤 薫

初めて御手紙致します。二月特大号で貴誌を知った時、その充実した内容と全誌面に溢れる編集の態度の立派さに私はどんなに嬉しかったでしょう。貴誌のみが真実の自分を語り得る場であると感じ、早速、告白記を投稿すべく筆を執ったのですが、忙しさの余りのびく／＼になっていた間に、三月特大号を手にして驚いてしまいました。森太一氏の少年時代の告白記こそ、正に私のそれだったのです。私が奇クこそ赤裸々に真実を語れる場だと感じたと同時に森太一氏も感じとったのだと思うと、微笑したくなりました。

扱て私も森氏の告白に関連して、貧弱ながら「脱腸に対する私見」を少し述べてみようと思います。

最近婦人雑誌の附録、その他の家庭医学に関する書物が数多く見られますものの、

その説明は至極簡単に述べられているにすぎません。成程、医学の進歩した今日「脱腸」の手術は容易になっていますが、それを受ける人は、陥頓等の重症者か、肉体労働に耐えられない人、其の他の一部の人にすぎません。

脱腸自体、平常は別段肉体に支障がないこと、又一時的にしる自分が脱腸であることとを知られたくないこと、又経済的な理由と相関関係に於て放置されているのです。それらの人でも脱腸帯すらかけていない人が随分多いのです。これらの人々にとって、かかる医学書に書いてある事柄は周知のこととて、日常の生活には、何らの役に立つものではないのです。そこで、脱腸の肉体的危機、陥頓、腸捲転等の危険については医学書にゆずるとして一方の精神的受難について述べましょう。

ぎれ臓腑が飛散る幻想に激しいあこがれを感じるのです。何と云う呪わしき地獄の幻想、それで居て現実の私は、道路にふみつぶされた犬、猫、鼠の死がいの、飛び出したはらわたの余りのきたならしさに顔をそむけ、はきけを感じ其の夜の食事まづく感ずるのです。此の矛盾は、どうした事でしようか？結局私の切腹願望は、陶醉感をむさぼるための一種の自慰にすぎないのでしようか。とに角こうした幻想を画き、切腹写真（特に女性の）切腹願望の告白記、切腹画等を見る事に、此の上もない幸福を感じる私にとって得難い切腹物を、豊富に毎号発表して下さる編集部の方には、いくら感謝しても感謝しきれぬ気持です。

一昨年十月号のアート頁に、久方ぶりに掲載されました切腹画、鞆和仁古氏の作品二枚は本当に嬉しく思いました。二図の女性の表情など特に美しく、思わずため息が出た程でした。十二月号にも同氏の作品が「腹部への加虐」の挿画として発表されていましたが、アート頁に大きく出して頂きたく思った程で今後の同氏の作品に大きく期待致して居ります。十一月号の原桐咲代さんの切腹写真の素晴しさは、筆舌にはとても現わせません。奇ク誌上をかざった数多くの切腹写真中、最高の傑作だと思えました。着物の胸を大きく開け、むっちり美しくふくらんだ乳房もあらわ

脱腸者の精神的苦痛は、特に少年期に於けるそれは非常に大きく、精神的成長を屢々誤らせるものなのです。或る少年犯罪の書物に犯罪の病的原因の一つに「ヘルニア」が記録されていることが証明されています。なんといいても場所が場所だけに、他人に知られたときの激しい羞恥心を考へ常に警戒心を働かせているのです。殊に少年時代には、理解され難い異性との肉体的相違よりも、自分と容易に比較出来る同性のものについて知ろうとし、強い好奇心を働かせますから、脱腸の児は常に警戒しなければなりません。

普通の子供達が銭湯で裸のまま遊んでいることは罪のないことですが、脱腸の児は勿論そんな真似は出来ず、といって大人の様に手拭で前を覆うことすら、他の子供の注意を引く危険を感じる程敏感になっています。一度他の子供に知れたら、揶揄されたり、暴行を受けることは、少年の世界は力が物を云うからです。暴行といえ、婦女子に行われるものを想像しますが、脱腸者の羞恥も女子の羞恥心に殆んど同じです。女子の場合でも、幼少期は銭湯等で、男の子の前で平気で裸を振舞うことが出来るのは裸になるということが、人間欲求の一つだからでしょう。脱腸者は然しそれが出

来ないので。つまり自然の欲求を満たすことが出来ず、その抑圧された気持は、どこにもはかすことが出来ないのです。思春期に達した女性でも、羞恥心からくる抑圧された気持は、同性の前では緩和されるでしょうが、脱腸は個人的秘密ですから、僅かに孤独の世界でのみ自らを慰めるにすぎないのです。

例えば、誰もいない部屋等で衣服をとって自分の姿を鏡にうつしたり、空想の世界に没入して自分の秘密を誰かに捧げる夢をみるのです。先に女性の羞恥心と同じだといったのはこの点なのです。女性も脱腸の者も、羞恥心は秘密を守る一方、誰かに知られたいという気持もあるのです。森氏の告白はこのことをよく物語っています。

私は生後三カ月にして脱腸して現在に至っていますが、今ではむしろ、脱腸に愛著をすら感じているとでも申しましょうか、只他人の前で裸になれずとも、奇クを通じて真実を語り励ましあうことが出来ればと希望しております。

追伸、三月特大号の森氏の告白記の挿絵に手術の処がありました。脱腸の手術は寝台の上に仰向けに寝て行うのではないと思ひます。何故ならば、その時、脱腸は置納してしまふからです。尚、腸のイメージを挿絵したものは大変面白いでしたね。

に、ふっくりしたお腹をお臍の下まで充分に露出し、ギューッと押付けた短刀の冷たい刃先の辺り、チワリとにじみ出た鮮血の色、軽く目を閉じ苦痛をジツとこらえる唇の辺り、本当に良く感じが出て居りました。発表されない作品がまだ有る由、本当に見たくてたまりません。十二月号の須藤氏の「川柳に見るお臍の功罪」切腹物ではありませんが、お臍の礼讃者である私には楽しい読物でした。

中川信夫氏の「女人磔零花」珠及白縫の二女性が磔柱に縛りつけられ、むごたらしく腹部と乳房を鋭い槍先で突きえぐられる場景では、私自身が処刑されている様な錯覚さえ感じ、非常に強いショックを受けました。十一月号で吾妻新氏が「裏返し」のA感覚」の文中羽村京子さんの縦一文字に腹を裂く願望について、盛り上ったお腹が裏返しされたお尻で有るから、割腹と云う形で縦に割目をつくり腎部代償とする為との御説明、及び新年号にて兵頭庫一氏が「腹部に依る悦虐」にて、男性切腹マニヤの心理は、一人のマゾヒスト男性が自己の腹を女体の一部と錯覚して、陶醉境に入らんとする一種の自慰であると説明された事に私は思い当る事もあり、大変興味深く味わい何度も読み返しました。

最後に新年号の読者通信の頁で、東京の津島比呂史氏の「女性切腹画帳」の案は、私も切望している処です。モダンな画風の畔亭数久氏、時代物では云いしれぬ妖艶な画風の梅田淳二氏、現代物の滝麗子嬢、其の他愛読者諸兄姉の切腹画大競演、写真では味わぬ色刷の美しい画帳、想像しただけでも嬉しさで身体中がゾク／＼する思いです。

—[愛は惜しみなく奪り]—

小説 虐妻日記

竹谷十三



影山修二は、愛する自分の妻マキ子を五年間かかって、理想の女性に人為的につくり上げたのだ。修二に云わせれば、世間では、新婚三年にして、どんな美しい女と生活しても、倦怠期になり、十年も過ぎると情性で夫婦生活を過ごす云うが、これは、夫婦共に愛の努力が足りないのだと云う。恋愛結婚だってそうだし、見合結婚なら、勿論、そうだ。始めから、理想の妻なんて存在するものじゃないのだ。ある老英文学者が、結婚二十年にして妻を失った時、後妻をすすめた人に曰く、「もう一度、妻の教育をやり直す元氣はありません」と答えたと云うが、これは、ある点、真理だと修二は思っている。『妻は夫に従いつ……』等と云う考えは、明かに封建的な思想だが、夫婦の間で、どっちかがイニシアチブを取らねば決して生活はうまくならない。その点、一方の積極的な人間（勿論女性の時もあるが）の人生の方向へ、相手を次第に教化して行く事が一番幸福な生活を生む事になると修二は信じて居た。

彼は、五年前に結婚する時も、自分の性格に合う女性を求めるよりも、その教育の成果を生れる素質を持つ女を求めた。彼は、地方の有富な医者の子男坊に生れ、家は長兄がつぎ、別に医者になる必要はなかったが、それでも医科大学に入った。学徒出陣で途中から兵隊に行き、終戦後、再び大学生になったが、今度は、文科系の学校に入って卒業してから、貿易商の仕事を始めた。早くから、東京に出て下宿生活をした彼は、郷里の肉親とは殆んど縁切り状態で居た。ヤミ横行時代に、彼は、巧みに泳ぎまわって、五年前の三十才の時には、小さな商社会社を切り廻すようになって居た。親類や知人が結婚の話をいろいろ持って来たが、彼は、いい返事を一度も与えなかった。恋人とまで行かなくても、彼と肉体関係のあった女も二、三人は居たが、彼は、その女達とも結婚しなかった。

彼は、自分がサディストである事を自認して居た。だから、妻には、理想的なマソヒストの女を求めて居た。彼は、女との交際で、

女性の多くは、マソヒズム的傾向を持ち、男から乱暴に扱われると逆に忘れられなくなる事を数多く知って居た。彼の恋人で、一度は彼女と結婚しようかと修二の思った菊江と云う酒場の女は、執拗に彼を追いかけて、彼が別れ様と邪慳にすればする程離れなかった。しかし、彼は、菊江の本質には、マソヒズムの素質はない事を知って居た。彼の妻になる女性には、絶対的に柔順でなくてはいけないうし、我慾の強い女では困るのだ。それに、菊江の様に自分の美しさに自信を持って居ても厄介なのだ。又、家族や肉親の多い事も困ると思つた。それに、菊江の様に自我のある女は、遊び友達ならよいが、とても、彼の伴侶としては向かなかった。

そうした彼の前に、偶然、彼の会社の女給仕としてマキ子が現われたのだ。十八歳になつたばかりの小柄で瘦せたオド／＼した娘だつた。女事務員の間でも、決して目立つ存在ではなかった。昔の外国女優シルヴァ・シドニーに似た顔が、修二の好みとして目に止つた。それに、彼女は、瘦せた体に似合わず乳房が大きく、粗末なセーターの胸は素晴しかつた。胴も細く、足もかもしかの様にスナリとして居た。性格も明かるく、決して、陰気な影はなかった。使用者である彼は、彼女の履歴を知って居た。両親を失い、高校中途退学で苦労して育つた身上だつた。彼女の伯

父達は、まごまごすると彼女を夜の女にでも売りかねない連中だつた。彼は、マキ子に特別の注意を払って居たが、まだ、妻にしよう等とは思って居なかつた。兎が、ある日の事だつた。仕事で遅くなつた彼は、部下達はどう皆帰つたと思つて、自分でお茶を取りに、洗面所の傍の茶汲室に入ろうとした時だ。そのカーテンの奥から、女のすすり泣きと別の女の叱責の音が聞えたのだ。怒って居るのは古参の女事務員で会計をやつて居る山田と云うオールドミスだつた。

「どうしても、あんた白状しないのね。強情な子ね。あの金は、あんたが知らないで事ないじやないの。唯の五百円だからいいと思つて居るの！」

「ほ……ほんとに私、知りません。私の不注意だつたのですけど……取つたりなんか決してしません……」

「嘘つき！ 川田さんだつて、山下さんだつて、あんたの机に五百円札があつたと云うじやないの……これでも、白状しないの……」
「アッ……い……いたい……ごめんなさい……堪忍して……」と泣く声は、確かにマキ子だつた。

「明日、課長さんに云つてやるから……あんたは誠よ……」

彼は、カーテンを開けて入つた。狭い茶汲室の中では、山田女史が、今、マキ子の片手

を後にねじ上げ、腕の肉を紫色になる程につねり上げて居た。

「アッ……社長さん！」二人は、驚いてハツとした。古狸の山田は、巧みにその場をつくらつた。彼は、マキ子の顔を見た時、胸をドキンと打たれた様に思えた。涙ぐんだ黒い大きな瞳、一寸ポカンと開けた可愛らしい唇、恥しさと驚きとミックスした何とも云えない顔だつた。相当に痛かつたらしい紫色の爪の跡にも拘らず、殆んど聞えない位の低い声で我慢して居たマキ子、自分を苦しめた山田女史をかばう様にした彼女の態度。彼は、この瞬間から、マキ子が好きになつた。勿論、金の問題は、彼女の罪ではなかった。

彼は、一ヶ月後に、女給仕のマキ子を正式に妻として迎えた。会社の連中も、男女の友達も、アッとして彼の行為に驚いたのだ。男振りもよく、金もあり、インテリの彼が、何を好んで、あんな小便くさい小娘と結婚するかと呆れ果てた。

しかし、彼は、彼女の体内に、彼の求めてやまない素晴らしい素質を見出したのだ。

新婚一年間は、彼は、一生懸命、彼女の美しさを磨き上げると同時に、ゆる／＼とマソヒズムの傾向を育て上げて行つた。

一年後には、マキ子は、相当に進歩した。では、彼の虐妻日記を御紹介しよう。これは彼にとっては、愛妻日記であり、訓練日記

でもある。

〇月〇日

昨日は、丁度、結婚して一年目だ。マキ子も、やっと近頃、縛られる事に平気になったらしい。朝、出勤の時に「今日、私達の結婚記念日だから、夕方早く帰って下さる？」と彼女は、可愛い顔を傾けて覗き込む様にして云ったから「いや、今夜は、菊江と約束があるから駄目だ」と、わざと邪慳に云ってやった。マキ子は、淋しそうな顔で、もう、涙を一杯、目に溜めて居た。それでも、何も云わず、いつもの様に手を振って送り出した。可哀そうだと思ったが、これが訓練の一つなのだ。

結婚記念日にお祝をするのは誰もがする。そんな事したら、マキ子は普通の女と同じ様に、自分の結婚にバカ／＼しい自信を持つだけだ。別に、菊江と約束はなかったが、帰りに彼女のバーで飲んで、十一時頃酔って帰った。マキ子は、玄関まで走って出迎えて、私に抱きついた。「ひどい人！私、とっても淋しかったわ……」彼女は恨めしそうに私を見た。

私は、マキ子のこの顔が好きなのだ。「お酒をお飲みになる。お料理は冷めたくなくてしまったけど……」と何一つ、不平を云わずに、ニッと笑うのだ。私は、心から嬉しかった。食卓に坐ってから「マキ子！結婚記念日

のお祝だ！」と云って紙包みを出した。「まあ！」と喜んで持った彼女は、重みに一寸変な顔をした。紙を破って中身を見た彼女は、ハッとして私を見た。「これ！手錠？」「そうさ、足錠もある。長い鎖もある。お前の手首や足首に合せて特別に作らしたのさ、とても、立派だろう」と私は、鉄で出来た手錠や鎖を並べた。マキ子は、何とも云えない表情で私の顔を凝視した。「裸になれ！早速、つけてみるんだ」と私は、わざと大声で叱った。マキ子は黙ってワンピースを脱いだ。「バカ！コルセットとパンツ一枚になるんだ！」と私は、再び叱った。私は、コルセットで固く締め上げられた彼女の胸、大きな美しい乳房を見るだけで、目がくらくらとする思いだった。抱いてやりたいのを我慢して、八の字を額に寄せて云った。「手錠をかけて貰う時は、ハイと云って両手を前に合せるのだ！」私は、マキ子の細い手首に手錠をかけ、足首にも同じ様にかかけ、鎖で両方を結んだ。「さあ、立って歩け！」マキ子は、食卓に手をつき立つには立ったが、全く一歩も歩けなかった。「あなた、歩けないわ」彼女は、よろ／＼と倒れかけるのを、私は、そっと抱いてやった。そして、熱い接吻をした。「感心、感心。よく嫌やがらなかったね。これから僕らの命令のある時は、これをつけるのだぞ。よし、取ってやる」と私は錠はずした。彼

女は手首をさすって、私の顔を見て笑った。「もう、一つ、お祝の品がある」と私は、別の小さな包みをマキ子に渡した。それは、前から欲しがって居たダイヤのついた腕時計だった。「まあ！嬉しい！」と彼女は、子供の様に喜んだ。「オイ！、どっちの送り物が嬉しいかい」と私は酒を飲みながら聞いた。「どっちもよ」と彼女は笑った。「嘘つけ！」「いえ、本当！あなたの贈り物は、何でも嬉しいの」とマキ子は、真剣な顔で云った。「手錠の時、嬉しいと云わなかったじゃないか」と私が皮肉った。「だって、怖ろしかったの。嬉しいよりも驚いたの。解って下さる？」「よし、了解」私は、妻の手を固く握りしめていた。

〇月〇日

妻が妊娠してしまった。私達は、当分、子供を持たない事に相談が決って居たが、失敗したのだ。しかし、もう、三ヶ月では仕方がない。勿論、私も、子供が可愛い。大好きな妻の子供だもの。だが、折角、コルセットで細くしたマキ子の胸がふとくなることは悲しい。

妊娠とコルセットは、両立しないから取らせる事にする。しかし、まだ、当分は肉体的な訓練は出来るから楽しい。

〇月〇日

もう、八ヶ月になる。マキ子の腹も大きく

なつたものだ。私は、妊娠してから、腹の大きい彼女を方々に連れて歩く事にした。普通の夫は、自分の妻の妊娠した腹を見せたがらないが、私は、無理にも、その大きな腹を人々に見せてやるのだ。マキ子は、恥しくて仕方がないらしいが、わざと体にピッタリした服を着せて人前に出す。会社にも、何かと用を命令して来させるのだ。山田女史のあの惨忍な瞳で見られると、マキ子は自分の腹の中が刺された様な気がする。愉快な事だ。妊娠と共に彼女の美しさや健康が失われない様に栄養に充分注意してやる。女中ももう一人増やす事にしよう。

○月○日

もう、彼女は臨月だ。訓練の対象にならない。私は毎晩、女から女と遊び、酒を浴びる程飲んで、家に帰らない日も続く。それでもマキ子は感心にヒステリーにもならない。私の愛を信じ切って居る。赤ん坊の着物等を縫って居る彼女は楽しそうだ。このまま変な母性愛等で賢母タイプにでもなられたら困る。出産が済んだら、徹底的に訓練のやり直しをするのだ。彼女にも、よく教えてやらねばなるまい。女は母親になるとバカになるから。菊江は美しい。だが、何と高慢な女だろう。まだ、私と結婚出来ると思って居るのか。あの男と結婚したらいいのに。

○月○日

可愛い女の子が生れた。母子共に健康。一日も早く、マキ子が退院する事だ。乳が驚く程よく出るそう。家に帰ったら、赤ん坊は人工栄養で育てさせ、母乳は別の使途を考える。

菊江が、あの男と同棲した。私の遊び相手が一人居なくなった。丁度、マキ子が入院して居る時なので困る。会社の仕事で、大きな穴があく。泣き面に蜂だ。

○月○日

佐知子は、丈夫で実に手がかからない。人工栄養に切り変えても、少しも体重が減らない。マキ子の乳房の大きくなった事は驚く。

前から大きい方だが、全く立派なものだ。人は不思議に思うかも知れないが、平素から発育させるために努力した結果だ。今迄、桃色で娘々した乳首も、褐色の大きな乳量の中からピンと尖って居る。乳もよく出る。私は、彼女に、赤ん坊に乳を飲ませる事を止めさせると共に勝手に乳を搾る事を禁止した。これは、乳を張らして苦しめさせるためだった。マキ子は、忠実に私の命令通りにした。どんなに苦しい時でも、私の命令のない時は、乳房に手を触れないのだ。乳バンドが、乳でベタ／＼に濡れて居る事もあった。私は、彼女の肉体的訓練を前より激しく行う事にした。コルセットも、前より固く締めさせ、アクロバットの様な美容体操もさせた。二人いた女

中は帰ってしまった。何故なら、広くもない家で、訓練をするのでは、どうしても世間に知れるから。

○月○日

マキ子は、子供の出来る前に比べて、私の訓練により積極的になって来た。もう、どんな縛り方でも平気だし、一晩中、手錠や足枷をつけさせていても顔色一つ変えなかった。だが、今迄は、私の訓練も、彼女の肉体を傷つける事は出来るだけ避けて居た。しかし、ここ迄来れば、そろそろ始めてもよい頃になった。だが、決して、他人に見られない場所に限る事だが……。

○月○日

結婚後二年になろうとする。マキ子の肉体も、殆んど理想に近い女体になって来た。子供が出来てから以前の様に細いギスギスした感じがなくなった。だが、手首とか脗は、驚く程に細い。乳房は、授乳をさせなかったのにデレツと垂下りはしないが、文字通り、熟し切って、崩れかかる一歩手前とも云える。セーターを着ても、大きく尖って突き出て居る。マキ子のヌード写真をいろいろのポーズでとった。

○月○日

今、私がこの日記を書いて居る前には、マキ子が、もう三十分以上、苦しい姿勢で刑罰を受けて居るのだ。マキ子は、両足をピンと

伸ばし爪先と両手で床に一杯釘の出た板から一生懸命になって体を守って居る。背中から足の先まで一本の棒が結ばれ、彼女は、体を少しも曲げる事は出来ないのだ。カーヴを画いて垂れ下った二つの乳房は、もう、釘の尖った先が触れそうになって居る。乳房のまわりには、太い長い針が出て居た。太腿から腹部は、短かい針が既に肌に刺って居た。広く開いて棒に結ばれた両手は、ブル／＼と震え、今にも、ガク／＼と曲りそうだった。「許して……お題い」ともう何度も、私に哀願したマキ子は、額に脂汗をかいて居た。釘が乳首を刺しそうになった時、私は、やうと彼女を拷問から許した。マキ子は、くた／＼になって居たが、私は次々と苦しい体操をやらせた。寒い日なのに、全身びっしりになる迄続けさせるのだ。ストリップ・ショウで見せる様な乳房をリズムカルに動かす運動や腰をくねらせる方法を何十分も続けさせるのだ。そして、その動きが、少しでもものろいと、私の手に持った短い革鞭が、ビシリ！と肌を打つのだった。

そして、全く力つきて倒れる迄やらせた。こうした運動のため、マキ子の身体は、益々のびやかに、柔軟となった。

○月○日

菊江が、男に棄てられて困って居る。私はマキ子と相談して、家で世話してやる事にし

た。

菊江は、荒んだ女になった。来たその日から、マキ子を限りない軽蔑を持って見下して居た。「ふん、こんな女があんた好きなの。私は、もう少し、美人で上品な女かと思ったわよ。」と私とマキ子の前で、シヤ／＼と云ってのけるのだった。私も呆れて居たが、当人のマキ子は、ニコ／＼と菊江の機嫌を取って居るのだ。

○月○日

私は、菊江との関係を断ち切ろうと考えているのに、妻のマキ子は逆に、二人を結びつける様にして居るのだ。例えば、菊江が風呂に入って居るとマキ子は私に「ねえ、菊江さんがお風呂よ。あなた、お入りにならない。私は、遅くなってから入るから」と云ったり床に入ってから「今夜は、菊江さんのお部屋に行かないの」等と平気で云うのだ。又、「ねえ、菊江さんの前で、もっと、私をいじめて……近頃、少しも可愛がって下さらないのね。」等と、そうした時、マキ子は真顔で頼むのだった。私は、初め、そんな考えで菊江を呼んだのではなかった。新しい仕事で菊江に見つかるとまで世話してやろうぐらいに思ってた。だから、菊江の前では、出来るだけマキ子を優しく扱ってきた。菊江に、私が妻を愛して居る事を示したくもあつたのだ。だが、マキ子の心が解つたので、次第に、頼

み通りにマキ子を手荒く扱い出した。ある晚一寸した手落ちから、私は、菊江の前でマキ子の腕をねじ上げてみた。畳にねじ伏せられながら、マキ子は「堪忍して……」と小声で哀願した。私は、菊江の目にも、マキ子の目にも、急に何とも云えない楽しそうな輝きを認めたのに驚いた。その日から、私は、以前妻にしたと同じ虐待を菊江の前でも始める事にした。この遊びは、私達三人の心を異様に楽しませた。「もっと、いじめて御覧よ。そう、その莫迦大きいお乳をくびれる程、縛ってやるといいわ」と菊江は、傍から憎々しうに云うのだった。そして、直接、菊江自身にマキ子を責める事もあつた。マキ子は「済みません」とか「許して……」とか云うだけだった。マキ子は、菊江から責められるのを楽しんで居る風に見えた。

○月○日

佐知子が大きくなった。マキ子に似て目の大きい可愛い子だ。菊江は、佐知子を嫌って居たし、佐知子も、母親をいじめる小母さんとも思ってた。菊江を怖しがって居る。私は、佐知子の手前、出来るだけ昼間は、マキ子をいじめない様に菊江に頼んだが、菊江は「ふん」と鼻で嘲笑するのだった。私は、マキ子とも相談して、昼間の責めは目立たない事、例えば、断食の刑とか、下着類の代わり拷問着をつけさせるとか云う風にした。その

ため、いろ／＼な拷問着を新しく作った。

イボ／＼の一杯出て居る乳バンドとか、同じ様なコルセット、それに、靴下止めの代りに使う鎖のついた金の輪とか云ったものだった。こうしたものを肌につけて、マキ子は仿くのが楽しかった。菊江は、こんな事では満足せず、佐知子が母親の前に居ても平気でマキ子を苦しめた。そんな時、マキ子は、「ねえ、佐知ちゃん、母さんは小母さまとお話があるから、お庭で遊んで居てね。後で、おいしいお菓子を作って上げるから」等と云って追い払ってから、菊江の命令通りになるのだった。菊江は、氣むらで、何時怒り出すか解らなかった。怒り出すと、マキ子の何もつけていない肌を思い切り鞭打ち打つのがだった。マキ子は、こうした時、ラジオを掛け、鞭の音が近所に聞えない様にした。どんなに苦しくても、泣き声さえ出さず、齒を喰いしばって我慢した。時には、どうしても佐知子が傍を離れない事もあった。そうした時、マキ子は菊江に「今夜ね、どんな目に会ってもいいわだから、今は許して」と哀願するのだ。菊江は、必ず、苛酷な条件を出して仕方なさそうに許すのだった。

そんな晩、私が床に入るとマキ子は「あなた、私、菊江さんの部屋に行つて参ります」と出て行くのだ。大抵の時、私が眠ってしまったから帰つて来た。私は、近頃、仕事が猛

烈に忙しく、菊江とマキ子がどんな事をして居るか、余り注意をして居なかった。

○月○日

昨夜は、久し振りに仕事から解放され、ゆつくりした気分、マキ子を折檻してやろうと思つたら、例の如く「菊江さんの部屋に行つて参ります」だ。私は、近頃、菊江の顔を見るのもいやなのだ。金を欲しがる時だけ、猫撫声をしやがってベタ／＼と媚態を示すがそれ以外は、高慢で無智で堪まらない女だ。何故、あんな女にマキ子が従つて居るのか解らない。「すぐ、帰つて来ますから」とマキ子は、私の返事も待たずに出て行つた。

一時間程しても帰つて来ないので、二階の菊江の部屋に上つて行つた。廊下まで来ると二人の会話が聞えた。いや、それは会話と云うのではなく、何とも云えなき呻き声と切れ／＼の声だった。「もう……許して……お願い……」とマキ子の苦しそうな声、「畜生！これでもか、これでもか。」キン／＼した菊江の声だった。私は思いきつて襖を開けた。菊江は、シロリと私を睨んだ。私は、そこで見た光景をここでは書けない。私は、男として、夫として怒りを感じる光景だった。

菊江の廻りには責め道具が散ばつて居た。私が入つた時、丁度、菊江はマキ子の片方の乳房を木製の締め木で締め上げて居た時だった。マキ子は、私の入つたのも気がつかぬら

しく、身をそらせ「苦しい……堪忍して……ウツ……ウツ……」と悲しそうに唸つた。私は

呆然と立つて見て居た。菊江は、「チエツ」と舌打ちすると天井から下つた別の綱を曳いた。ズル／＼とマキ子の体は引き上げられ足指が床から二、三寸離れた所で宙吊りになつて居た。マキ子は、チラツと私の方を見て顔を赤らめたが、ぐったりと首を垂れて何も云わなかった。「何しに來たの！」と菊江が高飛車に云つた。私は、唯、呆れて言葉も出なかった。「奥さんは、もうじき帰してやるのに！ バカね。」と菊江は、あぐらをかいて煙草を吸い出した。私は、限らない不愉快さで、「マキ子！ 帰つて来い！」と云うなり菊江の方も見ずに部屋を出た。そして、茶の間にいき、酒を飲み始めた。私は、無性に腹が立つた。二十分程して下に降りて来たマキ子を力一杯なぐりつけた。「済みません……許して……」と涙を浮べて詫びるマキ子を何回となく足で蹴つた。パジャマのままマキ子は、唯、私の足下で詫びるだけだった。「裸になれ、今度は僕が思い切り責めてやる！」と私は愛用の鞭を持って立つた。「ハ……ハ……」とマキ子は、泣きながら湯文字一枚になつて畳に伏した。私は、ここ一ヶ月程忙しいので妻の体をよく見もしなかったが、あの白く美しい肌が、青黒く腫れ、点々と褐色の跡が一杯についてるではないか。しかし、

私は、同情心よりも逆に、カッと怒りを感じた。ビシリ！と、力一杯にマキ子の背を打ち据えた。そして気のすむまで、鞭を力一杯に打ち降した。

私は、両手で彼女が隠している乳房を調べた。先刻の締め木で締められた方の乳房は、木の跡が紫色について居たが、それより驚いた事には、両方の乳房にも、褐色の豆粒大の跡があり、一面に傷だらけなのだ。私は、指で丸い跡を押して鋭く云った。「これは何だ！」「あの……お灸の跡なの……」とマキ子は消えいりそうな声で云った。「菊江が据えたのか……」「ええ……でも……私がお願したの。だから、菊江さんに怒らないで……」と可愛い顔で頼むのだ。「お前の美しい体をこんなにして」と私は、呆れてマキ子の顔を見るのだ。

○月○日

あの事があってから、私は、嚴重に二人にバカな行動を取らない様に命令した。だが、菊江も、マキ子も、少しも行動を改め様としないのだ。菊江のサディズムとマキ子のマソヒズムは、理性の範囲を越えて来て居た。私は、菊江に出て行って貰おうとした。だが、菊江は、何としても承知しないのだ。一方、マキ子も、「私を愛して居るなら、菊江さんと一緒にあって、私を苦しめて……お願い」と云い出すのだ。私は、菊江を連れて来た事

に深く後悔をしたが、今となっては手段がなかった。

菊江を無理に追い出せば、裁判騒ぎにもなり、私達の家庭の様子が世間に知れて、私の地位にも影響して来るのだ。困った事になった。私は、妻の美しい肉体が破壊されて居るのが、限りなく淋しいのだ。

○月○日

マキ子が、再び妊娠した。私がマキ子を深く愛して居るのだと云う事を菊江に見せるためにも、マキ子の妊娠は嬉しい。佐知子も大きくなる。マキ子が健全な母性愛に目覚める事が望ましい。皮肉な事だ。私は、菊江の要求するための金を稼がねばならぬ。当分、仕事仕事だ！

○月○日

今日、会社から帰って驚いた。佐知子が暗い中を玄関にしょんぼり立って居るのだ。私の顔を見て泣きながら飛んで来た。こんなに早く、家に帰った事はないのだが、「今御用でお家に入れないの……」と佐知子は、泣きべそをかいて云うのだ。成程、玄関も庭の戸も裏口も固く閉って居た。私はどん／＼格子戸を叩いた。やっと、菊江が出て来た。仕方なさそうに、戸を開けた。「いやに早いお帰りね」と皮肉に云ったきりで、二階に上って行くのだ。私は、暗い家の中に電気をつけると、佐知子を下に置いて、二階に上って

行った。思った通りだった。菊江が、マキ子を拷問の最中だった。臨月に近いと云う大きな腹をして、マキ子は、天井から逆に吊り下げられ、体中に灸を据えられて居たのだ。菊江は、私の姿を見ても平然と煙草を吸って、ニヤ／＼して居た。「奥さんのお望みだからね、私は知りませんよ……ウフフ……」と冷めた笑って居るのだ。私は、マキ子を叱る元氣もなかった。

○月○日

私は、無理して、菊江の要求する金額を作った。「兎に角、あんたと別れるわよ。あんな傷だらけの女の方が好きと云うなら仕方がないさ。このお金は一応頂戴致しますよう！」こんな捨てりふを云って、やっと菊江が出て行ったのは昨日だ。私は、傷だらけのマキ子の体を一日も早く治さねばならない。このままでは、とても、お産のため病院には入れられない。

○月○日

結婚、満五年目だ。次女の百合子が産れてもう、二ヶ月になる。私達の夫婦生活も、以前のようになった。あの怖い女夜叉の菊江はどうしてろう。近頃、影も見せない。だが、菊江の影響は、依然としてマキ子の体に残って居る。マキ子は、菊江がした様に私にして呉れと毎日せがむのだ。私は、菊江の様に惨忍な事は出来ないと拒むと、マキ子は、自分

一人で勝手にやり出すのだ。だから、私が監督して、ある程度、彼女のマゾヒズムを満足してやった方が、ずっと安全なのだ、私が、次々と刑罰を考えてやると、彼女は、実に楽しそうにそれに従う。そして、限らない程に優しい母親であり、良妻として、日を送って居るのだ。私が、少しでも、その手をゆるめると、この間の様に、自分で勝手に、乳首を火で焼く様な事をするのだ。マキ子の片方の乳は、見るも無惨な程に傷だらけで型も崩れてしまった。「もう、私、決して、お医者さんに体を見られない様にするから、もっと、ひどい事をして」と夢中で願うのだが、万一病気の事を考えると、私は困ると押し止めて居るのだ。幸に、彼女は、病氣らしい病氣はした事がない。彼女は、自分で工夫した責め

道具を次々と作っては、私に自慢するのだ。例えば、床の上に敷く釘の出た板とか、三角のギザギザのある蒲団の代わりに坐る板、特別に胸を締め上げる革の乳バンド・コルセットを始め、前から見ると普通のスカートでもヒップが隠れないため、絶対に後を向けないもの、私が新婚当時に買ってやった手錠や足錠を工夫している／＼な手枷、足枷等があった。こうしたものを子供達や女中が寝ると持ち出して来た。尤も、コルセットや乳バンドの類は、外出の時でもして歩いた。この様に自分の体を傷つけてながらも、彼女の若さは肉体のおとろえを見せないのは嬉しい事だった。

私達の夫婦生活も、次第に大人になって来る。子供も大きくなり、よきパパであり、マ

マでなくては困る。外観的には、そうであっても、まだ／＼この禁断の楽しみは続くだろう。私は、三十五歳、マキ子、まだ二十四歳だ。マキ子が無茶さえしなければ、あの美しい肉体は、十年は続くだろう。私の虐妻日記は、六冊目に移る。新しいノートには、どんな事が書かれるか。私は、マキ子と結婚して幸福だった。マキ子もそうだ。今、この事を書いてるのをマキ子は、ニコ／＼しながら自分の愛用の三角台の上にキッチンと坐り、手錠を嵌めた両手を私の机の上に出して居る。きれいにマニキュアした細長い爪が美しい。私は、そっと接吻をしてやると「ねえ、今夜も拷問して下さい。下さるわね……」と甘えて来るのだ。

(終)

現代マゾヒズム芸術時評

(復ノ一)

原 忠 正

本誌が、その有益にして、権威ある復活を為し遂げ、当初編集責任者が感じつゝあった、中途休刊の憂いが解消された現在、そうして、巷には数多くの偏向性愛者が其の内蔵する苦悩を再び、沈黙と内攻とに置

き換える事を余儀なくされつゝある今日、甚だしく不完全乍ら再び時評の欄を借りて筆者は、現代の平常な人々によって創作され、何等の意識的な偏向性愛の欲求無しに上映、上演、出版されつゝある幾つかの作

品を紹介して、その如何なる部分が、如何なる理由で、どの様にマゾヒズムの香りを伝え、マゾヒスティックな見地からの評価に耐えるかを指摘し、紹介する事の必要を痛感し、この仕事が決して無意味なものではないと考える。

今や、碩学沼正三氏がその居所を移転し、その連絡を断ち続けている以上、本誌にマゾヒズムの残り火をかきたてるものは鬼山絢策氏と二、三を数えるのみである。少くとも専門誌、研究誌を名乗る以上、沼氏の

如き正統派の有力な一員を失ったかに思われる事は、悲しむべき事と云わねばならない。

禁断の木の實にも比すべき、かくわしき香りに誇りを奪われた我々選民の火は絶やしてはならない。後に続き、今日現在に至っても猶その出生を続けている同憂の人々や同憂の萌芽を秘めて成育を続けている多くの魂に対して、私達は怯懦であってはならないと思う。時評は今後共読者諸氏に対して、限られた時間と限られた能力を極度に有効に用いる為の忠告と協力を続けてゆく心算である。マゾヒストにとって、秘宝にも類いすべき幾百の映画、出版物、演劇、音楽が無目的な人々の手によって、暗旗と忘却の彼方に失われる事のない様に、又我々の後嗣達に、一九五〇年代の明確なるマゾヒズム年代史の豊かな資料を提供する為に。

復刊第一項

ロシア映画「サーカスの女王」

色彩映画

在京の人々には既に一番封切館、一番館、三番館にて御承知かも知れない旧作であるが、今後共ニュース映画館に現われると思うので、前後十二ヶ月に渉る空白を埋める

為に注意を喚起しておく。約三十分の上映時間の最後の一卷に女猛獣使いイリイナ・ブルグリモーヴァが紹介されている。本欄に曾って紹介したスターク女史「世界動物博覧会の中猛獣シヨウ」の如き過去の存在に属するものではなく、卅才前後のブルグリモーヴァは、ザッハールマゾツホの描いたチエコのサーカスの女猛獣使いの再現そのものである。我々は、マゾツホ小説のこの様に完璧な偶然の一致を他に知らない。彼女はライオンに跨り、踏みつけ五頭のライオンの横たわる上に寝そべって笑う。その美しい顔をライオンの口の中へ突込む。烈しい革鞭の使用が現代に於てこの様に立派に捉えられた例は珍らしい。

私は、昔日の本誌に於てならば、この尊敬すべく讃仰さるべき支配者について、手許に有る限りの写真と幾つかの雑誌を以つて優に十頁を超える紹介をするのであるが現在その余裕は恐らくないと思うので、甚だ心外乍ら、割愛せざるを得ない。唯、若し御希望の方には編集部の仲介によって写真数種を頒布してもよいと思っている。猶、こゝに、この美しい支配者についての敘述と写真の出ている雑誌名を紹介しておく。重複するが、こゝには今世紀の最も理想的な形でマゾツホ小説の再現がある。

その雰囲気は真剣であり、その衣裳は完璧、その構成は甚だしく単純、そうしてその結構は甚だ絢爛、豪壮である。

1) Point (米), February 1956 P.40

2) Soviet Woman. (英文版) Oct 1955 P.39

3) Soviet Literature (英文版) 1952

筆者はこの稀有の女性とその管理に当っているモスクワ市国立サーカス劇場とに対する敬意を示し、又、より多くの資料を求める為に、去月在京ソ聯代表部及、ソビエット・ウーマン誌の責任記者リスドミラ・ゴロコウスカヤ女史に宛て書翰を送った。勿論、有名な文通統制の国柄である。その着否は未だ詳らかになし得ないが、若しこの要望が容れられて、イリイナ・ブルグリモーヴァ女史からの返信でも有れば、私達は遠く北方の新らしい大国に、曾って帝政爛熟の時代に、ザッヘル・マゾツホが、その博識と碩学を傾倒して遙かに望んだキエフの街の更に彼方に、理想と高貴の美しい結合を夢見る事が出来るのである。

復刊第二項

仏映画「歴史は女でつくられる」

天然色シネマスコープ

監督 マックス・オルフユス

主演 マルチヌ・カロール

アントン・ウォールブリュック、

ペエテル・ユステイノフ共演

Max Orphus Prélente

Martine Carol, Anton Worbrück

avec Peter Ustinov, dans un film

"Lola Montès"

この際物的な題名と「輪舞」の監督との奇妙な対照は故なしとしない。各歐洲映画誌は決してこの監督の高名に讃辭を与えようとしていない。

このフランスの大監督が奥太利の首都の描写に秀でているとしても、そのことは直ちに彼がバヴァリア王国の首府ミュンヘンを完璧に描きその文芸振興の様を伝え得る事にはならない。そうしてこの映画にバヴァリア王ルードヴィヒとの情事が事細かに伝えられ、新開地亜米利加の一サーカスに動物同然の取扱いをうけて、僅か一弗宛の金銭によって生涯の歴史を語らせられるローラ・モンテスが描かれても、地に流れるが如き淫風を描き得ず、人間獣化の誇り高い雰囲気や断章的にさえ写し得ていない事は、甚だ残念な事と云わねばならない。蓋し高名な監督オルフェスを以ってしても、シネマ・スコープの龐大な再現力を以ってしても、テクニコロールの色調を人工的に

彩色しても、鮮明な立体録音を以ってしても、加うるに題材に一代の妖妃ローラ・モンテスを以ってしても、絢爛、豪華、傲岸辺りを払うドミナの再現は不可能なのであるか。

ローラ・モンテスの名は一部の嘆賞者その他の大部分の反感を持つ者達の何れの側からも強い関心を以って印象づけられた。この西班牙風の名前を持つ印度生れの英国人はカンテ・フラメンコ（西班牙俗謡—Cantes Y Danzas Flamencas. ローラ・モンテスも亦このフラメンコ舞踊をもって独仏露の各国を巡行したのであった。）の古典曲として未だにキロが作る処の熱情的な名曲ローラ・モンテス—Quirga; Lola Montès, に唄われて美しく、その憎惡の極端な世評の中に敢然と生きた生涯を今日まで伝えられている。

筆者が、敢て貴重な誌面を割いて何故にローラ・モンテスを紹介しようとするのか。その簡単な説明を、私は他人の筆を借りようと思う。

グルトルーデ・アレツツ著わす「貴婦人」は、その数十頁をローラ・モンテスに費している。

その二〇九頁から二一〇頁に至るまでアレツツはローラ・モンテスが如何に男性に

とって魅力的であつたかを語り、偶々その衣裳に言及している。その中で、ローラが身体特に腰部の美しい線をはつきりさせる為に、好んで、乗馬服を着た事。特筆すべきはそれが、乗馬の時に限らず茶会や舞踏会にさえも乗馬服で出席した事を伝えていゝる。又二〇一頁には、ローラがミュンヘン市内の某ホテルで給仕を馬鞭で打ち懲しめた事、ホテルの支配人や無縁の通行人でさえ、この王の寵姫の命に直ちに従わない時には公開の席上であると無しを問わず、乗馬鞭の折檻を受けた事、そうしてローラのしなやかな細い美しい手が、如何に力強く鞭を扱ったかを驚嘆の念を持って描いている。因みに *Lolas Reitpeitsche*. ローラの鞭 II の名は西欧に有名な存在であつた。

この他、彼女が犬を常に従えた事、そうして、この犬は公開の席上で主賓の扱いを受けた事などは翻って考える時、無尽蔵のマゾヒスト好みの夢に溢れている。

ここに筆者は特に右の書物の中に紹介されている、銅版画のローラ・モンテスを挙げておく、手にせるは前記有名な「ローラの鞭」という西班牙風婦人用乗馬鞭であるこの画は一八三五年に L. H. ガルニエの作つたものである。



お仕置遊戯

桜井美知子

私の両親は五十を過ぎたばかりで頭は禿げていますが、共に健在です。私は今年二十二になるその一人娘です。父は小さい時からブリキ屋に奉公に行っていて、今では電車通りにブリキの修繕屋をしています。私は中学校を卒業してから、昨年の春結婚するまで、ずっと近くの紡績会社に勤めていました。その日暮しの貧乏家庭だったにも拘らず、特に私を見込んで婿養子にきてくれた夫は、私の結婚前の勤め先で、人事課に勤務していた大学出の青年です。

結婚してからは、夫は私の両親にも優しく勿論私にも愛情の限りを尽してくれますのでもうこの世の中の幸福は、自分一人で占めているような字頂天な毎日でした。そんなわけ

で新婚後二三月は夢のように過ぎました。

素足に下駄ばきも快い初夏の夜、私は夫と一緒に映画を見に行きました。新旧の二本立の中、時代劇の方は、高田浩吉の黒門町の伝七親分に、伴淳三郎の乾分、獅子鼻の竹という配役の捕物帳で松竹映画のたしか「黄金弁天」という題名の映画でした。伝七親分の女房のお俊には、月丘夢路が扮しました。三枚目の伴淳が例の通り人を笑わせるのですが、月丘夢路が物置の中で細引で胸へ廻して後手で縛られるシーンがありました。口には黒い布で猿ぐつわされます。悪侍が上の部屋に行ったすきに不自由な後手縛りのまま短刀で縄を切るのですが、その時、はっきり縛られた後手がほんの少しの間で見ることが出来ました。

美しい女が高手小手に縛られて身もだえす

る姿は、女の私でさえいいなあ、と思う程魅力がありました。帰りしなに、劇場で貰ったニュースを見たところ、後手に縛られ、黒襟の着物の胸に細引が廻り、黒い布で猿ぐつわされた月丘夢路の写真がのっていました。夕御飯を食べて、すぐ出掛けただので、九時頃には映画も観終りましたから、ぶらぶら街を歩いてパチンコ屋へ寄ったり、大衆食堂でおうどんを食べたりして、十時頃帰宅しました。

家は表の板の間は、父の仕事部屋で、その次の四畳半は居間にしていますが、奥の六畳は両親の部屋になっています。二階の八畳が私達の部屋になっています。下の四畳半の部屋の押入れの戸を開けると、すぐ梯子段で、そこから通り庭で便所へ通うようになっていましたので、私達は両親が寝てしまったあとは、戸締りをして、居間からお茶道具を提げて二人で二階へ上ってゆくのです。

部屋へ落ち着いてから、お茶を飲みながら二人で、今見てきた映画の話をしました。夫は私の顔をじっと見て、「あのお俊の役をした女優と、君とはよく似ているね」

「いやッ、そんな冗談言わんといで」「本当だよ、あの後手に縛られて悪侍をきくと睨みつけ、肩をこずかれたところなんか、今君が睨んだ顔と、そっくりだよ」

こんな見えすいた御世辞でも、美しい女優さんと似ていると云われると、女ですもの、私もぼうつと顔が染まってきた、本当かしらと内心嬉しいような、恥しいような気持ちがしました。

「私も、あの縛られた女優さん、美しいなアと思って見ていましたのよ。」

寝る前の習慣で、夫は御小用に下へ降りてゆかれました。私はその間に夜具を敷いていきますと、用足しをすました夫が、

「君、君に一寸頼みたいことがあるが」

「なんなの、そんなに改まって——」

「いや、別に大したことでもないんだが、ちよつと、そちらを向いてごらん」

私は敷きかけた掛蒲団をそのままに、後向きになりますと、夫は鏡台の横に置いてある日本手拭を取って、私の両手をうしろに廻して軽く縛り、私の両肩を持って、くると自分の方へ向けて、「どう？ 痛い」と聞くのです。結婚前に会社勤めをしていた時、運動会のパン食い競定で白木綿で後手に縛って貰った時の方が、余ッ程きつい位でしたので、「貴方、こんな緩い縛り様では、少しも痛ありませんわ」と云いますと、

「うん、でもね、余り酷く縛ると君が痛がるといけないと思つてさ、さっきの映画のお俊の役を君が演じていると仮定して、僕が悪侍になって美しい女を縛っているという気分を

味わいたかつたんだよ」

このように云われますと、細引できつちり身動き出来ないようにきつく肌に喰い込む位縛られたら、どんな気持ちになるだろうと好奇心が起きてきました。

「貴方、それでは手拭なんかより、細引で縛つてもいいことよ」

「うん、では今日はもう晚いから、次にいろいろ準備しておいて、やってみよう、さア、解いてあげよう。」

「ううん、こんな緩い縛り方だったら、すぐ抜けてしまいますよ、それッ」

と、おどけた振りをして、手を手拭から抜きますと、夫はニッコリして

「やッ、しまった、とり逃した。もっと堅く縛っておくのだった。残念、残念」

と冗談を言いつつ、パジャマに着替えています。

二

朝、夫を送り出して家の中のお掃除やお洗濯をすませると、母と一緒に市場へ買物に出かけました。帰り途、荒物屋の店先にいろいろな色のロープが吊り下げてあるのが目につきました。私は何かひかれるように、そのお店に入りました。麻の細引、棕梠縄、等ありましたが、木綿糸で編った真白の細引が気に入ったので三十尺のを買いました。これであ

れば、柔かくて綺麗だし、少々きつく縛られても痛くないだろうと思いました。

母は不審そうに見ていましたが、

「お前、そんな細引よりも、もっと丈夫なのが家に沢山あるではないの、何に使うの」

と尋ねますので、「エ、一寸」と胡魔化して、帰ってくると、二階の押入の隅へかくしておきました。夫は会社で会議でもない限り時間通り帰宅致します。夕食後、夫は新聞に一通り目を通してから、二階で心理学の本を読んでいます。私はお勝手をすましてから

夫の傍で靴下のつゞくり物をしておりまして夫は、本を机の上にバタツと置いて

「美知子、昨日の映画はどうだった？」

と話しかけてきました。

「え、本当に楽しかったワ」

「どうだ、一つ、昨日の映画のように君を縛らせてくれるかい？」

「私、今日これ買ってきたのよ」

押入れから細引を取り出しますと、夫はそれを手にとって

「ほ、君、こんな縄まで用意してくれたのかい、こりや柔かくていいナ、然し、この細引きは細いから、よく締るよ」

「え、どうぞ御遠慮なしに」

私は——貴方が縛ってくれるんですもの、と口に出してよう云わないので、心の中でそう呟きつつ、自分でも顔が赤くなってくる

のがよくわかりました。

「じゃあ、後へ手を廻して——」

背中で両の手を交叉しますと、夫は一巻きで縛りましたが、縛り様が緩いので、なんだか頼りない気がしました。然し昨夜のように手を抜いてみようと、両手を交互に捻じってみましたが、流石に細引きですから抜くことが出来ません。胸へ一廻りした縄尻を持った夫は、「歩くのだ」と二階の廊下を二回往復して、居間に入りました。

「今晚は君が洋装だから気分が出ないね」と夫は残念そうです。

「では、すぐ着物と着替えましょうか」

「いや、いゝんだよ、只あの映画を見てから君をお俊に扮装させて縛ってみたいと思っただけなんだ」

「そう、それだったらね、昨晚の映画の実演をしたら、どう？」

「実演は今やってるじゃないか」

「でも洋装じゃびったりしないでしょう、ですから和服を着て、頭も髪を借りてきて、あの映画のように扮装してみますわ、そして、私、思いつき抵抗しますから、縛るなり猿ぐつわするなり、貴方の御自由になすったら如何」

「うゝん、それは実感が出て面白そうだな」ということで、その晩は終わりましたが、明後日が日曜日なので、夫と相談して前から行

きたいといっていた広島の親戚へ両親に遊びに行つて貰うことにして、私達夫婦が留守番をするのにきめました。

さて、日曜日の朝、両親を送り出してから二階の八帖の間を拷問部屋に仕立て、大掃除に使う薄べりを畳の上に敷いたり、父が仕事に使う小梯子や脚たつを持って上つて色々の飾りつけをしました。風呂を沸かしてから美粧院へ行つて銀杏返えしの髪を頭に合して借りてきました。

私が昼食の仕度をしている間に、夫にお風呂へ入つて貰い、早ヒルを済ましますと私も入浴して、今日は特に念入りにお化粧をしました。殊に襟首から胸にかけては濃化粧をしておきました。素肌に緋の長襦袢を着て、着物は常に夫の好んだ、薄紫地に荒い稲妻模様のあるのを着ました。帯は白地に矢車の墨絵のあるのを締め髪をつけました。

夫は私の仕度中に、表の施錠をして、各部屋の窓を閉めたり、カーテンを降したりして二階へ戻ってきました。上ってくるなり夫は「うわア、凄い美人になった」と大仰に驚いてみせるのです。

扱て、愈々昨晚、打合せしたようにお仕置遊戯を始めることになったのですが、私達は俳優ではありませんから、むつかしい台詞もよう云いませんし、筋書もなく、只、最後の縛られる場面だけを演るのですから、極めて

手っとり早いのです。差当り私が女賊、夫が岡っ引きということになりました。

「では、貴方、数を百お読みになったら探しにいらっしゃいね」

と云つておいて、私は廊下へ出て、梯子段を降りました。隠くれようたつて、上下で三間しかない借家ですから、仕方ありません。湯殿へ入つて、脱衣箱の横へ入ろうとしましたが、帯が邪魔になつて駄目です。帯をゆるめようとした時、扉が開いて、夫が入ってきました。

「女賊御用だ」

と声を掛けるなり、私の左手を掴まれました。私は右手も掴まれぬように、左右に振つたり、前に廻したりして逃げました。夫は私の身体を後から抱きかゝえるようにして右手を掴みましたが、「しまった、捕縄を忘れてきた」と云いましたので、私は思わず「ホ、貴方、貴方、岡っ引きが捕縄を忘れるなんて、本当に間が抜けているわ」と云つてしまいました。

「うゝん、女賊を早く召し捕らうと思ったからだが、よし、すぐ持つてくるから、待つてくれよ」と急いで出てゆきました。私はそのすきに表側の仕事場へ隠れました。引返えしてきた夫は、湯殿に私が見えませんから仕事場の戸を開けて、そつと顔を出しましたので、私は、横から飛び出して、わつとびつ

りさせてやりました。それから格闘になります。後から襟首を掴まれて後へ引き戻そうとされましたが、私は身体を左右にゆすって腰紐を解いてしまい、着物を夫の手に残したまま、長襦袢一枚になって、階段をかけ上りましたが、廊下のところで夫に後から長襦袢の裾を右手で握られ、立ちすくんだところを、さっと足払いされますと、ころりと廊下の板の上に転げました。

夫は私の両腕を後に廻して腰紐で手早く一卷きして、ゆるく縛り、小手から二の腕と半分外へ出たお乳の上を一卷きして、うしろで結んで、「女賊を召捕った、さあ、早く立って歩くのだ」といふつゝ、私を抱いて起してくれました。私は夫に、

「貴方ア、女賊を縛るのに、こんな緩い縛り方でいいのですか、私、もつときつく縛られるのかと思っていましたのよ、一寸、ごらんホラ手首がこんなに動くんですもの」

「いゝや、今のは早縛りしたからだ、その上廊下ではゆっくり思うように縛られんからナ番所へ行ってから、もっと緊く本式に縛り直すつもりだ、さア、歩くん」

と、照れかくしに障子を開けると、私を部屋の中へ邪慳に押しこめました。部屋の正面の机の上にはカメラが置いてあります。机に向って、座敷の中程に薄べりが敷いてあり、半間床間の欄間から太綱が二尺位垂れて

います。その前横に、平石（一貫匁位の物）碁盤、踏台、長サ二尺の二寸丸の竹、水差し、玉突のキュー、脚たつ、小梯子等が並べてあります。

私は薄べりの上に座られますと、夫は私の買ってきた白い細引きを捌きながら、「さあ、これから女賊を本式に縛り直すのだ、一寸ウイスキーを飲んでくるから、待つとてくれよ」

と云い残して出てゆきました。やがて、下からジョニーウオーカーを持ってきた、

「さあ、女賊、これを一杯のむのだ」

とセリーグラスになみ／＼と注いで私の口へ持ってきました。

「いやア、そんなきつい」

「嫌いも好きもない無理にでも飲ますのだ」

夫は大分顔が赤くなっているのは、少し酔っているようです。私も半杯で胸が少し、ドキ／＼としました。

「さア、始めるぞ」

今迄縛ってあった腰紐が解かれました。その間に長襦袢の襟もとを直そうとしますと、夫の手が襟にかゝりさアッと脱がれ、いやいやをしていたら、そのすきに両腕をぐつと後へ捻じ廻され組んだ手首に三巻き、がっちり縛り上げられました。手首から真直に襟首の処に結び玉を作り、両方に分けた縄で首を廻して咽喉の処で又結び玉を作って、斜めに下

り、二の腕を二巻きして、背中の縄に一本宛通し前のお乳の谷で、ぐつと締めつけられますと背中の縄は八の字に広がるが、小手が、気持よい程、上に上ります。

更に前のお乳の谷の処で一結びして、一本ずつ斜め上に腕の縄へ通して一卷きしから結び、背中でも一度締め直してから縛り終りました。それから、長襦袢の紐を解かれましたので、お腰一枚になってしまいました。

夫は机を前にして、タバコをゆっくり吸いながら、私の縛られた姿を満足そうに眺めています。私は、夫に縛られたのは、タオルで後手に縛られたのが始めてでした。それから三回程縛られたことはありましたが、いつの時でもほんの形式的にしか縛られません。今こうして、本式に縛り上げられ、手首から腕、襟首に縄が喰い込む位、緊く縛られてみると何んだか、うっとりとしてくるのでした。

今、夫に対して、痛いと言ったら、すぐ解いて、ゆるく縛り直すに違いありませんので私は殊更微笑して云いました。

「これ位の縛りようでは大して痛くありませんわ」

「へエー、そんなに緊く縛られても」

「えゝ、もつときつてもいいのですよ」

「ふむう、強いな、じや拷問してもいいかい？」

「えゝ、えゝ、拷問でもなんでも、貴方のお好きなように。」

「じゃ、最初は水責めだ、さア立って」

縄尻をとられて、階下へ下り、そして湯殿へ連れて来て洗場に座らされますと、夫は洗面器で湯舟の湯を汲みとって、私の肩先からざあと五六杯掛けましたが、この様な事では苦しくも痛くもありません。かえって気持がよい位のもんです。

「貴方ア、これ拷問ですの、こんなの、夏の行水と同じじゃありませんこと、拷問って苦痛を味わす事じゃありませんの、貴方は私に遠慮してなさるんと違いますか」

「いや、これからだん／＼酷く責めるのだ、今もな、頭から湯をかけようと思ったが、借りてきた髪を濡らしては悪いと思ってな、さあ、それでは、もう一度番所へ帰って拷問のやり直した、さア、立って」

「ねえ、お願い、私のお腰濡れてるでしょ、ですから、取り替えて」

バサリとびしょ／＼になった腰巻は夫の手で流しへ落されました。私はそのまゝ、縄尻

をとられて縁に立たされ、夫はタンスの下の抽出からお腰の代りを持ってきて穿かしてくれました。二階へ上ると、小梯子を横にした上へ座蒲団を敷いて、正坐して坐らされました。夫は私の揃えた太股へ、さっき脱いだ長襦袢をあてゝ、その上へ抱えてきた責石をそっと乗せました。動いても落ちないように腰紐で腰から石に結びつけて、

「さア、少しは酷いぞ、覚悟はよいか」

私が無言で頷きますと、

「少し、腰を上げるのだ」と云います。何をするかと云われる通り腰を浮かせますと、二寸丸の竹をふくらはぎに入れました。そして小手の縄尻をこれ以上に腰から上に延び上れない程度で、両足に縛りつけて、新聞紙を三枚ばかり筒にして鞭の代用を造り、私のお臀をパシ／＼と打ちました。音が大きく響くだけで少しも痛くありません。

只、水で濡れた細引きが締ってきたのと、ふくらはぎの竹が、体重をかける度に痛くなってくるので、中腰の姿勢で辛抱していました。然し、膝の上の石の重みをいつ迄支えて

いるわけにはゆきません。腰がだるくなって下せば脛が痛いし、私は歯を喰いしばって我慢をしていますと、額から脂汗が出てきます。声は出すまいと堪えています、うーうーという呻めき声が自然に口からついて出ましたので、上半身をよじり、縛られた小手を握ったり開いたりしていました。

其の間、夫は前、横、後からと三枚、カメラにおさめました。直に膝の石と腰の縄を解くと急いで、ふくらはぎに入れた竹も除いてくれました。ほっとした私は、知らず知らずの中、荒い息がハア／＼しています。

夫は水差しをとって口に水を注いでくれました。少し落ちついてくると同時に力が抜けて私はがっくり、そのまゝ横倒しになりました。

「苦しかった？ 痛かっただろう。」

そういつて、夫は縛られたまゝの私を抱き起してくれました。

「うゝん、ちっとも辛くはなかったわ、愉しかったの」

私は心の中でそう云いながら、夫の胸の中に倒れこんだのです。

(おわり)

○ 大分以前であるが、ラジオの落語で、誰だったか名前は忘れたが『風船広告』というのをやっていました。ある失業した男がアドバルン広告にやとわれる。その仕事と

いうのは軽気球の広告と共に空中につりさげられ、人目をひこうという趣向につかわれるもの。契約がされるや否や、男はすぐそばのベッドにねかせられる。幾時間も

空中につりさげられるため、おしめをはかされる。嫌がる男が仕方なくおしめをはめられる姿がユーモラスで又エロチックだった。

○ 子供の頃読んだ読物、佐々木

邦『ユーモア艦隊』の中の「あべこべ玉」で仲の悪い兄と妹が入れかえられる。あべこべ玉の魔力で兄は妹の姿となり、妹は兄の姿となる。わんぱくな男の子もスカー

トをつけ、パチンとしまるズロースを穿かされ、やむをえずおとなしくさせられるところがたのしかった。

○ やはり少年読物のサトーハチロー『おさらば横町』中学の兄さんが運動パンツを忘れたため、妹の小学校にいつて妹のズロースを借りるところがある。

「だって、レースの飾りがついてるのよ」

「たのむからかしてくれよ」

「ええ、いいわ、私、下にコンビネーション着ているから」

というような会話だったと記憶している。

○ 新しいところでは、石坂洋次郎の小説の中によくズロースが出てくる。『青い山脈』で芸者が医者者の自転車のうしろに乗せてもらっているところ。

「ころんでも知らないわよ、わたし、ズロースなんて穿いてないんですから」

又『山の彼方』は映画の中でも出てきた。中学校の物々交換会でズロースを何かと交換したいという希望がついて出品してある。そ



フェチシストの 文学ノート S・Y 生

れを池部良の教師がひろげて驚くところ。小説の方ではズロースとしてあったのに、映画ではブリーフ式の小さいものだったので、がっかりした。どうしてもあの場合には、ブカブカのブルマー型の大型のズロースでなければ味がないところ。

○ 同じく洋次郎の『若い人』にもズロースが出る。ミッシェンの寄宿舎で持物検査がある。先生たちが生徒の行李の中を次々にあけてゆく。男の先生の目に、彼女の秘密の所持品が次々にのぞかれてゆく……。

かって卒倒する。かつぎ込まれてきた時。

「わたし、おしっこが出てるわ」

「えっ??」

「しりません、いま気がついたの、アラいやだわ私」

そこで男の先生にたのんで、代りをとってきてもらう。

「戸棚の中の草色の革のついた李がわたしのです。ブルマーとそれからズロースを」

○ 同じく彼の作品で題名は忘れだが、少女が寒い冬に折檻され、坐っている間に、おしっこをしかぶって、ズロースをぐしょぐしょに

○ 洋次郎

とよく似ている若杉慧の作品にも又よくズロースが出る

『エデンの海』で主人公の女学生が運動会の時、目かくしして走って、ぶつ

濡らしてしまうところがあった。

○ 伊藤整の初期のもので、満州か支那かの旅行記の中で、女給が椅子に足をあげていて黒いズロースがのぞいてみえていたところがあった。

○ 時代は、又、昭和の初期にもどるが、竜胆寺雄の『放浪時代』ガレッジの二階をかりて兄と妹と主人公の青年とが一しよに住んでいる。妹の魔子のズロースがよく出てくる。前にかがむ時、短い夏服の裾からズロースがみえる。

「きたないズロースだな」

と兄が冷やかす。

又、夜の浜辺で兄と妹が裸でダンスをする。

「いいだろう、お前、ズロース穿いているんだろ」

主人公と三人ねている時、魔子がズロースをぬぐシーンがある。

足先の方にかかしていつて、望遠鏡のような恰好でズロースがぬぎすてられるところ、やはり彼ならではと思わせる文章だった。

マソヒズム体験談

猪 狩 り

黒 井 邦



勧めるのだ。

これから私が皆様に告白しようという話は面白さには乏しいかもしれないが、女性というものが、如何に惨酷さを持った生物であるかを如実に物語っている点で興味があると思う。当時の私は女性に対して、或る種のマゾ的感情を多分に持っていたということは、疑いないが、実に悲惨の状態に置かれたその当時の恐怖心が、今でも忘れることが出来ない。又、反面には、すべての自由を奪われた時の苦しさとは比例して、或る程度の満足感が共存していたことも事実である。

私が二十三才という結婚適齢期を迎えた夏のことである。いつもヘボ将棋の相手で親しくしていた、はったり屋の魚寅と呼ぶ魚屋の寅さんが、日曜日の昼前、突然、下宿している私の二階を訪れ、「よい娘がいるが嫁に貰わないか、今日は日曜日でもあるから一つ欺されたと思って冷やかしに行こうではないか」と盛んに

そんなわけで私も新地の女を冷やかすような軽い気持ちで同道することになった。バスで街へ出たが、私は先ず第一に、先方の家というのが、目抜通りの大きな料理屋であるのに驚いた。なんでも、彼のお得意先だそうなの。寅さんの案内で、二階へ通されて待っている。と、十八、九の娘が、酒と肴を持って現れた。はったり屋の彼のことから、大ボラをふいている位に思っていたのに、彼が言っていた以上に健康美に溢れた美人であるに舌を巻いて、私はむしろ圧倒されたように言葉もなかった。

暫く御馳走になった頃、この娘の姉という芸者をしている人と二人で現れて、優美な日本舞踊を見せてくれた。私は飲みつけない酒を酒好きの寅さんの相手で飲み過ぎて、酔いつぶれ、姉娘の介抱を受けた。私は彼の言葉より事実はずっと素晴しかったので、心を動かした。田舎の農家の出である私にとって、水商売特有の垢ぬけのしたあでやかな雰囲気には、驚くというより、むしろ心の奥底から痺れるような眩惑を受けた。この世の中に、このようなあらゆる本能の愉しさを燃え上らせる世界があるのを初めて知った。

それから私は、下宿している町から数里離れた作州第一のこの街へ度々出かけた。

若い女性特有の甲高い、しかも甘ったるい話声、薄給の公務員の給料では中々飲めない

灘の生一本の酒の味、新鮮な肴、謡、踊、そんな夢のような日々がその都度繰り返えされたが、何故か彼女達に対して、それ以上の愛情は湧き上らなかった。心の中では、二人共美しいなあと嘆賞するのではあったが。

或る日、姉娘と二人で、彼女の家で経営しているという豚舎へ行ってみた。そこは街はずれの川端にあった。ヨークシャー、パークシャー、といった肉用豚が、大小さまざま、うごめいていた。世話をしている中年の男と何か話していた彼女は、器具を受取り乍ら私の方を顧ってニヤリと笑った。私を呼んで「豚は猪の進化したものよ、私は豚みたいに肥って大きいでしょう。けれども貴方のように痩せている人よりは進化しているかもしれないわ。」

と妙な理窟をいったかと思うと、右手に持った薄刃の小刀を示して言う。

「私は豚の去勢をよく手伝うのよ、今日一つ私の腕前を見せてあげましょうか」

とんでもないお転婆な娘だと思ったが、持前の好奇心と科学的興味で、私は彼女の仕草を見守った。彼女は可なり大きな一頭の白豚を動けないように、柵に縄で縛りつけて、左手で陰囊を握り締めていたが、右手の小刀で二度ほど撫でると、ピンポン玉のようなタマがころりと飛び出した。それを皿に入れて、帰り途、

「ねえ、私これが大好きで、大変元気になるような気がするの、帰ったら貴方にもすぐ料理してあげるから」

と云う。私はその皿の上に淋しく光っている乳白色の玉を見て、胸がむかむかとしてくるのだった。

それ以来、姉娘に対しては少し気味悪くなっていたので、妹の方とよく出歩いた。或る日の午後、妹と二人で大川で水泳をしていたら姉がやってきた。

「良ちゃん、私も泳ぐわよ」

と大声で橋の上から叫んだかと思うと、姉の正子は小走りにとんできて派手な浴衣をばつと脱ぎ捨て、見事なはちきれそうな身体で強烈な陽をはねかえしながらざぶざぶと川の中へ入っていった。

「私は水泳が得意よ」と自慢するだけあって全く彼女の泳ぎは素晴しかった。ポリウムのあるエネルギーシユな身体は、弾力的にぴちぴちと動いて相当早い流れを易々と横切った。見事なクロールだった。橋の上からは沢山の人が鈴なりになって、彼女の泳ぐのを見ていた。

水しぶきを上げて岸へ戻ってきた正子は、堤防の石垣に腰掛けていた私のところへきて「ねえ、貴方泳いでごらん、手を持ってあげると云う。「僕は一人で泳ぐよ」と吐き出すように言ったが、中々承知しない。仕

方がないので、一度だけ女の云う通りにすることにした。彼女は私の手をしっかり持つて川の中程へ引っぱってゆく。私は出来るだけ空気を吸い込んでから水に頭をつけた。目を開くと、川底の小石が波で縞模様きれいにゆれて見える。呼吸が苦しくなったので急に立ち上ったら、そこは、もう三十センチ位の瀬であった。正子はニタニタ笑って、「あなたは、よく水にのる」と褒めてくれたのはよかったが、それからが大変だった。

向う岸に近く、川の中に洲があるが、そこへ行く迄に相当深いところがあり、流れも早かった。無器用な私は、さんざん彼女に玩具にされ、水を吞まされ、挙句の果、やっと洲へ辿りつくことが出来た。砂の上に腰を下して休んだ。

正子は、しつとりと湿った砂の上に大の字に仰向けに寝そべった。

「ねえ、私の身体を砂で埋めてみない？」

とそゝのかす。色白の正子の肌も陽に灼けて、ほんのりと赤らんでいる。私は、掌で砂をすくって彼女の身体の周りにかけた。私は疲れてもきたし、岸で待っている妹娘のことも思つて、「もう、これ位でいいだろう」と手を休めると「駄目駄目、もっと私の身体の周りを固めるのよ」と言つて承知しない。若い女が、全く変っている、と思ひながらも、湿った砂を川沿いからせせと運んだ。まだ

十分載せきれないのに、彼女はがばツと砂から抜け出した。

大の字型の窪みが彫刺のように残って、こゝへ石膏でも流し込んだら、美事な女人像が出来そうだった。

「貴方、私の体の中へ、砂をこわさないように入ってみてごらん」

「まさか、砂を崩さずには無理ですよ」

「さあ、足先から」

「仕様がな、入ろうか」

正子にせかされて、私は仕様ことなしに、踵の型に注意して踵から、両脚、腰、胴、頭両腕と完全にその砂痕の中へ入った。が、砂は崩れなかった。正子は砂の中に大の字になった私を見つめ

「貴方は私の身体の中に完全に入れるわね、ほら足も、股のきれ上りは私より小さいよ。砂の型のより上に踵があるわ」

と言って、ぎゅっと足を握った。その痛いこと、私はびっくりしたが、彼女はすぐ離れたので、私はそのまゝで寝そべっていると、「お尻も、肩も頭も、こんなに余裕綽々だもの」

正子は勝利者のように手を腰にして突っ立っている。実際、正子の偉大な体軀には私はとてもかなわない。今日のように、肉体を露している、その貧弱さが、たまらない圧迫感となって威圧されてくる。正子の身体の中

中に自分が完全に入っても、まだゆとりがあるということに明瞭に自覚して、今までの正子と違って、なんとなく偉大に見えてきた。質量共に圧倒されて、今更、恋愛的な感情も湧く筈はなかった。

それから数日後、私は自分の一生を通じての最も奇怪な日にぶかった。

その日は晴れていたが、二百十日を目前にひかえて、風の強い日であった。

例のように、彼女達の部屋になっている二階の奥の八帖で煙草を喫っていると、良子と正子が二人一緒に入ってきた。正子は

「良ちゃん、折角邦さんが来られたのだから今日は面白いことをして遊ばない」

と言ってから、何か良子に耳うちした。良子は「うゝん」というような返事をしていたが、私は先日のことでもあるので、なんとなく薄気味悪く感じて、床柱の方へいざり寄ってもたれた。傍の机の上には、表紙の破れた雑誌が置かれてあった。見るともなしに頁を開くと、グラビヤの口絵で、女が三角型の木馬に跨って責められている絵が目に入った。跨った足の先には、両側とも鉤りがつけられ、苦しさに身もだえしている光景であった。

正子は、部屋の障子を開け、廊下の縁側の手摺に渡してあった長さ一間、径二寸五分位の竹のらんかんを取り外して部屋の中へ持ってきた。この部屋は、この廊下の入口は板戸

になっていて、それから先はカギの手に曲つて、内庭に面した大広間に通じているので、いわば、こゝだけが離れのように孤立しているわけだった。

「さあ、これを三人で股ぐのよ」

と正子に云われた。私を真中に、三人でその竹の棒を跨いだ。あの日以来、正子は私が苦しむ事をよく承知して、こんな悪戯を初めるのだと思ったが、彼女に云われると、どうも最初は、いやと云っていても、いつの間にかやら彼女の云う通りにさせられてしまうので今日は、彼女の云いなりになってやろう、と決心していた。

「良ちゃん、いいかい」

正子が言うのと妹の良子はスカートを穿いていたので、股のつけ根まで、まくり上げて、股で竹を挟むと両手で竹をしっかり握った。正子は着物を着ていたが、腰巻と一緒にたくし上げて竹を股で挟んでいる。彼女は脚長というのか、小柄な私は、踵が次第に畳から浮いて爪先立つのを余儀なくされた。間もなく両側の姉妹が爪先立ちとなるや、私の爪先は宙をはなれて、畳の上に、もんどりを打って倒れた。

姉妹は明るい顔で笑った。

「どう、痛くなかった？」

と二人に寄り添われると、

「平気だ、今のは僕の失敗だった」

と負け惜しみを言った。然し、この優しい言葉が、彼女たちの最初からの計画だったとは、夢ならぬ身の私は知らなかった。

「それでは、もう一度やり直しと、では手拭を脚に、ハンカチで手を」

竹に跨って、手首と足首を各々括られた。

今度は手首を括られているので、竹を握ることが出来ず、足も揃えたまゝなので、前よりは余程条件は悪い。然し、そのまゝでも倒れはしない。彼女たちは、姉の正子が足首を縛り、妹の良子は両手を縛った。

前のようにお互いに爪先立ちとなってしまう。私はしきりにバランスをとろうとするが脚も手も不自由であるし、竹の中央にいるということは、いずれにしても最も不利である。約五分間ばかり懸命に頑張ってみたものゝ、実力の相異は如何ともしがたく、もがきもがき足を上にして一廻転したかと思うと、両足両手を竹に縛られたような恰好でぶら下ってしまった。

いつの間にか、正子は竹の棒を股から離して両手に持ちかえていた。私の体は手足を縛られているので猪狩りの恰好でゆらゆらと揺れている。もう完全に自由を奪われているのだと覚った時に、もう手遅れであった。私は猪狩りの獲物の猪のようにぶら下り、竹の一端は床の間の違い棚に、他の一端は衡立の上にかけられ、正子が、得意そうにニタニタと笑

っている。正子は妹の良子に「もういゝわ」と言つて、妹を下へ下してしまった。

「あなたって、お馬鹿さんね、先日よくわかつていたのに、もう自分の実力を忘れてしまったのね、男のくせに、こんなみじめなざまになるなんて」

こんな憎まれ口をきいても、偉丈夫といった体格の彼女の口から出るのだから、まことに似つかわしい。それよりも私は、自分の全体重をかけた両手と両足の結び目の痛さを辛抱する方が当面、急な問題であった。

「貧弱な男のくせに、魚寅に断つたわね、今日は猪狩りして、この怨みを晴してやるから覚悟するのよ」

この間のことがあってから、私はそれとなく婉曲に寅さんに断つたのは事実だが、私としては、妻とするならお転婆の姉の正子より良子の方がいゝと思つていたのだが、どうも先方では、姉の方の養子に来てほしいという意向のようだった。

「別に僕の方から云い出したんじゃないんだよ魚寅の小父さんが、君たちを欺していたんだよ、ねえ、判つたら下してくれ、頼む」

「うそ、おっしやい、今更、じたばたしたって許してなんかやるもんか」

次第に手足が痺れてきた。豚の去勢を顔色一つ変えずに喜々としてやる正子のことだ。どんなことをされるかもしれない。そう思う

と、私の背筋を冷やりとしたものが走った。

それからの十数分間――

私は、女性というものが、如何に惨酷な精神を持った生物であるかということを、つくづくと思い知らされた。

私はその時のことを、こゝに再現して書く元気がない。それは、それこそ、あの豚以上の哀れさとみじめさだったからだ。

ふと気がつくと、私は次の間で毛布にくるまって横になり、一枚の夏蒲団が掛けてあった。それは姉妹のどちらかのものなのか白粉の匂いに混つて、かすかな若い女の体臭が鼻に漂ってきた。

もう日が暮れかゝって、螢光灯が輝やいていた。私は眼を開けて窓越しに薄墨色の空を眺めてなんとなく物悲しくなってきた。「もう二度と、彼女たちと逢うのはよそう」そう思いながらも、別れたあとの淋しさが、ひし／＼と身に迫ってくるのだった。私は再び狸寝入りをした。

(おわり)

【編集部註】「男性猪狩りの図」という、正子と良子が、男を吊っている絵と、「男性一匹を計量する図」という、ドンゴロスに男を入れて、計っている絵の二枚が、添布されてありましたが、これは、別紙発表の「限定版マゾヒズム特集号」に掲載することにします。

緊縛女体雑考

三鷹家浮



まだロクに肩上げも取れない少年の頃から「責絵」(主として美女の後手に縛られた絵画や写真)を蒐めて、二十数年、今はもう初老期に入った私である。

アノ頃(戦前)一度でもいゝから伊藤晴雨氏に会ってみたい。又その作品の種々を見せたいとく事が出来たら、私はもう何時なんどき死んでもよい等と、今考てみるとまるで正気とは思えない程の凝りかたであった。

大平洋戦争の空襲で、私にとっては命から二番目とも云うべき、蒐集品の全てを失い、

ヤケのヤンパチも手伝って、永年住み馴れた故郷の大阪をすて、現在のこの炭鉱に来てから早や十年余り——。幸いにも戦後の頹廢の波は、待望久しかった晴雨氏とその作品の数々を世上に発表するの機会を与えてくれた。勿論私は欣喜雀躍して、氏の作品を片っぱしから入手して行った。が、しかしその結果は別の方面から晴雨氏に対する理解を深めたが「責絵」に関してはいさゝか失望した——。

ということとは、筆名は違うが大分以前に告白したことがあったので、今回は奇ク復刊を祝

す意味からも、もっと最近の私の心境や雑感を述べることにしよう——。

復刊第三号(四月号)誌上に、緑 猛比呂氏の御説の中に、アノ懐しい往年の緊縛女優の、原 駒子さんや大倉千代子さんが、今は大阪難波新地で、バーを共営されており、そのバーでの大倉さんの語られた、往年の縛られ役の場合の心境やら周囲の事どもについて氏の聞かれたまゝが、少し載っていたのを、私は大変興味深く拝見した。そのことについて、——勿論私は大倉さんの御意見を否定する訳ではないが——一つ吾々アブ党の中の女体緊縛シーン崇拜者の一人としての私の氣持を述べてみたい。

一体、映画にしても演劇にしても、その劇中に縛られ役を振られる女優さんといえば、大抵主演者か、でなくば主演者の相手役に当る場合が多い筈である。したがって縛られ役に廻る女優さんは、当然演技に於ても又、美貌の上から云つても名の売れた、即ち大幹部どころ——という事になるであらう。——ということは又吾々マニアにとっては「待つてました！」と快哉を叫びたいところなのである。

然るに、その女優さんが、監督始め大勢の見ている前で縛られるのが恥しい。——というので、ホンの形式だけのダラシなく縄目の緩んだ縛られ方をしたり、或はまた吊し上げられ

る役が痛いから厭だとか云って、代役させるとすれば、吾々マニアをして是程失望落胆させることはないのである。

私は、こう思うのだが——即ち大勢の眼の前で縛られるという事は、成程恥しいには違いない。しかし、それは劇であり、自分は俳優であるとの意識があるなれば、縛られるのも当然芸の上の勉強ではないか。かの江戸末期の沢村田之助を見よ！ 痛いからといって代役させられた者だって、やはり痛さに変わりはあるまい。サーカス等のように、一朝一夕には体得出来ない特殊なものは、致し方ないとしても……。

この点、監督さん達も充分考慮して、すべて写真味を出す為に、遠慮なく当人をガッチリ縛ってほしいものだ。

「振袖狂女」の一カットで、宮城野由美子さんが本当に吊し上げられていた——といって、大いに気を良くされていた人の記が、一ト頃の奇ク誌上に出ていたるも、ムべなる哉である。

現在の私は、正直に云って、もう一ト頃程の「責絵蒐集熱」はない。それは年令的にも且つ環境的にもよるのであろうと、自分では割り切っているのである。

とは云え、そんな私がタマに暇を得て街に出ると、ヤハリ何時とはなく自然に本屋の店内に足を踏み入れて了う。そして手にとる月

刊雑誌をバラ／＼めくってゆくのだが、やはり内心では、女の縛られた場面の挿画が現われるのを密かに期待していることは否めない。

しかし又、さればと云って、余程珍らしく素晴らしい構図のそれに出会わぬ以上、今の私は、一本を購うようなこともしないのである。

永い歳月の間に、さまざまな「女体緊縛の構図」を求めて、小説や物語の挿画から、映画演劇に至るまで探求し尽したつもりで私ではあるが、近頃はもう自己の求める構図に、限度が出来てしまった。

私は仮りに、人間の縛り方を「東洋型」と「西洋型」の二つに分けている。

「東洋型」というのは、その呼称の如く大体東洋人に課せられる縛り、即ち日本映画や芝居で見る、かの「高手小手」という形容詞を——概ね時代物を主として——文学者が常用する「後手縛り」であり、「西洋縛り」とは洋画に現われるところの、後手でなく両手を肩から垂直に、両脇腰のあたりに下げた姿勢で縛られたり、或は両手を前に膝に揃えた姿勢で縛られたり、免に角、後手縛りでないものを指すのである。

「美しい女の後手に縛られた姿態」の中で、私が最も魅力を感じるのは、東洋型の高手小手であり、かの胸から背にかけて腕を羽がい

締め、幾巻にも緊縛されたそれである。

私が往年蒐集した凡ゆる場面の「女体緊縛画及写真」も、皆この条件に当て嵌ったものばかりであった。

映画を観るのも、雑誌を読んでも、以上の条件に当嵌るものと云えば、自然、時代物を主とするの外はなく、——しかし又、洋画や日本現代読物の中でも、そうした場面のあるものならば、勿論、私は見逃がさなかった。

戦前、河合キネマの現代劇で、「貞操」と題した映画では、琴糸路扮する美貌の若妻が、淋しい墓場の中で、悪ラツな工場長の輩下の為に、荒縄で後手に縛られ猿轡を嵌されて掘立小屋の中で責められるシーンがあったし、又「うずしお」と題した映画では、これも同じく琴糸路が、明治初期の扮装で、始め猿轡を嵌され床に投げ出されている後手縛りの背中を見せ、後には立姿で柱に縛りつけられた、素晴らしい場面を見せてくれたことも覚えてい

洋画では残念乍ら以上のような、私の好む後手縛りのシーンが、皆無とは云えぬ迄も極めて稀であるのと、今一つの私の好み（和装純日本風俗）に合わぬため、自然敬遠の形を取るのが私の常である。

乙羽信子扮する「縮図」に於ける芸者姿の緊縛シーンについては、既に先輩諸氏が本誌上で定評を加えられているので、私如きが今

更とや角云う必要もないが、こゝで一つ「映画ポスターに現われた緊縛場面」について、述べてみたい。

若い頃から（今もなお）経済的にも肉体的にも、余裕に恵まれなかった私のことゝて、果して充分な自信をもって、これを云えるかどうかを怪しむが、（足りないところは又、先輩諸兄弟からお叱りなり御教示に預るとして）一体映画ポスターに女の縛られた場面を挿入したものは非常に少い。

ポスターに魅せられて、飛びつく思いで映画館に走り込み、そんな場面が一つもなく、見事に肩すかしを喰って失望落胆、始めの勢いはどこへやら、悄然と館をアトにした記憶は三月号誌上で、緑 猛比古氏も述べておられたかの東映探偵物「獄門島」である。

アレ程艶麗且つ、吾々アブサンの喜ぶ太縄のグルグル巻きの場面は、永い間の私の蒐集狂時代にも類を見なかった。それだけに私も勿論アノ映画に失望落胆組の一人である。

話は戦前に遡って、昭和十一、二年頃だったと思う。——新生マキノ映画が、千鳥興業株式会社提供で封切られていた時代劇「深夜の紅独楽」のポスターに後手縛りの女が吊し上げられている場面が挿入されていた。この映画では、獄門島のようなインチキではなくラストシーンで当時の緊縛女優「桜井京子」が、——これはサウンド版であつたので、

「衆寡敵せず雁字搦目の荒縄に……」という名解説につれて、太い釣瓶縄で雁字搦目にされて井戸の上に吊り下げられるのを見せてくれた。

ポスターに現われた女体縛りで、もう一つこれも昭和十二頃だったと思うが、当時の極東キネマの時代劇「光秀の源太」にそれがあつたのを覚えてゐる。

このポスターの縛り画は、別にドウといった取柄もない普通の絵であつたが、日本髪の頭から緋鹿の子の結綿がダラリと垂れ下がりフックラと盛り上つた乳房の膨らみが、縄目からハミ出ているその様（さま）が、当時、蒐集熱に最も脂の乗り切つていた私の好むところとなり、矢も楯も堪らなくなつて、——忘れもしないアレは大阪、千日前の芦辺劇場の電車道に面した、非常口の扉に押しピンで止めたあつたそのポスターを、私は無断で失敬して了つた。

勿論、映画も観たが、これは又ポスターだけで、中味はつまらなかつた。以上の外に、最も大切なことを忘れてはなるまい。云う迄もなく、それはかの人も知る「縮図」であろう。これこそはポスター実演共に、戦後における緊縛ポーズの最傑作と云えよう！

先にも一寸述べておいたが、初老期に入つた近頃の私は、何となく、物臭太郎で、自然往年程の熱意が盛り上つてこない。そのため

でもあらうか、昔は映画のスクリーンを見る丈で「ハハアンこの映画には必ず女体緊縛場面があるナ」てなことが、たとえスクリーンに緊縛場面が無くとも凡そ「カン」で判つたものが、今はそれが判らない、——最近の日活映画で、双葉社の月刊雑誌「別冊読切傑作集」連載の「白浪若衆」を映画化した「江戸怪盗伝」を観に行つて、私は次のような失敗をした。

何せアノ原作中では、主人公「お嬢吉三」の愛人「お久美」が「お坊吉三」一味の為に糸纏わぬ素っ裸にされた上、大八車の片車輪に縛りつけられ吊されて車責めに遭う凄惨な場面があり、その挿画は戦後の新鋭「三谷一馬」画伯によつて画かれており、又、それから後の章では、今度は女賊の「お滝」が半裸体で、髑髏組の主領の為に、鼠責めに遭う場面もあり、俱に私の好むところ、さて映画の上ではどのように演出されるであらうかと、胸躍らせて上映館に飛び込んだ。

話が少々脱線気味になるが、近頃の月刊雑誌をみると、どれにも大抵封切映画の紹介欄がある……。勿論私は、それに目を通したのであつたが、その為却つて是から述べる失敗をしてかしたのである。

何という名の雑誌であつたかは忘れたが、——それには映画のスクリーンからとつたものゝ横に、挿画を加えてあつた。そして原作中

での、お久美車責めの場面に相当すべき、「お嬢」が「お坊」一味の為に捕えられ、縛られている写真の横に、これは挿画で、「お久美」が後手でなく、両手を前に挙げて吊されているのであった。この場合、お久美の分が画でなく、写真であつたら、私は絶対かの映画を観に行かなかったであつたが……、妙に信用が出来ずに若しや？の期待をかけて、寸暇を割いた。

画面が進展して、遂にそのシーンとなったトタンに私は映画館を飛び出した。——雑誌所載の通りであつたことは、最早云う迄もあるまい。

しかし何ぞ計らん、その時慌て、映画館を飛び出さずに、今暫らく、ジックリと観ていたら、後には女賊「お滝の蛇責め」が、後手縛りで観られたのであつたものを……。

私は後になって、是を知って大いに口惜しがつたのである。——奇ク復刊第三号のお蔭であつたことを、申し添えておく。

奇クが休刊になつてからは、何だが生甲斐を失つたようで妙に心淋しかったが、その癖して、復刊の朗報を得ても、さて飛びついて入手しようとしなかったのは、すべて現在の私の物臭に起因していたのである。

復刊四月号を入手してみても、ヤハリ良かった。——と云うよりも、大いに得るところがあつたのである。女優緊縛シーンの紹介がそ

れであつた。

スチールにもなく、雑誌の映画紹介欄にもない為に、冗費に終ることを嫌って、見逃していた数本の映画も、お蔭で遅滞乍ら追つかけて観ることにした。

最後に、これも先に一寸述べた「自己の求める構図に限度が出来てしまった——」というその限度について、少々釈明を加えて稿を終ることにしよう。

私の好む「女体緊縛の構図」——。それは是又先に述べた筈の、必ず後手の高手小手であること。仮令それが高手小手であっても、後に廻した手首だけを重ねて縛つたものや、もう一步進んで二の腕を羽がいに締めてあつても、胸から背に廻して縄目（扱帯も含む）が掛つていなければ、その構図に対して感じる魅力は半減するのが、私独自の境地なのである。又、その胸に掛つた縄の位置は恰度乳房を縛つた程度の、所謂「胸高でなければ氣に入らない。尚又、以上に満足出来たとしても、その縄目の中の一本でも、理屈に合わないような妙な個所に外れていたり、ダラシなく弛んでいたりすると、これ又氣に入らない。

「責」の研究大家、伊藤晴雨翁は、胸を縛つたその縄で、女を吊し上げると、——乳房を強く圧すると、数分にして絶息してうう筈だがと、他の諸画家の画かれた「緊縛吊し女」の

画を皮肉っておられたことがあつたが、理屈はどうあろうと、私はその乳房の上を緊縛したのでなければ、吊し女の場合にも魅力を感じないのである。——以上私の好みに関わらないものは、今は全然蒐集しないことにしている。

猿轡を嵌めたものは、私も好きだが、これにも又、その嵌せ方によつて、非常に魅力を感じる場合と、そうでない場合があるが、猿轡については、過去の奇ク誌上掲載「変の字問答第二話」中に述べたことがあるので今回は割愛させて頂くことにして、最後に云う。——私の求めてやまない「女体緊縛の構図」は、容易くいつも眼近にあるようでもあり、又、一向にお眼にかゝれない——とも云い得るのである。

奇ク復刊四月号のお蔭で、東映「里見八犬伝」のラストシーン、田代百合子の緊縛やら日活の「江戸怪盗伝」中の、女賊「お滝の蛇責め」やらを鑑賞出来たことを、心から感謝してこの稿を終る。

(終り)

【参考】

昭和二十九年十月特大号

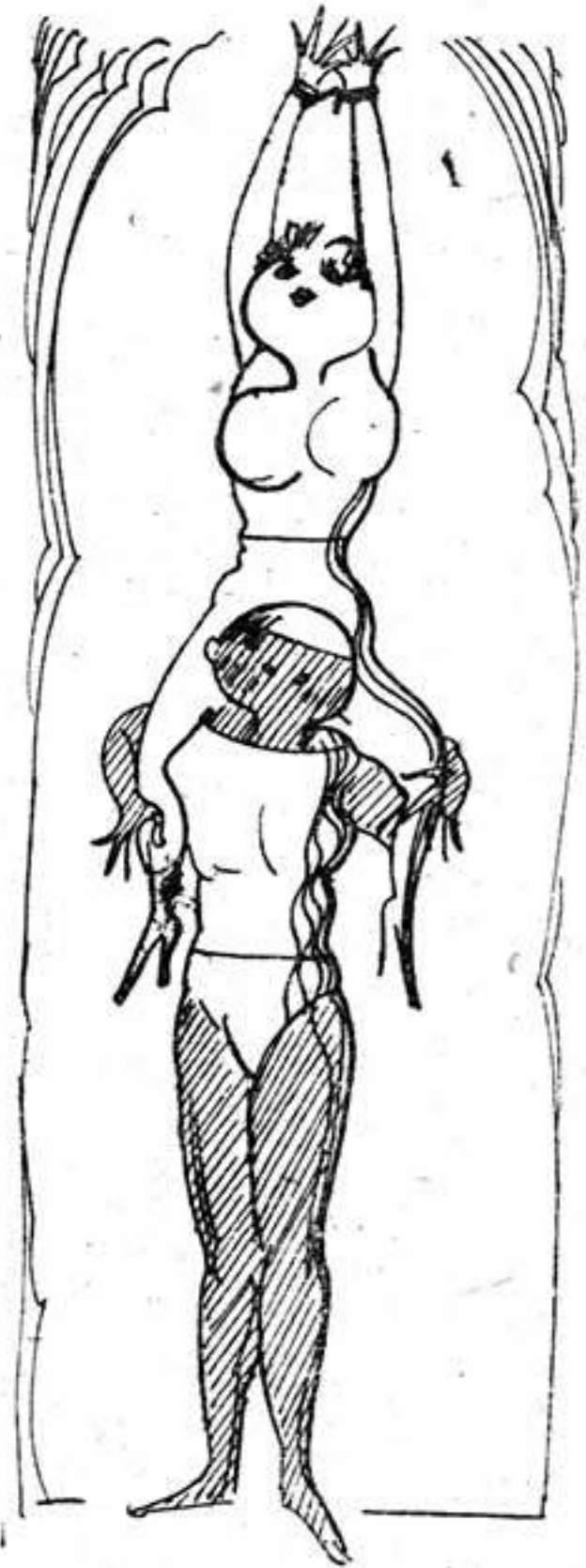
『変の字夜ばなし』浮家鷹三

昭和二十九年十一月特大号

『続・変の字夜ばなし』浮家鷹三

(体験・告白・手記)

「禪」先生 青葉 模一



私は小学校を、師範学校の附属へいったが、六年生の時に病氣をして、中学の受験が出来ず、そのまま高等科へ進んだ。高等科になると、小学校の時分とは違い、科目のいくつかは、科目別に、師範の方の担任教師が来て受持つようになる。

体操担任の工藤先生は、師範へその年に新任して来たばかりの、筋骨質の若い逞しい教師だった。ランニング・シャツにびっちりと包まれた胸は、叩けばビーンと鳴りそうな弾力で張り、狐色の皮膚からは、健康な体臭が強く発散し、私は彼の前に出ただけで、一種の快い威圧を受けずにはいらなかった。

最初の授業で、「オイ。その蒼いの。モット胸を張って」と、彼から注意されたことが、私の心には、何時迄も消えずに残った。虚弱な私は、体操の教師にみこみの悪いのはきまっていた。それは仕方のないことだとしても、相手が工藤先生だというのが、私の氣持を特別に痛めたのである。

身体の弱い私が、工藤先生から好かれないのはあたり前だ。そう思っただけで諦めようとしても、私の胸は悲しく沈むばかりだった。

湯殿の修理を始めて、家では風呂がたてられないので、余り行くことのない銭湯へ私は出かけた。明日は又体操の時間があると思う

と、妙に切なく苦しかった。私は下駄を引ずりながら、元氣なく、ざわめいている宵の町を歩いていった。

銭湯は相変らず混雑していた。そういう場所には馴れない私は、裸の男達に囲まれただけで、もう酔ったようになり、ボツと上気してしまう。落着かぬ氣持で脱衣棚の前に立ち、釦をはずしていると、突然誰かの手が、ボンと肩を叩いた。びっくりして振向くと、そこには思いがけない人の顔があった。工藤先生である。

「ア、先生——！ 今晩は……」

私は、ひどくドギマギして頭を下げた。

「やア、君の家もこっちの方だったのかい——？」

「はい……」

私は急に高くなった自分の鼓動が、先生に聞えはしないかと惧れた。

「そうかい。じゃ、此れからも、時々一緒にいるかも知れないな」

そう云いながら、先生は紺紵の袴をパツと脱ぎ捨てた。

私は、身体中を固くして、洋服を脱ぎながら、何気ない振りで、裸になっていく彼を、ジッと見守っていた。

シャツとズボン下を脱いだ工藤先生は、その下に、真ッ白な六尺褌を締めていた。

それを見た途端、私は何故か、ドキリとし

た。六尺禪が珍らしいのではなく、彼が締めていたことが、私にはシヨッキングだったのである。

スルスルと禪をはずした先生は、私を促して先にたつた。

はずした禪の白さと、あらわれた体毛との対象の鮮やかさが、眩しく私の眼を射た。ギリシヤの斗士のような、美しく逞しい彼の前に、私は自分の貧弱な身体を恥じながらも、秘かに慕心を寄せているその人との入浴は、嬉しく楽しく、心が躍った。

翌日は体操の時間の間中、工藤先生の白いズボンの下が、私は自分でもおかしい程気になつてならなかった。今日もあの下には、六尺禪を締めているに違いないと考えると、昨夜のことがまざまざと思出されて、頬が熱くなった。工藤先生が、六尺禪を常用していることを知っているのは、クラス中で私一人だけだと云う、何か誇りのようなものが、私を内心得々とさせていた。誰にも云わず秘密にしておきたいくせに、亦誰かに喋べりたくてたまらないのだった。

そして、とうとう、私は隣席の金原にそのことを囁いてしまった。

「君。工藤先生ねエ。何時も六尺禪をしてるんだぜ」

だが彼は、「フウン」と一言、興味のなさそうな返事をしたきりだった。

拍子ぬけがしたように、ガツカリした私はすぐその後で、或いは自分だけが、禪に対して特別に興味をもっているのかも知れないと気付いて、急に恥かしくなった。

夏休みが始まる頃には、誰が云い出したともなく、工藤先生に『禪先生』という綽名がついてしまっていた。

そのいわれは、次のような事からだ。学校の裏にある、天神様の松林で、蟬の音がするようになったある日。授業の終りぎわに、工藤先生は、

「いいか、みんな。よく聞くんぞ。いよいよ夏になったので、此れからの授業は、全員禪一本の裸で行う——」

と云うと、一旦言葉を切つて、皆の顔を見渡した。生徒達は、期せずして口々にガヤガヤと騒ぎ出した。

「静かに——。禪は白の六尺禪。全部揃えるんだから、他では駄目だ。現在持っている者はそれでいいが、無い者は家の人に晒を切つて貰え。みんな、締められるか？ 締め方を知っている者は、手を上げてみる」

そう云われて、手を上げた者は三分の一ぐらいあった。都市の学校だから、比較的少数だが、水泳のとき用いて知っているらしい。私は勿論知らない組だった。

「よし。知らない者は、お父さんとか、兄さんとか、知っている人に教えて貰つて、よく

覚えておけ。月曜日には体操があるから、それ迄には、全員締められるようになってくるわかったな。では、今日は此れで終る」

全く、晴天の霹靂と云つていい程の宣告だった。クラスの者は皆驚いたらしかったが、中でも私の驚きは大きかった。

私の胸はすっかり混乱して、後の授業はもうわのそらだった。私は禪の締め方など全然知らないのだ。父だつて知っているとは思われなかったし、他に教えて貰うような人は誰もいない。どうしよう。どうしたらいいのだろう。月曜日にもし知らないままだったらどんなに叱られて、恥をかかわからない。困った——。月曜日は、病氣だと云つて欠課しようか。全員が禪姿で体操をする恥かしさをかんがえるよりも、今はそのことの方が心配だった。

その日の授業が全部終了して、放課後になったとき、私はやっと決心すると、勇気を振つて、師範の職員室の扉を開けたのである。帰支度をしかけていた工藤先生の机のそばへいった私は、小さな声で、

「先生。僕、禪の締め方が、わからないんです。それに、家にも教えてくれる人はいないんです——。」

とおそるおそる云つた。

「そうか。そいつは困つたな——」
と一寸の間考えていた先生は、すぐに思い

付いたように、

「明日は日曜だったな。よし、じゃ俺の処へ来い。教えてやろう。場所は——今書いてやる。午過ぎにやって来い。明日の、午過ぎだぞ」

「はい……」

手帳を破って書いてくれた所書きを受取ると、私は礼をして室を出た。未だ胸がドキドキしている。そして何が嬉しいのか、無性に気分が燥いでならなかった。

工藤先生の下宿は、余り大きくない雑貨屋の二階だった。

「先生。学校の生徒さんがお見えですよ」

店にいたおかみさんが、梯子段の下迄いつて大声で呼ぶと、

「あ、そう。此方へ上って貰って下さい」

と聞きなれた太い声がした。

狭い急な梯子段を上っていくと、畳のあかくなつた六畳で、先生は寝転がって、雑誌を読んでいた。

併しそれよりも先に、私の眼は窓の方へ向いていたことになる。二階へ上って、最先に私の見たものは、窓の軒下に干してある、洗ったばかりの六尺禪だった。それはまだ雪が垂れて、陽の光に眩しく光っていた。その何でもない筈のことが、私の心には、妙に強く響くのである。

「さア、禪の締め方だったナ。禪は持って来

たか——？」

起きなおつた先生にそう云われて、私は初めて自分の迂濶さに気付いた。禪の締め方を教わるのに、禪も用意してこなかったのだ。

私は、彼に心の中を見すかされてもしたように、真赤になり、周章てて禪を取りに戻ろうとすると、

「いいよ。ワザワザ取りに帰らんでも。何んとかなるさ」

と云って、先生は笑いながら、煙草に火を点けた。

「済みません——僕、本当にウツカリしてて——」

「まア、坐れよ。今一ぶくするから——」

フウツと、薄青い煙を吐出すと、煙草を口に啞えたまま、先生は後へ手をやって、帯の結目を解いた。そして立上ると、勢いよく浴衣を脱いで、部屋の間へ抛った。

下は六尺禪一本である。

私は息をつめ、マジマジと瞳を凝らして、野武士のように精悍で、比類なく美しい、工藤先生の禪姿を瞞めた。

先生はもう一度深く吸込んでから、煙草を灰皿へ投げて、

「締めたところは此うなる。どうだ——」

誇らしげにそう云うと、仁王立ちになっている全身に、グツと力を入れた。股の付根の筋肉が、ピクピクと動く。股間を強く締めつ

けた布を、なお下から豊かに盛上げて、遅い弾力！固肉の臀部のわれめに、深く食込ませたその端を、尾骶骨の上で、しっかりと結んだ力強さ！ギョツとくびれる程に、腰のまわりを緊縛した六尺禪は、美事に発達した下半身の筋骨を、いやが上にも、強靱に見せているかのようだ。

私の双の眼は、熱を帯びて、ギラギラと輝いていたに違いない。そして、身体中が燃え上るような昂奮に、己を失いそうだった。

「六尺禪は、日本男子を、最も端的に表すものだと思ふ。こいつを締めると、心身共に引締って、勇壯の気が横溢してくる」

昂然としてそう云う、彼の禪姿は、見るからに頼もしく、威風をさえ感じさせた。

「これから締方だが、先刻洗った禪は未だ乾かないじ、そうだ、こいつを解いてやろう」

初めからその心算だったらしく、先生は気軽に、クルクルと禪を解いた。

浴場とは亦違つて、畳の上で見る彼の裸身は、炸裂するような激情で私をゆすった。

「サア、服を脱って」

そう促されて、今更のように自分の立場を知った私は、ブルブルと身体が顫えた。

恥かしいという感情を持つ余裕はなく、私は、すべてを先生の前に投出してしまふよう気持で、次々と、着ているものを脱いでいった。一刻も速く、彼と同じ姿になりたかつ

た。そうすることが、恰で二人の肉体を結びつけでもするかのように、私の心を駆立てるのだ。

最後に私がパンツを脱捨てると、近寄った先生は、未だ充分に体温の残っている生暖い六尺を、私の身体にあてた。

どういふふうにして締められたか、覚えるどころではない。俄に加った緊縛感を耐えるのが、勢一杯だった。工藤先生の手が禪を一寸でも離れたら、私はクタクタとその場に坐ってしまいそうだった。

「よし。サアどうだ。具合は——？ ウン、仲々よく似合うぞ」

先生は二、三步後へ退って、しげしげと私の禪姿を眺めた。

私は、生れて初めて禪を締めた（いや締めさせられた）恥かしい姿で、恰で曝しもののように、彼の眼の前に立っているのだ。苦痛というものとは違う。だが私は、心の中で助けを呼ばないではいられなかった。工藤先生の広い胸に、しっかりと抱かれたかった。

「では解いて、今度は自分でやってみる」

そう云われ、ハッとして禪を解くと、次に締めようとして、私はうろたえた。

「何だ。分らんのか——ホラ、こうやって、こう——今度はよく覚えるんだぞ。サ、これでよし。では、もう一回やってみる」

私は一所懸命にやって、やっとどうやら禪を自分で締めることが出来た。

「ようし！ 立派なものだ。オイ、今度は俺のを締めてみる。俺の軀は、生やさしいことじや締められんぞ」

いいことを思付いたとでもいうふうに、そう云う先生を、私は驚いた顔で見上げた。彼は白い歯をみせて、面白そうにニヤニヤしている。私は急いで禪をパンツとはきかえ、先生の軀へ禪をつけていった。

私は汗ビッシヨリだった。そして月曜日。恐れながらも、待っていた日である。私は妙に落着かない気持ちで家を出た。鞆の中には、昨夜母にきつて貰ったばかりの、真新しい六尺が入っている。

二時間目の授業が終ると、次がいよいよ体操の時間だ。級友達は、それぞれ禪を取り出すと、大騒ぎをしながら締めはじめる。中にはもう運動場へとびだして、相撲の真似をしているものもある。覚悟はしている筈なのに、私は頭に血がのぼり、脚に力が入らない。六尺禪は鞆から出したが、何か気おくれがしてすぐには締められず、わざとグズグズしていた。外では、「わア、スゴイ！ 裸で体操！……」とかんだかい女生徒の声がする。

皆が教室から出てしまふのを待って、私は手早くパンツを脱り、禪をつけた。廊下へ出ると、もう始業のベルが鳴っているのに、其

処此処から、好奇の眼が私を追って来る。

級長の号令がかかり、昇降口から工藤先生が現れた。見ると上半身は裸だが、下は何時もの白ズボンに運動靴。（オヤ、先生は禪じやないのか）併し、裏切られたと思った私の期待は、すぐに満された。号令台の下迄来ると、先生は、やおらずボンと靴を脱捨てたのである。台上にすくと立った、禪一本の彼の肉体は、降りそそぐ陽光をさんさんと受けて、筋肉の一つ一つが、今しも天翔けんとする天馬のようにきおい立ち、青空の中に誇らしく浮彫りされていた。だがそれも、もう私一人のものではない。そう思うと、嫉妬に似た感情が胸を暗くする。

「気をつけ！ なおれ。いいか、初めは先ず徒手体操から。みんな六尺禪を締めると、もう立派に一人前の男子だ。しっかりとやるんだぞ」

徒手体操に続いて、駄足・鉄棒・蹴球と行われていったが、相撲や水泳以外のものを、禪でやることに、異常な興奮を覚えるのか、誰も彼も、顔を紅く上気させているようだった。

付記

山口幸一氏をはじめ、その他の方々の、禪に関する文章に接し、私ははからずも『禪先

生』のことを思いだした。と同時に、何時のまにか薄れかけていた、襦への愛着を、懐しく甦らせてくれた。私は襦マニヤではないけれども、併しソドミアとして、襦にはやはり無関心ではいられない。工藤先生は、まもなく応召して、それきり消息を知らないが、無

事でいられたら、もう四十台の筈。だがまだ、あの逞しい体軀は衰えないだろう。そして相変らず六尺襦を愛用していただけるに違いない。

(終)

【体験告白手記】

お 臍 の 研 究

(三)

その相と性格に就て



須 藤 律 夫

美しき臍窩に対する私の執拗な探究は、然しもう三十年余りにもなるであろうか。機会ある毎に秘かなる凝視と、その度にときめく心を制し乍ら、見聞した事などの記録もかなり多い。私の蒐めた蔵書の中には、然し臍相

学として纏ったものは一冊もなく、何れも人相学(それも人体各部相法の一部として)のお臍の項があるに過ぎない。而も世上謂う——当るも八卦、当らぬも八卦——とか、各人諸説の中には多少の相違もあり、これと言

【編集部より】身体各部のフエチシズム並に身辺にある節片フエチシズムに関する資料や体験をお持ちの方々には本誌の資料的価値を高めるため、何卒、その種類、枚数の如何を問わず、お寄せ下さるようお待ちいたします。

った決め手のないものにも遭遇するのだが、この点読者諸氏の御判断と御叱正とを俟ち度いと思う。先ず世俗に謂う「臍相学」とは何れもお臍の形状に就て記述されているように思うが、私は更に一步を進めて、臍紋にも何かその人の宿命が語られているように思われてならない。この事に就ては、宮本幹也著「続河岸の石松、青春満開篇」の文中に左のような一節があるので一寸御紹介して見よう。

(臍相学に関する石松と女親分との会話)

前略——「河岸の人間はイキがいゝんだってね、恥しがる事はないよ、見てお貰いなさいな」女親分がけしかけた。そう言われゝば見て貰わない訳にはいかない。石松はまゝよと思った。

「じゃあ、おヒイさんお手柔かに頼まあ、」

ジャンパーを脱ぎ捨てながら、

「一体そんな事を何処で誰に習ったんです」

「大祖母様より習い覚えしもの。その昔公卿上臍の好みしものとか。下々ではあまりやらぬか？」

「へーえ、女郎かね、洲崎じやあ見かけた事
あねえが、吉原あたりじややってるかな？
道理で色っぽい易だと思っただぜ」——中略——ズ
ボンを引き下ろして臍を突き出すと、

「さあ、氣を確かに、とっくりと見てくんね
え」

「では拝見」

おヒイ様は威儀を正して、しなやかに片膝
をつき、右手の中指で石松の臍をこちよ／＼
とくすぐり始めた。

「えへへへへ、へッへッへッ。とてもたまら
ねえ。あはははははは」とう／＼腹をかゝえて
笑い出した。

「性は単純、明朗活発」とおヒイ様が説明を
始めた。「冒険を好み、つねに居所が定らな
い。太陽丘、第二大星丘が共に発達している
わいな。氷河条線がくつきり出ている故、肉
親の縁が薄い。だが月丘が突き出している故、人
人に愛される。殊に女人には……。石松さま
御用心遊ばせ」

「よせやい」

「また猟奇的傾向もあるわいな」

「え？本當かい。どうしても信じられねえ」

と石松が言うと、

「運命は臍の緒を切ったる、その切口にある
ぞい。手相や人相は後天的なもの故、信じら
れぬが、へその相は生涯変らぬ。而も不思議
な事に未来の相が条紋となって現われている

わいな。合点か？」

「いや参った」と石松は汗を拭いた。（原文
のまゝ）お臍の穴に指を突込んでまさぐり、
その人の運命を予言するとは誠に愉快な相法
ではあるけれど、一般の観相とは異り、之は
一寸簡単に行かないのが難点であろう。閑話
休題——。

本誌の二十九年六月号に発表した「臍窩へ
の省察」の中で、筆者は臍相判断の事にも一
寸触れたので、今回はアングルを変え別の観
点から私の思考を纏め、同時に見聞した幾つ
かの実例を併記し度いと思うのだが、先ず基
本的な常識として観相家吉川昌巖氏の説を左
に掲げて見よう。臍は一見したところ、何の
用にもならない無用の存在のように思うが実
は大変に重要なものであつて、その位置は体
の中心に當るのだから言わばその重心とも見
る事が出来る。之は胎内にある頃、これによ
つて母親から栄養分をとり、母体を離れて物
心ついた頃は、これによつて氣を丹田にしず
め、精氣を養うところとなつてゐる。元來こ
の臍は腹の真中にあるべきもので、左右上下
に偏しているのは、何れも良くない。高くつ
きすぎているものは活動力が鈍く、低いもの
は淫乱である。右、左に偏している人間は決
して長寿を全うせず、必ず日常に病弱である
臍の形は李を入れる事の出来る位に大きくて
深いのがよい。方向はや／＼上を向いているも

のが上乘で、下を向いているものは下卑て居
り、性格が偏狭である。そして配偶者に死別
して孤閨を守るか、でなければ自分が短命で
ある。横向きは多病、無論長命は覚束ない。
飛び出してゐて、臍の頭が衣服に触れて痛み
を感じるようなものは、その人に根氣がない
から成功せず、辛抱力に乏しく短命である。
又深いのがよいと言っても穴がつぶれていて
毛を噴き出しているようなものは、決して
運命がよいとは言えないのである。こう言う
人は性格がとかく頑固であつて、どう言う方
面に精進しても大成しない。生れたばかりの
子供で、臍の中に血のない子は長命しない。
成長するにつれて、次第に臍が陥沈して、前
に言つたように、李を入れる事の出来るよう
な恰好になるのが、運勢はよいのである。
臍のまわりに毛の生えるのは、男女共に下
劣である。恥毛との間隔は三寸以上あるもの
を最もよしとする。凡て臍はその人の性格を
見るのに、最も都合な場所であると同時に
又健康を診断する場合もこの臍が適當である
——云々。又、アメリカ、フランク・フルト
大のハンス・フリードリッヒ教授は、その半
生をお臍の研究に没頭したと伝えられるが、
彼は臍と性格に就て、端的に次のように説明
している。即ち、婦人の臍は大体に於て間口
が狭く、奥行の深い巾着型、怒りっぽい人は
出臍型、渦を巻いたのが天の邪鬼型、凹んだ

のが瞑想型等々。更に隣邦中国に於ては古書に「雜事秘章」の中に次の一節がある。

曰く。築脂玉刻。胸乳菽発。

臍容半寸許珠。私処墳起。云々

之は桓帝の建和元年春のこと、皇后の候補を選ぶ女体テストに於ける光景を描いたものであるが、私処墳起は兎に角として、臍容半寸許の珠とは全く素晴らしい形容ではないだろうか、因にこの肌しらべの対象となったのは、淑徳の噂の高い、瑩と言う十六歳の乙女と伝えられている。扱、本論に戻し、私はお臍の形状を左の六種に分類し、過去三十年余りの間に巡り合った数例を併記し度いと思う。

実例は総て匿名として、括弧内は私との関係を示す。猶、私が実例を申し上げても、それは私自身奇しき宿命さを感じる事で、或は臍相学とは何等の關係がなかったかも知れない事は、もとより論を俟たない。又観相の對象は、何れも成年期以後とし、小児観相は他日の事とする。

○丸型

(一) 臍の穴が大きくて寛く、弾力があり、深さも五分以上の(所謂半寸の珠を入れられる)もの。地位、名譽、子孫、財産等申分なく、極めて幸運の相、御婦人の場合は多産、(註、古書に曰く深さ一分にして一子を得るとか)精力も絶倫であり、美人系に多い。
△写真参照△

おんみの臍は美酒の欠くる事

なき円き杯の如し。 —雅歌第七章—

本文参照 (某ホールにて筆者撮影のもの)



(二) 臍は大きい、穴の浅いもの。

地位、名譽、財産等中運。精勤、明朗である。婦人の場合は寡産にして、又難産が多い。男子の場合は不慮の死に注意のこと。

参考例(一)

T・M氏(先輩) 温和な活動家であり、極めて健康であったが、日支事変の初中支に応召、山西省の主都太原の近くで一団の匪賊に遭遇、応戦のいとまもなく腹部、脚部貫通銃創にて戦死、この戦死に於て氏は、極めて僅かな戦死者の一人であった

参考例(二)

K・O氏(先輩) 肉体美を誇る氏は、強健であり、精力家でもあったが、その為めか地位も順調に累進、勤務先の近く、小唄の師匠と懇ろとなり、然しその風評も立たず、世間は知らなかった。ところが或る夜半、師匠はその一(十八字削除)を感じたのである。之は果して極楽死であろうか。

○楕円型

お臍の型としては丸型と同じく典型的なものではないだろうか。大きさも深さも充分な

らば、凡て運勢は丸型と同じである。

◇縦裂型（縦に細長いお臍）

婦人に多いが、この型の人の腹部は余り豊満ではない。ヌードモデル等によく見かけるが、女優マリリン・モンローのモデル時代の写真にこの型を見る。運勢にはむらが多く、初婚の成功には難色がある。性質は明朗、その他中運、この型のお臍も深い方がよく、奥深く引き締まっていれば相当の財運がある。

猶、この型の人には顔も長方形（うりざね顔）の人が多い。男子の場合、性質は明朗、温和にして才智あり、手先も器用である。又最近のボディ・ビルダーの中にもよくこの型の人を見る。

◇横裂型（横に平たいもの）

栄養型と言うか、肥満体質の人に多い、婦人なれば商家の女主人、料理屋のおかみ等によく見る型である。殊に更年期に入ると腹部の皮下脂肪が加わって、横に一本のひだが出来、お臍がかくれて見えなくなるが、そんな時お臍の穴を指で掘げると、ずっと奥深くにお臍は鎮座しているものである。之は男女共に無事安泰の相、又穴が上を向いていれば、更に幸運の相である。我々は七福神の中、布袋和尚（布袋腹）にこの型を見るのであるが若しお臍の穴が下を向いていると、置物にしても掛物にしても識者は採らない。

△上向き三角型

四角なお臍はもとより、三角型のお臍も言葉としては一寸可笑しいのだが、腹部の緊張度、皮下脂肪の沈着状態等により、時折三角型に窪んでいるお臍を見かける。深さも勿論指を入れて見て寛さも相当にあるものは、従って性格、運勢等も頭書に同じで、時としては相当の栄達が望める。古書にも「臍窩深くして李を入るゝものは名千里を震う」とあり幸運の相である。

▽下向き三角型

上向きに比し、運勢はやゝ劣る。婦人なれば愛嬌があり、男子なれば研究心が強く、共に中運、健康である。

浅薄型

お臍が極めて小さく、而も窩を形成しておらず皮膚の癍痕に過ぎないもの。婦人には稀であるが、男子ではよく見かける。この型の人は身体の何処かに欠陥があり、精力、智能、活動力に乏しい。又意志が弱く、子孫の縁も薄く、蓄財は成り難い。性質は案外朗らかであるけれど、晩年は薄幸の相である。不幸にしてこの型の人は、先ず自己の身体的欠陥を速やかに是正し、慎重なる計画の下に努力を重ね、遅くも中年迄には生活の基礎を固めねばならぬ。

参考例(三)

T・A氏知人相当な体格の労務者であった。

或る会社に勤め、その監督に迄累進、少くとも生活は豊かに見えたが、やゝ下賤のところもあつた。金銭的には締りがなく、酒は浅酌の程度、四十歳の頃ふとした事から寝つき、二、三年経って会った時には見違える程やせ衰え、昔の柔道教士の倅もなく、彼のつく松葉杖が一入哀れだった。私が彼の赴報を聞いたのは、それから程なくの事である。

参考例(四)

S・K氏（知人）或る映画館の映写技士を振り出しに、後本社詰となり、五、六年を経て倉庫係長に迄栄転したが、性来の競馬熱は少なからず彼の私生活を乱したらしい。性は粗雑で思慮に乏しく、言語は粗野であつた。酒煙草は普通人以上で、べん／＼たる太鼓腹をしていたが、ネーブルのへたのようなその幽かなお臍が私には淋しかった。後或る事件で退社する破目となり、私は彼の動静を知る由もなく十余年が経った。三年前の某月某日、郵便局のある町角で、私は偶然にも彼を見かけたのだが、何故か彼は視線をそらして逃げようように立ち去って行った。人づてに聞けばK氏の小使をしている由、その時恰度郵便物を運んで来たのであろう、腰が曲りかけ、びっこをひき／＼去って行った彼の後姿が、今も私の脳裡から消えない。

次に補足として気の付いた儘の事を記して見よう。

◎お腹の割にお臍の大きいもの（体質が虚弱である。）
 ◎お腹の割にお臍の小さいもの（相当福分に恵まれ、金銭的にも恵まれるが、動もする（りんしょく）と吝嗇に流れ易い）

◎お臍の穴が左右何れかを向くもの（苦勞性であり、進歩性に乏しい）
 ◎お臍が平らで腹圧を加えると、むしろ出臍となるも（婦人では妊む事難く、男子では氣力乏しく夭折の相）

◎お臍の大小を論ぜず、浅くて下を向くもの（神経質で度量狭く、下積となり勝である又婦人なれば子の縁薄く、心勞絶えず、蓄財もなり難い）
 ◎お臍が右巻のもの
 普通は左巻のC型であるが、「の」の字型のこの右巻には左利の人が多い。
 ◎お臍が比較的上位にあるもの（才智はあるが性的魅力に乏しい）
 ◎お臍が比較的下位にあるもの（才智は無いが性的には健康である）
 ◎婦人の臍は仮令小さくとも奥深く引込んでおり、指が深く入れば幸運の相である。

【映画・雑誌】通信

最近の縛り時代映画から

嵯峨美也子

最近のスクリーン、とくに時代劇映画から「縛り女優」の作品を探ってみよう。

最近の作品の中で、何といっても最大傑作は、松竹作品「弁天夜叉」の高峰三枝子であろう。講談倶楽部に連載されている山手樹一郎の「青空剣法」の映画化だが、原作自体が、サジズム、マゾヒズム、それにノゾキ趣味もあるというその道の愛好者にとつては垂涎おく能わざる作品である。この映画で、高峰は十九の年に嫁入してみつちり可愛がられた挙句、旦那が死んで今や三十八という女盛りの質屋の後家お世紀をやっている。このお世紀が稲妻組という怪盗団にさらわれ、高田浩吉の曾我平九郎をこれも思っている恋敵の雪代敬子の火の玉

お紋という女賊に、長襦袢一枚にむかれ、荒縄で文字通りガンジガラメに縛り上げられ、豆しぼりの猿ぐつわをかまされる。荒縄もお乳の上に四巻、下に二巻というきびしいもので、その上煙管でつゝかれる。その縛られカットが、高田浩吉が宝刀と引換えに救いにくるカットと交互に出てくるので充分に楽しませてくれる。

そしてお紋は縛られたお世紀の前で、「見ているがいい。その高慢ちきな面の皮をヒンむいてやるから」と大泉滉の豆蔵に目配せして出ていく。豆蔵はニヤニヤ笑いながらお世紀に猿ぐつわをかませ、襟の間から手を入れたりさわりする。

原作では、お紋は稲妻組の首領に縛られ

むすび――。

昔時太閤秀吉が未だ日吉丸と名乗り、岡崎のとある橋上に仮睡の夢をまどろむ時、通りかゝった野武士の一人がこれを咎め出世の糸口となった。この時日吉丸は大きなお臍を出して寝ていたとか、又武士の一人はその臍相を見て将来あるを卜し、之を蜂須賀小六に取り次いだとか、然し史実は明らかでない。凡そ幸と云い、或は不幸と言うも何れも主観的問題であり、この意味合からすれば、自己の臍相の不遇に、徒らに苦慮する事もなからう。然しと言って油断はゆめ禁物である。臍相とは要するに〃そうなる可能性が多分

て喜ぶ女賊だが、映画でも盛んに、「あんなになら縛られてみたい、さあ縛っておくれ」と高田浩吉にぐいぐい身体をすりつけてきたりする。千秋みつるの女中お文も足まで縛られて寝間の上に転ばされる。この作品では中村賀津雄の与力野上半次郎ががんにがらめに太縄で縛られる。高峰はまたはじめの肌脱ぎ姿も見せるというオマケがついているが、一寸ウバ桜だけに哀れな感じもする。これは高峰の「治郎吉格子」のお仙以来の縛られ姿がたんのう出来る作品である。

大映作品の江島みどり、峯幸子、立花宮子の若手女優の「腰元行状記」でも楽しい縛られ姿を見せてくれる。縛られるのは江島みどりの腰元と、若衆に男装した立花の腰元である。江島は、後手縛りの後姿を撮られるが、きつちり縛られ猿ぐつわもはめられている。立花はオキヤンな腰元で、男姿で柱にしぼりつけられ、相等長く縛られている。楽しい縛られ姿だった。東宝作品の嵐寛寿郎の「御用盗異変」では薩摩の御用盗が町家へ押入り、寝間着姿の女を縛り猿ぐつわをかませた姿がよく出たが、ロングなのが一寸惜しかった。

新東宝の大友柳太朗の「隠密七生記」で大友の妹になった遠山幸子の信夫が、敵に

つかまり、しごきで縛られカゴで運ばれるシーンが一寸よかった。

駕籠といえば、松竹の「伝七捕物帳女狐駕籠」で伝七の女房になる草笛光子のお俊がまた高田浩吉の滝之丞という役者に縛られ、柴屋の奈落にころがされる。お俊もいつも縛られる役で、これは月丘夢路以来である。

大映作品の市川雷蔵の「おしどり喧嘩」新八郎をめぐる四十八人の美女で宝塚歌劇から入った春風すみれが越後獅子の姉になって、縛られ折カンされるくだりが脚本にあった。映画ではどのようなかお楽しみである。東映の作品に近ごろ、縛られシーンがないのが淋しい。大川橋蔵の「下町あんめえ侍」で関千恵子のオキヤンな恋人がさらわれ縛られた姿が一寸印象に残る。

今撮影中のものでは、宝塚映画の中村扇雀と美空ひばりの初顔合せの「恋すがた狐御殿」で、美空が撮影に入った最初のシーンが、セットの柱にお姫様姿で太縄で賊の大將の山茶花宛に縛られ悲鳴をあげ、扇雀に「美空しぼり」と冷やかされたというゴシップがあるが、映画ではどのように楽しませてくれるかをおたのしみに筆を擱こう。

にある〃と言う丈の事、従って自分の臍は逆も深いから、黙っていても金運に恵まれると思ひ込むのも危険であり、又穴が浅いから一生浮ばれない等と悲観するのも愚かしい話である。第一臍紋を除いて、お臍の形状は環境次第で少しずつ変化する。例えば穴の浅いお臍が次第に深くなり、その頃からめつきりと健康体になったり、又地位や財産の築かれて行くなどはよくある例である。兎もあれ、不遇な臍相は速かに力めて改造す可きであろうそれには座禅もよし、腹式呼吸、又は座禅を加味した新ボディビルなど、様々な方法があるが、何れも相応の効果のある事を私は体験上確信する。最後に特異な偏執の結果とも言える可きこの拙文が、読者諸彦の御参考になれば、筆者望外の欣びである。

—完—

附 記

本稿を草するに当り、先輩諸氏の御高説を参考とし、観相学に関する数多の文献、資料を渉猟しましたが、若し誤謬その他お氣付の点など、編集部を通じて御連絡賜われれば幸甚です。
(律夫)

【編集部より】 編集部氣付にて下さった通信は筆者に転送いたします。

晴 雨 私 稿

結 髪 の 種 々 相

伊 藤 晴 雨

現代に於ける、新聞雑誌界の挿画に於て第一人者である岩田専太郎氏は其著「挿画の描き方」の中で挿画々家として立ちたい人々の為に其要素となる可き参考書目を数多く並べて居る。其中に特に必要な書物として推奨して居るのは「古今百風吾妻余波（あづまなごり）」である。同書は実に明治十八年十月の出版にかゝり、著者は岡本昆石、挿画は当時浮世絵の第一人者小林永濯で、上下二巻しか発行されて居ないのは売れ行きが悪かった故為と思われるが、当時一部三十銭程の粗末な印刷の赤本式のものが現在では約二千円近くに跳ね上って、それすら容易に手に入らぬ珍本である。其内容は明治の初期に文明開化の波に旧江戸の風物が著しく変化して来て、世の中の風俗がガラリ一変するので旧習保存の意味を含めて時代考証を試みたもので、独り挿画々家と云わず、大衆文芸の作家にとつ

ても参考資料として絶好なもので、三十余年を経て廃刊の運命にたどりついた神田新石町の東陽堂発行の風俗画報と共に現代に於ける文化資財として全く保存の途を講ぜらる可き珍本であるとも云う事が出来るが、頁数僅に四八頁二四丁、上下揃って百頁にも満たない片々たる端本であるのに何に依ってかくも珍重されるかといえ、其内容が実に充実して居るからで、時代考証という点からよく纏まって居る至って便利な書物であるという点である。采風備貌と書いた市川団十郎の題字もさこそと思われるが、其内容の一端を読者に知らせんが為に其序文の一部を記す事を許された。序文は後に東京朝日新聞の記者になった真木痴囊である。明治時代の文章を其儘抜萃する事にした。

古今良書の陸続として世に出るもの月に日に多しと雖も元来文明の進歩は弾丸の走る

が如し、無造作なるものに非ずして歩一歩を進む時は跡に一步の疑念を生じ、新旧相合して競争を興し開新竟に旧新に打勝つて其長所を分捕り、又一步を進めば旧の如く（中略）開進は次第に進む毎に勢力を得るに拘わらず次第に敵する所多きより或は開進の妨害と云ってこれを憎み、或は旧幣と呼んでこれを誹るものあれども強敵亡びて味方の武威衰うとか（下略）

序文の要旨は、敵国外患なければ国即ち亡び、温故知新を以て文明開化の要旨とするという事にあるのであらう。此書の冒頭に「東都婦女の髪風弁考」と題して当時流行の婦人の結髪様式から逆説して寛永年間に及んで其数凡一百種を描いている。茲で又其本文を紹介する事を許して頂きたい。

ところ変れば品変るとやら、西京で蟬鬢（たば）の釣し上りたるを好とし、越後では老若共に島田崩しを好とするが如く、国土地に依って種々の風あれども大約、徳川時代より婦女の髪の様は江戸風を以て第一とすれど、同じ江戸風にも或は上品風あり、粹風（いきむき）あり、温順風（おとなしむき）あり又下品風（でんぼうふう）あって、髪風を見れば略其身分を知り得べし、俚諺に馬士にも衣裳髪形ちと予は茲に古今東京に流行りたる婦女の髪形を集めて地方の婦女に示す。

総て東都婦女の髪風古と今と比較して考ふるに鬘は次第に大きく前髪追年が小さく根は巻下ノ方今若し同丈を以てから真向に見る時は島田も兵庫も丸鬘も後面に隠れて宛ら毛坊主を見るが如し、古今の人情も髪

の形を見て知るべし云々。
とフンガイして居るが、説の当否は別として茲に現した百種の髪は、略日本結髪史の代表的なものとも云い得ると考える。

最近発行された日本結髪史は不幸にしてまだ閲読して居ないが、日本の髪について記されたものには浪花風俗化粧伝（なにわふうぞくけしようにん）があり、明治三十年八月頃から東京日本橋区吉川町の地本錦絵問屋大平事松木平吉から出版された一枚絵美人かゝ美及代かゝみの一枚絵に矢張り慶長前後から明治時代迄の髪形を描いた風俗画がある。筆者は明治時代似顔絵の名人といわれた豊原国圃の弟子で橋本周延の筆で現在でも一枚数百円の価値があるが、発行当時は、一枚僅かに二銭五厘であった。

又しても、と思われるかも知れないが、錦木清方氏の師匠の水野年方筆の三十六佳選という美人画は明治二十四年から二十六年に亘って連月日本橋区室町二丁目（現三越呉服店の前）の秋山武右エ門から発行されて応仁時代から初まって文化文政天保明治に及ぶ本邦婦人の結髪と風俗画の集大成を為して一枚刷

りの錦絵で現代でも希少の珍品である。序文を当時の戯作者で新聞記者で一世を風靡した橋塘伊藤専三郎が永井素岳の筆耕で完成の後に総目録を書いている。

以上は、本邦婦女の結髪史に残された印刷上の文献であつて、これが全部では無いが、此外に印刷物として残されたものは明治三十六年以後、今の東京新聞の前身、都新聞社から発行された「都の花」という月極め読者のみ進呈された附録の挿絵に現れた髪のかいぶりて筆者は美人画の泰斗として我れ人共に許した故富岡永洗、梶田成古、松本洗耳などが新柳二橋の芸妓に就て写生をした。結髪の形ちが如実に描かれているので、明治時代に到って完成された日本の結髪が写真以外に判りよく残されている。其外に同時代に発行された「髪」という専門雑誌にも流行の日本髪が記載されているが若しこうした文献を蒐めたならば日を更えると共尽きでないであろうが以上は筆者が狭い管見から其記憶を記しただけであつて、これに日本の演劇史上に案出された特殊な「芝居の髪」「かつらの髪」を加えたならば其数は相当多数に上ると思われる。東京上野の帝國図書館所蔵の喜多川守貞著守貞漫稿の中に女扮の一項があつて、これにも江戸と京阪地方の結髪様式を数多く並べてある。大正時代に発行された活版本の、近世風俗史は現在でも古本屋の店頭で容易に手に

入るから、珍本という程度では無いが、参考にはなると思うが、同書の挿絵は専門家の手に成ったものでないだけに、誤りも多く、多少の取捨を要する事と思われる。

以上記し來つた日本髪に関する文献文書は、女の責場に全然一連の關係無しとは云い得ないと思うので、かく云う老生と雖群集の中で日本髪の子を見た場合多少の異様なショックを受けたい事は無い。日本髪は美は極端に云えば其婦人の容貌にある事は勿論で、要約すれば責められる女が肉体美であると然らざるとに拘らず、第一条件として美人である事は云う迄も無いが、扱、其美人という条件は各人個々別々のものがあつて、古来から現代迄の画家の描く美人の標準は其人々に依つて感度が異つて居る事は、仮りに現代に就いて云えば、清方氏の美人と、深水氏と、専太郎氏と林唯一氏と、富永謙太郎氏と、各相違している。之れを過去の、挿絵画家に就いて云えば、北齊と豊国と異なる如く、永洗と、年方と、芳年と、相違するが如く、清長と、一蝶と隔るが如く、各自女其物に就いての感度と感度を異にして居るのであるから、婦女の結髪其物に就いての感度も亦人に依つて異つて居て、責め場の女の髪が乱れたのを美しいと感じる者と、然らずと云う人との相違も生じてくるのは当然有り得る事で、どちらに軍配を上げるにも当るまい。古い事になるが、和

泉としをという先生の北齊論も、黒井珍平さんのお説も煎じ詰めれば大局の事では無く、失礼乍ら自己中心の論旨かとも思われるのでムキになった老生、今になって誠に汗顔に堪えないと思っている。

扱、過去の事は閑話休題として、やゝ専門的になるが、賣場の女の毛描きに就て是非とも此際に書いておきたい事がある。というのは、序と申しては読者に相済まぬ事ではあるが、美人画の毛描きに就いての古人の苦心談で、これは草双紙の挿画などに現れている賣場の女の毛が木版彫刻師によって如何に注意を払われたかという事に、女の賣場の研究者特に明治初期から遡って化政度の合巻物や草双紙の研究者にとつては（一部の読者にはチト迷惑になるかも知れないが）可成り必要な事と思われるので冗漫を厭わず書いておく事とする。いさゝか鼻白む次第ではあるが、識は東西を貫かず、井蛙の見は女の賣場以外に何の特色も無い老生が、生涯に只一つ得たものは、縛られた女の毛描き丈けであるから、其研究の筋道を結髪の種々相に引っからめて記述するつもりである。

ある。第一に我々が嬉しいのは製版術の進歩で、凸版の進歩は明治時代のそれより（戦後は特に著しい進歩振り）急激に発達したが、チト憎まれ口を利けば、女の毛描きが拙くなつたのは木版彫刻の技術が衰えて来た事である。これにつれて日本画家が毛描きに力を入れなくなった事も亦一つの原因である。

扱、これから私は卒直に女の髪を描法と維新前の画家の総てが描いて生活して居たと伝えられる所の春画の毛髪と其彫に就いて書く事にする。

画聖葛飾北齊が彫工江川仙太郎に命じたのは或る出版屋（其頃は絵草紙）から秘画の版下を頼まれた。其時の北齊の住居は現向島区須崎町三囲神社の南方曳舟通り、康申塚橋から北へ二丁斗り入った地点の農家で北齊専属の彫工江川仙太郎（此人の息子即ち二代目の仙太郎は明治末期迄現台東区浅草元鳥越二番地にて小杉放庵の末醒時代のカットなどを彫って居た）は本所業平町（現吾妻橋一丁目）の裏屋に住んでいた。

或る歳の暮に何処も同じ年末の金に差支え注文の版下の秘画を大急ぎで彫り上げて北齊の処へ持って来た。其頃の徳義として彫師は必ず、版下を描いた絵師の校閲を経て、それから出版者へ彫刻料を請求に行く習慣になつて居たので、其時も前例に依り、彫り上げた版面を校合刷りを添えて北齊の処へ持参した

北齊は江川の彫刻した秘画の毛が気に入らないので、再三改彫を命じた。

年の暮の数え日にやり直しの仕事を喰つた江川は切迫つまつた今度という今度、北齊が「ウン、これでよし」と云わなかったら暮が越せない。年の瀬が越せないとなれば夜逃げより方法がない。今度不合格だといったら一ト思いに北齊を殺して了おうと思つて彫り直して持参に及ぶと、北齊は一見してまだいけない、秘画の毛は実物の人間の毛より細く彫る可きものであると云つて、傍にあり合せた小刀を取るなり自分の鬢の毛を一本抜いて之れを二つに割いて見せたので、江川は殺そうと思つた氣持が北齊尊敬の念と變つて、更に精根を籠めて彫り直してやつと納めたという（此話は北齊画談等に紹介されているが、それが秘画の毛である事は書いてない）一本の髪を毛を座右の小刀で二つに割くという技術には、永年彫刻の刀を執つていた江川仙太郎も驚いたに違いないが、それも其筈で、北齊は幼時木版彫刻師の徒弟になつた事があるというから或はそうした事が日常茶飯の事であつたかも知れない。

明治時代、本所区小梅町に後藤鉄太郎という有名な木版彫刻師があつて、日本橋通二丁目の春陽堂和田うめの小説本の口絵は大抵此人の手に成るものが多く、後に新小説を月刊する様になつてから泉鏡花の風流線や金色夜

結髪の種類々相 吾妻余波 (あづまなごり) より
【伊藤晴雨画】



又などになって写真版を使用する様になったが、それ以前の口絵には小栗風葉の恋慕流しや浪六の原田甲斐など、現代ではとても出来得ないと思われる傑作が此人の手に依って作られて居る。

木版彫刻の技術の中に（しごく）という事があった、画家の描いた線を小刀の力——彫刻の技術に依って版下（原画）以上に精密に彫刻する事で、大首の女の髪の生え際などは画家が一々細線を描くものでなく、彫刻刀の力に依って成され、木版刷師の色彩の感覚に依って出来上るもので、此点は現代の写真製版の技術以上のものであると、私は考えているのは決して老人の「昔褒」では無い事を断っておく次第である。

秘画の局部の細毛や、女の乱れ毛の一本の細さは、筆を以て描かれた原画を彫刻の技術を以てより以上に細くして置かないと印刷になつて線が太るのである。此点は理代の写真凸版も同様である事を承知して頂きたいのである。若し、私の描いている責場の女の髪の記事を記す事を許されるならば、私は筆を選び紙を選んで、女の責められて乱れた髪の毛は実物以下の細さに描いて居る事であつて、これ丈は密かに長年練習の結果、「毛筆はペンより勝る」と思つて居る次第である。

別図に示したものは、前記吾妻なごりに記された結髪百種の抜萃であつて薄葉へ毛筆で

描いて見たが印刷になつた結果はどうであるうか。「葉能書程利かず」のお叱りを受けるかも知れない。

私の筆はあまりに専門的になり過ぎたが、女の毛に就いては次の様な事実がある。本誌に最近連載されている刑務所の内部の話であるが、大戦以前の刑務所の既決囚がまだ外役のあつた頃の話で、好んで外役（街頭に出て道路工事などに従事するもの）に出たがるのは獄内の無聊を慰める斗りでなく、シヤバの女を見られる事と、女の脱毛を拾う事の楽しみであるという事で、前者の方は誰でもハッキリ合点が行く事だが、後者の女の脱毛に就いては少しく説明を要する事になってくるのである。

女の髪の毛に或る種の連想を持ち、女の髪の毛を密かに監房の壁に掛けて、夜中之を愛撫するという事は信ぜられない事の様であるが、長期の囚人が女に愛著を感じて、往來に落ち散つて居る女の髪の毛を一本々々看守の眼を盗んで拾い集めて宝玉の如くに所持している。時としては之を官給のモツソウ飯と交換し、空腹を堪えて居るといふ心理は普通のシヤバに居る人間には想像も出来ない事で、彼等が女の髪の毛を十本以上持つて居るものは房内の大尽であるという。シヤバに居れば其頃三十銭か五十銭も出せば「かもじ屋」で島田蠶の「かもじ」が買える時代に監獄内で

は僅か十本の女の抜け毛、それも必ずしも若い美しい女とは限つて居ないであろう処の女の抜け毛の屑を宝玉の様に大切に肌身に着けて居る。囚人の、女に対する執着は女の髪の毛を対象物として、不自然な或る種の行為を余儀なくして自ら慰めている、本能的手段に過ぎないのである。

寄せ場の名物知らないか、喰う事赦免尻話云々という監獄の唄は女の髪の毛に及んで居ないが、明治時代の囚人は事実女の髪の毛に異常な衝動を感じて居たものだ、これは筆者に語つた昔の囚人の事実談である。

十九世紀の頃、フランスのある田舎に金髪の美しい少女が居た。或時パリに出て街を歩いてみると、某商店の店頭に吊してあつた籠の中の鸚鵡が「美しい髪」と云つて囀つたという事が当時の新聞に伝えられて、鳥も亦女の髪の毛に快感をもつものだという事が立証されて、動物学者の話題となつた著名な話がある。

大正時代に筆者の門下生となつた横浜市花咲町に居た広岡三吉という人は、井戸ヶ谷の陶磁器輸出会社に勤めて居る所謂陶器画工で此人の事は曾て某雑誌に一度書いた事もあるが、女の髪の毛の特殊な趣味を持つて居る。只一口にそれは変態性慾であると片附けられない趣味である。それは横浜の淫売窟の女を縛つて写生するのと、其女の頭髮の毛を何

本か女の油断を見済まして、むしり取って自分で女の「かつら」を作ろうと思ひ附いた事である。一人の女から十本宛むしり取ったとしても二個の「かつら」には凡そ三万本の毛が必要であるから、彼の希望は容易に達せられないので、其日暮しの彼は妻子を別居させて野毛山下の或る裏長屋に独居生活をしていた。会社から帰ってくると、五燭の電灯の下で、附近の淫売婦を呼んで縛って写生をし乍ら最後に女の髪の毛を引き抜くので、終いには評判になって縛られる女が居なくなつてしまつたという。

大正十二年八月、先代尾上梅幸の金沢の別荘に招かれて、大橋新太郎氏の夫人や帝劇の幕内主任伊坂梅雪其の他人々と、年中行事の灯籠流しをやつた帰途、野毛の裏長屋を訪ねて広岡の画室を訪れたが、それは実に陰惨極まるもので、いろは長屋の六畳と二畳の二た間の壁面には縛られた女の絵が一面にピンで張り付けられて、女の髪の毛が柱に束になつて掛けられてあり、戸棚の中には自製のブリキの台金の女の「かつら」に長短とりどりの髪の毛が植えられたのが転がっている。女を縛る麻縄と米俵のほごし縄が所狭しと散乱しているの中に、なまめかしい女の長襦袢が袖畳みにもせずに放り出してある。当時流行した女優のプロマイド——それも普通のプロマイドの写真の上から胡粉でいともテイネイに

縄が描かれて壁に張られている。

実に面白いと思われたのは、今はあまり街頭に見掛けなくなつたが、紙製の姉妹人形を風呂で縛ってボール函に入れ、人に見られるのを恐るゝが如くにしまひ込んであるやら、責場のある芝居の番附が、襖に張られてあるかと思えば、責場のフィルムの数々が机の抽斗から取り出されるという塩梅に、見れども尽きず、夏の夜をまんじりともせず徹夜をして、翌日の一番電車で当時同市内羽衣町（現存二代目）の六代目尾上菊五郎専属の鳴物師住田長三郎という、これまた責のコレクションに全収入を投げ出している横浜の名物男を訪問した。

此住田長三郎というお囃子は現市川左団次氏が「いつも参ります」というアダナを附けた男で、誰かに用事を頼まれると蛎の様な眼をギロリと光らせて「へえ行つて参ります」とペコンとお辞儀をするのは暗に往復の車代（？）を要求するという、芝居道によく有り勝ちな卑しい性格の持ち主で、六代目尾上菊五郎の使に行つても金をくれないといつて、音羽屋の事をケチ五郎々々といつていた。

それかくの如き各番の住田君が目に見えぬ飯綱婆アの手には握まれたのかどうか、女の髪の毛の写真を撮るのに興味を持ち、其頃としては時代のセンタンを行つて、市村座から貰つた給料を女房に隠して写真機を買い込んで

東横線の小机城跡へ二号（？）を連れて、女を縛つて辻堂の縁側に転がした写真などを撮つて内緒で喜んでいて、私が其次東京日々新聞に発表した責の記事から、私の画室を三日に挙げずに訪問して、下らぬ楽屋内の話をしつて帰つて行つたが、私が市村羽左衛門の画の師匠に頼まれるようになり、尾上梅幸氏の別荘へ遊びに行く様になつたらバツタリ来なくなつてしまつたが、此人が今生きていたら奇巧の投書家の資格を十分に備えていて、前記広岡三吉と共に奇談百出の材料を供給したに違ひないと思つてゐる。

私は卒直に云えば、女の髪に異常な興味を持つが、それは若い女の黒い髪と長い髪に限るのであつて、赤味を帯びた髪や短い髪には全く興味がなないので、曾て書いた事のある下総成田山の額室に現存する毛綱と、各神社に納められた女の切り髪に一種の魅力を感じてそれに関連して一種の神祕といった様なものを感じてゐる。

女の生命とする所の髪を切つて神社へ納めるといふ事は昔の女には余程の勇氣と決断を要する事は現代の断髪婦人の夢想だにしない処で、大正時代を分水嶺として、私の「責場の女」に対する、乱れ髪の興味は失われたといつても差支えないので現代では止むなく、責に熟練した女優を使って慾望を満たしているに過ぎないから、私の撮影した写真は、大正期がクライマックスであつたかも知れない

解 説 吾 妻 余 波

(あづまなごり) より

戦国時代——少くとも応永前後から織豊時代迄の婦人の髪は結び髪と下げ髪が大部分を占めていた事と思われるので、此時代の女の責場の絵には、首の部分には大した変化はないと見ていゝと思うが、天正前後堺に互市貿易が始まってオランダの風俗が舶来されてから、長崎丸山の遊女に額の髪を縮らせる新しい風俗が生れたのは、今のパーマネントの魁を為すものであらうとも考えられない事は無い。切支丹殉教史の絵にこうした風俗を描かれ、南蕃屏風の一部に当時の流行が描かれている。其髪形は、建久時代の揚げ巻に似ている。前髪を切つて散らしているのは明治時代の散髪を思わせる。

其以後、寛永から元禄になって島田髷が流行し、文化文政に至って上流は御守殿風の髪形を作り、下町は又別な下町独特の髪を創作したのは、伝承的には歌舞伎の床山(かつらを結う髪結い)で山下金作に附いていた男だと云っているが、歌舞伎の席から流行の結髪を生んだという事だけは事実らしく思われる。

それとは別文にして当時髪製作が不完

全であつて、生え際の技巧が精巧でなかったから、之を補う為に前髪(まえがみ)の処へ紫の布を当てたのが後には市中の流行となつたとも伝えられるが、維新前には良家の家庭では女髪結を喜ばず、堅気な家、殊に武家では市の女髪結などは出入りを禁じて、娘を持つ家などは母親が髪を結つてやつていたから髷の形をよく見せる為に紺土佐(こんどうさ)と針金で作つた髷形(まげがた)を入れて其上へ毛を冠せるという方法をとつていたから、恐らく文化文政頃の婦人の髷は、結髪技巧に於ては余り勝れたものでは無かつたらうと思われる。其最も一般的に処女の結う島田髷の如きも、元禄以後、余り著しい変化はなかつたに違いない。図に示す処は前記の如く吾妻余波(あづまなごり)の抜萃と描写であるが、現代では其名前さえ忘れられた髪形が多分にあると思われるので少し説明を加えると、旧大名の奥向きで、五節句の祝日などに結う所の下げ髪には髷の根に紫の布(ちりめん)を掛け、「かもじ」の長さは六尺以上もあつたものを用いたのを例として居た。

明治以後になつても花柳界などでは、毛巻きという髪があつた。これは不幸のあつた席に臨む髪で、葬式の見送りには、列席の婦人は必ず此髪を結うのを礼儀としていたもので、こうした約束は現代人の恐らく驚異に価するものであらうと思われるので事の序を以て記しておく。

図中の三ツ輪は旧劇のお部屋様などの外全く見る事が出来ないし、「おたらい」や「おしやこ」に至つては、全く影も形も無い。此髪は最も下層階級、俗にいう所の裏店の唄アという連中の結う髪で、時として芝居の紅皿欠皿のお爪婆アや片腕(かたもい)等が結う色気に乏しい髷である。

蔵前風というのは、昔浅草(台東区)蔵前に幕府の米稟があつた時、札差の妻女などが結つた特殊な髷で、当時は髷の根の低いのを卑しんだので、極めて髷の根を高く結つたものであるという咄だ。

「楽屋いちよう」は現代でも、芸妓の温習会などで見受けられる髪であるが、「ふくら雀」や唐人髷は稀に見受けるが、児童福祉法の為に半玉(はんぎよく)という者が無くなつた現代には全く陰を失つたといつても差支えあるまい。以上を以て説明に替えておきます。



玉稿落穂集

—誌上に載らなかった—

原稿のことばも—

編集部

本月はちよつと変つたところで、懸賞応募

原稿の中で、公開不能のため惜しくも没にな

つたもので、(あるソドミアの手記)とサブ

・タイトルして「男便所を覗く男」と題した

一篇を御紹介してみましよう。作者は国分隼

人となつています。この作品なんかは、不真

面目なところは些かもなく、しかも文を読め

ば様々な性体験の中、アブノーマルに關した

ものを、恥も外聞もなく、ありのまま、正直

に書き綴つたものだといふことが、よくわか

ります。こういった文章は、このまゝ活字に

するわけに参りませんが、なんとかして残し

ておきたい記録の一つです。では、先ず書き

出しから。小見出しの番号は(一)、

『戦後、私が東京で学生生活を送っていた頃』

のことである。ある日曜日の午後、ぶらりと

新宿へ出かけた私は、新しく出来たバラック

建の小さな映画館へ入った。

やがて、ひと通り映画を観終つた私は、用

を足すために男便所の扉を押した。強烈なア

ムモニアの臭いが鼻を刺す。東京の盛り場の

映画館には珍しい非水洗便所であつた。小便

所にはコンクリートの踏台があるだけで、仕

切の袖壁もなく、左手に二つ並んだ大便所は

ペンキ塗りの板壁造りであつた。私は用を足

しながら、ふとこんな事を考えた。(今は俺

一人だが、一寸視線を動かすだけで——中略

——)その時、何気なく左側の大便所の板壁に

眼を移すと、丁度腰の高さ位の処に、いくつ

かの節穴がある。いや節穴ではない。よく見

ると、それは明らかに故意に作られた穴であつた。私とてもホモ党のはしくれ、それが何を意味するものか、直ぐにピンと来た。ドアをノックしたが返事がない。ついでに左隣の方も空いていることを確めてから、件の大便所の中へ入った。さて、そこへしやがみ込んでみると、さっきの穴が眼の前に在る、顔を近づけた私は、思わずどきりとした。之は絶好の照準孔ではないか。——中略——私は、まだ何も見えないうちから、体中がかあーっとなつてくるのを、どうすることも出来なかつた。

(早く誰か来ればよいのに)

次から次へと場面を追つて畳み込んでゆく

書きぶりは、文章としても中々達者なもので

す。この次には、愈々廊下を伝つてくる足音

が次第に大きくなって来たかと思うと、ギイ

ボタンとドアの音がして人が入ってくるとい

う事になります。第一号は学生です。続いて

第二号、第三号、と数人、入れかわり立ちか

わり入ってきます。こゝの描写がやゝ刻明に

亘ります。そして、その描写が終つたあとに

『私はまた静かになつた便所の中に、いつま

でもしやがんでゐるのが、馬鹿らしくなり、

漸く立ち上ろうとした。その時、足音もしな

かつたのにギイーツとドアの開く音がした。

私はそつと腰をかがめて、穴から覗いてみ

た。高校生である。黒の制服に白い運動靴を

はいている。足音が聞えなかった筈だ。左手にスポーツバッグを提げている。運動選手らしい。』

といった調子で彼の品定めは、刻明且つ詳細をきわめます。こゝのところは、ホモ党ならずとも最も興味のある個所ですが、原文のまま引用出来ないのが残念です。途中で人が来たところから、この学生が彼の隣の大便所へ移転するといった事件が起つて、事態は愈々面白くなってゆきます（この間約三枚）が、省略しておきましょう。

『それから約一年間、私は数えきれない位その映画館へ足を運んだ。勿論、映画を見るためではない。だから、正確にいえば、その映画館の便所へ通つたと云わなければならぬ。』

と、このように、一年間の長い間に見た現実を述べていますが、しかし、あの日の高校生とは遂にめぐりあうことはありません。そして或る時は便所の中で、一、二時間もねばっていた結果の見聞記の報告が、述懐として書かれています。筆者は余程、あの時の高校生が気に入ったようです。こゝで、小見出しの(一)は終り、次は(二)に移ります。

『卒業と同時に東京を去った私は、今日まで東京を訪れることはなかった。従つて、私の欲望も、此の郷里の中都市とその周辺に於て求めなければならぬわけである、あの新宿

の映画館の便所のような所が、果してほかにもあるだろうか？、私は初めての館へ行く度に、必ず便所へ行つてみた。しかし、どれも皆私の望みを叶えてはくれなかった。半ば諦めかけていた私はある日、まだ一度も入つたことのないN館へ行つた。そして其の便所へ行つてみた。男子用には二つの大便所が並んでいた。一方は使用中のしるしが出ていたので、空いている方にそつと足音をしのばせて入つた、壁には様々な落書がしてある。——中略——下の方の落書を見ようと思つて何気なくしやがんだ時、私は真正面の壁に小さな穴があるのを発見して、嬉しさの余り身体全体がふるえるのを覚えた。私はそつと眼を近づけた。』

そつと視線を近づけて見えたものは、なんであつたでしょうか。

『視線を遮るように、何か黒っぽいものが前方にうごめいている。はてな？ 私にはそれが何なのか、直ぐには判らなかつた。もう一度よく眼をこらして見た時、それが前の便所にしやがみ込んでゐる男の背中だということ判つた。私はがっかりし乍らも、その穴から眼を離さずにいると、今度は、いきなり眼の前が明るくなった。』

度々、引用しましたように、この人の文章はその時の動作や場面をいき／＼とよく描いています。前の男は何をしているかという

と、やはり、筆者と同じように、丁度同じ位置に穴があるらしく頭をくつつけて、懸命に何かを覗いてゐるというのです。その理由がやつと判つてみると、筆者は、その男を此の上もなく不潔なものに感じたと言白しています。その心理は誰にでもよくわかるだろうと思ひます。

『彼が覗いてゐる穴の向うは、ひとつだけ男便所の方に割り込んだ形になつてゐる女便所なんだ。それが判ると、私は自分の行為は棚に上げて、その男を此の上もなく不潔なものに感じた。女便所を覗くなんて、何と云ういやらしい奴だろう。』

暫くして、その男が出たあと、筆者は隣へ引越しをします。そして、今迄自分が入つてゐた便所の方を覗こうというわけです。

『私はほつとしてタバコに火をつけた。三分の一位まで吸つた時、靴音が聞えて来た。男便所へ近付いて来る。私は全神経を耳に集中した。私の横のドアの前で足音は止んだ。そして、勢いのよい放尿の音が聞えて来た。用が済んだら、そのまま出てゆくだろうと思つてゐた私は、いきなりコツコツとノックされてびっくりした。私は息を殺してじつとしてゐた。何となく遠慮勝ちにノックしてゐたが諦めたのか、隣の便所へ入つて入つて来た。素早く穴から覗いた私は、その男が会社員風の青年であることを知つた。』

と、こゝでこの青年が自分一人きりの密室で行う行為の窃視のありさまが描かれています。例の通り公開を憚るので割愛します。

『それでも自分の住んでいる処に斯う云う場所を発見した喜びは大きかった。』

その翌々日、上映作品が替ったので、私は早速N館へ行った。客席は満員である。然し私には、そんなことはどうでも良かった。廊下へ出ると真直ぐ便所へ行った。ところが、例の場所は先客があつて、もう一つの方だけしか空いていない。』

その先客というのは、どんな男だろうか、きつと女便所を覗いているに違いない。と筆者は咄嗟にそう思います。

『足音をしのばせ、ドアをそつと閉めてから、壁の穴を覗いた。想像した通りである。靴、背広、折靴、何れも高級品ばかり。顔こそ見えないが、会社なら重役、お役所なら課長級の立派な紳士？に違いない、子供の四、五人はおろか、ひよつとした孫がいるかもしれないと思われる紳士が、でっぷりと肥った体をまるめて、懸命に前方の女便所を覗いている。それはグロテスクでもありまたユーモラスでもあった。しかし、私はそれ以上見るに堪えなかった。其処を出て、満員の場内へ戻った。』

と、こういうような滑稽ともいうべき場面も副産物として出てきます。人間の裏面を描

き得て妙。

『それから約一時間、おとなしく映画を見ていた私は、もう直ぐラストシーンになりそうな気がしたので、愚図々々して例の場所を占領？されてはたまらないと思い、終幕を待たずに便所へ行った。男便所は二つとも空いていた。私は先日と同じように、女便所側の穴を全部塞いでから、うしろ向きに腰を下ろした。』

「五分間休憩致します」と云う場内アナウンスの音が流れて来ると同時に、便所の中は騒音と雑音のるつぽと化した。殿方用も婦人用も満員である。私が張り込んでいる？便所のドアも何回となくノックされた。その度に使用中であることを応答しなければならぬ。わづらわしさに、私はうんざりしてしまった。そのうちに、私は奇妙な事に気がついた。と云うのは、私が入っている便所のドアをノックする回数と、隣のもう一つの男便所が使われる回数とが著しく違うことである。つまり隣の便所が空いているにも拘らず、私の方をノックして、使用中と云うことが判ると、空いている方に入ろうともせず、外へ出る者が何人もいると云うことである。しばらくして私はその理由が判った。その連中は決して用便が目的で来たのではない。彼等の目的は先刻私が紙片でふさいだ、女便所側の穴である。然し、私の狙っているものは全く異った

対象である。』

こゝのところは大変意味深長ですね、ホモ党氏の目的と一般の人の目的の違い、筆者がそれを自覚して書いているところに、この文章の生彩が一層高められているようです。

『休憩時間が終り、次の映写が始まってから十分位して、そつと隣に入った男がある。穴から覗くと、某私鉄の従業員らしく、制服制帽をつけた二十五、六才の青年である。ドアの錠をかけると、そのまゝしやがみ込んで、タバコを吸いはじめた。小さな穴とは云え、僅か二十糎足らずの処には、帽子のひさしの下に鋭い眼が光っている。私は自分が覗いている事を気付かれはしないだろうかと思ひ、少々びく／＼していた。じつとこちらを見つめていた視線が横にそれ彼の横顔が見えた。そして、その唇のはしが、微かに歪んだ。落書の一つ一つを、たんねんに眺めているらしい。やがて立ち上った。』

こゝで例の通りの窃視の描写があるので、そのあとで筆者は、ある文句を手帖の端に走り書きしてその紙片を境の壁の一番下にある隙間から、そつと向う側の床の上へ滑らせました。然し、この第一回の試みは完全に失敗に終わってしまいます。それから機会ある毎に、その映画館へ行くようになり、何時間も、甚しい時には、午前中に行つて、夕方六時頃までねばったり、或はまた、同じ週に二

回も三回も映画館へ通ったりします。そういった異常なまでの熱心さは、又、いろいろな場面の発見と共に、一つの哲学を生ませる根拠ともなるのです。こうして、小見出し(二)は終り、(三)にうつります。

『私は足繁く通っている間に、いろ／＼なこ

【映画・雑誌】通信

映画に現れたムツキ

赤井 茂

映画スターだって吾々と同じ人間である故吾々の生活過程と何等変りなく、吾々と同じ生活がスクリーンに登場した処で何等の不思議も有りませんが、人気稼業だけに興味あるものと思ひ筆を執つて見ました。然しサドとかマゾと云った点に於いては縁が薄いですが、私は興味を持って又記憶にあるまゝ綴つて見ました。

一、戦前の映画で、戦後上映された物で新興か大都映画(現大映)の〃母代〃黒田説代主演で子供の母親は冷たい獄窓につながれ、看守である黒田説代が子を引き取つて育てる。然し子供は病気になる苦勞する。(消化不良)黒田説代が子供のオムツを取りかえる場面がクロージアップされ、取り

とを発見した。それは一種の便所哲学とでも云うようなものである。』

こゝで、便所哲学の第一、第二、第三、について言及しております。これは公開出来るとしたら、さぞ稀少な調査報告として尊重されるべき性質の内容ですが、赤裸々な実態だ

代えたばかりで又汚してオムツを取り代える。〃婆やオムツ持つて来て頂戴〃と云う場面。

二、新東宝映画、五所平之助監督、主演田中絹代の〃煙突の見える場所〃で田中絹代と上原謙の夫婦間に子供がなく、花井蘭子の捨て赤ん坊を育てる。育児の経験がなく田中は大弱りする。競輪場での友達浦辺糸子に赤ん坊のオムツを取り換えてもらう。その際に浦辺にオムツカバーを取ってくれと云われて田中が汚なそうにつまんで渡しつまんだ手を嗅ぐ場面があり、観客は哄笑したがこれも仲々面白い場面。

三、〃女の一生〃松竹映画、淡島千景主演淡島千景が、女学生から老婆まで演ずる

けに、こゝに要約することさえ出来ないのが残念です。しかし、その豊富な対象をあらゆる観点から挙げてゐるのには感心させられます。これはアブ的執念だけでは出来ないことだろうと思います。筆者はきっと豊かな生活の持主かもしれません。(三)はこれで終つて次は(四)に移ります。

『さて、私の期待も空しく数ヶ月が過ぎ去ったが、丁度此の便所通いを始めてから半年ほど経った夏の終りのある日、私はとう／＼チヤンスを掴んだ。

お盆過ぎとは云うものゝ、日中の暑さは真夏と少しも愛らない。私は、けだるそうにあくびばかりしているモギリ嬢に、入場券を渡すと階段を上って客席に入ってみた。冷房が出来ていないので、場内は蒸し風呂のようである。暗さに馴れて来ると、客席はガラ空きなのが判った。しまった! こんな日に来るんじやなかった。と思つたが、あとの祭である。私は、こんな入りでは、便所の楽しみも駄目だろうと思つたが、どうしても一度は覗いて見なければ気が済まないもので、そつと廊下へ出て、何時もの便所へ足を向けた。』

こゝで、はからずも理想的な対象に逢えるということになるのですが、そのいきさつは省くとして、一般的な興味を持てるのは、これ迄であつて、これから以後は、ホモ的な専門的興味が中心となつてゆきます。対象の第

名演。子供を生み、子供にオムツを取りかえる場面があり、部屋に雪国紋のオムツが干してある。

四、新東宝映画、雪村いづみ、南風洋子、主演。題名は忘れましたが、南風洋子が雪村いづみ達女学生の寄宿舎の監督者でもあり、先生でもある。その寄宿舎に突然、赤ん坊の泣き声がする。捨子、男子禁制の寄宿舎に赤ん坊の出現、先生始め生徒達が大弱りで警察へ届け様とするが、あまりの可愛さに学校の先生達に内緒で育てる事にする。その中に学校長始め来賓達の寄宿舎見学で南風洋子始め雪村いづみ達があわてゝ物干場に干してある赤ん坊のオムツの取り入れに苦心する場面。

五、洋画で最近の「戦略空軍命令」ジエームス・スチュアート、ジュンアリスン主演の中で子供が出来、アリスンの側で乳母がオムツをたゝんでいる場面。

六、「三人の名付親」ジョンウエイ主演三人の黒人がとある処でインデアンに襲われ取り残された幌馬車の中に出産間際に遭遇して、子供を生むと間もなく母親は三人に子供を託して死ぬ。三人は子供に名前を付ける。道中でジョンウエイ達は育児書にもとづいて育てる。ジョンウエイが赤ん坊のオムツをかえている場面。

七、東宝映画「浮世天国」笠置シズ子、横山エンタツ、吉川満子主演でエンタツが家政夫となり、風呂焚きから拭き掃除、オムツの洗濯と云った少しばかりマゾヒスティックな場面。と仲々面白き描写が記憶に残って居ります。日常生活の描写ではあります。が襁褓へ興味を持つ者にとっては興味あるものと綴って見ました。

襁褓辞典に依ると、キョウホウ、むつぎうぶきとある。英語でマドウリングクロップスとあるが、方言に依っては面白い表現があり、二三あげて見ます。オシメ、オムツ、これは一般の常用語、農村方面に行く、ムツキ、シメシ、と云う言葉は往々にして聞きますが始め「ドンコ」の言葉が分りませんでした。「この子は昨年までドンコをしていたのにこんなに大きくなって」の会話でオムツの事だなど思いましたが念のためきいてみましたら、矢張りオムツの事で面白いものと思えます。最近外語ではダイアパー、クロウートカバーと云われて同じ一つの物でも幾通りかの名前のある物だと興味があると思えます。

出来れば世界各国のオムツ風俗を研究して見たいものだと思願して居ります。同好者の皆さん、大いにオムツに対して投稿下さい。

一は大学生、然し、住所姓名を聞いておかなかったため、別れてしまつてからは、もう二度と逢うことが出来ません。こゝで限られた人しか愛することの出来ない人の哀愁が書かれています。第二の人は、デニムの青ズボンにジャンパーという職工タイプの青年。この青年とは暫く交際しますが、金銭上の問題でその青年が勤務先を追われて、別れ別れになります。この原稿は、このあと、小見出し(四)で、総合的な体験談が四つ、五つ挙げられ、自分の好み等を述べてしめくゝりをつけています。『私の好みは、前記の文章でお察しがつくと思うが、私と同じ位か或は私以上に体格の良い男性的なタイプの人で、容視は美男でない男らしい顔が好きで、色白の人や、優さ男は嫌いだ。相手の職業にも選ごのみがあるが、特に保安隊員、巡査、船員、鉄道員等の制服着用者には耐らない魅力を感じるしかし、そのような人に限ると云うのではない。インテリ型よりも、むしろ劣者タイプの子供っぽい男が好ましい。また、ウールニングとかペダラストとかの区別のある関係も嫌いだ。双方共に同じ立場で愛し合える人を求める。』

と、こゝで四十枚に亘るこの原稿は終りをつけています。本月は、この原稿の紹介に終始しましたが、次回、又変つたものを御紹介しましょう。

虐げられる娘

＜写真物語のアイデアとして＞

嵯峨紀世



今しがた別れて来た喬さんとのランデブーのたのしきも、我が家へ歩一步と近づくにしたがって、重苦しい気持ちに変わってくる私だった。喬さんはあんなにはっきりと私との結婚を誓い、明日正式に父や義母の承諾を得に訪れる約束まで交して来たのであるが、義妹の万里子が何時の間にか、結婚までも誓い合った喬さんを我が物にしようと、義母を抱き込んでの私への妨害も、喬さんと私とが接近す

ればする程激しくなる一方である。昨日も帰宅が遅いと義母と一緒にになって私を打つ蹴るの暴行沙汰であった。その事を気にしながらも、今日亦、喬さんと一緒にの楽しさから帰宅の時間が遅くなってしまった。重い足どりもやがて帰りたくない我が家の門前迄たどりついてしまった。入ろうか入るまいかとまどつたが、矢張り我が家である。それに、こうしているうちにも時刻は刻一刻と過ぎてゆく。

思い切って玄関の戸を開けた。

「只今帰りました」動悸打つ胸を押えながらこう云って自分の部屋へ入ろうとすると、

「あら、泥棒かと思ったら義姉さんよ。こんなに遅くまで何してたのよ。又変な男の人と遊んで来たのでしょう」

義妹の相変らず意地の悪い言葉が耳を衝いた。

「いいえ、会社の用事で一寸」

私は出来るだけ逆らわずにこう云って部屋に入り着換えを始めた。と義妹の後から、目を釣り上げた義母が、何時ものどげ／＼しい口調で

「れい子さん、何です、今頃帰って来て。毎晩々々何してるんですッ。万里子さんを御覧何時でもきちんと帰っているのに、貴女はどうして、こうなんです？」

と言いながら、着換え半端の私の傍へ寄って来ると、いきなり、シュミーズの上に端負ろうとしていた着物の襟元をつかんで、さつと剥ぎとってしまった。何時もならば坐つてうつむいている私を物差しで打つ位であった義母の今日の激しい仕打ちに、私もドキリとした。「又、義妹が何か嘘の作り事を義母に話し、義母の私への憎しみを倍加させたに違いない」と怨むような目でちらと義妹の方を見たが、思い直し無言の儘足元に落された着物物を拾おうと手を伸ばすと、いきなり手首を

義母につかまれてしまった。と、義母は「いくら言っても聞かしても分らないひとは少し痛い目を見ないと身にこたえないものらしい。万里子さんも手伝ってお呉れ」

と云いながら、私の腕をぐいぐいと背にねじ上げた。

私は

「あつ、お義母様。何をなさるんです。あつあつ、つゝつ」

ともがいたが、義妹も手伝つての二人掛りでは抵抗も空しく、唯身体をよじるに過ぎなかった。そうするうちに、私の帯は腕に、そして背に組み合わされた両手首に纏いついていった。

「お義母様、あんまりです。はっきり理由も聞かずにこんなひどい事をなさるなんて」

私は口惜しさに涙を流しながらこう抗議したが、

「おや、自分の悪い事を棚に上げてまだそんな事を云っているのね。云わしておけば勝手な事ばかり云つてうるさいから、ねえお母様口もしばってしまった方がよいようね」

義妹の此の言葉に母も領き、やがて、必死にもがき、あばれ、抵抗出来るだけ抵抗した私だったが、二人掛りで口中にハンケチを押し込まれ、その上を手拭で頬もくびれる程強く猿轡をはめられてしまった。

真実を語ろうにも、弁解しようにも口を覆

われては、声は唯うめきにしかない。それでも私はもがいた。シユミーズ一枚の半裸の姿で縛り上げられた辱ずかしさと憎悪に必死に身をもんでみたが、縛しめの帯は肌に喰い入るばかりだった。

「お母様、本当に義姉さんたら図々しいのよ私と結婚の約束までした喬さんを横捕りしようなんて、とんでもない人だわ」

義妹は私の口のきけないのをいい事にして自分勝手な事を云い始めた。「そんな、そんな馬鹿な事はない。それは皆嘘です。喬さんは明日私の事で此所に来て下さる事になっている位ですもの」私はこう叫んだが、勿論、その声は、口をしつかり覆った猿轡の下で、「う、う、うー」といううめき声にしかならなかった。私のこの抗議めいたように、義母は

「おや、まだ何か文句があるらしいね。まだこりないといえる。ようし、それでは少しはこりる様にしておけるよ」

と云ったかと思うと、義妹に手伝え、そうはさせまいと暴れる私の着ているシユミーズを剥ぎとり、あまつさえ、身に纏う最後の一枚であるブラジャーまでも無理矢理脱がせパンティ一枚にしてしまうと、私の片足首とももの付け根とをくくりつけ、腰を一巻きさせたしごきをお腹の上で結ぶと二本一束にしてねじあわせ、その端に紐を結びつけると、

背の両手をくくった帯に結びつけた紐と一緒にして天井に釣り上げてしまった。私は片足の而かもつま先きだけで「く」の字なりに曲がった身体を支えなければならなくなった。

之迄にされると私も「もうこんな母子には哀願などするものか、どんな仕打ちにあつても頑張ってみせるぞ」という気になり、じっと目をつむった儘、次の仕打ちを待っていると義妹が

「お母様、唯こうしていても面白くないわ。物差しでも持ってきて来ましょうか」

と云つてバタ／＼と隣りの部屋へ走り去った。「ハッ」として目を開き、義妹の方を見ると、義妹は左手に物差し、右手にベルトを持って戻つて来た。そして、憎しみの目で見らむ私を「ふふん」と鼻で笑うと、いきなり左手の物差しで、むき出しになっている、私の太股をピシリと力まかせに打った。「あつ、うーむ」私は齒を喰いしばって痛さをこらえたが、何時もと違い、肌へ直接当る物差しの痛さはじーんと焼鏝でもあてられた様な激しいものだった。義妹は私の痛さをこらえる様子をみると残忍さがかき立てられたものか、今度は右手のベルトで一振り、打った。痛さと屈んだ姿勢の苦しさとから、私はつい「うめき声を出し、不自由な身体をよじりもがいた。と義妹の物差しとベルトは交互に、而かも矢次早に私のお尻めがけて打ち下され

た。義母は半裸の私が辱ずかしい姿で縛り上げられ、打たれ、もがく様をさも心地よさそうに眺めているだけで、狂った様な義妹の私刑を止めようとしめない。継母と云うものは之程迄も非情なものなのだろうか。私は死んだあの優しい母を想い浮かべ、そして何も知らず出張中の父を恨めしく思うと涙がどっとこみ上げて来た。

やがて、義妹は疲れたのか、それとも飽きたのか手を休めると、義母の傍へ寄り、何か囁いたが、痛さ、苦しさにじーんと耳鳴りのしている私には何を囁いたのか分らなかったが、二人が行動を起すと、それが何であったか直ぐ分り慄然とした。

二人は吊り上げた紐を解くと直ぐ、抵抗力の弱まった私の両手首を縛った帯の余りを両肩から両膝を廻し、ぐっと絞めながら私の首の後で結び、他の紐で腕と足首とをつなぎ、「かに責め」の姿勢にすると、殆ど動きのとれなくなった私の背から腰、お尻と六ヶ所位だろう、「灸」をすえ始めた。その熱さにもがこうにももがく事も出来ぬ姿の私は、唯「うーむ、うーむ」とうめくというよりうなっていたのであろう。

それから後は、ぐったりして、為すが儘になり放しの私を、義母と義妹は悦虐の鬼さながらの姿で、両腕を柱を背負うようにしてくくり上げ、両足首は柱の後で組み合わせて縛

った全然身動きすら出来ぬ姿勢にして、乳房やお腹、ももなど所構わず、タバコの火をつけたリ、針をさしたりして、その度にぴくりと筋肉を引きつらせうめく私を面白がり、又箒の柄に両腕と両手首とをくくりつけ、天井から吊り下げると、全く開ききった「わきの下」をくすぐり苦しさに身をよじらせてもがき、涙を流す私を心地よげに眺めたりされたが、やがて、苦痛と屈辱とに疲れ果て、何時の間にか私は気が遠くなってしまう。私が気を失っている間どんな事をされたかは分らない。然し、しばらくして気がついてみると私は箒の柄を背負うようにして縛られた姿の儘、転がされていた。恐らくは、義母達も疲れた為、私をこうして縛っておいて自分達も休んでいたのであらう。

私はみみず脹れや、火傷、血の滲んだ針跡そして長い間縛られ、もがいた為、節々の痛む身体を動かしてみたが、
「あつ、あつ、うーむ」

思わずうめいてしまった。と、此の声に目覚めたのか、隣の部屋で休んでいたらしい義母と義妹が寝間着の儘起き出して来ると、
義妹は

「おや、お氣付きらしいね。そろ／＼夜明けだし、もう一度責めてから、ゆっくり休ませてあげようね」

と云いながら義母を促し、私を箒から解き

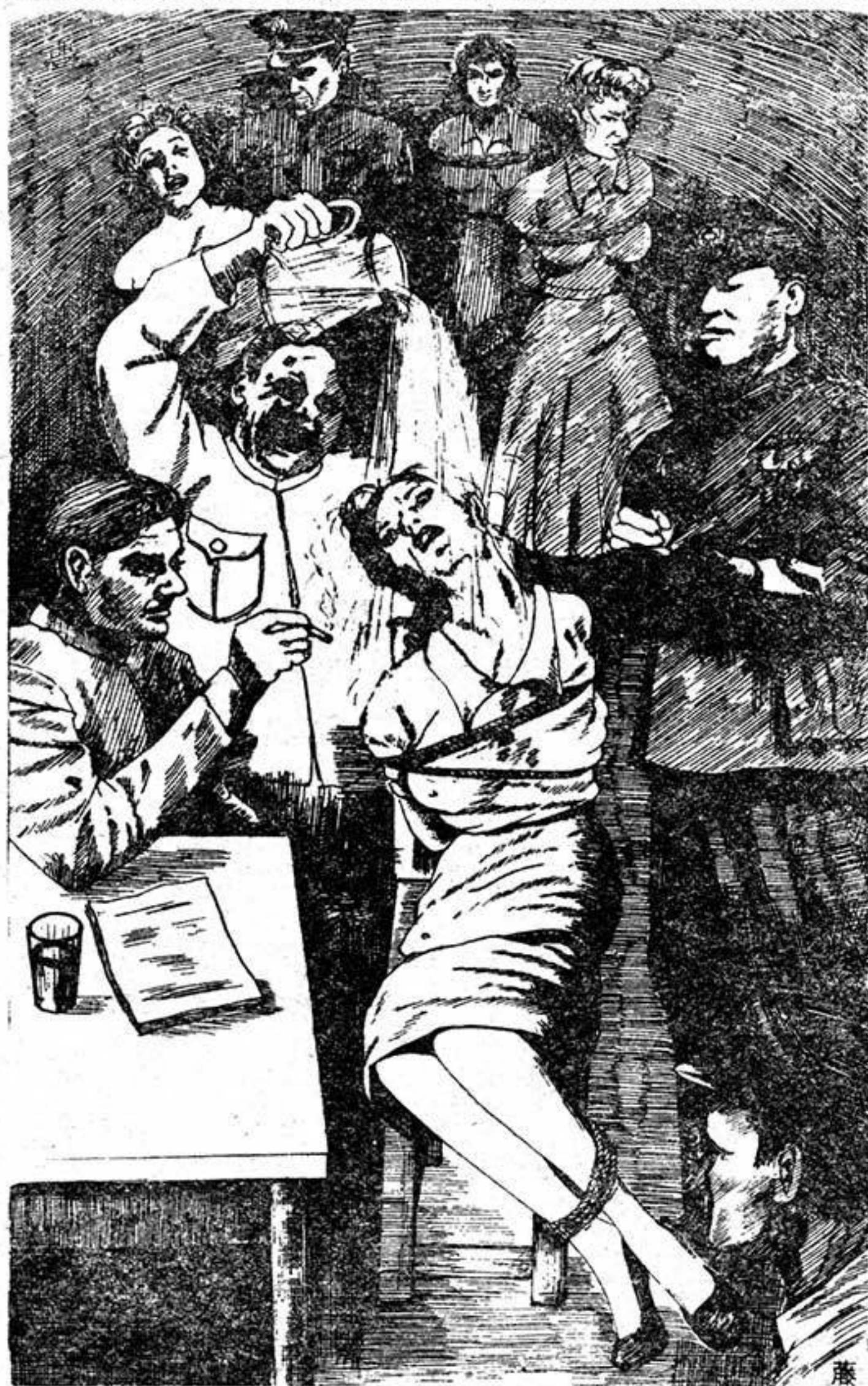
放すと、両足を開いた形に足首を箒の柄に縛りつけ、背の両手首を胴にしつかりとくくりつけるとその縄尻と箒の柄の両足首の縄尻とを一緒にして天井から吊り下げた。私はもがこうにも節々や傷ついた肌の痛みの為、為すが儘になっっているより仕方がなかった。一体義妹達はどんな責め方をするのだろうか。

義妹は私を吊り終ると、私の浮いたお尻の下に火をともしたローソクをおいた。二人は私を「ローソク責め」にしようとするのだ。やがて、上昇する焰の熱気に、パンティはチリ／＼と焼け焦げ、皮膚までも焼けただれるであらう。「あつ、あつ」私は精一杯、もがけるだけもがいてみたがどうする事も出来ない。余りにも残酷なそして苛酷な義母や義妹の私刑に私は彼女達を怨み、呪いながら、やがて気を失ってしまった。

何か激しく云い合うような声と身体の不自由さに「ハッ」と我に返った私は、其所に着物で包んだ私の身体をしつかり抱きしめながら義母達に激しく抗議している喬さんを見出し
「あつ、喬さん」

としつかり抱きついた私は、救われた喜びに止めどなく流れ落ちる涙に後の言葉も出ず唯喬さんの胸にすがって泣きつづけた。

私が気を失うと殆ど同時に、約束通り私の家を訪れた喬さんは、不意の来客に驚き慌てる義母達の様子に不審を抱き、案内もこわす



ナチスの暴虐

前大戦中、ナチスが勢力を占めていた頃、各地の占領都市に對して、その暴虐を欲しきまゝにした。彼等は、非戦士員である婦女子までに、残虐の限りを尽くしたのである。

(藤 木 仙 治)

上り込んで、今下したばかりの私の変り果てた姿に奮然として、義母達を押しつけ、私の縛しめを解き、半裸の私の身体を着物で

包み、義母達の目に余る残虐な私刑に對して激しく抗議し、反省を求めていた所だったのである。

「れい子さん、苦しかったらうね。僕がもう一足遅かったら殺されるところだった。さあこんな鬼のような人達のいる所に居ないで、病院に行こう。貴女の身体はすっかり傷めつけられている。僕はお父さんが帰られたら、何もかもお話しした上で、必らず貴女と結婚します。もうどんな事があっても絶対貴女を離しません。貴女は永久に僕のもんです」

喬さんの此の温かい言葉に、私は傷の痛みも、義母達への憎悪も忘れ、喬さんが包んでくれてあった着物がずり落ちるのも構わず、喬さんにすがりつき、嬉し涙にくれたのだった。

やがて、傷も全快し、退院した私は父の許しを得、又自己の罪を悔い、すっかり人の変わった義母や義妹の祝福を受けながら、喬さんと結婚し、毎日の生活をたのしく送っている。

【編集部より】 嵯峨紀世氏の「虐げられる娘」は写真物語のアイデアとして、ここに掲載しましたストーリーと共に、若干の絵を一緒に送られて来ましたが、都合により、絵又は写真は最近刊行予定の「限定版、サディズム特集号」の方に発表する予定でありますから、何卒御期待下さい。

限定版各種特集号〔発行予告〕

読者の皆様の中には、写真集や画帖、或は口絵、挿画、等を豊富にしてほしいという御意向が相当見受けられますので、今回、そういった方々の要望を満たすため、従前発行の画帖、アルバム等とは違った形で解説、説明等も豊富に挿入した写真、絵画、図譜集を左記の通り企画をいたしましたのでここに予告いたします。現在のところ、左記の三種目に限っていますが、皆様の要望によっては、他の種目にも及ぼしたいと考えています。、するつもりです。

一、限定版 サデイズム特集号

五百部限定版 頒価一部千円

形式、A5版、総頁両面特アト紙使用
内容、サデイズムに関する外国の写真、絵画その他の資料の紹介、絵物語、女体責めに関する新作フォト及び悦虐画家の筆になる新作、責画、緊縛デッサン集、読者

最新版女体緊縛フォト

光沢印画紙焼付
本誌写真部特写

本誌、復刊第一号並に第二号誌上に初めて発表して大好評を得た、縛られた女体の特写フォト。若々しい多数のモデル嬢が縦横無尽に活躍しているマニア垂涎の傑作揃い、絶版にならぬうちに、お早くお求め下さるようお願いいたします。

○高瀬忍嬢

悦虐ポーズ代表選
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○美少女緊縛

(中富綾子嬢)
キヤビネ版 二枚一組 二百円

○藤田節子嬢

「落花狼藉」キヤビネ版
第一集 三枚一組 三百円
第二集 三枚一組 三百円

○古川裕子好み縛り

(萩千恵子嬢)
第一集 第二集
キヤビネ版 三枚一組各三百円

○加賀利江子嬢

第一回縛り集
第二回縛り集
キヤビネ版 三枚一組各三百円

○加賀利江子嬢

悦虐ポーズ集
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○厚狭春江嬢

股間しばり三態
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○デニムのズボン縛り

(加賀利江子嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○須川令子嬢

股間しばり三態
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○萩千恵子嬢

新版腰巻しばり
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○灸点地獄

(施術者 春日ルミ嬢)
被術者 伊吹真佐子嬢
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○悦虐モデル

緊縛六人集
キヤビネ版 六枚一組 五百円

○ジャジャ馬馴し

(中富綾子、村田那美子)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○逆さ吊り

(伊吹真佐子嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○萩千恵子嬢

新版股間しばり
キヤビネ版 三枚一組 三百円

一、限定版 マゾヒズム特集号

二百部限定版 頒価一部千円

形式、A5版、総頁両面特ア

ト紙使用

内容、マゾヒズムに関する外国の写真物語、絵画、その他の外国文献、資料の紹介、

並にサジスチンによる男性責めの新作絵画の紹介、本誌既載の小説をテーマとした絵画の発表

一、限定版 女体切腹特集号

二百部限定版 頒価一部千円

形式、A5版、総頁両面特ア

ト紙使用

内容、中康弘通氏の「女腹切図譜構成案」を骨子として作成せる、女体切腹図並に、本誌既載の文章中よりテ

マを選んだ切腹図の紹介、及び新作女体切腹フォト、読者（原桐咲代氏外）から投稿された切腹フォトの紹介等。

◆企画進行状況並に申込方法

◎只今のところ、右の三種の特集号の発行の企画を樹立しました。手持の資料以外に新しい資料の蒐集、写真の撮影、描画等を目下進行させております。

◎予約募集ではありませんから御送金は本誌に詳細発表までお待ち下さい。完成次第、本誌々上に発表いたしますから、その時お申込み下さい。限定番号を附して御送り致します。

◎図譜を中心に編集し、各頁、

必ず写真又は絵画を豊富に挿入する関係上、用紙、印刷、製版等については十分意を用い、きつと御満足の召すものになりたいと思います。

◎将来、末永く保存するということ関係上、製本についても、考慮中ですが、出来るだけカサ張らないものゝ方がいゝように思いますので、そういう製本方法によりたいと思います。

○坂口利子嬢

悦虐全裸緊縛集
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○萩千恵子嬢

曲芸縛り
キヤビネ版 三枚一組 三百円
手札型 三枚一組 二百円

○強烈縛り五人選集

キヤビネ版 五枚一組 五百円

○須川令子嬢

立木縛り野外晒し
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○女体いじめ四態

春日、伊吹、二嬢コンビ
キヤビネ版 四枚一組 四百円

○猥らな縛り

キヤビネ版 四枚一組 四百円

○肉体美緊縛三態

(伊吹真佐子嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○女体品定め

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○ローソク責め

(春日、伊吹、二嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○女学生凌辱連続写真

キヤビネ版 六枚一組 五百円

○須川令子嬢

高手小手五態
キヤビネ版 五枚一組 四百円

○川辺砂登子嬢

メンズバンド着用
キヤビネ版 二枚一組 三百円

○衆人環視の緊縛

(萩千恵子嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○修学旅行の出来事

(須川令子嬢)
キヤビネ版 二枚一組 二百円

○お寝み前の五分間

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○晒責め三態 (伊吹嬢)

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○佐賀美智子嬢

女事務員の縛り
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○凌辱魔侵入 (シリーズ)

キヤビネ版 十二枚一組 千円

○旦那の二号責め

キヤビネ版 十枚一組 八百円

○落したブローズ

(佐賀美智子嬢)
キヤビネ版 五枚一組 五百円

天星社代理部特選写真集

(実費分譲)

□高級光沢印画紙使用 大きさ

(タテ 九 横 十三)

緊縛女体の フォト

二枚一組	一五〇円	五枚一組	三〇〇円
三枚一組	二〇〇円	六枚一組	三五〇円
四枚一組	二五〇円	(以上送料共)	

◎腕によりをかけた 二十集◎

◎この二十集は、マニア諸氏からの要望を百%取入れて作成したもので、各集とも十分に変化をつけ好みのものを手軽に、しかも安価に入手してコレクション出来るように心掛けて配置しました。どうか皆様のアルバムを一層多彩絢爛たるものにして下さい。

AS1 タンス責め

(伊吹嬢) 三枚一組

タンスの環に両足を縛られて、逆か立ちになったところを頭を足で踏みつけられる。

AS2 浴室の緊縛プレイ

(須川嬢) 二枚一組

AS3 柔肌の弄戯

(村田嬢) 二枚一組

全裸の柔肌にまといつく蛇のよな縄。村田ファンに捧げる。

AS4 アクロ緊縛

(萩嬢) 六枚一組

柔軟な萩さんの華やかな身体が縄の束縛にあってエビのように曲ったり、シヤチホコのように逆立ちしたりする。

AS5 トイレ五態

(須川嬢) 五枚一組

初めて試みたトイレの中に於ける緊縛。

AS6 強烈股間緊縛

(中塚嬢) 六枚一組

新人中塚文子嬢を記念させた新考案の強烈股間縛りは豊満な全裸の肌を容赦なくさいなみつつける

AS7 セーラー服哀歓

(須川嬢) 三枚一組

清潔な可憐さを制服に包んで受ける縄目の悲しさと歓び。

AS8 奇抜な縛り

(伊吹嬢) 二枚一組

文字通り奇抜な、そして大胆なポーズ。

AS9 蒲団責め

(須川嬢) 五枚一組

丸めた蒲団の上で、どんな責めが演じられることだろう。新しいアイデアによって試みた卓越したポーズ揃い。

AS10 新股間縛り

(伊吹嬢) 三枚一組

絶版となった以前の分と同じ逸品。むしろそれ以上の品。

AS11 女体嗜虐譜

(春日伊吹) 五枚一組

春日嬢のあくなき惨虐の手は従順な伊吹嬢の上に加えられてゆく

AS12 裸に縛るまで

(菅嬢) 四枚一組

新人菅登紀子嬢を初めて裸にして縛り上げるまでの連続四枚のフォト。コレクト・マニアは是非。

AS13 胴絞めしぼり

(伊吹嬢) 二枚一組

一入豊満さを増した伊吹嬢の胴もくびれよとばかり手首と共に正面しぼり。

AS14 後手縛三態

(佐賀嬢) 三枚一組

新人佐賀美智子嬢の後手の裸しぼり。

AS15 股間しぼり五態

(須川嬢) 五枚一組

優美な五つのポーズが、どれもこれもマニアのお気に召す逸品揃い。

AS16 馬乗り姫シリーズ

六枚一組

春日ルミ嬢と伊吹真佐子嬢のコンピ作品、伊吹嬢が山肌の上へ裸で押えつけられ春日嬢に馬乗りになられるまで六枚のシリーズ。

AS17 禪美女体

(須川嬢) 二枚一組

正面と背面の二枚の禪姿の女体

AS18 股間緊縛四態

(萩嬢) 四枚一組

どれもみんないゝものを選びました。きつとお気に召すでしょう

AS19 羞恥責め

(中富嬢) 二枚一組

花恥しき乙女の全裸の姿を何ら覆うことを許さず前と後からつくづく鑑賞出来るという幸福なフォト。

AS20 見ちや嫌

(伊吹嬢) 三枚一組

三枚共、みんな正面タテしぼりどうかそんなんに見つめないで頂戴見ちや嫌よ。

アブフォト集

◎得難い稀少な

二十五集◎

各組 一枚 八〇〇円
 十組 一枚 七五〇円
 二十五組 二十五枚 一八〇〇円
 (以上全部送料共)

◎この二十五集は、皆様の各々お好みのモデル嬢、お好みの趣向或はポーズを選んでお求め願えるよう一枚分売となっております。

BS1 覗れた下着 (加賀嬢)
 BS2 股間しばり (坂口嬢)
 BS3 クリップ責め (川辺嬢)
 BS4 擦り責め (中富嬢)
 BS5 狙上の魚 (須川嬢)
 BS6 大の字縛り (浅野嬢)
 BS7 みゝずばれ (杉嬢)
 BS8 くさり責め (高瀬嬢)
 BS9 折檻 (雲井嬢)
 BS10 梯子責め (伊吹嬢)
 BS11 ハリツケ (萩嬢)
 BS12 月経帯縛り (村田嬢)
 BS13 手錠くさり (伊吹嬢)
 BS14 人身御供 (高瀬嬢)

新マゾ風景十態

一組 一枚 一〇〇円
 十組 十枚 九〇〇円

M1 ワン公水をやろうか
 M2 なぶりもの
 M3 ベッドの上で可愛がる
 M4 押え込み
 M5 足舐め大写真
 M6 お化粧台
 M7 ハイヒールの下にて
 M8 足の裏に屈服する
 M9 頭を殴る
 M10 お小言頂戴
 M11 男性緊縛フォト
 晒し者三態 三枚 三〇〇円

BS15 落した下着 (萩嬢)
 BS16 下半身裸出 (村田嬢)
 BS17 鼻責め縛り (川辺嬢)
 BS18 高手小手 (加賀嬢)
 BS19 乳房責め (川辺嬢)
 BS20 首縄 (川端嬢)
 BS21 後手しばり (藤田嬢)
 BS22 竹棒責め (伊吹嬢)
 BS23 蛙潰し責め (雲井嬢)
 BS24 改つた表情 (佐賀嬢)
 BS25 森の中の凌辱 (村田嬢)

M12 男性股間しばり

一枚 一〇〇円

女体切腹フォト

H1 女体割腹譜
 二枚一組 二〇〇円

女体浣腸フォト

K1 エネマシリンジ
 四枚一組 三〇〇円

女体切腹写真

しせ〇自害悦虐女体切腹
 キヤビネ版 三枚一組 三百円

かせ〇女学生の切腹姿態
 キヤビネ版 五枚一組 五百円

まん〇切腹曼陀羅図

キヤビネ版 五枚一組 五百円

たち〇女性切腹「立腹」

手札型 二枚一組 百五十円

さん〇女学生散華

キヤビネ版 七枚一組 七百円

女性浣腸写真

かか〇女学生の浣腸

キヤビネ版 四枚一組 五百円

マゾフォト

とし〇奴隷使役

キヤビネ版 三枚一組 三百円

しれ〇女王様の尻の下

キヤビネ版 三枚一組 三百円

なむ〇長靴着用の女性から鞭で仕込まれる
 キヤビネ版 三枚一組 三百円

とき〇奴隷教育

キヤビネ版 三枚一組 三百円

しお〇乗馬靴乗馬服の男から責められる男
 キヤビネ版 三枚一組 三百円

おこ〇男性縛り禪美縛体
 キヤビネ版 三枚一組 三百円

おき〇男性緊縛二態

キヤビネ版 二枚一組 三百円

なお〇嬲られる男

キヤビネ版 三枚一組 三百円

へん〇鞭撻

キヤビネ版 二枚一組 三百円

私の空想天国

娘 子 島 探 険

東 坊 丸

空想は実に楽しい。自分の頭の中で誰にも妨げられず、自由奔放、いかなる残虐、荒唐無稽な事件を起しても罪にはならず、何時の間にか刻が経ってゆく。ふと我れに返れば一場の夢、はかないものであり実に味気ない思いもするが、でもその空想の中に遊ぶ一刻は私にとって貴重なもの。私は今「娘子島」なる所に旅行している。之からのくだりはその旅行見聞記である。沼正三氏は「丹夫人の化粧台」についての裏付の空想を見事な筆致で書いておられるが私のこの夢を如何に解剖せられるかは是非とも承わりたいものである。

先ず話は、第二大戦当時、日米両国が太平洋に於て、日夜決戦を続けていた頃に遡る。その頃、マキン島の守備をしていた海軍陸戦隊の私が転進を命ぜられ帰途、輸送船を敵潜水艦によって撃沈せられ、海上に漂流すること三日、自分一人生き残り漂着した島が二十世紀の世にはお伽話的な娘子島だった。

この国は女王の支配する国で、道で会う人間といえばすべて之、女ばかり。そして美人ばかりである。僅か腰に南方の人達がする様な短い布片を巻いているだけ。その豊かな乳房、ふつくらとした腰、こうなると色がいさゝか黒いだけで立派な美術品である。健康なる肉体美、南国の豊かな太陽の光を浴びて黒光りに光っている。私はやがて女王のもとに連れてゆかれ異人故に特別にその国の法律によって客人となる。いわば国賓待遇である。

この国は農業国で勿論漁業、機織、砂糖しぼりなど盛んで全くの自給自足、面積は淡路島大の人口五千位の島国である。女ばかりでどうして子孫が絶えないかの疑問があるであろうが、実は次に述べる理由に基づくものである。

私は女王の宮殿へと連れてゆかれる途すがら、ふと街角の肉屋にぶらさがっている肉片を見て驚いた。それはまさしく人肉、しかも

男の肉片なのである。片足ぶら下っていたり生々しい肉肌を見せて肋骨部が下っていたりする。そして女が二、三人買物籠を下げて盛んに買っている。肉屋の主人の女は大きな肉切包丁で造作なくコマ切れにして客の注文に応じているのである。思わず唇が真青になりふるえる私に案内人は「何も驚く事はないよあれは雄という畜生の肉だよ」とこともなげに言うのである。登城を促されるままついて行けば、今度はうず高く砂糖黍を積んだ荷車を引いてくるのに出会った。女が揮うムチに、盛んに叩かれながら、あえぎあえぎ、荷車を引いている者、おゝそれこそ、我々同性の、つまり此の国でいう、雄なる畜生なのである。始めて同性にあつた懐しさに声をかけようと思つたが彼の雄は全く私には関心もない様子で、まるで牛馬のように汗を流している。然も彼の雄は両手が附根よりぷつぷつとないのである。妙な事と良く見れば去勢もされている。良く太った男が首と胸、腰に革バンドで荷車にびったり装着されているのである。どうやら二、三その情景に会うにつけてこの国で飼っているのは小鳥とか猫、犬位の小動物のみで、あらゆる労役には雄が畜生同様にこき使われ、またその肉は食用に提供されているのだなとおぼろ気ながら分りかけて来たが、此処まで考え込んでいる内宮殿へと

着いてしまったので女王に視察の許可を願いでてつづきに探訪する事にした。

その結果、この国には各種の国立飼育場を持つてゐる事が判った。まず第一が「国立幼雄飼育場」之は男いや雄出産の場合は直ちにこの飼育場に入れる。之は五才までで出産の時の目方により百匁千円にて政府が買いあげるのである。例えば七百匁の子は七千円で買いあげられ飼料はすべて山羊乳である。

六才になったら「国立種雄飼育場」「国立肉雄飼育場」の両方に分けて入れる。之はすべて厳重に政府の検査官によつて選別され、肉体的に虚弱であつたり平均体重に満たなかつたりするものは肉雄の方へ、優秀なるものは種雄の方にまわすのである。

まず種雄飼育場へ入れるものは両手を切断する。理由はなるべく精力を労費させず悪癖を予防し肉附をよくするためであり、また逃亡を防ぐ為でもある。両手がなければ腰を縛るのみでその行動は束縛される。生れた年を腹部に焼鰻で鮮明に焼きつける。そして二十五才になれば種付をする。二十六才になれば去勢して労力のいる民間家庭に政府が賃借するのである。大体一ヶ月三千円程度の低廉さで借ることが出来る。街で見かけた荷車ひきの雄はこのたぐいである。三十五才になればいよいよ国立屠殺場に追いやられる。

また一方、検査に落ちて肉雄飼育場にやられた六才の肉雄は直ちに両手切断、去勢され同じく生れた年の腹部焼付をする。之は種雄と違つて十五才になれば一般家庭に月二千円にて賃借に出される。五年毎に五百円増、即ち二十才で二五〇〇円、二十五才で三千円、三十五才で屠殺場行きとなる。

毎朝、国立の賃借市場が立つと全国の女主人共が多勢よつて賑やかな事である。この雄どもは腹に焼付けられた年によつて、その雄の名称とする。また同じ年に生れた雄は一、二、三と番号がついてゐる。例えば三十年の一番早く生れたものは三〇ノ一であり、四番目に生れたものは三〇ノ四である。借り手はこの台上に引きすえられた雄の肉付、体力、従順さ、或は労働能力等を判断して借る。その都度係官はその雄の番号と借主名、その返還日など記載して借主との契約を終るのである。之は種雄飼育場から来た二十六才以上の用済の種雄についても同様である。

屠殺場の方は全部ギロチン形式で処理する切り落した頭部は粉碎して肥料とする。極めて従順な畜生なので自己の運命に泰然自若たるものがある。屠殺場から出た肉は全部肉屋に払下げられて女主人の食膳に供せられる。

ではどうして子孫の繁殖をはかるのかと云うと之は女が成年に達すれば、国民の一大義務として種付をせねばならない。一日に百人

の種付で指令が役場から通知次第、飼育場に隣接した国営宿泊場に入る。勿論無料である五泊して五回の種付が終れば帰郷できるのである。さてこの種付は番号順に二十五才の種雄を順次使用される。

こうして十人の子を産めば税金免除、二十人生めば出産功勞勲章が貰えるので出産能力のあり次第、希望種付出願が押すなぐの盛況である。女子が生れたらその儘手許で養育することが出来るが、雄が出産すれば政府が買い上げ、直ちに前記の幼雄飼育所に所定の値段で収めるのである。

この様な組織の娘子国を一巡してゐる中各地に賃借して使役されている雄を見たが、砂糖しほりでロクロに体を縛られ無表情に廻つてゐるもの、漁場では地曳網のロクロ廻し、たんぼでは田の水入れに水車を踏んでゐるもの、荷車を引くもの等、只これ雄に課せられた仕事を忠実に何の不満もなく働いてゐる。

さて、珍らしい国もあるものと思つたが自分もその種雄にでもされたら大変と女王の氣の変らぬ中、帰国を願ひ出、この国の規定により筏に食糧を満載、再び漂流の旅の末、米艦に救出され、その儘捕虜となり、終戦と共に南方から送還されたというわけである。

(終り)



サデイスチック

な漫画

藤木仙治

正確に言えば、サデイスチックなシーンが出てくる漫画である。サデイズムそのものが素材になっ
てはいないが、関係はある。この漫画は、大分以前の映画雑誌に掲載された杉浦幸雄氏の作品に私がい
くらか手を加えてこゝに描き改め
たものである。然し漫画のアイデ
アとしては変りない。映画女優の

△或る告白▽

春と女の素足

由木 稔

三月末の朝日新聞の「ひととき」という囲い物の欄で、たしか二十才になる娘さんが、素足になって街を歩くという新鮮な喜こびといったものを実名で書いていたのを読んだことがあります。まだ靴下を脱ぐというのは早い季節に、少し冷たいが素足になって街を歩いてみる

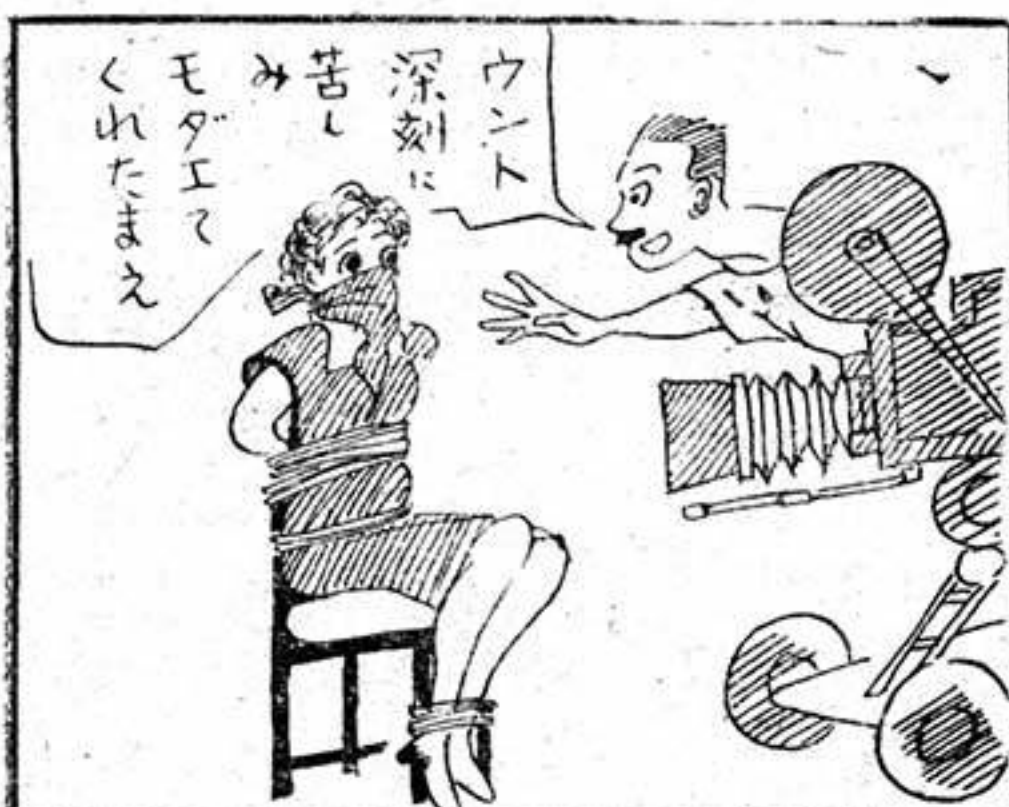


と、直接空気が肌に当たって今迄にない感情を持ったというのですが、霜焼の残っている足の指に気にしながら、という点など女らしさの細い心遣いが感じられると共に、そこに何か人間的なものが受けとられて面白いと思いました。

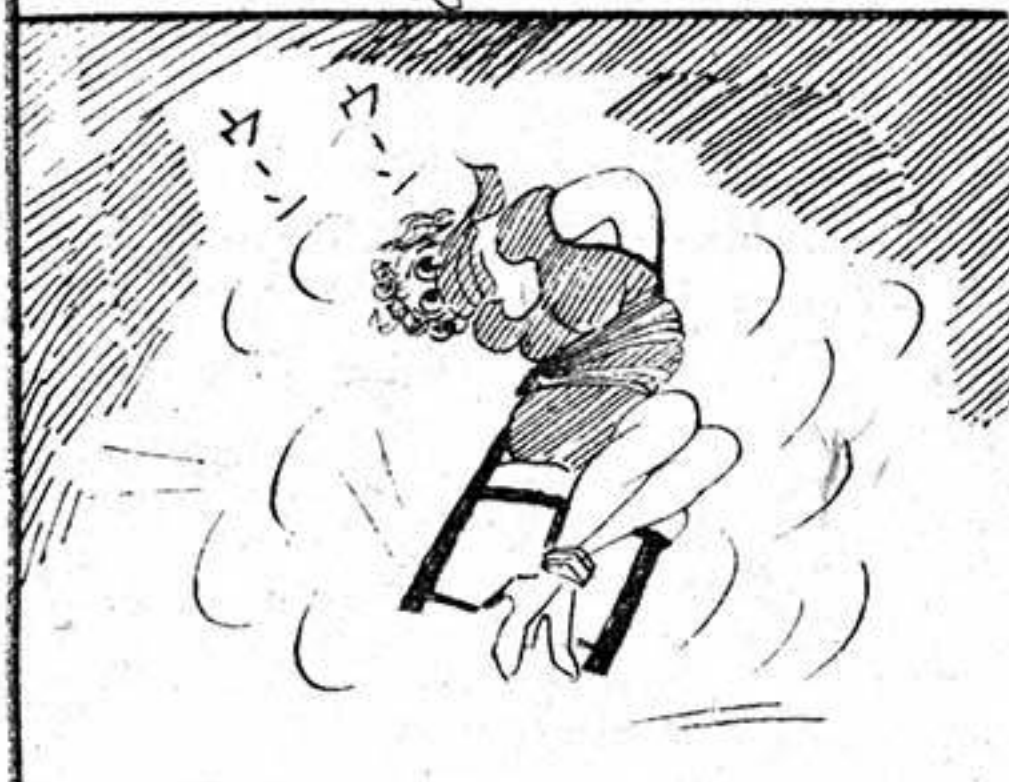
こんな取るに足らぬ記事が何故、私の目に入ったかと云いますと、私は小さい時から女性に対する足フエチシストですから活字に「素足」とあれば、すぐピンとくるわけです。

先日、五月中旬の暖かさだという季節外れの三月末の日曜日のこと。陽気に浮かれて近くの公園まで遊びに行ったところ道ゆく男の人は、中には冬オーバを着ている者もあるというのに、若い女の人たちは、短いスカートから勇敢に真白い素足を出して歩いているのが多いのは驚きもし、「足フエチ」の私としては、全く素晴らしい目の保養であったことを正直に告白します。

一番早く街を素足で歩き出す



キノ子さんの撮影中に於けるアクシジョンだが、ごらんになればわかると思うが、私たちにって見捨てられない要素が多分にある。わずかに八コマの漫画の中に美女緊縛のシーンを撮影する際の状態が、かなり真実性をもって描かれていると思う。撮影が終って、縛られたキノ子さんの縄を解く二人の助監督のポーズ、表情などなかなか味のある描写ではないか。セムシ男に襲われるシーン撮影の小休止中、椅子に腰をおろしているキノ子さんの背後の縄目がキチンと緊縛してあるのも嬉しい。



のは、やはり若い女の人です。殊に冬の間、ストッキングに包まれて外気に触れていないから陽に灼けていず、眩しいくらい白さであるのも、私にとっては楽しい眺めであります。美しい素足の娘さんが下駄ばきで歩いてくるのに出逢ったりした時は、いつまでも、その人の姿が見えなくなるまで見送ったものです。



に灼けた真黒なのは幻滅です。現実には、すべての点で理想的な足の持主には中々逢うことが出来ません。俗に、「夜目遠目傘の内」と云いますように、遠目からチラリとべつ見した時のその感じに空想を仿かせて理想化したイメージが一番楽しいようです。



らくらとする位でしたが、日陰を通るとき、静かに落着いて観察してみました。何度繰り返してみても、見飽きない程の美しさなのです。思わず知らずその娘さんのあとを一丁ばかりつけていきましたが、市場の人ごみの中へ入ってしまったので心残りでしたが、稀にみる美しい足と別れを告げねばなりません。本当に陽に晒しておくのが惜しいような美しい足でした。

〔今月の新版〕

代理部特写真集

□薄手光沢印画紙使用

大きさ(タテ 九センチ
ヨコ 十三センチ)

緊縛女体のフオート

二枚一組	一五〇円
三枚一組	二〇〇円
四枚一組	二五〇円
五枚一組	三〇〇円
六枚一組	三五〇円
十二枚一組	六〇〇円

今月の新しい写真集、十六組を御紹介いたします。前月号発表の分に引続いて、多少に拘らず御注文下さるようお願いいたします。全部送料共のお値段です。

CS1 美しき惨虐物語

ヤンチャ娘…春日ルミ嬢
内気な娘…伊吹真佐子嬢

(シリーズ) 十二枚一組

こゝは、春の陽がさん／＼と降りそぐ或る公園の一角である。一人のヤンチャ娘がブラジャーに

パンツ一つという勇ましいいでたちで一人の豊満な肉体の娘をいじめていた。後手高手小手、首縄、猿ぐつわと、身動きならず縛られた娘は、尚もヤンチャ娘のあくなき惨虐の手に翻弄されてゆく。実際に、この一コマを撮影する時には見物人が沢山集ってきて弱ったものである。

サド、マゾのいずれも満足させる最新撮影のシリーズ。

CS2 裸身の嬌羞

須川令子嬢 三枚一組

二十才の裸身に春の陽を浴びて肌につきく喰い込む麻の縄目、痛さに耐えながらも、尚、乙女の羞らいを見せる令子嬢は、柔肌に砂の喰い入るのも知らぬげに流し目をふりまくのであった。

従順で人なつこい彼女は、指定するどんなポーズも、嫌がらずに易々ととってくれた。後手に縛りあげたまゝ、一丁程の山道もハダシで歩いてくれたのだった。

CS3 セーラー服の見世物

雪井久子嬢 六枚一組

変転滑脱、柔軟きわまりない久子嬢の長身を、高手小手に縛りあ

げて鏡の前でポーズをとらした五つのポーズ、猿ぐつわしたものの三ポーズ、しないものの二ポーズ、床柱に後手に括ったもの一態、苦痛にゆがむ顔の表情は、演出したものにあらず、たくましく出てきた嗜虐の表情である。

CS4 豊満への攻撃

伊吹真佐子嬢 三枚一組

余りにも肉づきのよい玲瓏な女体に相遇すると、サディストならずとも、男性である以上、サディスチックな攻撃欲にかられるものだ。シミ一つない豊満な姿態を御意のまゝに、と放り出されたら、彼女の全裸のヌメの肌に、如何なる縄の暴虐がたけり狂うであろうか。グル／＼巻きにガンジガラメに縛りあげるであろうか、そして又、如何なるポーズをとらすだろうか。サディストの見果てぬ夢を実現した「豊満への攻撃」

CS5 素足の色気満点

佐賀美智子嬢 三枚一組

和装の高手小手、猿ぐつわ、足首に掛った紐は、股から胸、首へと通って着物の裾を乱す。紐に引っ張られて、反りかえった足指の

表情は、紐を使わないでは到底出てこないサディスチックなものである。

CS6 排泄の強要

中塚文子嬢 四枚一組

(この分は特に三百円)

新人、中塚文子嬢の再び登場、場所を洋風のトイレに運び、すべて狭い便器の上で、ポーズをとらした稀少な一篇、前回の強烈股間緊縛で好評を博した中塚嬢が、更に新生面を拓いた緊縛マニアも浣腸マニアも必見の緊縛フオート。

CS7 悪鬼の仕打ち

杉 芙美嬢 二枚一組

(この分は特に二百円)

両手を揃えて吊り上げられた一糸まとわぬ全裸のポーズ、全身をくねらせて身を守ろうとするが、悪鬼のような男の右手にしたムチは情容赦もなく、背中に臀部に、太股にサク裂する。あゝ、いたましい白いけにえのもたえ。

CS8 ガンジガラメ吊り

萩千恵子嬢 二枚一組

全身グル／＼巻きに身動き出来ない迄に固く縛り上げられた千恵

子嬢の足首と胸に、縄が通されて天井から吊り下げられた二つのポーズ。悦唐モデル萩嬢ならではの緊迫した雰囲気、普通のモデル嬢だったら「吊る」といっただけで尻込みしてしまうのだが、萩嬢は自分から進んで、この吊りのポーズを申し出てくれたのであった。

CS9 芋虫コロコロ

厚狭春江嬢 二枚一組

どたり、とボリラムのある厚狭嬢の全裸の姿態は、むく／＼と固ぶとりに肥って、芋虫のように全身グル／＼巻きに縛りあげても、恰かも縄を弾きかえすような張りを保持している。この白い女身の芋虫は、コロ／＼と転しても、一向にその重量感におとろえを見せなかった。

CS10 パイプ責め

菅登紀子嬢 四枚一組

髪をリボンで飾った可憐な娘さん菅登紀子嬢、パイプに片足を上げて縛られ、両手を揃えて縛られる。まだ縛られることに馴れきっておらない彼女の、なんとないぎこちなさが、殊更、可憐さを増しているようだった。

CS11 女悪魔の暴力

女悪魔：春日ルミ嬢 いけにえ：伊吹真佐子嬢

シリーズ 五枚一組

片眼の女サタンが、見事な脚線美を見せて、無力な小羊に向ってその身ぐるみを剥ぎ落とす。はかない抵抗を続ける小羊は、身にもとう最後の肌着さえも裂かれて今や、哀れな縛しめの身となり、悲しい救いの叫び声は、猿ぐつわによって絶たれてしまった。女サタンは微笑んで愈々小羊の最後の料理にとりかゝろうとするのであった。

CS12 女の禪美

伊吹真佐子嬢 二枚一組

女性の禪美フアンと、禪美の緊縛フアンに込めて、この二枚を捧げる。二枚共、従前の禪姿と違って野外に於けるポーズである。一つは縛りなしの禪美、一枚は緊縛の禪姿のものである。

CS13 雨の夜のプレイ

萩千恵子嬢 三枚一組

時雨のそぼそぼと降る或る秋の

夜のことであつた。突然、編集部を訪れた萩千恵子嬢は、今夜は思いきり、きつく緊縛してほしいというのであつた。裸になるのには既に肌寒い雨の夜であつたが、彼女は何かのためらいもなく、着ていたスーツを手早く脱ぎ捨てたのであつた。彼女の持っていたアイデアは、どのようにこのプレイに活用されたであろうか。

CS14 ショー出演

萩千恵子嬢 三枚一組

萩千恵子嬢の出演によって緊縛マニアの会合が催された時のことであつた。ラストの余興で、愈々今日の会合の呼物、緊縛マニアの方々のお好みの縛り方、ポーズをとってみせるというショーが行われた。萩嬢手製の水玉模様の紐と猿ぐつわ用の布片とが出題者に渡された。萩嬢はお揃いの同じく水玉模様のブラジャーとバタフライだけを着けたまゝで、いさぎよく責めの祭壇に昇るのだった。

この日に行われた責めのショーの中で最も卓越した凄惨なポーズを三枚ごらんに入れる次第。

CS15 女体の荷造り

二枚一組

女荷造人：春日ルミ嬢 女体の荷物：伊吹真佐子嬢

股間しぼりなんか全く問題ではない、といわれる、これは又変つた女体の荷物、身体をタテからヨコから亀甲型に嚴重な荷造り、そして又、荷造り役のルミ嬢が真剣な顔つきで、この十数貫の大きな荷物をどうしてやろうか、と思案顔、荷物は只、縄目の痛さをこらえるだけで精一杯である。

CS16 四モデル特選集

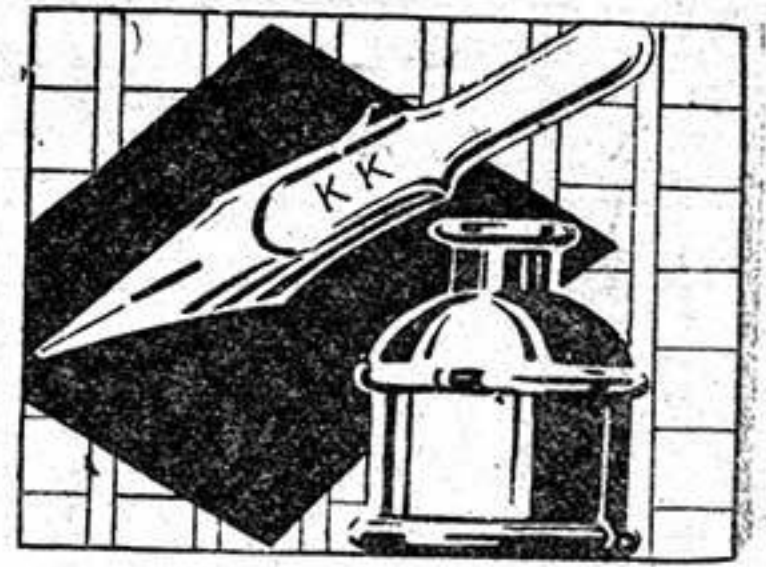
萩嬢、高瀬嬢 杉嬢、伊吹嬢 四枚一組

本誌の代表的四人のモデル嬢の顔見世ポーズ、いずれも嚴重なる高手小手のまゝ正面を向いて、その顔貌をはっきり皆さんの方へ向けているものばかり。どうか、この緊縛嬢を存分に可愛がってやって下さい。

(以上)

◎御注文は符号だけを書いて下さって結構です。

◎御送金次第、嚴重荷造りの上急送申し上げます。



【読者通信】

五月号、お送り下さいましてありがとうございました。重厚な読みものが多く面白く読みました。ことに「幽囚十ヶ月」「戦慄怪談屋敷」「灰色のノート」「奇妙な禪」「生埋め願望」など、全く他誌では得られぬ貴重な記録だと思えました。「魔の味い」などを読むと、白昼妖しい夢をみているような、それでいて妙に真実性のある記録で、このような趣味を持たないものまでも、人間性の不思議さに考えさせられてしまいます。「奇妙な禪」も全く奇妙な話で、しかも嘘や創作でないことは文章を読めばわかりますし、このような記録を集めているのは、奇巧しかないのですから、文字通り唯一

の特異誌といえるわけです。もし奇巧というものが存在しなければこのような人間性の特殊な生態の実態が、闇から闇へ葬り去られてしまいうわけです。おそらく医者だとして、性科学者だとして、熱心な奇巧の読者程には、このようなマニアの実体の細部まで知らないのでは無いでしょうか。稀少価値だけの価値でなく、人間性研究の一端としての立派な価値が、五年も十年も二十年も先には、識者に認められるような気がします。いつもは挿絵が豊富で、それらに幻惑されて本文はよく読まなかったのですが、五月号は、本文だけが、ぎっしりつまっているのです。読むほうも腰をすえて、じっくり読んだので、改めて奇巧の特異性を確認したわけです。しかし、各マニアの方は、挿絵口絵がなければやはり寂しいだろうと思います。その気持は私にもよくわかります。写真や絵は、巻頭に上質の紙に掲載しなくとも、頁のまん中頃に適宜に挿入してもよいと思います。絵を沢山入れると下品になるし、入れないとマニアの方の失望が多くなるし、むずかしいところだと思います。編集後記にもありました

が、従前の内容に捉われない奇譚も載せるとのこと、私も大賛成です。そのような意味で、四月号の「接客婦」のようなアブ性のないものも、これからの奇巧にはよいと思います。細く長くやっていても、確実に発行さえしていれば、一定の読者は確保できると思います。奇巧の発展を心から期待して居ります。

(藤見郁)

奇巧の復刊を心から祝福いたします。悪条件下、各種マニアを満足させる苦闘して居られる姿にたとえ様のない喜びを感じます。一昨年の十月以来、奇巧の虜となっ

○読者通信をお寄せ下さい

読者通信欄は孤独に悩む方々のよなき慰めの場として、広く同好の士のため誌面を開放しております。本名其の他の秘密は固く守りますから、御安心の上、御遠慮なく、ドジドジとお寄せ下さい。

ローズアップされてきました。どなたでも結構です、名乗りをあげて戴けば喜んで参ります。どちらが勝つかは判りません。余り力に差があれば、私の身体の一部を縛ってもらっても結構です。然し幼い時、姉妹の末子として育った私は女の子の様な遊びかせず、角力や組打ちをやっても一番弱く、丁度二年下ぐらいの子と争って良い勝負というところでしたので、相争うプレイをたのしみたいと思われる様な女性の方とだったら適当の相手だと思えます。最初、彼女も私も股にびったり喰いついたシヨートパンツで争いました。そしてパンツの脱し合いをするのです。パンツを脱がされればその下に、水泳パンツと短いパンティ又はお互いサラシの褌姿でもよい姿です。やがてプレイを楽んだ最後に私は征服され馬のりになられるのです。こんなプレイをしたくてたまりません。私も畑昇一氏の言われる様に本当の責めは緊縛ではなく、肉体と肉体の格闘により苦痛だと思っています。又、真の女性の美しさは「メトミ」です。若い女二人が肌に紅さして髪を乱し荒い息を吐きつゝ組み

つ組まれつする時程、動的な美を感ずるものはありません。好んで私は女子プロレスを見にゆきます。空手チョップ、ハンマー投げ、飛び蹴りの様な荒々しい技ではなく二つの肉体のからみあう寝業にたまらない魅力を感じます。相手の上に馬乗りになり、はね返えされまいと必死に争うとき、又、はね返えそうと激しく抵抗するとき、全身の力が満ち溢れ、その緊迫シ

ーンは息も詰りそうです。この様な女性が二人居れば、グループを作り奇巧の支援のもとお互いプレイを楽しみたいものです。女性二人に私一人なれば、むつかしい問題や心配も起りません。三人リーグ戦をしましょう。誰か誌上で名乗りをあげて下さい。

(奈良、T・K生)

初めてお便り致します。寝床の

上五年、愛読四年の奇巧の愛好者です。写真も欲しいし、同好の友達も欲しいと思いつつも肉体的に又経済上無収入で、店頭買いの細々とした愛好者ですが、奇巧を愛する点では、皆様にそう引けは取らないと自負して居ります。それが昨春、急に店頭から姿を消された時には、逆コース時代、もしや、と思いつつも全くガツカリしてしまいました。それが全然

予期せずに復刊三号が手に入り、死んだとばかり思いつて居た恋人が帰ってきた様な、いなそれ以上の喜びかも知れません。復刊に際しても種々制約を受け、御苦労な事は断断暴虐の中にも滅び去る事はないと思います。御誌も格調正し、いアブ文化研究誌として益々発展せられます様編集の諸先生、愛好者の諸先輩にお願い申し上げます。

奇譚クラブ

復刊第一号
十月月号

目次

定価二百円 (千16円)

口絵

美しいドアー……

(四馬 孝画)

頭立二馬車……

(畔事数久画)

水中の女……

(都築峰子画)

緊縛フォト・オンパレード

黒のシユミーズ……

(川辺砂登子)

繃帯……

(伊吹真佐子)

どういふポーズをとるの？

(萩 千恵子)

ポリウム……

(加賀利江子)

ながし目……

(須川 令子)

朝日を浴びて……

(須川 令子)

うつぶせ……

(加賀利江子)

着物……

(藤田 節子)

旅の縛られ女優……

(藤木 仙治)

きものシリーズ迎春花……

(白金 紅次)

悪軍日記……

(榎本 利子)

ボクの責め方……

(宝塚二三夫)

女性の下着について……

(水上流太郎)

鼻いじめの写真……

(北谷 英二)

奈落の欲情……

(沢井 和雄)

浣腸器と共に……

(久利須照雄)

お臍の型と種類……

(土屋 淑人)

自殺娘の死体損壊……

(近藤 一)

二個のイチシク浣腸……

(花村恵美子)

女性緊縛寸考……

(宝塚二三夫)

完全なる隷属……

(坂田 信治)

サディズム雑感……

(村岡 助浩)

再度の鞭を期待しつゝ……

(沼 正三)

(二俣志津子さんに)

(南洋 一郎)

女工哀史以前……

(藤山 秀緒)

乗馬ズボンの女腹切……

(田辺 愛子)

女性の渾愛用……

(東京 津島比呂史)

切腹通信……

(東京 津島比呂史)

少年刑務所体験記

(三根 耕二)

男性自虐の方法……

(岡村 文雄)

玉稿落穂集……

(編 集 部)

アブ追求三〇年の回顧……

(山田 正実)

幽囚十ヶ月……

(春田 一郎)

女性切腹面に憑かれた男……

(伊藤 和彦)

素足礼讃……

(高原 正夫)

新しいコルセット……

(一柳真砂子)

あるマゾヒストの手帖から……

(沼 正三)

私の浣腸論……

(数 正男)

映画に見た淡いマゾ……

(春木 俊野)

アクロバット通信……

(九州 傾城)

明治年間の新聞覚え書……

(吾妻 新)

残酷なる女性達……

(森本 愛造)

「七化け小僧出現」……

(緑 猛比古)

奇譚クラブ旧号主要目次読者通信

(編 集 部)

復刊に当りて……

(編 集 部)

最新版アブオし分和課題原稿募集

(編 集 部)

二度と休刊の悲しみを味わせないで下さい。最後に我儘を二つ。昨年「めくら狼」を見て、R、テンブルのアクロ緊縛（柱に縛られていた）にすっかり魅せられてしまひ、是非グラビアでも欲しいと映画雑誌を全部見てみましたが見当らず残念でなりません。貴誌で出来ませんでしょうか。又同封のグラビヤは雑誌「明星」に出ていたものですが、絵が描けませんので参考にお送りしますが、このようなポーズの緊縛の写真、せめて口絵にでも掲載して頂けないでしょうか、勝手な事を書いて御容赦下さい。早く店頭販売の出来る事を祈ります。（柳沢吉保）

○ K K バックナンバー、昭和二十六年六月号及び十二月号をお譲りいただける方、お知らせ下されれば幸いです。尚価格もおついでに。（東京都文京区柳町二九、篠本方久保哲志）

○ コルセット、ニッパ一等を御愛用の女性の方、一柳トシ様、真砂子様、蜷間洋子様そのほかの方々と文通をいたしたいと存じます。どうか御住所をお知らせ下さい。（福山市東町 小林茂）

○ 五月号誌上で久し振りに森山女王様の御通信を拝読し嬉しく存じます。今後は女王様御得意の健筆で誌上を飾って下さるものと胸をときめかせて期待して居ります。私は中年の男性マゾで、私共のような者では女王様の御側近く召使つて頂くことは到底叶わぬこと、思いますが、せめて御手紙の中でも女王様からけだものへのお言葉を頂けたらと存じまして、茲にお願い少々御通信致すものであります。何卒よろしく御願います。（東京中央郵便局私書箱三九）

○ 奇クの御復刊を喜ばしく思います。私は皆々様と異り、平凡な趣味の持主らしいですが、昔から女相撲の愛好者です。貴誌でも時々記事のせて来られました、今後も御願います。他に文献もないので貴誌をたのしみにしております。他の趣味の方も多いことですから時々で結構です。貴誌の安全な御継続を心から祈るものです。（京都洛南 E生）

○ 五月号の奇クに於ける最大の収穫は昨年の五月号以来、御目にかゝれなかつた森山美歌様の玉稿に

接した事です。本当に何という喜びでしようか、これからもどしどし誌上に御発表下さる様御願ひ致します。私は昨年五月号の女王様の読者通信の中で奴隷の一人に数えて頂きました直木昭でございます。今回の女王様の御好意は我々マゾヒストにとりまして誠に御慈悲あふるゝ御心の表れと深く感謝申上ります。何卒、忠実なる奴隷の上に女王様の御便りを下さらん事を御願ひ申上ります。（東京都葛飾区金町一ノ七〇四、増田方、植村氣付、直木昭）

○ 只今、先に注文しておいた責写真四組入手致しました。今回ののは全く素晴らしいものです。前回の不満も取りもどして十分です。こんなのが出来れば他社のものを求める必要は少しもありません。各組の感想を簡単に申し上げます。CS4、今回注文した四種の中では一番よくなく、モデルの肉体は美しくアイデアもよいのだが、肉体と背景が同一色で陰影に乏しい。CS6、実に素晴らしい出来ばえである。後手に縛られた背からふっくらと丸みを見せて盛り上った臀部は魅力満点、美しい肉体は、そのまま芸術品である。CS7、杉嬢

の魅力を十分に發揮した作品、私の最も好きな写真です。前回頂いた杉嬢のものが非常に不満でした。今回のものは之を取りもどして十二分に満足を与えて下さいました。CS11、いつもながら伊吹、春日のコンビは好ましい。今までのものには両嬢の全身が写されず全体に気分が物足りぬものを感じさせるものがあつたが、今回ののは殆ど全部、全身が表れて実感に満ち／＼している。春日嬢の腰にまゝ布は実によくできています。表情、体のこなしは流石に満点。先回も申し上げたように御社の写真は同系他社のものには見られぬ芸術味豊かで印画が鮮明、アイデアも優れていたのでしたが、突込みがもう一歩足りなく残念に思つておりました。が、今回のものは総ての点で全く素晴らしい一言につきました。御礼申し上げます。（T・M生）

○ 五月号に僕の通信をのせて戴きました。早速二三の方より御手紙を下さいます。僕の外にも多くの友達が有る事を思いますと、心強くなりしました。まったく奇クの御蔭であります。あつく御礼申し上げます。御愛好者の皆様方、どしどし御便り

下さい、御待ちしております。赤い禪の外、白の六尺の禪愛用者も締め方など御教示下さい。僕はまだ垂れのない締め方より知りません。垂れをつくと早くゆるんでしまう様に思いますので僕はいつも垂れを長くして、それを股へ通し、ぐっと後で締め上げます。その時の緊縛感忘れられる事が出来ま

せん。この感じは禪愛好家のみ知っている処であります。尙競技用にてパンツの下に締めるサポーターの変ったのを御持ちの方は是非御知らせ下さい。僕の外出用のものは水泳用のサポーターです。又びったりと肌に喰い込むようなキヤルマタを持っていられる方も是非共御一報下さい。編集部への御

願いとして巻頭の写真ページには旧号の様に青少年達の六尺禪を締めたものをのせて下さい。禪愛好家の共通した望みであると思います。旧号にありました様なソドミ小説「美少年の秘密」「或る少年のモノローグ」とか又「少年の禪美」についてなどの記事を今後

も出来る限り誌上に出して下さい

尙禪の締め方をくわしく絵又は写真で締め初めから終った所までを出して下さい。そして我々禪に憧れを持って居る若人の夢と喜びを實現して下さい。禪でも越中禪とか相撲禪は僕はきらいです。やはり肌をびたりと合った木綿の晒の禪か或は真赤な禪の方が魅力があつてよいと思います。前に「禪

奇譚クラブ

復刊第二号
十一月号

目次

定価二百円(〒16円)

口絵

みのむし

畔亭 数久

小さな運動会

四馬 孝

漂う女二題

都築 峰子

賭場の獲物

滝 れい子

小人島の捕われ人

北原 純子

女調教師

杉原 虹児

上げてくる潮

依田 精二

掃除日の出来事

宮崎 昭平

告白

古川 裕子

変態小説論

佐東 増夫

幽囚十ヶ月

春田 一郎

ボクの責め方

宝塚二三夫

切腹通信

羽村 京助

レスボスと浣腸

藤山 秀緒

稽古着姿の女腹切

命がけの遊び

二俣志津子

あるマゾヒストの手帖から

沼 正三

拷問に笑う女

辻村 隆

敵前上陸"責め"

三根 耕二

賭けられた娘

宮崎昭平面

お多と腰巻

永 長治

錯乱

山下 真一

私にも貴女の下穿きを

芳野 眉美

輝美礼賛

伊勢 進

炉辺談話

伊志田 治

接客婦

加治 信一

大和撫子の散華

宮崎昭平面

残酷なる女性達

森本愛造訳

被虐より嗜虐へ

沖野恵美子

明治年間の新聞覚え書(四)

吾妻 新

泉都の夜明け

豊後 忠

完全なる隷属

坂田 信治

浣腸器と共に

久利須照雄

或るソドミアの告白

朝路のぼる

浣腸のお仕置

宮崎昭平面

サディズムへの憧れ

京町柳一郎

掲載候補作品寸評

編集部

玉稿落穂集(二)

編集部

女優の素足

高田 正夫

百合子の記録

渡辺 陽

長瀬昭子さんへ

畑 晃一

映画、雑誌、芝居の緊縛場面

波羅田譲一

吹き溜り

近東規矩也

アクロバットと曲馬団

鍛冶 真三

続・岩瀬祥一のお灸院

岩瀬 祥一

続・映画に観た淡いマゾ

春木 俊野

アルバム第三集のアイデア

鳴海 文雄

セーラー服姿の切腹写真

編集 部

女子プロレスリング雑感

鬼山 絢策

密淫

青葉 慎一

同愛の士に告ぐ

天泥 盛英

読者通信(並に読者交歓室)

川上 明

最新版アブフォト(前月と今月の分譲品)

吉住 信吉

蜂の胴四十五センチ

先祖の女腹切

をした少年」の写真が出ておまじりしたが、もつときつぱりした締め方をした方がよいかと存じます。少年よりも青年にして下さい。サポーターをした青年、又は六尺襷を締めた青年、素肌にサポーターを締めキヤルマタをはかんとした青年等が僕の夢です(池田正治)

○ いろ／＼勝手な事を申し上げますが、号中、写真と絵が非常に少くなつたことも、やむを得ないこととはいえ、真に淋しいことです。文中小さな絵でも結構楽しめますから出来るだけ多く載せて下さい。絵のない文は気の抜けたビールと同じです。折角の力作が点晴を欠くのうらみがあります。又目下世上一般の傾向は総べての本は文より画報になりつゝあります。この間の動向に御考慮願います。又写真中静止の場面が多いのですが、動作しつゝある動的のところを写して頂きたいと思ひます。例えば緊縛の場面にしても唯縛さ

ても見る人に強い印象を与えたいと思ひます。もう一つ愛読者からのいろいろの写真又は絵等が数多く集つてきていると思ひますが、我々読者はそれに大変興味をもっているものですから、これは下手だからとか、絵や写真になつていないとか云わず、必ず誌上に紹介して下さい。文のみ誌上に載せて絵や写真を余り載せないのはおかしいと思ひられます。もし誌上公開をハバカル様なものなれば、其の一部分の上半身でも、又下半身でも載せたら良いと思ひます。その方がかえつて見る人により想像を樂しませることが出来るかもしれせん。以上は小生並に二三の人も同感ですからあえて一筆致します。(愛知 S・T 生)

○ 「編集部から一言」絵、写真は今後漸次増やすようにするつもりですが、別頁に発表しましたように「限定版の特集号」を発行して今迄蒐集した図画は、主としてこの方に収容する企画ですから、各々御自分の好みに合ったものを御申込み下さい。思ひます。動作中の写真は、分譲品中のフォト例えば、CS7等、動感を表しておられます。他にも沢山ありますからどうぞ下下さい。読者から投ぜられる写真や絵画、私達もこれに載せたいと思ふものが沢山ありますが、文章と違つて簡単に訂正は出来ず、又、最初からカットする意図で作成されていませので誠に惜しく思ひつゝも、没にしていくのが実情です。つとめて「玉稿落穂集」中にも紹介し、新企画の限定版の特集号の中へでも発表出来るよう研究してみましよう。

○ 奇譚クラブの再刊を本当にころからおよろこび申し上げます。私も長い間の奇譚クラブの愛読者の一人でございます。自分で自分を愛するといふ妙な癖のために今迄ずいぶん悩んでまいりました。でもそんな時、奇譚クラブの存在がどんなに私を慰めてくれた事でしょう。私の様な性格の方が愛読者の中に多勢いらしゃるかどうかわかりませんが、自分自身がどうにもならない程好きで、私は今迄自分を愛するためにずいぶんいろいろなことをやってきました。そのことを出来ない手記にまとめたみました。興味本位に書けませんので面白くはございませんが、御一読いただければ、本当に嬉しく存じます。何かの御参考になさつて下さいませ。まだいろいろな経験がございしますので又お伝えたいと存じております。(門田奈子)

○ 本号で「奈子の自己愛」をお書きになられた門田奈子さんは、愛読者の方からの通信を求めておられますので、編集部宛御出し下されば転送の勞をとります。

○ 本誌毎月発行との由、最上の喜びに存じ東京より幹部諸兄の御努力の程厚く御礼申し上げますと共に以前に勝る増頁の日の早からん事を切望致します。現在頁数の少ない処、御無理とは思ひますが、男性性割腹記事掲載の節、挿画を挿入して頂けませんか、女性切腹の挿絵は今までも本誌に数多く見受けられますが、男性割腹の挿画が皆無なのはどうかうわけですか、如何に男性割腹マニアが少数でも本誌の愛読者になりありません。百七十余頁の中一頁を我等少数マニアの為に採用して戴く事は出来ませんが、多種多様なマニアの希望故、編集部の方も大変とは思ひますが、我等少合マニアも本誌の一端を活用して下さいる様御願ひ致します。児島様山田様のアラブレター拝見致しました。是非小生にもお御紙戴ければ幸甚

に存じます。尙男性割腹を好まれる方々と文通致したくお便りお待ちしております。(東京都世田谷区北沢三ノ一〇九、吉田綿糸方、治川貴志)

フエチの皆さん、「奇ク」の再刊を喜びましょう。今日は私のコレクションの一部を紹介します。

夜になるといつも部屋をつなをはって、それに私のコレクションのズロース類を萬国旗のようにかけてたのしみます。いずれも買い求めたり注文して作らせたりしたもののばかりで、色々の色がとても美しいのです。白メリヤスのズロース、白のキャラコスのズロース、白のパンアイ、うすいピンクのナイ

ロンのブリーフ、ピンクのズロース、黒のズロース、黒のブルマース、黄色のブリーフ、色模様のオムツカバー、透明ビニールのズロース、黒のメシスバンドなど、今私が穿いているのは、このごろ作らせたものです。私はズロースとおしめにフエチがあるのでコレクションの下穿類はみな(中略)又

男の私が女のズロースを穿いたりおしめをはめているのを人に、特に若い女性に見られるのが好きです。しかし恥しいのであまり実行する機会をもちません。(中略)私はいつもこれらのズロース類をながめながら勝手な空想をします。ズロースを穿いている時、不良少女の群につかまって地下室に

奇譚クラブ

復刊第三号
四月月号 目次

定価二百円(〒16円)

口絵

痛苦の夢

四馬 孝・画

第二次会の披露宴

宮崎昭平・画

戦国夜盗

畔亭数久・画

ナイロンのレインコート

萩 千恵子

「こんなポーズでお気に召すかしら?」

佐賀美智子

「手首が痛いから早く解いてエ!」

加賀利江子

明治年間の新聞覚え書

吾妻 新

おしめ放浪記

畔野 当磨

フアンタジック・ストーリー

黒岩 巖

或る切腹マニヤ恋文

笠原孫之介

楽しい正月映画の縛られ女優達

嵯峨美智子

幽囚十ヶ月

春田 一郎

山口式ボデイビルの御紹介

山口 幸一

キヤルマタの美

櫻村 睦彦

魔の味い

高木 伸夫

ドストエフスキの嗜虐性

野中 愛三

女性乗馬考

馬場 喬次

サジスチンの独白

原 美智子

ボクの責め方

宝塚二三夫

女剣士の切腹について

青山 芳樹

ラブレター

春日ルミ様へ

少年矯正院体験記

みせしめ

私に訴える・アブ放譚

高杉 正二

腰巻佩用許可願

水上流太郎

完全なる隷属

小暮 道也

私のイメージ

坂田 信治

映画の緊縛断片

北谷 英二

マニア誕生

緑 猛比古

体験告白記 お臍の研究

坂野上信彦

残酷なる女性達

須藤 律夫

切腹願望と臍窩

森本愛造 沢 清克

その後の緊縛女優列伝

升岡 金吉

縛られた女優達

十字 好介

映画(近松物語)より

小村 二郎

ああこの恍惚境

永井昇次郎

責めのアイデア

狩井 麗作

シーソー責め

佐巻 跋策

浣腸雑記

加治 信一

洋画に於ける緊縛場面

笠置 俊郎

懸賞入選作品佳作第一席

川瀬 一美

接客婦

緒台あふみ

蜂の胸四十五センチにこたえて

辻村 隆

倒錯の英雄織田信長

松井 籟子

Xの尻

城 秀人

「女」の随筆「女のお腹談義」

読者通信(並に読者交歓室)

赤い花は泣いている

代理部特選写真集(前月と今月の分譲品)

◎次号(七月号)は、五月廿日発売です

つれこまれ、そこでお仕置をうける。男のくせに女のズロースをはいているので私はシバられたまゝで(中略)又、こんな空想もします。女学校の寄宿舎にしのびこんでつかまり、その罰にブカブカのブルマースを穿かされる。そしてそのまゝのかっこうで外におっぱり出される。……又、山の中をこれらのコレクションをトランクにつめて散歩している。四五人の強盗が出てきてトランクを奪う。そして私を縛った上でそのトランクの中味をとり出す。そこから出てくるのは、女のズロースやおしめカバーにバンド、みんながケイベツした目でみて笑う。私の夢はつきません。みなさんも自分のコレクションを紹介して下さい。

(K・M生)

○ 復刊おめでとう御座います。昨日或る所ではからずも五月号を手に入れる事が出来ました。旧刊が廃刊になったときには最早、今後奇クに目を通すことは出来ないのではないかと思っておりましたのに、実に意外で夢を見て居る様な

気がしました。しかも私の願望して止む事のなかったアクロバットの記事が出て居りましたのを見た時々は思わず手がふるえてきました。しかも昨年の十月号から復刊して居られるのを知りなかつたとは誠に残念に思います。本月号では、誠に素晴らしいのは、記事では、魔の白鳥と、拷問に笑う女口絵では素晴らしいショーでした。旧刊では実現しなかつたアクロバットを今後もしどし載せて下さい。それから一柳氏のコルセツトの記事も御願ひします。アクロバット愛好の全国の読者の方もどしどし投書しようではありませんか。そうしてより素晴らしいアクロバットの記事、口絵の出現を期待しようではありませんか。(国島生)

○ 田辺愛子さんの「女性の禪愛用」うれしく拝見しました。私は一女子高校生ですが、実は私も高校一年の夏からつばら自作の水泳禪で通して居ります。私の作っているものは布地はうす手のスカーフの地のようなものを用い、前はごく小さい三角形で、うしろは紐状

になつています。ズロースやパンティ、ブリーフの類を一切着用しません。チャチで使う気になれないのです。学校のダンスの時間などはこの上に直接ブリーフ式の体操パンツのごく短いものをはきます。お友だちはたいがい長めのブルマーですが、私はダンス部に入っている関係でブリーフ式のものをご公然と着用出来るのです。そうしてこのパンツも他のダンス部のお友達のものより特にみじかくつくって、うしろは少し位お尻が出る様にしています。このダンスの時以外は私はもつぱら自作の水泳禪です。寝る時はこれ一つでやすみます。女性の御愛用家の皆様、どしどし意見を發表して下さい。自分の使用しているものゝ寸法、型などを發表して下さい。(福岡 池田ふみ子)

○ 今日早朝から風に乗って春雨が降っている。降っているというより吹きつけているといった方がいゝでしょう。表を出歩くと腰から下がびしょより濡れてしまう程である。多忙なる毎日ではあるがこうして奇譚クラブを友にもち、読みふけるといふことが出来るのは実にありがたい。本当に感謝し

ている。では五月号について少々思うことを申し上げる。巻頭口絵について、四馬氏の画、相変らず好いですね、一昨年十一月号に新人責絵集に初めて登場されてより、『暗夜の訪問者』以来、数多く描かれていた人ですが、実に思いつきのよく出来たのを感じします。最近外国物のフォートが影をひそめてしまつて居るが本月号は少々挿入されて幸いである。だがひと頃の様に好いのが出ないので、ちよつと淋しいですね、宮崎氏のスチュアーデスの晒し、は現実を遠く離れている関係か、感じが出ないですね、あゝいう風に女性を縛って飛べないからね、本当の夢です、こう申し上げていると思いつく事です、最近特に口絵に挿絵が少なくなつた事に気づきますが赤字の連続で閉口されていられると思えば、やむを得ないと思ひますが淋しいです、出来れば立派にされて多少値上げされる事はやむを得ないと存じますが。五月号を見て特に絵の少いことには不平を申し上げる一人ですが、制約の激しい今日ではと編集部の御苦勞に遂に泣いてしまいたい程であります。『赤い花は泣いている』も第二回をかきねて、初めての章

奇譚クラブ

復刊第四号
五月号

目次

傑作小説特集号

定価二百円(千16円)

口絵

素晴らしいショー……………四馬孝・画

モデル嬢の表情 (緊縛写真集)

佐賀美智子 須川令子

加賀利江子 萩千恵子

アメリカ雑誌「ビザ」より

淑やかな令嬢、メイドの拘束服

スチユアードスの晒し……………宮崎昭平・画

赤い花は泣いている(第二回)……………松井 頼子

幽囚十ヶ月……………春田 一郎

魔の味……………高木 伸夫

完全なる隷属……………坂田 信治

戦慄怪談屋敷……………岸本 青柳

体臭日記……………狩井 麗作

桀王やしき(異常体験記)……………相沢 松柏

おそい目覚め……………足立 夏夫

(ある流腸マニアの日記から)……………矢崎 竜一

灰色のノート……………多山 皓

箱 磔……………多山 皓

女サディストより奴隷に与える手紙……………森山 美歌

撫子の花散りぬ……………北川 操

奇妙な禪……………森 太一

責めとフェチズム……………畔野 当磨

魔の白鳥……………加宮 敏一

お臍の研究(二)……………須藤 律夫

生理め願望……………長岡愛一郎

紅魔殿……………佐次 浩介

姉とその弟……………春木 俊野

陰花への憧憬……………青山 伸夫

去日の美女……………吉井 環

悲風磨上原……………瀬川 泰子

玉稿落穂集……………編集 部

アブノーマル・モノローグ……………竹谷 十三

(あるアクロバット・ダンサーの記録)……………辻村 隆

拷問に笑う女……………辻村 隆

読者通信、読者交歓室、代理部特選写真分譲広告

今月の新版特写真集、編集後記

から次の場面にはらんを極めるよう想像して松井頼子氏のこの後の描写に期待をたくさんかける者は私一人でない事を申し上げて失礼申し上げます。(渡辺乃介)

私は禪愛好のもので且つ禪美の礼賛者です。特に美女の禪姿や女斗美に限りないあこがれを持っています。三十年三月号の畔野氏の

「娘相撲」に於ける乙女の禪一本の姿、又、本年四月号に於ける「戦国夜盗」の男装の姫御前が緋縮緬の禪をキリツと締めている姿はマニアに隋喜の涙をこぼさせたことと思います。私も女性の禪一本の姿絵を見つづける度にスクラップしていましたが、すでに一冊一杯になつてしまいました。その中でもやはり畔野氏のが一番すぐれていま

す。今後共どしどしこのような作品を発表して吾々マニアを楽しませて下さい。同好の諸氏を求めます。誌上で御一報下さい。(大阪、K・K生)

奇ク其の後遅刊なく毎日御送附頂きまして有難うございます。しかし前のような魅力が薄くなつたのはどうしたことでしょう。いろ

いろの事情で制約され、各々の持つ趣味に合うという処迄は現在の処一寸困難な事と思われませんが、出来るだけ一つの小説、エッセイにしてもいろいろとすべてを加味されたミックスした全部のマゾサジ等と共に面白く興味ある奇クである事を切望する次第であります。一日も早く以前のような立派で充実した奇クにならない事を御祈り申し上げます。(横浜YS生)

◎お願い◎

雑誌の購入や分譲品の御申込みのため、或はその他の用件で直接発行所を御訪問下さる方がありますが、理由の如何を問わず右は固くお断り申し上げます。必ず郵便にて御申込下さるようお願い致します。

「切腹画帖」

発行中止について

一部の切腹マニアの方々から切腹画帖の発行につき、熱狂的な要望がありましたので本誌四月号並に五月号誌上に掲載発表しました通り、その予約募集を致しましたところ、本誌の現在の発行部数が従来に比較して格段の差異がありますため、そういった方々の眼に触れないのが原因してか、四月中旬迄の予約申込者の数が、二十数名にしか達しませんでした。従ってこのまま予約者数の増加を待っておりますと、非常に長い期間に亘り刊行不能となつて、予約された方々に大変御迷惑をおかけすることになりますので、此の際「画帖」の発行を中止すること

にしました。事情御推察の上、悪しからず御諒承下さい。

◆返金御希望の方は、ハガキにて御一報次第、今迄の通信費書留返金料等、当方にて負担の上、御返金申し上げます。

◆只今、進行中の「限定版、女体切腹特集号」を御希望の方は、頒価壹千円であります。が、「画帖」を予約された方に限り予約金五百円のみ（即ち半額にて）御送りいたします。

◆但し、右は四月十五日迄にお申込み下さった方に限ります。既に御返金申し上げた方や代品をお送りした方、或は書面のみにての予約の方々には、適用しません。

◆尚、限定版は予約募集ではありませんので、御送金はしないで下さい。

◎売切品について◎

本誌で取扱っておりました分譲品や本誌の旧号の中、売切になりましたものについて、自分だけなんとか探して送ってくれ、という御註文が多数参りますが、売切品は、いくら代金を沢山頂いても、どうも都合がつかねます故どうかお許し願います。

拾万円懸賞原稿募集

賞金

一席	貳万円	一篇
二席	壹万円	五篇
三席	五千元	五篇
佳作	壹千元	五篇
選外佳作	本誌三月分贈呈	十篇

規定

- 一、内容、形式は本誌の掲載に相当すると思われるものでしたら、小説、創作、体験、告白、論稿、その他如何なるものでも結構です。
- 一、枚数は四百字詰原稿用紙百枚まで。必ず未発表の作品たること。
- 一、締切期日は、昭和三十一年六月三十日まで到達したもの。
- 一、入選作発表は、本誌八月号誌上。
- 一、賞金は入選作発表と同時に送りますが、選外佳作の本誌三ヶ月分贈呈は、本誌九月号より十一月号迄発行の都度贈呈いたします。
- 一、送り先は、天星社編集部宛。
- 一、誌上匿名は御自由です。筆名をお書き添え願います。
- 一、原稿の第一頁上部に「懸賞」と朱書しておいて下さい。